

JP1 Version 12

## JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1

解説・文法書

3021-3-D91

---

## 前書き

### ■ 対象製品

●JP1/Performance Management - Manager (適用 OS : Windows Server 2012, Windows Server 2016)

P-2A2C-AACL JP1/Performance Management - Manager 12-00

製品構成一覧および内訳形名

P-CC2A2C-5ACL JP1/Performance Management - Manager 12-00

P-CC2A2C-5RCL JP1/Performance Management - Web Console 12-00

●JP1/Performance Management - Manager (適用 OS : CentOS 6 (x64), CentOS 7, Linux 6 (x64), Linux 7, Oracle Linux 6 (x64), Oracle Linux 7, SUSE Linux 12)

P-812C-AACL JP1/Performance Management - Manager 12-00

製品構成一覧および内訳形名

P-CC812C-5ACL JP1/Performance Management - Manager 12-00

P-CC812C-5RCL JP1/Performance Management - Web Console 12-00

●JP1/Performance Management - Agent Option for Transaction System (適用 OS : Windows Server 2012, Windows Server 2016)

P-2A2C-AGC4 JP1/Performance Management - Agent Option for Transaction System 12-00

製品構成一覧および内訳形名

P-CC2A2C-AJCL JP1/Performance Management - Base 12-00

P-CC2A2C-FGC4 JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1 12-00

●JP1/Performance Management - Agent Option for Transaction System (適用 OS : AIX V7.1, AIX V7.2)

P-1M2C-AGC1 JP1/Performance Management - Agent Option for Transaction System 12-00

製品構成一覧および内訳形名

P-CC1M2C-AJCL JP1/Performance Management - Base 12-00

P-CC1M2C-FGC1 JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1 12-00

●JP1/Performance Management - Agent Option for Transaction System (適用 OS : Linux 6.1 以降 (x64), Linux 7.1 以降)

P-812C-AGC1 JP1/Performance Management - Agent Option for Transaction System 12-00

製品構成一覧および内訳形名

P-CC812C-AJCL JP1/Performance Management - Base 12-00

P-CC812C-FGC1 JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1 12-00

これらの製品には、他社からライセンスを受けて開発した部分が含まれています。

## ■ 輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替及び外国貿易法の規制並びに米国輸出管理規則など外国の輸出関連法規をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

## ■ 商標類

HITACHI, Cosminexus, HiRDB, JP1, OpenTP1, uCosminexus は、株式会社 日立製作所の商標または登録商標です。

IBM, AIX は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

IBM, DB2 は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

IBM, Lotus は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

IBM, WebSphere は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

Internet Explorer は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Itanium は、アメリカ合衆国および / またはその他の国における Intel Corporation の商標です。

Linux は、Linus Torvalds 氏の日本およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Oracle と Java は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

Red Hat は、米国およびその他の国で Red Hat, Inc. の登録商標もしくは商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標がついた製品は、米国 Sun Microsystems, Inc. が開発したアーキテクチャに基づくものです。

SQL Server は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

UNIX は、The Open Group の米国ならびに他の国における登録商標です。

Windows は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows Server は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

その他記載の会社名、製品名などは、それぞれの会社の商標もしくは登録商標です。

## ■ マイクロソフト製品の表記について

このマニュアルでは、マイクロソフト製品の名称を次のように表記しています。

表記		製品名
Internet Explorer		Windows(R) Internet Explorer(R)
Windows Server 2012	Windows Server 2012	Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Datacenter
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Standard
	Windows Server 2012 R2	Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Datacenter
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 R2 Standard
Windows Server 2016	Windows Server 2016	Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Datacenter
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2016 Standard

Windows Server 2012 および Windows Server 2016 を総称して、Windows と表記することがあります。

## ■ 発行

2019年1月 3021-3-D91

## ■ 著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2019, Hitachi, Ltd.

## はじめに

このマニュアルは、JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1 の機能や収集レコードなどについて説明したものです。

### ■ 対象読者

このマニュアルは、次の方を対象としています。

- 稼働監視システムを設計または構築したい方
- パフォーマンスデータの収集条件を定義したい方
- レポートおよびアラームを定義したい方
- 収集したパフォーマンスデータを参照して、システムを監視したい方
- 監視結果を基に、システムへの対策を検討または指示したい方

また、監視対象システムの運用について熟知していること、および OpenTP1 に対する知識があることを前提としています。

なお、JP1/Performance Management を使用したシステムの構築、運用方法については、次のマニュアルもあわせてご使用ください。

- JP1/Performance Management 設計・構築ガイド
- JP1/Performance Management 運用ガイド
- JP1/Performance Management リファレンス

### ■ マニュアルの構成

このマニュアルは、次に示す編から構成されています。なお、このマニュアルは Windows および UNIX の各 OS (Operating System) に共通のマニュアルです。OS ごとに差異がある場合は、本文中でそのつど内容を書き分けています。

#### 第 1 編 概要編

JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1 の概要について説明しています。

#### 第 2 編 構築・運用編

JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1 のインストール、セットアップおよびクラスタシステムでの運用について説明しています。

### 第3編 リファレンス編

JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1 の監視テンプレート、レコード、コマンド、およびメッセージについて説明しています。

### 第4編 トラブルシューティング編

JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1 でトラブルが発生したときの対処方法について説明しています。

## ■ 読書手順

このマニュアルは、利用目的に合わせて章を選択して読むことができます。利用目的別にお読みいただくことをお勧めします。

マニュアルを読む目的	記述箇所
JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1 の特長を知りたい。	1章
JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1 によるパフォーマンス監視の機能概要を知りたい。	1章
JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1 の導入時の作業を知りたい。	2章, 3章
JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1 のクラスタシステムでの運用を知りたい。	4章
JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1 の監視テンプレートについて知りたい。	5章
JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1 のレコードについて知りたい。	6章
JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1 のメッセージについて知りたい。	7章
障害発生時の対処方法について知りたい。	8章

## ■ このマニュアルで使用する書式

このマニュアルで使用する書式を次に示します。

書式	説明
文字列	可変の値を示します。 (例) 日付は YYYYMMDD の形式で指定します。
[ ]	ウィンドウ、ダイアログボックス、タブ、メニュー、ボタンなどの画面上の要素名を示します。
[ ] - [ ]	メニューを連続して選択することを示します。 (例) [ファイル] - [新規作成] を選択します。

書式	説明
[ ] - [ ]	上記の例では, [ファイル] メニュー内の [新規作成] を選択することを示します。

# 目次

前書き	2
はじめに	5

## 第1編 概要編

<b>1</b>	<b>PFM - Agent for OpenTP1 の概要</b>	<b>16</b>
1.1	PFM - Agent for OpenTP1 の特長	17
1.1.1	OpenTP1 のパフォーマンスデータを収集できます	17
1.1.2	パフォーマンスデータの性質に応じた方法で収集できます	18
1.1.3	パフォーマンスデータを保存できます	18
1.1.4	OpenTP1 の運用上の問題点を通知できます	19
1.1.5	アラームおよびレポートが容易に定義できます	19
1.1.6	クラスタシステムで運用できます	20
1.2	パフォーマンスデータの収集と管理の概要	21
1.3	パフォーマンス監視の運用例	22
1.3.1	ベースラインの選定	22
1.3.2	UAP 稼働状況の監視	22
1.3.3	ジャーナル出力時間の監視	25
1.3.4	MCF 入力キューの滞留状況の監視	26

## 第2編 構築・運用編

<b>2</b>	<b>インストールとセットアップ (Windows の場合)</b>	<b>28</b>
2.1	インストールとセットアップの流れ	29
2.2	インストールとセットアップの前に確認すること	31
2.2.1	前提 OS	31
2.2.2	ネットワークの環境設定	31
2.2.3	インストールに必要な OS ユーザー権限について	33
2.2.4	前提プログラム	33
2.2.5	クラスタシステムでのインストールとセットアップについて	34
2.2.6	障害発生時の資料採取の準備	34
2.2.7	インストール前の注意事項	35
2.3	インストール	38
2.3.1	プログラムのインストール順序	38
2.3.2	PFM - Agent for OpenTP1 のインストール手順	38



- 2.4 PFM - Agent for OpenTP1 のセットアップ 40
  - 2.4.1 言語環境の設定 40
  - 2.4.2 PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for OpenTP1 の登録  
《オプション》 40
  - 2.4.3 インスタンス環境の設定 43
  - 2.4.4 ネットワークの設定 《オプション》 45
  - 2.4.5 ログのファイルサイズ変更 《オプション》 45
  - 2.4.6 パフォーマンスデータの格納先の変更 《オプション》 46
  - 2.4.7 PFM - Agent for OpenTP1 の接続先 PFM - Manager の設定 46
  - 2.4.8 動作ログ出力の設定 《オプション》 47
- 2.5 アンインストール 48
  - 2.5.1 アンインストール前の注意事項 48
  - 2.5.2 インスタンス環境のアンセットアップ 49
  - 2.5.3 接続先 PFM - Manager の解除 50
  - 2.5.4 アンインストール手順 50
- 2.6 PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成の変更 52
- 2.7 PFM - Agent for OpenTP1 の運用方式の変更 53
  - 2.7.1 パフォーマンスデータの格納先の変更 53
  - 2.7.2 インスタンス環境の更新の設定 56
  - 2.7.3 Store バージョン 2.0 への移行 58
- 2.8 バックアップとリストア 61
  - 2.8.1 バックアップ 61
  - 2.8.2 リストア 61
- 2.9 Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定 63
  - 2.9.1 マニュアルを参照するための設定 63
  - 2.9.2 マニュアルの参照手順 64
- 3 インストールとセットアップ (UNIX の場合) 65**
  - 3.1 インストールとセットアップの流れ 66
  - 3.2 インストール前に確認すること 69
    - 3.2.1 前提 OS 69
    - 3.2.2 ネットワークの環境設定 69
    - 3.2.3 インストールに必要な OS ユーザー権限について 71
    - 3.2.4 前提プログラム 71
    - 3.2.5 クラスタシステムでのインストールとセットアップについて 72
    - 3.2.6 障害発生時の資料採取の準備 72
    - 3.2.7 インストール前の注意事項 73
  - 3.3 インストール手順 76
    - 3.3.1 プログラムのインストール順序 76

3.3.2	PFM - Agent for OpenTP1 のインストール手順	77
3.4	セットアップ	79
3.4.1	LANG 環境変数の設定 <span>〈オプション〉</span>	79
3.4.2	PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for OpenTP1 の登録	79
3.4.3	インスタンス環境の設定	82
3.4.4	ネットワークの設定 <span>〈オプション〉</span>	84
3.4.5	ログのファイルサイズ変更 <span>〈オプション〉</span>	85
3.4.6	パフォーマンスデータの格納先の変更 <span>〈オプション〉</span>	85
3.4.7	PFM - Agent for OpenTP1 の接続先 PFM - Manager の設定	85
3.4.8	動作ログ出力の設定 <span>〈オプション〉</span>	86
3.4.9	OS 固有の環境変数の設定 <span>〈オプション〉</span>	86
3.5	アンインストール	88
3.5.1	アンインストール前の注意事項	88
3.5.2	インスタンス環境のアンセットアップ	89
3.5.3	接続先 PFM - Manager の解除	90
3.5.4	アンインストール手順	90
3.6	PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成の変更	92
3.7	PFM - Agent for OpenTP1 の運用方式の変更	93
3.7.1	パフォーマンスデータの格納先の変更	93
3.7.2	インスタンス環境の更新の設定	96
3.7.3	Store バージョン 2.0 への移行	98
3.8	バックアップとリストア	101
3.8.1	バックアップ	101
3.8.2	リストア	101
3.9	Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定	103
3.9.1	マニュアルを参照するための設定	103
3.9.2	マニュアルの参照手順	104
<b>4</b>	<b>クラスタシステムでの運用</b>	<b>105</b>
4.1	クラスタシステムの概要	106
4.1.1	HA クラスタシステム	106
4.2	フェールオーバー時の処理	108
4.2.1	PFM - Agent ホストに障害が発生した場合のフェールオーバー	108
4.2.2	PFM - Manager が停止した場合の影響	109
4.3	インストールとセットアップ (Windows の場合)	110
4.3.1	インストールとセットアップの前に確認すること	110
4.3.2	クラスタシステムでのインストールとセットアップの流れ (Windows の場合)	112
4.3.3	クラスタシステムでのインストール手順 (Windows の場合)	114

4.3.4	クラスタシステムでのセットアップ手順 (Windows の場合)	114
4.4	クラスタシステムでのインストールとセットアップ (UNIX の場合)	121
4.4.1	クラスタシステムでのインストールとセットアップの前に確認すること (UNIX の場合)	121
4.4.2	クラスタシステムでのインストールとセットアップの流れ (UNIX の場合)	123
4.4.3	クラスタシステムでのインストール手順 (UNIX の場合)	125
4.4.4	クラスタシステムでのセットアップ手順 (UNIX の場合)	125
4.5	クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ (Windows の場合)	132
4.5.1	クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップの流れ (Windows の場合)	132
4.5.2	クラスタシステムでのアンセットアップ手順 (Windows の場合)	133
4.5.3	クラスタシステムでのアンインストール手順 (Windows の場合)	137
4.6	クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ (UNIX の場合)	138
4.6.1	クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップの流れ (UNIX の場合)	138
4.6.2	クラスタシステムでのアンセットアップ手順 (UNIX の場合)	139
4.6.3	クラスタシステムでのアンインストール手順 (UNIX の場合)	144
4.7	PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成の変更	145
4.8	クラスタシステムでの PFM - Agent for OpenTP1 の運用方式の変更	146
4.8.1	クラスタシステムでのインスタンス環境の更新の設定	146
4.8.2	クラスタシステムでの論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポート	147

## 第3編 リファレンス編

<b>5</b>	<b>監視テンプレート</b>	<b>149</b>
	監視テンプレートの概要	150
	アラームの記載形式	151
	アラーム一覧	152
	Rcv Msg Count	153
	Rollbacks	154
	RPC Time Out	155
	RTS Branch Time	156
	RTS JNL Write Time	157
	RTS Rollbacks	158
	RTS RPC Time Out	159
	RTS SCD Stay Time	160
	RTS SCD Waits	161
	RTS Svc Time	162
	RTS UAP Terminates	163
	UAP Terminates	164
	レポートの記載形式	165
	レポートのフォルダ構成	166
	レポート一覧	168
	Checkpoint Dump Detail	174
	Checkpoint Dump Status	175

DAM File Detail	176
DAM Status	177
Journal Detail	179
Journal Status	181
Lock Detail	183
Lock Status	184
MCF Connection Detail (5.0)	185
MCF Logical Terminal Detail (5.0)	186
MCF Service Group Detail (5.0)	187
MCF Status (5.0)	188
Message Log	189
Name Status	190
Process Detail	191
Process Status	192
Process Trend	193
RPC Status	194
RPC Trend	195
RTS Checkpoint Dump Status (5.2)	196
RTS DAM Status (5.2)	197
RTS Journal Status (5.2)	198
RTS Lock Status (5.2)	199
RTS Name Status (5.2)	200
RTS Process Status (5.2)	201
RTS Process Trend (5.2)	202
RTS RPC Status (5.2)	203
RTS RPC Trend (5.2)	204
RTS Schedule Status (5.2)	205
RTS Schedule Trend (5.2)	206
RTS Shared Memory Status (5.2)	207
RTS TAM Status (5.2)	208
RTS Transaction Status (5.2)	209
RTS Transaction Trend (5.2)	210
Schedule Detail	211
Schedule Status	212
Schedule Trend	213
Shared Memory Detail	214
Shared Memory Status	215
TAM Status	216
TAM Table Detail	217
Transaction Detail	219
Transaction Status	221
Transaction Trend	222

## 6

### レコード 223

データモデルについて	224
------------	-----

レコードの記載形式	225
ODBC キーフィールド一覧	228
要約ルール	229
データ型一覧	231
フィールドの値	232
Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド	234
Store データベースに格納されているデータをエクスポートすると出力されるフィールド	236
レコードの注意事項	237
レコード一覧	239
Checkpoint Dump Status (PD_CPD)	241
DAM File Status (PD_DAM)	243
DAM Summary (PI_DAMS)	245
Journal Status (PD_JNL)	249
Lock Status (PD_LCK)	252
MCF Connection Status (PD_MCFC)	254
MCF Service Group Status (PD_MCFG)	256
MCF Logical Terminal Status (PD_MCFL)	258
MCF Summary (PI_MCFS)	261
OpenTP1 Message (PD_MLOG)	263
Process Status (PD_PRC)	265
RTS Summary (PI_RTSS)	267
Schedule Status (PD_SCD)	270
Shared Memory Status (PD_SHM)	272
System Summary (PI)	274
TAM Table Status (PD_TAM)	286
TAM Summary (PI_TAMS)	289
Transaction Status (PD_TRN)	292

## **7      メッセージ 295**

7.1	メッセージの形式	296
7.1.1	メッセージの出力形式	296
7.1.2	メッセージの記載形式	297
7.2	メッセージの出力先一覧	299
7.3	syslog と Windows イベントログの一覧	302
7.4	メッセージ一覧	304

## **第4編    トラブルシューティング編**

### **8      トラブルへの対処方法 321**

8.1	対処の手順	322
8.2	トラブルシューティング	323
8.2.1	セットアップやサービスの起動に関するトラブルシューティング	323
8.2.2	コマンドの実行に関するトラブルシューティング	327

8.2.3	レポートの定義に関するトラブルの要因	328
8.2.4	アラームの定義に関するトラブルシューティング	328
8.2.5	パフォーマンスデータの収集と管理に関するトラブルシューティング	329
8.2.6	その他のトラブルに関するトラブルシューティング	331
8.3	トラブルシューティング時に採取するログ情報	332
8.3.1	トラブルシューティング時に採取するログ情報の種類	332
8.3.2	トラブルシューティング時に参照するログファイルおよびディレクトリ一覧	333
8.4	トラブルシューティング時に採取が必要な資料	335
8.4.1	トラブル発生時に Windows 環境で採取が必要な資料	335
8.4.2	トラブル発生時に UNIX 環境で採取が必要な資料	339
8.5	トラブルシューティング時に採取する資料の採取方法	343
8.5.1	トラブルシューティング時に Windows 環境で採取する資料の採取方法	343
8.5.2	トラブルシューティング時に UNIX 環境で採取する資料の採取方法	346
8.6	Performance Management の障害検知	350
8.7	Performance Management システムの障害回復	351

## 付録 352

付録 A	構築前のシステム見積もり	353
付録 A.1	メモリー所要量	353
付録 A.2	ディスク占有量	353
付録 A.3	クラスタ運用時のディスク占有量	353
付録 B	カーネルパラメーター	354
付録 B.1	AIX の場合	354
付録 B.2	Linux の場合	354
付録 C	識別子一覧	355
付録 D	プロセス一覧	356
付録 E	ポート番号一覧	357
付録 E.1	PFM - Agent for OpenTP1 のポート番号	357
付録 E.2	ファイアウォールの通過方向	357
付録 F	PFM - Agent for OpenTP1 のプロパティ	360
付録 F.1	Agent Store サービスのプロパティ一覧	360
付録 F.2	Agent Collector サービスのプロパティ一覧	364
付録 G	ファイルおよびディレクトリ一覧	373
付録 G.1	Windows の場合	373
付録 G.2	UNIX の場合	375
付録 H	バージョンアップ手順とバージョンアップ時の注意事項	379
付録 I	バージョン互換	380
付録 J	動作ログの出力	381
付録 J.1	動作ログに出力される事象の種別	381

付録 J.2	動作ログの保存形式	381
付録 J.3	動作ログの出力形式	382
付録 J.4	動作ログを出力するための設定	387
付録 K	JP1/SLM との連携	390
付録 L	各バージョンの変更内容	391
付録 L.1	12-00 の変更内容	391
付録 L.2	11-00 の変更内容	391
付録 L.3	10-00 の変更内容	392
付録 L.4	09-00 の変更内容	392
付録 M	このマニュアルの参考情報	394
付録 M.1	関連マニュアル	394
付録 M.2	マニュアルでの表記	394
付録 M.3	このマニュアルで使用する英略語	397
付録 M.4	このマニュアルでのプロダクト名, サービス ID, およびサービスキーの表記	398
付録 M.5	Performance Management のインストール先フォルダの表記	398
付録 M.6	KB (キロバイト) などの単位表記について	399
付録 N	用語解説	400

## 索引 407

# 1

## PFM - Agent for OpenTP1 の概要

この章では、PFM - Agent for OpenTP1 の概要について説明します。



## 1.1 PFM - Agent for OpenTP1 の特長

---

PFM - Agent for OpenTP1 は、OpenTP1 のトランザクション情報、RPC コール、またはスケジュール情報を監視するために、パフォーマンスデータを収集および管理するプログラムです。

PFM - Agent for OpenTP1 の特長を次に示します。

- OpenTP1 の稼働状況を分析できる  
監視対象の OpenTP1 から、トランザクション情報などのパフォーマンスデータを PFM - Agent for OpenTP1 で収集および集計し、その傾向や推移を図示することで、OpenTP1 の稼働状況の分析が容易にできます。
- OpenTP1 の運用上の問題点を早期に発見し、トラブルの原因を調査する資料を提供できる  
監視対象の OpenTP1 でトラブルが発生した場合、Eメールなどを使ってユーザーに通知することで、問題点を早期に発見できます。また、その問題点に関連する情報を図示することで、トラブルの原因を調査する資料を提供できます。

PFM - Agent for OpenTP1 を使用するには、PFM - Manager および PFM - Web Console が必要です。

PFM - Agent for OpenTP1 について次に説明します。

### 1.1.1 OpenTP1 のパフォーマンスデータを収集できます

PFM - Agent for OpenTP1 を使用すると、対象ホスト上で動作している OpenTP1 のトランザクション情報などのパフォーマンスデータが収集できます。

PFM - Agent for OpenTP1 では、パフォーマンスデータは、次のように利用できます。

- OpenTP1 の稼働状況をグラフィカルに表示する  
パフォーマンスデータは、PFM - Web Console を使用して、「レポート」と呼ばれるグラフィカルな形式に加工し、表示できます。レポートによって、OpenTP1 の稼働状況がよりわかりやすく分析できるようになります。  
レポートには、次の種類があります。
  - リアルタイムレポート  
監視している OpenTP1 の現在の状況を示すレポートです。主に、システムの現在の状態や問題点を確認するために使用します。リアルタイムレポートの表示には、収集した時点のパフォーマンスデータが直接使用されます。
  - 履歴レポート  
監視している OpenTP1 の過去から現在までの状況を示すレポートです。主に、システムの傾向を分析するために使用します。履歴レポートの表示には、PFM - Agent for OpenTP1 のデータベースに格納されたパフォーマンスデータが使用されます。
- 問題が起こったかどうかの判定条件として使用する

収集されたパフォーマンスデータの値が何らかの異常を示した場合、ユーザーに通知するなどの処置を取るように設定できます。

## 1.1.2 パフォーマンスデータの性質に応じた方法で収集できます

パフォーマンスデータは、「レコード」の形式で収集されます。各レコードは、「フィールド」と呼ばれるさらに細かい単位に分けられます。レコードおよびフィールドの総称を「データモデル」と呼びます。

レコードは、性質によって2つのレコードタイプに分けられます。どのレコードでどのパフォーマンスデータが収集されるかは、PFM - Agent for OpenTP1 で定義されています。ユーザーは、PFM - Web Console を使用して、どのパフォーマンスデータのレコードを収集するか選択します。

PFM - Agent for OpenTP1 のレコードタイプを次に示します。

- Product Interval レコードタイプ (以降, **PI レコードタイプ**と省略します)  
PI レコードタイプのレコードには、1分ごとのプロセス数など、ある一定の時間（インターバル）ごとのパフォーマンスデータが収集されます。PI レコードタイプは、時間の経過に伴うシステムの状態の変化や傾向を分析したい場合に使用します。
- Product Detail レコードタイプ (以降, **PD レコードタイプ**と省略します)  
PD レコードタイプのレコードには、現在起動しているプロセスの詳細情報など、ある時点でのシステムの状態を示すパフォーマンスデータが収集されます。PD レコードタイプは、ある時点でのシステムの状態を知りたい場合に使用します。

各レコードについては、「[第3編 6. レコード](#)」を参照してください。

## 1.1.3 パフォーマンスデータを保存できます

収集したパフォーマンスデータを、PFM - Agent for OpenTP1 の「**Store データベース**」と呼ばれるデータベースに格納することで、現在までのパフォーマンスデータを保存し、OpenTP1 の稼働状況について、過去から現在までの傾向を分析できます。傾向を分析するためには、履歴レポートを使用します。

ユーザーは、PFM - Web Console を使用して、どのパフォーマンスデータのレコードを Store データベースに格納するか選択します。PFM - Web Console でのレコードの選択方法については、マニュアル「[JP1/Performance Management 運用ガイド](#)」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

## 1.1.4 OpenTP1 の運用上の問題点を通知できます

PFM - Agent for OpenTP1 で収集したパフォーマンスデータは、OpenTP1 のパフォーマンスをレポートとして表示するのに利用できるだけでなく、OpenTP1 を運用していて問題が起こったり、障害が発生したりした場合にユーザーに警告することもできます。

例えば、RPC タイムアウトの発生件数が 50 回を上回った場合、ユーザーに E メールで通知するとします。このように運用するために、「RPC タイムアウトの発生件数が 50 回を上回る」を異常条件のしきい値として、そのしきい値に達した場合、E メールをユーザーに送信するように設定します。しきい値に達した場合に取る動作を「アクション」と呼びます。アクションには、次の種類があります。

- Eメールの送信
- コマンドの実行
- SNMP トラップの発行
- JP1 イベントの発行

しきい値やアクションを定義したものを「アラーム」と呼びます。1 つ以上のアラームを 1 つのテーブルにまとめたものを「アラームテーブル」と呼びます。アラームテーブルを定義したあと、PFM - Agent for OpenTP1 と関連づけます。アラームテーブルと PFM - Agent for OpenTP1 とを関連づけることを「バインド」と呼びます。バインドすると、PFM - Agent for OpenTP1 によって収集されているパフォーマンスデータが、アラームで定義したしきい値に達した場合、ユーザーに通知できるようになります。

このように、アラームおよびアクションを定義することによって、OpenTP1 の運用上の問題を早期に発見し、対処できます。

アラームおよびアクションの設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

## 1.1.5 アラームおよびレポートが容易に定義できます

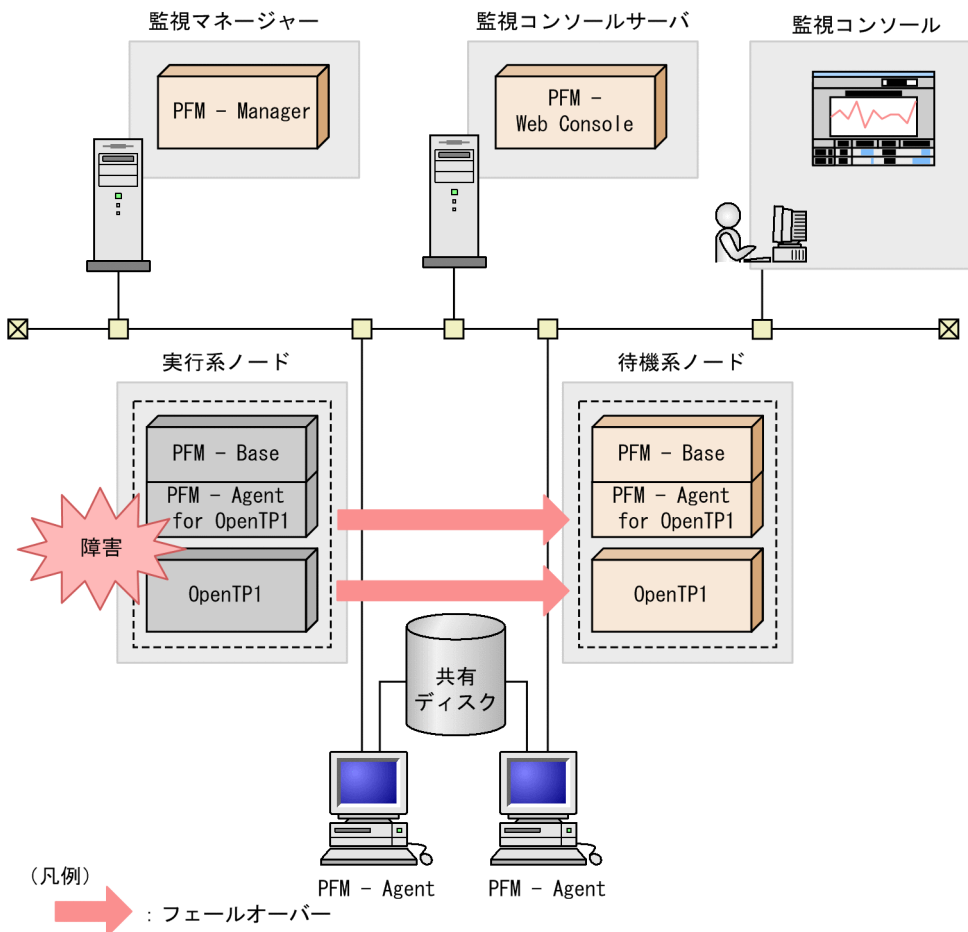
PFM - Agent for OpenTP1 では、「監視テンプレート」と呼ばれる、必要な情報があらかじめ定義されたレポートおよびアラームを提供しています。この監視テンプレートを使用することで、複雑な定義をしなくても OpenTP1 の運用状況を監視する準備が容易になります。監視テンプレートは、ユーザーの環境に合わせてカスタマイズすることもできます。監視テンプレートの使用方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成またはアラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。また、監視テンプレートの詳細については、「[第 3 編 5. 監視テンプレート](#)」を参照してください。

## 1.1.6 クラスタシステムで運用できます

クラスタシステムを使うと、システムに障害が発生した場合でも継続して業務を運用できる、信頼性の高いシステムが構築できます。このため、システムに障害が発生した場合でも Performance Management の 24 時間稼働および 24 時間監視ができます。

クラスタシステムで監視対象ホストに障害が発生した場合の運用例を次の図に示します。

図 1-1 クラスタシステムの運用例



同じ設定の環境を 2 つ構築し、通常運用する方を「実行系ノード」、障害発生時に使う方を「待機系ノード」として定義しておきます。

クラスタシステムでの PFM - Agent for OpenTP1 の運用の詳細については、「第 2 編 4. クラスタシステムでの運用」を参照してください。

## 1.2 パフォーマンスデータの収集と管理の概要

---

パフォーマンスデータの収集方法と管理方法は、パフォーマンスデータが格納されるレコードのレコードタイプによって異なります。PFM - Agent for OpenTP1 のレコードは、次の2つのレコードタイプに分けられます。

- PI レコードタイプ
- PD レコードタイプ

パフォーマンスデータの収集方法と管理方法については、次の個所を参照してください。

- パフォーマンスデータの収集方法  
パフォーマンスデータの収集方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。収集されるパフォーマンスデータの値については、「第3編 6. レコード」を参照してください。
- パフォーマンスデータの管理方法  
パフォーマンスデータの管理方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

PFM - Agent で収集および管理されているレコードのうち、どのパフォーマンスデータを利用するかは、PFM - Web Console で選択します。選択方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

## 1.3 パフォーマンス監視の運用例

システムを安定稼働させるためには、パフォーマンスを監視してシステムの状態を把握することが重要です。この節では、PFM - Agent for OpenTP1 を用いてパフォーマンスを監視する方法について説明します。

なお、監視テンプレートで異常条件および警告条件として設定している値はあくまで参考値です。具体的な設定項目については、システムの運用形態に合わせて検討してください。

### 1.3.1 ベースラインの選定

ベースラインの選定とは、システム運用で問題なしと想定されるラインをパフォーマンス測定結果から選定する作業です。

PFM 製品では、ベースラインの値をしきい値とすることでシステムの運用監視をします。ベースラインの選定はしきい値を決定し、パフォーマンスを監視する上での重要な作業となります。

なお、ベースラインの選定では、次の注意事項を考慮してください。

- 運用環境の高負荷テスト時など、ピーク時の状態を測定することをお勧めします。
- システム構成によってしきい値が大きく異なるため、システムリソースや運用環境を変更する場合は、再度ベースラインを測定することをお勧めします。

### 1.3.2 UAP 稼働状況の監視

必要なリソースを確保できない状況で UAP が動作した場合やトランザクション連携先のデータベースシステムなどに異常が発生した場合、次に示す問題が起こるおそれがあります。

- OS, OpenTP1, データベースなどの提供関数の応答時間の遅延に伴って、UAP のサービス処理時間が長くなることによるスループットの低下、および RPC タイムアウトの発生。
- OS, OpenTP1, データベースなどの提供関数がエラーリターンすることによるトランザクションのロールバック、または UAP の異常終了。

このため、OpenTP1 上で動作する UAP の稼働状況を監視することは重要です。UAP が正常に稼働しているかどうかは、次に示す項目を監視することで確認できます。

- サービス処理時間
- RPC タイムアウト回数
- 異常終了回数
- トランザクションロールバック回数

## (1) 関連する監視テンプレート

OpenTP1 上で動作する UAP の稼働状況を監視するために使用できる監視テンプレートを次の表に示します。

表 1-1 UAP 稼働状況の監視で使用できる監視テンプレート

アラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件
Rollbacks	PI	ロールバック決着回数	Rollbacks > 2	Rollbacks > 1
RPC Time Out	PI	RPC タイムアウト件数 (サービス単位)	RPC Time Out > 50	RPC Time Out > 10
RTS Branch Time	PI_RTSS	トランザクションブランチ実行時間 (サービス単位)	Event ID = 1906 AND Sv Name = "basespp"※1 AND Svc Name = "update"※2 AND Average ≥ 2,000,000	Event ID = 1906 AND Sv Name = "basespp"※1 AND Svc Name = "update"※2 AND Average ≥ 1,000,000
RTS Rollbacks	PI_RTSS	ロールバック決着回数 (サービス単位)	Event ID = 1901 AND Sv Name = "basespp"※1 AND Svc Name = "update"※2 AND Counts ≥ 2	Event ID = 1901 AND Sv Name = "basespp"※1 AND Svc Name = "update"※2 AND Counts ≥ 1
RTS RPC Time Out	PI_RTSS	RPC タイムアウト件数 (サービス単位)	Event ID = 1731 AND Sv Name = "basespp"※1 AND Svc Name = "update"※2 AND Counts ≥ 50	Event ID = 1731 AND Sv Name = "basespp"※1 AND Svc Name = "update"※2 AND Counts ≥ 10
RTS SCD Waits	PI_RTSS	スケジュール待ち数 (サーバ単位)	Event ID = 1800 AND Sv Name = "basespp"※1 AND Svc Name = "_SERVER ONLY" AND Average ≥ 600	Event ID = 1800 AND Sv Name = "basespp"※1 AND Svc Name = "_SERVER ONLY" AND Average ≥ 400
RTS SCD Stay Time	PI_RTSS	スケジュール滞留時間 (サーバ単位)	Event ID = 1804 AND Sv Name = "basespp"※1 AND Svc Name = "_SERVER ONLY"	Event ID = 1804 AND Sv Name = "basespp"※1 AND Svc Name = "_SERVER ONLY"

アラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件
RTS SCD Stay Time	PI_RTSS	スケジュール滞留時間 (サーバ単位)	AND Average $\geq$ 2,000,000	AND Average $\geq$ 1,000,000
RTS Svc Time	PI_RTSS	ユーザーサービス実行 時間 (サービス単位)	Event ID = 1730 AND Sv Name = "basespp"*1 AND Svc Name = "update"*2 AND Average $\geq$ 2,000,000	Event ID = 1730 AND Sv Name = "basespp"*1 AND Svc Name = "update"*2 AND Average $\geq$ 1,000,000
RTS UAP Terminates	PI_RTSS	UAP 異常終了回数 (サーバ単位)	Event ID = 1501 AND Sv Name = "basespp"*1 AND Svc Name = "_SERVER ONLY" AND Counts $\geq$ 3	Event ID = 1501 AND Sv Name = "basespp"*1 AND Svc Name = "_SERVER ONLY" AND Counts $\geq$ 2
UAP Terminates	PI	UAP 異常終了回数	UAP Terminates > 3	UAP Terminates > 2

#### 注※1

ご使用の環境の監視対象のサーバ名に変更してください。

#### 注※2

ご使用の環境の監視対象のサービス名に変更してください。

## (2) 監視方法

### サービス処理時間の監視

特定のサービスの処理時間は、RTS Svc Time アラームを使用して監視できます。スケジュール待ち数、スケジュール滞留時間、トランザクションブランチ実行時間などを監視することで、さらに詳細に監視できます。これらは次に示すアラームを使用して監視します。

- スケジュール待ち数の監視  
スケジュール待ち数を監視する場合、RTS SCD Waits アラームを使用します。特定の UAP のスケジュールキューに滞留されたサービス要求数を監視できます。
- スケジュール滞留時間の監視  
スケジュール滞留時間を監視する場合、RTS SCD Stay Time アラームを使用します。サービス要求が特定の UAP のスケジュールキューに滞留されてから取り出されるまでの時間を監視できます。
- トランザクションブランチ実行時間の監視  
トランザクションブランチ実行時間を監視する場合、RTS Branch Time アラームを使用します。特定の UAP のサービスをトランザクションとして開始してから、同期点処理が完了するまでの時間を監視できます。



## RPC タイムアウト回数の監視

OpenTP1 システム全体での RPC タイムアウト回数は、RPC Time Out アラームを使用して監視できます。また、特定のサービスで発生した RPC タイムアウト回数は、RTS RPC Time Out アラームを使用することで監視できます。

## 異常終了回数の監視

OpenTP1 システム全体での UAP 異常終了回数は、UAP Terminates アラームを使用して監視できます。また、特定の UAP の異常終了回数は、RTS UAP Terminates アラームを使用することで監視できます。

## トランザクションロールバック回数の監視

OpenTP1 システム全体でのトランザクションロールバック回数は、Rollbacks アラームを使用して監視できます。また、特定のサービスのトランザクションロールバック回数は、RTS Rollbacks アラームを使用することで監視できます。

ここで説明したアラームによって異常を検知した場合、次に示す監視テンプレートを使用することで UAP の状況を確認できます。

- Message Log レポート  
Message Log レポートによって、OpenTP1 の出力メッセージを表示させて、異常が発生した UAP、要因などを確認できます。
- Process Detail レポート  
Process Detail レポートによって、UAP プロセスの稼働状況を確認できます。
- Schedule Detail レポート  
スケジュールキューの状態、サービス要求の滞留数、UAP の異常終了などに伴うサービスグループの閉塞状況を確認できます。
- Transaction Detail レポート  
トランザクション状況を確認できます。

さらに詳細な状況や原因を調査したい場合は、OpenTP1 や OS が出力するログ、提供コマンドなどを使用してください。

## 1.3.3 ジャーナル出力時間の監視

ジャーナルは、OpenTP1 システムや UAP の各種履歴情報の取得に使用されます。また、障害回復にも使用される重要なデータです。

ジャーナルはトランザクションでは必ず取得されるため、ディスク障害や高負荷状態によってジャーナルの出力に長い時間を必要とした場合、トランザクション時間が長くなり、オンライン性能のボトルネックとなるおそれがあります。

このため、ジャーナルの出力時間を監視することは重要です。ジャーナルの出力時間はジャーナルファイルの書き込み処理に掛かった時間を監視することで確認できます。

## (1) 関連する監視テンプレート

ジャーナルの出力時間を監視するために使用できる監視テンプレートを次の表に示します。

表 1-2 ジャーナルの出力時間の監視で使用できる監視テンプレート

アラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件
RTS JNL Write Time	PI_RTSS	ジャーナルの出力時間	Event ID = 1104 AND Sv Name = "_SYSTEM" AND Svc Name = "_SYSTEM ONLY" AND Average $\geq$ 2,000,000	Event ID = 1104 AND Sv Name = "_SYSTEM" AND Svc Name = "_SYSTEM ONLY" AND Average $\geq$ 1,000,000

## (2) 監視方法

### ジャーナルの出力時間の監視

ジャーナルの出力時間は、RTS JNL Write Time アラームを使用して監視できます。

RTS JNL Write Time アラームによって異常を検知した場合、次に示す監視テンプレートを使用することでジャーナルファイルの状況を確認できます。

- Journal Detail レポート

Journal Detail レポートによって、ジャーナルグループの状況を確認できます。

さらに詳細な状況や原因を調査したい場合は、OpenTP1 や OS が出力するログ、提供コマンドなどを使用してください。

### 1.3.4 MCF 入力キューの滞留状況の監視

MCF 経由でメッセージを受信するシステムで受信メッセージを処理する MHP のサービスグループが閉塞すると、メッセージが受信されません。これによって未処理のメッセージが MCF 入力キューに滞留してしまい、業務処理が正常に実行できなくなるおそれがあります。

このため、MCF 入力キューの滞留状況を監視することは重要です。MCF 入力キューの滞留状況は、受信メッセージ数を監視することで確認できます。

## (1) 関連する監視テンプレート

MCF 入力キューの滞留状況を監視するために使用できる監視テンプレートを次の表に示します。

表 1-3 MCF 入力キューの滞留状況を監視するために使用できる監視テンプレート

アラーム	使用レコード	使用フィールド	異常条件	警告条件
Rcv Msg Count	PD_MCFG	受信メッセージ数	Rcv Msg Count > 100	Rcv Msg Count > 50

## (2) 監視方法

### 受信メッセージ数の監視

受信メッセージ数は、Rcv Msg Count アラームを使用して監視できます。

Rcv Msg Count アラームによって異常を検知した場合、次に示す監視テンプレートを使用することで MCF メッセージの送信に関連する状況を確認できます。

- MCF Service Group Detail (5.0) レポート  
MCF Service Group Detail (5.0) レポートによって、MCF サービスグループの状況を確認できます。
- Message Log レポート  
Message Log レポートによって、OpenTP1 の出力メッセージを表示させて、異常が発生した UAP、要因などを確認できます。

さらに詳細な状況や原因を調査したい場合は、OpenTP1 や OS が出力するログ、提供コマンドなどを使用してください。

# 2

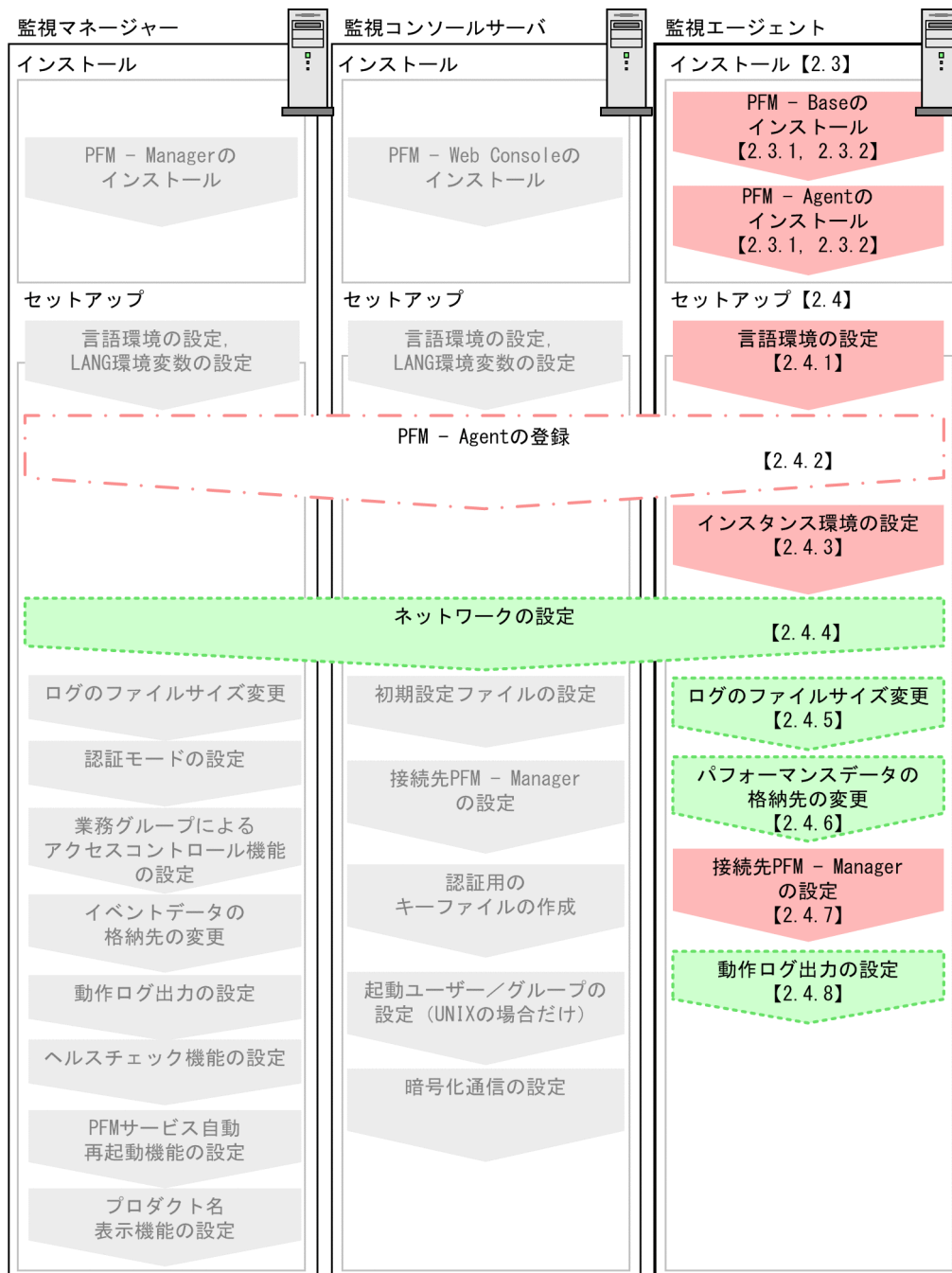
## インストールとセットアップ (Windows の場合)

この章では、PFM - Agent for OpenTP1 のインストールおよびセットアップ方法について説明します。Performance Management システム全体のインストールおよびセットアップ方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Windows 用のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

## 2.1 インストールとセットアップの流れ

PFM - Agent for OpenTP1 をインストールおよびセットアップする流れを説明します。

図 2-1 インストールとセットアップの流れ



(凡例)

- : 必須セットアップ項目
- : 場合によって必須となるセットアップ項目
- : オプションのセットアップ項目
- : 運用・操作マニュアルに手順が記載されている項目
- 【 】** : 参照先

PFM - Manager および PFM - Web Console のインストールおよびセットアップの手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

なお、ユーザー入力を必要とするセットアップコマンドは、対話形式で実行するか非対話形式で実行するかを選択できます。

対話形式で実行する場合は、コマンドの指示に従ってユーザーが値を入力する必要があります。

非対話形式で実行する場合は、コマンド実行中に必要となる入力作業をオプション指定や定義ファイルで代替するため、ユーザー入力が不要になります。また、バッチ処理やリモート実行によってセットアップ作業を自動化できるため、管理者の負担や運用コストを低減できます。

コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

## 2.2 インストールとセットアップの前に確認すること

---

PFM - Agent for OpenTP1 をインストールおよびセットアップする前に確認しておくことを説明します。

### 2.2.1 前提 OS

PFM - Agent for OpenTP1 が動作する OS を次に示します。

- Windows Server 2012
- Windows Server 2016

### 2.2.2 ネットワークの環境設定

Performance Management が動作するためのネットワーク環境について説明します。

#### (1) IP アドレスの設定

PFM - Agent のホストは、ホスト名で IP アドレスが解決できる環境を設定してください。IP アドレスが解決できない環境では、PFM - Agent は起動できません。

監視ホスト名（Performance Management システムのホスト名として使用する名前）には、実ホスト名またはエイリアス名を使用できます。

- 監視ホスト名に実ホスト名を使用している場合  
Windows システムでは `hostname` コマンド、UNIX システムでは `uname -n` コマンドを実行して確認したホスト名で、IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。なお、UNIX システムでは、`hostname` コマンドで取得するホスト名を使用することもできます。
- 監視ホスト名にエイリアス名を使用している場合  
設定しているエイリアス名で IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。

監視ホスト名の設定については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

ホスト名と IP アドレスの設定は、次のどれかの方法で設定してください。

- Performance Management のホスト情報設定ファイル（`jpchosts` ファイル）
- `hosts` ファイル
- DNS

## 注意事項

- Performance Management は、DNS 環境でも運用できますが、FQDN 形式のホスト名には対応していません。このため、監視ホスト名は、ドメイン名を除いて指定してください。
- 複数の LAN 環境で使用する場合は、jpchosts ファイルで IP アドレスを設定してください。詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
- Performance Management は、DHCP による動的な IP アドレスが割り振られているホスト上では運用できません。Performance Management を導入するすべてのホストに、固定の IP アドレスを設定してください。

## (2) ポート番号の設定

Performance Management プログラムのサービスは、デフォルトで次の表に示すポート番号が割り当てられています。これ以外のサービスまたはプログラムに対しては、サービスを起動するたびに、そのときシステムで使用されていないポート番号が自動的に割り当てられます。また、ファイアウォール環境で、Performance Management を使用するときは、ポート番号を固定してください。ポート番号の固定の手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

表 2-1 デフォルトのポート番号と Performance Management プログラムのサービス (Windows の場合)

サービス説明	サービス名	パラメーター	ポート番号	備考
サービス構成情報管理機能	Name Server	jp1pcnsvr	22285	PFM - Manager の Name Server サービスで使用されるポート番号。Performance Management のすべてのホストで設定される。
サービス状態管理機能	Status Server	jp1pcstatsvr	22350	PFM - Manager および PFM - Base の Status Server サービスで使用されるポート番号。 PFM - Manager および PFM - Base がインストールされているホストで設定される。
JP1/SLM 連携機能	JP1/ITSLM	-	20905	JP1/SLM で設定されるポート番号。

(凡例)

- : なし

これらの PFM - Agent が使用するポート番号で通信できるように、ネットワークを設定してください。



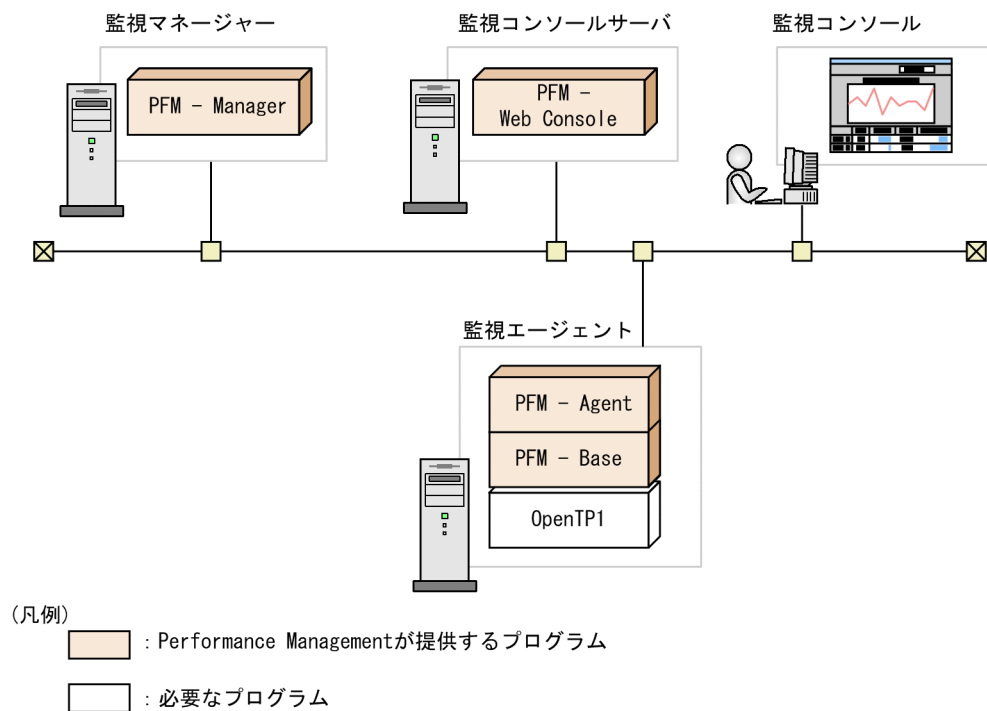
## 2.2.3 インストールに必要な OS ユーザー権限について

PFM - Agent for OpenTP1 をインストールするときは、必ず、Administrators 権限を持つアカウントで実行してください。

## 2.2.4 前提プログラム

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 をインストールする場合に必要な前提プログラムを説明します。プログラムの構成図を次に示します。

図 2-2 プログラムの構成図



### (1) 監視対象プログラム

PFM - Agent for OpenTP1 の監視対象プログラムを次に示します。

- uCosminexus TP1/Server Base
- uCosminexus TP1/FS/Direct Access
- uCosminexus TP1/FS/Table Access
- uCosminexus TP1/LiNK
- uCosminexus TP1/Message Control
- uCosminexus TP1/NET/Library
- uCosminexus TP1/NET/TCP/IP
- uCosminexus TP1/Server Base(64)

- uCosminexus TP1/FS/Direct Access(64)
- uCosminexus TP1/FS/Table Access(64)
- uCosminexus TP1/Message Control(64)
- uCosminexus TP1/NET/Library(64)
- uCosminexus TP1/NET/TCP/IP(64)

これらの監視対象プログラムは、PFM - Agent for OpenTP1 と同一ホストにインストールする必要があります。

## (2) Performance Management プログラム

監視エージェントには、PFM - Agent と PFM - Base をインストールします。PFM - Base は PFM - Agent の前提プログラムです。同一ホストに複数の PFM - Agent をインストールする場合でも、PFM - Base は 1 つだけでかまいません。

ただし、PFM - Manager と PFM - Agent を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base は不要です。

また、PFM - Agent for OpenTP1 を使って OpenTP1 の稼働監視を行うためには、PFM - Manager および PFM - Web Console が必要です。

### 2.2.5 クラスタシステムでのインストールとセットアップについて

クラスタシステムでのインストールとセットアップは、前提となるネットワーク環境やプログラム構成が、通常の構成のセットアップとは異なります。また、実行系ノードと待機系ノードでの作業が必要になります。詳細については、「第 2 編 4. クラスタシステムでの運用」を参照してください。

### 2.2.6 障害発生時の資料採取の準備

トラブルが発生した場合にメモリーダンプおよびクラッシュダンプが必要となることがあります。

#### 注意事項

メモリーダンプのサイズは、実メモリーのサイズによって異なります。搭載している物理メモリーが大きいと、メモリーダンプのサイズも大きくなります。メモリーダンプを採取できるだけのディスク領域を確保してください。詳細は、OS 付属のドキュメントを参照してください。

## 注意事項

クラッシュダンプに出力される情報は JP1 だけでなく、ほかのアプリケーションプログラムのトラブル情報も出力されます。また、クラッシュダンプが出力されると、その分ディスク容量が圧迫されるため、十分なディスク領域を確保しておいてください。

### 2.2.7 インストール前の注意事項

ここでは、Performance Management をインストールおよびセットアップするときの注意事項を説明します。

#### (1) 環境変数に関する注意事項

Performance Management では JPC\_HOSTNAME を環境変数として使用しているため、ユーザー独自に環境変数として設定しないでください。設定した場合は、Performance Management が正しく動作しません。

#### (2) 同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストール、セットアップするときの注意事項

Performance Management は、同一ホストに PFM - Manager, PFM - Web Console, および PFM - Agent をインストールすることもできます。その場合の注意事項を次に示します。

- PFM - Manager と PFM - Agent を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base は不要です。この場合、PFM - Agent の前提プログラムは PFM - Manager になるため、PFM - Manager をインストールしてから PFM - Agent をインストールしてください。
- PFM - Base と PFM - Manager は同一ホストにインストールできません。PFM - Base と PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールする場合は、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Manager → PFM - Agent の順でインストールしてください。また、PFM - Manager と PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合も同様に、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Base → PFM - Agent の順でインストールしてください。
- PFM - Manager がインストールされているホストに PFM - Agent をインストールすると、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先 PFM - Manager をリモートホストの PFM - Manager に変更できません。リモートホストの PFM - Manager に接続したい場合は、インストールするホストに PFM - Manager がインストールされていないことを確認してください。

- PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールすると、PFM - Agent の接続先 PFM - Manager は自ホスト名に設定し直されます。共通メッセージログに設定結果が出力されています。結果を確認してください。
- PFM - Web Console がインストールされているホストに、PFM - Agent をインストールする場合は、ブラウザの画面をすべて閉じてからインストールを実施してください。
- Performance Management プログラムを新規にインストールした場合は、ステータス管理機能がデフォルトで有効になります。ただし、07-50 から 08-00 以降にバージョンアップインストールした場合は、ステータス管理機能の設定状態はバージョンアップ前のままとなります。ステータス管理機能の設定を変更する場合は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

### ポイント

システムの性能や信頼性を向上させるため、PFM - Manager, PFM - Web Console, および PFM - Agent はそれぞれ別のホストで運用することをお勧めします。

## (3) バージョンアップの注意事項

Performance Management プログラムをバージョンアップする場合は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップの章にある、バージョンアップの注意事項について説明している箇所を参照してください。

PFM - Agent for OpenTP1 をバージョンアップする場合は、「付録 H バージョンアップ手順とバージョンアップ時の注意事項」を参照してください。

なお、バージョンアップについての詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録を参照してください。

## (4) その他の注意事項

- Performance Management のプログラムが 1 つもインストールされていない環境に新規インストールする場合は、インストール先フォルダにファイルやフォルダがないことを確認してください。
- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままインストールした場合、システムの再起動を促すメッセージが表示されることがあります。この場合は、メッセージに従ってシステムを再起動し、インストールを完了させてください。
- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままの状態、ディスク容量が不足している状態、またはディレクトリ権限がない状態でインストールした場合、ファイルの展開に失敗することがあります。Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラムが起動している場合はすべ

て停止してからインストールし直してください。ディスク容量不足やディレクトリ権限不足が問題である場合は、問題を解決したあとにインストールし直してください。

- Performance Management のプログラムをインストールする場合、次に示すセキュリティ関連プログラムがインストールされていないかどうか確認してください。インストールされている場合、次の説明に従って対処してください。

- セキュリティ監視プログラム

セキュリティ監視プログラムを停止するかまたは設定を変更して、Performance Management のプログラムのインストールを妨げないようにしてください。

- ウィルス検出プログラム

ウィルス検出プログラムを停止してから Performance Management のプログラムをインストールすることをお勧めします。

Performance Management のプログラムのインストール中にウィルス検出プログラムが稼働している場合、インストールの速度が低下したり、インストールが実行できなかつたり、または正しくインストールできなかつたりすることがあります。

- プロセス監視プログラム

プロセス監視プログラムを停止するかまたは設定を変更して、Performance Management のサービスまたはプロセス、および共通コンポーネントのサービスまたはプロセスを監視しないようにしてください。

Performance Management のプログラムのインストール中に、プロセス監視プログラムによって、これらのサービスまたはプロセスが起動されたり停止されたりすると、インストールに失敗することがあります。

## 2.3 インストール

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 のプログラムをインストールする順序と提供媒体からプログラムをインストールする手順を説明します。

### 2.3.1 プログラムのインストール順序

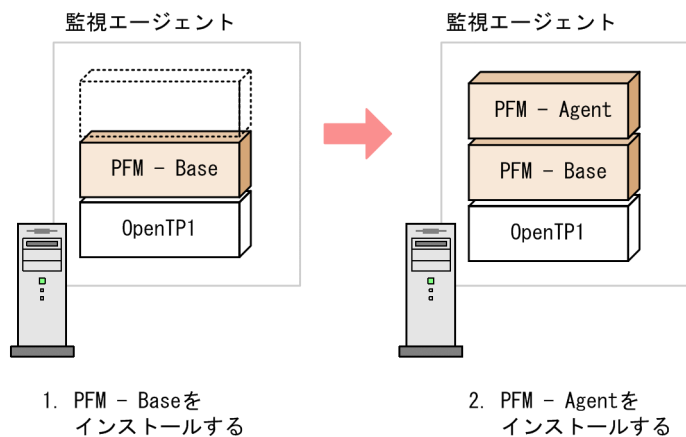
プログラムのインストール順序を次に示します。

- PFM - Base と同一ホストに PFM - Agent をインストールする場合  
PFM - Base → PFM - Agent の順でインストールしてください。PFM - Base がインストールされていないホストに PFM - Agent をインストールすることはできません。
- PFM - Manager と同一ホストに PFM - Agent をインストールする場合  
PFM - Manager → PFM - Agent の順でインストールしてください。PFM - Manager がインストールされていないホストに PFM - Agent をインストールすることはできません。

また、Store データベースのバージョン 1.0 からバージョン 2.0 にバージョンアップする場合、PFM - Agent と PFM - Agent の前提プログラムである PFM - Manager または PFM - Base のインストール条件によって、セットアップ方法が異なります。Store バージョン 2.0 のセットアップ方法については、「[2.7.3 Store バージョン 2.0 への移行](#)」を参照してください。

同一ホストに複数の PFM - Agent をインストールする場合、PFM - Agent 相互のインストール順序は問いません。

図 2-3 プログラムのインストール順序



### 2.3.2 PFM - Agent for OpenTP1 のインストール手順

Windows ホストに Performance Management プログラムをインストールするには、提供媒体を使用する方法と、JP1/NETM/DM (JP1/NETM/DM は日本国内の製品名称です。) を使用してリモートインス

インストールする方法があります。JP1/NETM/DM を使用する方法については、マニュアル「JP1/NETM/DM 運用ガイド 1 (Windows(R)用)」を参照してください。

## 注意事項

OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、インストール中にユーザーアカウント制御のダイアログが表示されることがあります。ダイアログが表示された場合は、[続行] ボタンをクリックしてインストールを続行してください。[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、インストールが中止されます。

提供媒体を使用する場合のインストール手順を次に示します。

1. プログラムをインストールするホストに、Administrators 権限でログオンする。
2. ローカルホストで起動している Performance Management のサービスがあれば、すべて停止する。  
停止するサービスは、物理ホストおよび論理ホスト上の Performance Management のサービスです。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
3. 提供媒体をセットし、インストーラーを実行する。  
起動したインストーラーの指示に従ってインストールを進めます。  
PFM - Manager または PFM - Base のインストール時に設定された次の項目が表示され、確認できます。
  - ユーザー情報
  - インストール先のフォルダ
  - プログラムフォルダ
4. [インストール] ボタンをクリックして、インストールを開始する。

## 2.4 PFM - Agent for OpenTP1 のセットアップ

---

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 を運用するための、セットアップについて説明します。

〈オプション〉は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

### 2.4.1 言語環境の設定

Windows は言語環境を設定する個所が複数ありますが、設定はすべて統一しておく必要があります。

言語環境の設定手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の言語環境の設定について説明している個所を参照してください。

### 2.4.2 PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for OpenTP1 の登録 〈オプション〉

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent を一元管理するために、PFM - Manager および PFM - Web Console に PFM - Agent for OpenTP1 を登録する必要があります。

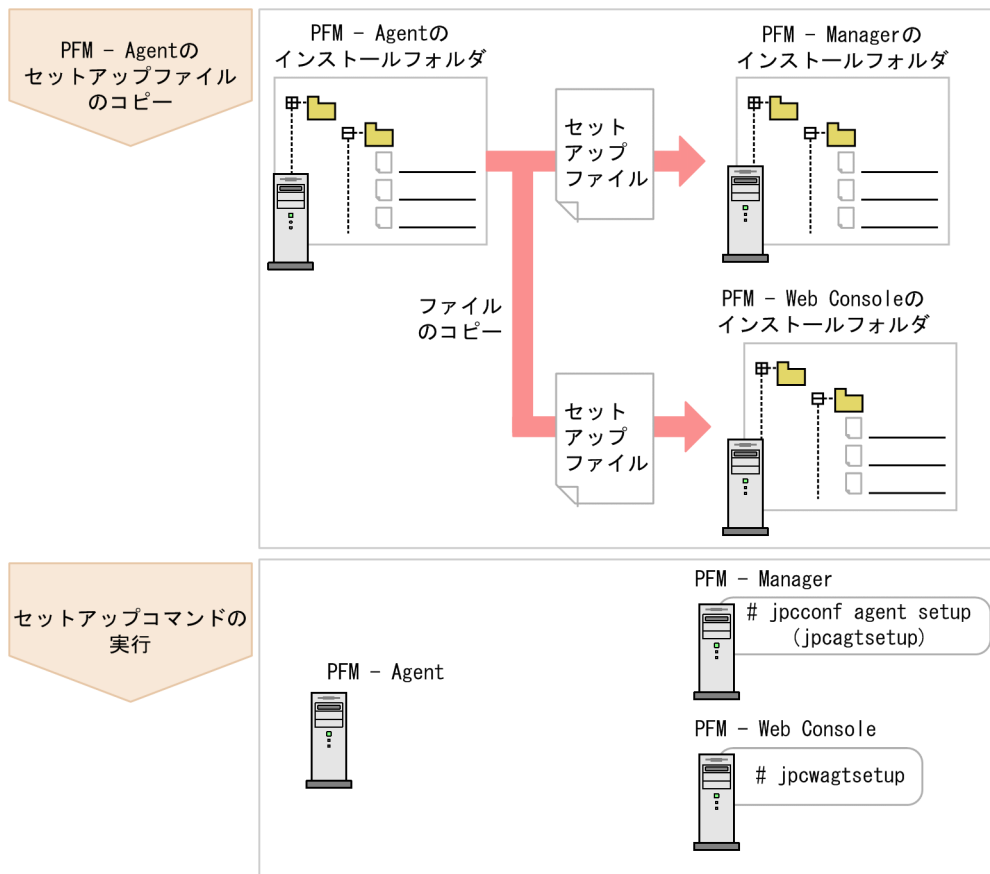
PFM - Manager のバージョンが 08-50 以降の場合、PFM - Agent の登録は自動で行われるため、ここで説明する手順は不要です。

ただし、PFM - Manager よりリリース時期が新しい PFM - Agent または PFM - RM については手動登録が必要になる場合があります。手動登録の要否については、PFM - Manager のリリースノートを参照してください。

PFM - Agent の登録の流れを次の図に示します。



図 2-4 PFM - Agent の登録の流れ



## 注意事項

- PFM - Agent の登録は、インスタンス環境を設定する前に実施してください。
- すでに PFM - Agent for OpenTP1 の情報が登録されている Performance Management システムに、新たに同じバージョンの PFM - Agent for OpenTP1 を追加した場合、PFM - Agent の登録は必要ありません。
- バージョンが異なる PFM - Agent for OpenTP1 を、異なるホストにインストールする場合、古いバージョン、新しいバージョンの順でセットアップしてください。
- PFM - Manager と同じホストに PFM - Agent をインストールした場合、`jpcconf agent setup` コマンドが自動的に実行されます。共通メッセージログに「KAVE05908-I エージェント追加セットアップは正常に終了しました」と出力されるので、結果を確認してください。コマンドが正しく実行されていない場合は、コマンドを実行し直してください。コマンドの実行方法については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドの章を参照してください。

## (1) PFM - Agent for OpenTP1 のセットアップファイルをコピーする

PFM - Agent for OpenTP1 をインストールしたホストにあるセットアップファイルを PFM - Manager および PFM - Web Console をインストールしたホストにコピーします。手順を次に示します。

1. PFM - Manager および PFM - Web Console のサービスが起動されている場合は、停止する。  
サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

2. PFM - Agent のセットアップファイルをバイナリーモードでコピーする。

ファイルが格納されている場所およびファイルをコピーする場所を次の表に示します。

表 2-2 コピーするセットアップファイル

コピー先			PFM - Agent の セットアップファイル
PFM プログラム名	OS	コピー先ディレクトリ	
PFM - Manager	Windows	PFM - Manager のインストール先フォルダ¥setup¥	インストール先フォルダ¥setup¥jpcagthw.EXE
	UNIX	/opt/jp1pc/setup/	インストール先フォルダ¥setup¥jpcagthu.Z
PFM - Web Console	Windows	PFM - Web Console のインストール先フォルダ¥setup¥	インストール先フォルダ¥setup¥jpcagthw.EXE
	UNIX	/opt/jp1pcwebcon/setup/	インストール先フォルダ¥setup¥jpcagthu.Z

## (2) PFM - Manager ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Manager で PFM - Agent for OpenTP1 をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpccconf agent setup -key OpenTP1
```

### ■ 注意事項

コマンドを実行するローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止していない状態で `jpccconf agent setup` コマンドを実行した場合、エラーが発生することがあります。その場合は、Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止したことを確認したあと、再度 `jpccconf agent setup` コマンドを実行してください。

PFM - Manager ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは、この作業が終了したあと削除してもかまいません。

## (3) PFM - Web Console ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Web Console で PFM - Agent for OpenTP1 をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpccwagtsetup
```

PFM - Web Console ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは、この作業が終了したあと削除してもかまいません。

## 2.4.3 インスタンス環境の設定

PFM - Agent for OpenTP1 で監視する OpenTP1 システムのインスタンス情報を設定します。インスタンス情報の設定は、PFM - Agent ホストで実施します。

設定するインスタンス情報を次の表に示します。セットアップの操作を始める前に、次の情報をあらかじめ確認してください。OpenTP1 システムのインスタンス情報の詳細については、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照してください。

表 2-3 PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス情報

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
DCDIR	監視対象 OpenTP1 システムの環境変数 DCDIR の値 (OpenTP1 ディレクトリのパス)。	50 バイト以内の半角文字列	—
DCCONFPATH	監視対象 OpenTP1 システムの環境変数 DCCONFPATH の値 (OpenTP1 システム定義ファイル格納ディレクトリのパス)。	512 バイト以内の半角文字列	—
Store Version*	使用する Store バージョン。	{1.0   2.0}	2.0

(凡例)

— : なし

注※

次に示すどちらかの場合で、初めてインスタンス環境を設定するときに必要です。

- PFM - Agent と同一ホスト上の PFM - Base が 08-10 以降の場合
- PFM - Agent と同一ホスト上の PFM - Manager が 08-10 以降の場合

注意

インスタンス環境を設定していない場合、PFM - Agent for OpenTP1 のサービスを起動できません。

インスタンス環境を構築するには、`jpccconf inst setup` コマンドを使用します。インスタンス環境の構築手順を次に示します。

### 1. サービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpccconf inst setup` コマンドを実行する。

例えば、PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス名 SDC のインスタンス環境を構築する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst setup -key OpenTP1 -inst SDC
```

### 2. OpenTP1 システムのインスタンス情報を設定する。

表 2-3 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力してください。各項目とも省略はできません。デフォルトで表示されている値を、項目の入力とする場合はリターンキーだけを押してください。

すべての入力終了すると、インスタンス環境が構築されます。構築時に入力したインスタンス情報を変更したい場合は、再度 `jpccconf inst setup` コマンドを実行し、インスタンス環境を更新してください。インスタンス環境の更新については、「[2.7.2 インスタンス環境の更新の設定](#)」を参照してください。

構築されるインスタンス環境を次に示します。

- インスタンス環境のフォルダ構成

次のフォルダ下にインスタンス環境が構築されます。

物理ホストの場合：インストール先フォルダ¥agth

論理ホストの場合：環境フォルダ¥jp1pc¥agth

注※

環境フォルダとは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のフォルダです。

構築されるインスタンス環境のフォルダ構成を次の表に示します。

表 2-4 インスタンス環境のフォルダ構成

フォルダ名・ファイル名		説明	
agent	インスタンス名	jpccagt.ini	Agent Collector サービス起動情報ファイル
		jpccagt.ini.model※1	Agent Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル
		log	ログファイル格納フォルダ
store	インスタンス名	jpccsto.ini	Agent Store サービス起動情報ファイル
		jpccsto.ini.model※1	Agent Store サービス起動情報ファイルのモデルファイル
		import※2	インポート先フォルダ
		partial※2	部分バックアップ先フォルダ
		*.DAT	データモデル定義ファイル
		dump	エクスポート先フォルダ
		backup	バックアップ先フォルダ
		log	ログファイル格納フォルダ

注※1

インスタンス環境を構築した時点の設定値に戻したいときに使用します。

注※2

Store バージョン 2.0 を使用しているときだけ作成されます。

- インスタンス環境のサービス ID

インスタンス環境のサービス ID は次のようになります。

**プロダクトID 機能ID インスタンス番号 インスタンス名 [ホスト名]**

PFM - Agent for OpenTP1 の場合、インスタンス名には `jpconf inst setup` コマンドで指定したインスタンス名が表示されます。

サービス ID については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録を参照してください。

- インスタンス環境の Windows のサービス名

インスタンス環境の Windows のサービス名は次のようになります。

- Agent Collector サービス：PFM - Agent for OpenTP1 インスタンス名[論理ホスト名]
- Agent Store サービス：PFM - Agent Store for OpenTP1 インスタンス名[論理ホスト名]

Windows のサービス名については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録を参照してください。

## 2.4.4 ネットワークの設定 〈オプション〉

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合にだけ必要な設定です。

ネットワークの設定では次の 2 つの項目を設定できます。

- IP アドレスを設定する

Performance Management を複数の LAN に接続されたネットワークで使用するときに設定します。複数の IP アドレスを設定するには、`jpchosts` ファイルにホスト名と IP アドレスを定義します。設定した `jpchosts` ファイルは Performance Management システム全体で統一させてください。

詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

- ポート番号を設定する

Performance Management が使用するポート番号を設定できます。運用での混乱を避けるため、ポート番号とサービス名は、Performance Management システム全体で統一させてください。

ポート番号の設定の詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

## 2.4.5 ログのファイルサイズ変更 〈オプション〉

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。このファイルサイズを変更したい場合に必要な設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

## 2.4.6 パフォーマンスデータの格納先の変更 オプション

PFM - Agent for OpenTP1 で管理されるパフォーマンスデータの格納先を変更したい場合に、必要な設定です。

パフォーマンスデータの格納先は次のとおりです。

- 保存先：インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥
- バックアップ先：インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥backup¥
- 部分バックアップ先※：インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥partial¥
- エクスポート先：インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥dump¥
- インポート先※：インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥import¥

注※

Store バージョン 2.0 を使用しているときだけ設定できます。

注意

論理ホストで運用する場合のデフォルトの保存先については、「インストール先フォルダ」を「環境フォルダ¥jp1pc」に読み替えてください。

詳細については、「[2.7.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。

## 2.4.7 PFM - Agent for OpenTP1 の接続先 PFM - Manager の設定

PFM - Agent がインストールされているホストで、その PFM - Agent を管理する PFM - Manager を設定します。接続先の PFM - Manager を設定するには、`jpconf mgrhost define` コマンドを使用します。

### 注意事項

- 同一ホスト上に、複数の PFM - Agent がインストールされている場合でも、接続先に指定できる PFM - Manager は、1 つだけです。PFM - Agent ごとに異なる PFM - Manager を接続先に設定することはできません。
- PFM - Agent と PFM - Manager が同じホストにインストールされている場合、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先の PFM - Manager をほかの PFM - Manager に変更できません。

手順を次に示します。

## 1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する

セットアップを実施する前に、ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

jpccnf mgrhost define コマンド実行時に、Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、停止を問い合わせるメッセージが表示されます。

2. 接続先の PFM - Manager ホストのホスト名を指定して、jpccnf mgrhost define コマンドを実行する  
例えば、接続先の PFM - Manager がホスト host01 上にある場合、次のように指定します。

```
jpccnf mgrhost define -host host01
```

## 2.4.8 動作ログ出力の設定 〈オプション〉

PFM サービスの起動・停止時、または PFM - Manager との接続状態の変更時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

設定方法については、「付録 J 動作ログの出力」を参照してください。

## 2.5 アンインストール

---

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 をアンインストールおよびアンセットアップする手順を示します。

### 2.5.1 アンインストール前の注意事項

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 をアンインストールおよびアンセットアップするときの注意事項を次に示します。

#### (1) アンインストールに必要な OS ユーザー権限に関する注意事項

PFM - Agent をアンインストールするときは、必ず、Administrators 権限を持つアカウントで実行してください。

#### (2) ネットワークに関する注意事項

Performance Management プログラムをアンインストールしても、services ファイルに定義されたポート番号は削除されません。

#### (3) プログラムに関する注意事項

- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままアンインストールした場合、ファイルやフォルダが残ることがあります。この場合は、手動でインストール先フォルダ以下をすべて削除してください。
- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままアンインストールした場合、システムの再起動を促すメッセージが出力されることがあります。この場合、システムを再起動して、アンインストールを完了させてください。
- PFM - Base と PFM - Agent がインストールされているホストの場合、PFM - Base のアンインストールは PFM - Agent をアンインストールしないと実行できません。この場合、PFM - Agent → PFM - Base の順にアンインストールしてください。また、PFM - Manager と PFM - Agent がインストールされているホストの場合も同様に、PFM - Manager のアンインストールは PFM - Agent をアンインストールしないと実行できません。この場合、PFM - Agent → PFM - Manager の順にアンインストールしてください。

#### (4) サービスに関する注意事項

PFM - Agent をアンインストールしただけでは、`jpctool service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。この場合、`jpctool service delete` コマンドを使用してサービスの情報を削除してください。



## (5) その他の注意事項

PFM - Web Console がインストールされているホストから、Performance Management プログラムをアンインストールする場合は、ブラウザの画面をすべて閉じてからアンインストールを実施してください。

### 2.5.2 インスタンス環境のアンセットアップ

インスタンス環境をアンセットアップするには、まず、インスタンス名を確認し、インスタンス環境を削除します。インスタンス環境の削除は、PFM - Agent ホストで実施します。

インスタンス名を確認するには、`jpccconf inst list` コマンドを使用します。また、構築したインスタンス環境を削除するには、`jpccconf inst unsetup` コマンドを使用します。

インスタンス環境をアンセットアップする手順を次に示します。

#### 1. インスタンス名を確認する。

PFM - Agent for OpenTP1 を示すサービスキーを指定して、`jpccconf inst list` コマンドを実行します。

```
jpccconf inst list -key OpenTP1
```

設定されているインスタンス名が SDC の場合、SDC と表示されます。

#### 2. インスタンス環境の PFM - Agent のサービスが起動されている場合は、停止する。

サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

#### 3. インスタンス環境を削除する。

PFM - Agent for OpenTP1 を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpccconf inst unsetup` コマンドを実行します。

設定されているインスタンス名が SDC の場合、次のように指定します。

```
jpccconf inst unsetup -key OpenTP1 -inst SDC
```

`jpccconf inst unsetup` コマンドが正常終了すると、インスタンス環境として構築されたフォルダ、サービス ID および Windows のサービスが削除されます。

#### 注意

インスタンス環境をアンセットアップしても、`jpctool service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。この場合、`jpctool service delete` コマンドを使用してサービスの情報を削除してください。次に指定例を示します。

- インスタンス名：SDC
- ホスト名：host01
- Agent Collector サービスのサービス ID：HA1SDC[host01]

- Agent Store サービスのサービス ID : HS1SDC[host01]

```
jpctool service delete -id サービスID -host host01
```

コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

### 2.5.3 接続先 PFM - Manager の解除

接続先 PFM - Manager を解除する場合は、対象の PFM - Manager に接続している PFM - Agent for OpenTP1 のサービス情報を削除する必要があります。

サービス情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップ（Windows の場合）の章の、サービス情報の削除手順について説明している箇所を参照してください。

なお、接続先を別の PFM - Manager に変更する場合は、「[2.4.7 PFM - Agent for OpenTP1 の接続先 PFM - Manager の設定](#)」を参照してください。

### 2.5.4 アンインストール手順

PFM - Agent for OpenTP1 をアンインストールする手順を説明します。

1. PFM - Agent for OpenTP1 をアンインストールするホストに、Administrators 権限でログオンする。

2. ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。

サービス情報を表示して、サービスが起動されていないか確認してください。サービスの停止方法およびサービス情報の表示方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。

3. アンインストールする Performance Management プログラムを選択する。

Windows の [コントロールパネル] で [プログラムと機能] ※を選択して、アンインストールする Performance Management プログラムを選択します。

注※ Windows のバージョンによって名称が異なる場合があります。

4. [削除] を選択し、[OK] ボタンをクリックする。

選択したプログラムがアンインストールされます。

## 注意事項

OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、アンインストール中にユーザーアカウント制御のダイアログが表示されることがあります。ダイアログが表示された場合は、「続行」ボタンをクリックしてアンインストールを続行してください。「キャンセル」ボタンをクリックした場合は、アンインストールが中止されます。

## 2.6 PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成の変更

---

監視対象システムのネットワーク構成の変更や、ホスト名の変更などに応じて、PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成を変更する場合があります。ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成を変更する手順を説明します。

PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成を変更する場合、PFM - Manager や PFM - Web Console の設定変更もあわせて変更する必要があります。Performance Management のシステム構成を変更する手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。なお、物理ホスト名またはエイリアス名を変更するときに、固有の追加作業が必要な PFM - Agent もありますが、PFM - Agent for OpenTP1 の場合、固有の追加作業は必要ありません。

## 2.7 PFM - Agent for OpenTP1 の運用方式の変更

収集した稼働監視データの運用手順の変更などで、PFM - Agent for OpenTP1 の運用方式を変更する場合があります。ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 の運用方式を変更する手順を説明します。Performance Management 全体の運用方式を変更する手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

### 2.7.1 パフォーマンスデータの格納先の変更

PFM - Agent for OpenTP1 で収集したパフォーマンスデータは、PFM - Agent for OpenTP1 の Agent Store サービスの Store データベースで管理しています。ここでは、パフォーマンスデータの格納先の変更方法について説明します。

#### (1) jpcconf db define コマンドを使用して設定を変更する

Store データベースで管理されるパフォーマンスデータの、次のデータ格納先フォルダを変更したい場合は、jpcconf db define コマンドで設定します。Store データベースの格納先フォルダを変更する前に収集したパフォーマンスデータが必要な場合は、jpcconf db define コマンドの-move オプションを使用してください。jpcconf db define コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

- 保存先フォルダ
- バックアップ先フォルダ
- 部分バックアップ先フォルダ\*
- エクスポート先フォルダ
- インポート先フォルダ\*

注※

Store バージョン 2.0 を使用しているときだけ設定できます。

jpcconf db define コマンドで設定するオプション名、設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 2-5 パフォーマンスデータの格納先を変更するコマンドの設定項目

説明	オプション名	設定できる値 (Store バージョン 1.0)	設定できる値 (Store バージョン 2.0)	デフォルト値*
パフォーマンスデータの保存先フォルダ	sd	1~127 バイトの半角英数字	1~214 バイトの半角英数字	インストール先フォルダ %agth%store%インスタンス名

説明	オプション名	設定できる値 (Storeバージョン 1.0)	設定できる値 (Storeバージョン 2.0)	デフォルト値*
パフォーマンスデータのバックアップ先フォルダ	bd	1~127バイトの半角英数字	1~211バイトの半角英数字	インストール先フォルダ %agth%store%インスタンス名%backup
パフォーマンスデータの部分バックアップ先フォルダ	pbd	—	1~214バイトの半角英数字	インストール先フォルダ %agth%store%インスタンス名%partial
パフォーマンスデータを退避する場合の最大世代番号	bs	1~9	1~9	5
パフォーマンスデータのエクスポート先フォルダ	dd	1~127バイトの半角英数字	1~127バイトの半角英数字	インストール先フォルダ %agth%store%インスタンス名%dump
パフォーマンスデータのインポート先フォルダ	id	—	1~222バイトの半角英数字	インストール先フォルダ %agth%store%インスタンス名%import

(凡例)

—：設定できません。

注※

論理ホストで運用する場合のデフォルト値については、「インストール先フォルダ」を「環境フォルダ %jplpc」に読み替えてください。

## (2) jpcsto.ini ファイルを編集して設定を変更する (Store バージョン 1.0 の場合だけ)

Store バージョン 1.0 を使用しているときは、jpcsto.ini を直接編集して変更できます。

### (a) jpcsto.ini ファイルの設定項目

jpcsto.ini ファイルで編集するラベル名、設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 2-6 パフォーマンスデータの格納先の設定項目 (jpcsto.ini の[Data Section]セクション)

説明	ラベル名	設定できる値*1	デフォルト値*2
パフォーマンスデータの保存先フォルダ	Store Dir*3	1~127バイトの半角英数字	インストール先フォルダ%agth%store%インスタンス名
パフォーマンスデータのバックアップ先フォルダ	Backup Dir*3	1~127バイトの半角英数字	インストール先フォルダ%agth%store%インスタンス名%backup
パフォーマンスデータをバックアップする場合の最大世代番号	Backup Save	1~9	5

説明	ラベル名	設定できる値※1	デフォルト値※2
パフォーマンスデータのエクスポート先フォルダ	Dump Dir※3	1~127バイトの半角英数字	インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥dump

#### 注※1

- フォルダ名は、Store データベースのデフォルト格納先フォルダ（インストール先フォルダ¥agth ¥store¥インスタンス名）からの相対パスか、または絶対パスで指定してください。
- 指定できる文字は、次の文字を除く、半角英数字、半角記号および半角空白です。  
; , \* ? ' " < > |
- 指定値に誤りがある場合、Agent Store サービスは起動できません。

#### 注※2

論理ホストで運用する場合のデフォルト値については、「インストール先フォルダ」を「環境フォルダ ¥jp1pc」に読み替えてください。

#### 注※3

Store Dir, Backup Dir, および Dump Dir には、それぞれ重複したフォルダを指定できません。

### (b) jpcsto.ini ファイルの編集前の準備

- Store データベースの格納先フォルダを変更する場合は、変更後の格納先フォルダを事前に作成しておいてください。
- Store データベースの格納先フォルダを変更すると、変更前に収集したパフォーマンスデータを使用できなくなります。変更前に収集したパフォーマンスデータが必要な場合は、次に示す手順でデータを引き継いでください。
  1. jpctool db backup コマンドで Store データベースに格納されているパフォーマンスデータのバックアップを採取する。
  2. 「(c) jpcsto.ini ファイルの編集手順」に従って Store データベースの格納先フォルダを変更する。
  3. jpctool db restore コマンドで変更後のフォルダにバックアップデータをリストアする。

### (c) jpcsto.ini ファイルの編集手順

手順を次に示します。

1. PFM - Agent のサービスを停止する。  
ローカルホストで PFM - Agent のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。
2. テキストエディターなどで、jpcsto.ini ファイルを開く。
3. パフォーマンスデータの格納先フォルダなどを変更する。  
次に示す網掛け部分を、必要に応じて修正してください。

```

:
[Data Section]
Store Dir=.
Backup Dir.=¥backup
Backup Save=5
Dump Dir.=¥dump
:

```

## 注意事項

- 行頭および「=」の前後には空白文字を入力しないでください。
- 各ラベルの値の「.」は、Agent Store サービスの Store データベースのデフォルト格納先フォルダ（インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名）を示します。格納先を変更する場合、その格納先フォルダからの相対パスか、または絶対パスで記述してください。
- jpcsto.ini ファイルには、データベースの格納先フォルダ以外にも、定義情報が記述されています。[Data Section]セクション以外の値は変更しないようにしてください。[Data Section]セクション以外の値を変更すると、Performance Management が正常に動作しなくなることがあります。

4. jpcsto.ini ファイルを保存して閉じる。

5. Performance Management のプログラムおよびサービスを起動する。

### 注意

この手順で Store データベースの保存先フォルダを変更した場合、パフォーマンスデータファイルは変更前のフォルダから削除されません。これらのファイルが不要な場合は、次に示すファイルだけを削除してください。

- 拡張子が .DB のすべてのファイル
- 拡張子が .IDX のすべてのファイル

## 2.7.2 インスタンス環境の更新の設定

インスタンス環境を更新する手順を次に示します。

複数のインスタンス環境を更新する場合は、この手順を繰り返し実施します。

インスタンス名を確認するには、jpcconf inst list コマンドを使用します。また、インスタンス環境を更新するには、jpcconf inst setup コマンドを使用します。



## 1. インスタンス名を確認する。

インスタンス環境で動作している PFM - Agent for OpenTP1 を示すサービスキーを指定して、`jpccconf inst list` コマンドを実行します。

例えば、PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス名を確認したい場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst list -key OpenTP1
```

設定されているインスタンス名が SDC の場合、SDC と表示されます

## 2. 更新する情報を確認する。

インスタンス環境で更新できる情報を、次の表に示します。

表 2-7 PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス情報

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
DCDIR	監視対象 OpenTP1 システムの環境変数 DCDIR の値 (OpenTP1 ディレクトリのパス)。	50 バイト以内の半角文字列	—
DCCONFPATH	監視対象 OpenTP1 システムの環境変数 DCCONFPATH の値 (OpenTP1 システム定義ファイル格納ディレクトリのパス)。	512 バイト以内の半角文字列	—

(凡例)

— : なし

## 3. 更新したいインスタンス環境の PFM - Agent for OpenTP1 のサービスが起動されている場合は、停止する。

`jpccconf inst setup` コマンド実行時に、更新したいインスタンス環境のサービスが起動されている場合は、確認メッセージが表示され、サービスを停止できます。サービスを停止した場合は、更新処理が継続されます。サービスを停止しなかった場合は、更新処理が中断されます。

## 4. 更新したいインスタンス環境の PFM - Agent for OpenTP1 を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpccconf inst setup` コマンドを実行する。

例えば、PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス名 SDC のインスタンス環境を更新する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst setup -key OpenTP1 -inst SDC
```

## 5. OpenTP1 のインスタンス情報を更新する。

表 2-7 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力します。現在設定されている値が表示されます。表示された値を変更しない場合は、リターンキーだけを押ししてください。すべての入力終了すると、インスタンス環境が更新されます。

## 6. 更新したインスタンス環境のサービスを再起動する。

サービスの起動方法および停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

## 2.7.3 Store バージョン 2.0 への移行

Store データベースの保存形式には、バージョン 1.0 と 2.0 の 2 種類があります。Store バージョン 1.0 および Store バージョン 2.0 の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」を参照してください。

Store バージョン 2.0 は、PFM - Base または PFM - Manager のバージョン 08-10 以降の環境に、08-10 以降の PFM - Agent for OpenTP1 を新規インストールした場合にだけデフォルトで利用できます。それ以外の場合は、Store バージョン 1.0 形式のままとなっているため、セットアップコマンドによって Store バージョン 2.0 に移行してください。

何らかの理由によって Store バージョン 1.0 に戻す必要がある場合は、Store バージョン 2.0 のアンセットアップを行ってください。

インストール条件に対応する Store バージョン 2.0 の利用可否と利用手順を次の表に示します。

表 2-8 Store バージョン 2.0 の利用可否および利用手順

インストール条件		Store バージョン 2.0 の利用可否	Store バージョン 2.0 の利用手順
インストール済みの PFM - Base, または PFM - Manager のバージョン	PFM - Agent のインストール方法		
08-10 より前	上書きインストール	利用できない	PFM - Base, または, PFM - Manager を 08-10 にバージョンアップ後, セットアップコマンドを実行
	新規インストール		
08-10 以降	上書きインストール	セットアップ後利用できる	セットアップコマンドを実行
	新規インストール	利用できる	設定不要

### (1) Store バージョン 2.0 のセットアップ

#### 1. システムリソース見積もりと保存期間の設定

Store バージョン 2.0 の導入に必要なシステムリソースが、実行環境に適しているかどうかを確認してください。必要なシステムリソースを次に示します。

- ディスク容量
- ファイル数

#### 2. インストールとセットアップ (Windows の場合)

- 1 プロセスがオープンするファイル数

これらの値は保存期間の設定によって調節できます。実行環境の保有しているリソースを考慮して保存期間を設定してください。システムリソースの見積もりについては、リリースノートを参照してください。

## 2. フォルダの設定

Store バージョン 2.0 に移行する場合に、Store バージョン 1.0 でのフォルダ設定では、Agent Store サービスが起動しないことがあります。このため、Agent Store サービスが使用するフォルダの設定を見直す必要があります。Agent Store サービスが使用するフォルダの設定は `jpccconf db define` コマンドを使用して表示・変更できます。 `jpccconf db define` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。Store バージョン 2.0 は、Store データベースの保存先フォルダやバックアップ先フォルダの最大長が Store バージョン 1.0 と異なります。Store バージョン 1.0 でフォルダの設定を相対パスに変更している場合、絶対パスに変換した値が Store バージョン 2.0 でのフォルダ最大長の条件を満たしているかどうかを確認してください。Store バージョン 2.0 のフォルダ最大長は 214 バイトです。フォルダ最大長の条件を満たしていない場合は、Agent Store サービスが使用するフォルダの設定を変更したあと、手順 3.以降に進んでください。

## 3. セットアップコマンドの実行

Store バージョン 2.0 に移行するため、次のコマンドを実行します。

```
jpccconf db vrset -ver 2.0 -key OpenTP1
```

`jpccconf db vrset` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

## 4. 保存期間の設定

手順 1.の見積もり時に設計した保存期間を設定します。Agent Store サービスを起動して、PFM - Web Console で設定してください。

## (2) Store バージョン 2.0 のアンセットアップ

Store バージョン 2.0 は `jpccconf db vrset -ver 1.0` コマンドを使用してアンセットアップします。Store バージョン 2.0 をアンセットアップすると、Store データベースのデータはすべて初期化され、Store バージョン 1.0 に戻ります。

`jpccconf db vrset` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

## (3) 注意事項

### (a) Store バージョン 1.0 から Store バージョン 2.0 に移行する場合

Store データベースを Store バージョン 1.0 から Store バージョン 2.0 に移行した場合、PI レコードタイプのレコードの保存期間の設定は引き継がれます。ただし、PD レコードタイプのレコードについては、

以前の設定値（保存レコード数）に関係なくデフォルトの保存日数がレコードごとに設定され、保存日数以前に収集されたデータは削除されます。

例えば、Store バージョン 1.0 で、Collection Interval が 3,600 秒の PD レコードの保存レコード数を 1,000 に設定していた場合、PD レコードは 1 日に 24 レコード保存されることになるので、 $1,000 \div 24 \div$  約 42 日分のデータが保存されています。この Store データベースを Store バージョン 2.0 へ移行した結果、デフォルトの保存日数が 10 日に設定されたとすると、11 日以上前のデータは削除されて参照できなくなります。

したがって、Store バージョン 2.0 へ移行する前に、PD レコードタイプのレコードについて保存レコード数の設定を確認してください。Store バージョン 2.0 でのデフォルトの保存日数以上のデータが保存される設定になっている場合は、`jpctool db dump` コマンドでデータベース内のデータを出力してください。Store バージョン 2.0 でのデフォルト保存日数については、リリースノートを参照してください。

## **(b) Store バージョン 2.0 から Store バージョン 1.0 に戻す場合**

Store バージョン 2.0 をアンセットアップすると、データは初期化されます。このため、Store バージョン 2.0 をアンセットアップして Store バージョン 1.0 に戻す前に、`jpctool db dump` コマンドで Store バージョン 2.0 の情報を出力してください。

## 2.8 バックアップとリストア

PFM - Agent for OpenTP1 のバックアップおよびリストアについて説明します。

障害が発生してシステムが壊れた場合に備えて、PFM - Agent for OpenTP1 の設定情報のバックアップを取得してください。また、PFM - Agent for OpenTP1 をセットアップしたときなど、システムを変更した場合にもバックアップを取得してください。

なお、Performance Management システム全体のバックアップおよびリストアについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」のバックアップとリストアについて説明している章を参照してください。

### 2.8.1 バックアップ

バックアップはファイルをコピーするなど、任意の方法で取得してください。バックアップを取得する場合は、PFM - Agent for OpenTP1 のサービスを停止した状態で取得してください。

PFM - Agent for OpenTP1 の設定情報のバックアップ対象ファイルを次の表に示します。

そのほかのファイルについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の PFM - Agent のバックアップ対象ファイル一覧（Windows の場合）について説明している個所を参照してください。

表 2-9 PFM - Agent for OpenTP1 のバックアップ対象ファイル

ファイル名	説明
インストール先フォルダ¥agth¥agent¥インスタンス名¥*. ini	Agent Collector サービスの設定ファイル
インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥*. ini	Agent Store サービスの設定ファイル

#### 注意

論理ホストで運用する場合のファイル名については、「インストール先フォルダ」を「環境フォルダ ¥jp1pc」に読み替えてください。

PFM - Agent for OpenTP1 のバックアップを取得する際は、取得した環境の製品バージョン番号を管理するようにしてください。製品バージョン番号の詳細については、リリースノートを参照してください。

### 2.8.2 リストア

PFM - Agent for OpenTP1 の設定情報をリストアする場合は、次に示す前提条件の内容を確認した上で、バックアップ対象ファイルを元の位置にコピーしてください。バックアップした設定情報ファイルで、ホスト上の設定情報ファイルを上書きします。

## 前提条件

- PFM - Agent for OpenTP1 がインストール済みであること。
- PFM - Agent for OpenTP1 のサービスが停止していること。
- システム構成がバックアップしたときと同じであること。
- それぞれのホストで、バックアップしたホスト名とリストアするホスト名が一致していること。
- バックアップ環境の PFM 製品構成情報がリストア対象の PFM 製品構成情報と一致していること。

### 注意事項

PFM - Agent for OpenTP1 の設定情報をリストアする場合、バックアップを取得した環境とリストアする環境の製品バージョン番号が完全に一致している必要があります。製品バージョン番号の詳細については、リリースノートを参照してください。リストアの可否についての例を次に示します。

#### リストアできるケース

PFM - Agent for OpenTP1 10-00 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for OpenTP1 10-00 にリストアする。

#### リストアできないケース

- PFM - Agent for OpenTP1 10-00 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for OpenTP1 09-00 にリストアする。
- PFM - Agent for OpenTP1 08-00 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for OpenTP1 08-00-10 にリストアする。

## 2.9 Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定

Performance Management では、PFM - Web Console がインストールされているホストに、プログラムプロダクトに標準添付されているマニュアル提供媒体からマニュアルをコピーすることで、Web ブラウザでマニュアルを参照できるようになります。なお、PFM - Web Console をクラスタ運用している場合は、実行系、待機系それぞれの物理ホストでマニュアルをコピーしてください。

### 2.9.1 マニュアルを参照するための設定

#### (1) PFM - Web Console のヘルプからマニュアルを参照する場合

1. PFM - Web Console のセットアップ手順に従い、PFM - Web Console に PFM - Agent を登録する (PFM - Agent の追加セットアップを行う)。
2. PFM - Web Console がインストールされているホストに、マニュアルのコピー先ディレクトリを作成する。
  - Windows の場合：Web Console のインストール先フォルダ¥doc¥ja¥××××
  - UNIX の場合：/opt/jp1pcwebcon/doc/ja/××××××××には、PFM - Agent のヘルプ ID を指定してください。ヘルプ ID については、「[付録 C 識別子一覧](#)」を参照してください。
3. 上記で作成したディレクトリの直下に、マニュアル提供媒体から次のファイルおよびディレクトリをコピーする。

##### HTML マニュアルの場合

Windows の場合：該当するドライブ¥MAN¥3021¥資料番号 (03004A0D など) 下の、すべての HTML ファイルおよび FIGURE フォルダ

UNIX の場合：/提供媒体のマウントポイント/MAN/3021/資料番号 (03004A0D など) 下の、すべての HTML ファイルおよび FIGURE ディレクトリ

##### PDF マニュアルの場合

Windows の場合：該当するドライブ¥MAN¥3021¥資料番号 (03004A0D など) 下の PDF ファイル

UNIX の場合：/提供媒体のマウントポイント/MAN/3021/資料番号 (03004A0D など) 下の PDF ファイル

コピーの際、HTML マニュアルの場合は INDEX.HTM ファイルが、PDF マニュアルの場合は PDF ファイル自体が、作成したディレクトリ直下に配置されるようにしてください。マニュアルファイルのコピー方法については、マニュアル提供媒体の readme.txt を参照してください。

4. PFM - Web Console を再起動する。

## (2) お使いのマシンのハードディスクからマニュアルを参照する場合

提供媒体から直接 HTML ファイル, STYLE2.CSS ファイル, PDF ファイル, および GIF ファイルを任意のフォルダにコピーしてください。HTML マニュアルの場合, 次のディレクトリ構成になるようにしてください。

```
html (HTMLファイル, STYLE2.CSSファイル, およびPDFファイルを格納)
└─FIGURE (GIFファイルを格納)
```

### 2.9.2 マニュアルの参照手順

マニュアルの参照手順を次に示します。

1. PFM - Web Console の [メイン] 画面のメニューバーフレームにある [ヘルプ] メニューをクリックし, [ヘルプ選択] 画面を表示する。
2. マニュアル名またはマニュアル名の後ろの [PDF] をクリックする。  
マニュアル名をクリックすると HTML 形式のマニュアルが表示されます。[PDF] をクリックすると PDF 形式のマニュアルが表示されます。

#### Web ブラウザでの文字の表示に関する注意事項

Windows の場合, [スタート] メニューからオンラインマニュアルを表示させると, すでに表示されている Web ブラウザの画面上に HTML マニュアルが表示されることがあります。



# 3

## インストールとセットアップ (UNIX の場合)

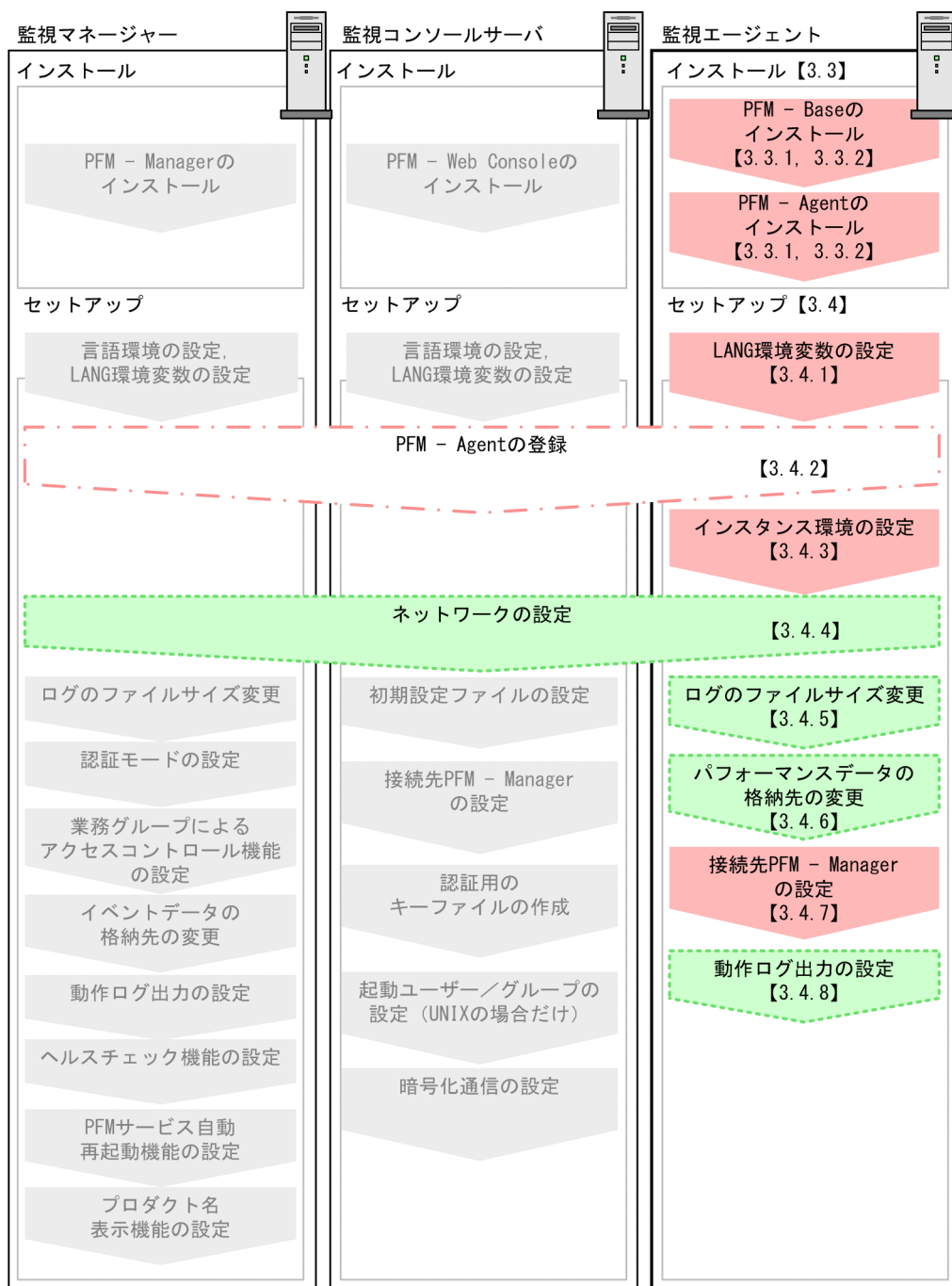
この章では、PFM - Agent for OpenTP1 のインストールおよびセットアップ方法について説明します。Performance Management システム全体のインストールおよびセットアップ方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、UNIX 用のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

## 3.1 インストールとセットアップの流れ

---

PFM - Agent for OpenTP1 をインストールおよびセットアップする流れを説明します。

図 3-1 インストールとセットアップの流れ



PFM - Manager および PFM - Web Console のインストールおよびセットアップの手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

なお、ユーザー入力を必要とするセットアップコマンドは、対話形式で実行するか非対話形式で実行するかを選択できます。

対話形式で実行する場合は、コマンドの指示に従ってユーザーが値を入力する必要があります。

非対話形式で実行する場合は、コマンド実行中に必要となる入力作業をオプション指定や定義ファイルで代替するため、ユーザー入力が不要になります。また、バッチ処理やリモート実行によってセットアップ作業を自動化できるため、管理者の負担や運用コストを低減できます。

コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

## 3.2 インストール前に確認すること

---

PFM - Agent for OpenTP1 をインストールおよびセットアップする前に確認しておくことを説明します。

### 3.2.1 前提 OS

PFM - Agent for OpenTP1 が動作する OS を次に示します。

- AIX
- Linux (x64)

### 3.2.2 ネットワークの環境設定

Performance Management が動作するためのネットワーク環境について説明します。

#### (1) IP アドレスの設定

PFM - Agent のホストは、ホスト名で IP アドレスが解決できる環境を設定してください。IP アドレスが解決できない環境では、PFM - Agent は起動できません。

監視ホスト名（Performance Management システムのホスト名として使用する名前）には、実ホスト名またはエイリアス名を使用できます。

- 監視ホスト名に実ホスト名を使用している場合  
Windows システムでは `hostname` コマンド、UNIX システムでは `uname -n` コマンドを実行して確認したホスト名で、IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。なお、UNIX システムでは、`hostname` コマンドで取得するホスト名を使用することもできます。
- 監視ホスト名にエイリアス名を使用している場合  
設定しているエイリアス名で IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。

監視ホスト名の設定については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

ホスト名と、IP アドレスの設定は、次のどれかの方法で設定してください。

- Performance Management のホスト情報設定ファイル（`jpchosts` ファイル）
- `hosts` ファイル
- DNS（Domain Name System）

## 注意事項

- Performance Management は、DNS 環境でも運用できますが、FQDN 形式のホスト名には対応していません。このため、監視ホスト名は、ドメイン名を除いて指定してください。
- 複数の LAN 環境で使用する場合は、jpchosts ファイルで IP アドレスを設定してください。詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
- Performance Management は、DHCP による動的な IP アドレスが割り振られているホスト上では運用できません。Performance Management を導入するすべてのホストに、固定の IP アドレスを設定してください。

## (2) ポート番号の設定

Performance Management プログラムのサービスは、デフォルトで次の表に示すポート番号が割り当てられています。これ以外のサービスまたはプログラムに対しては、サービスを起動するたびに、そのときシステムで使用されていないポート番号が自動的に割り当てられます。また、ファイアウォール環境で、Performance Management を使用するときは、ポート番号を固定してください。ポート番号の固定の手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

表 3-1 デフォルトのポート番号と Performance Management プログラムのサービス (UNIX の場合)

サービス説明	サービス名	パラメーター	ポート番号	備考
サービス構成情報管理機能	Name Server	jp1pcnsvr	22285	PFM - Manager の Name Server サービスで使用されるポート番号。Performance Management のすべてのホストで設定される。
サービス状態管理機能	Status Server	jp1pcstatsvr	22350	PFM - Manager および PFM - Base の Status Server サービスで使用されるポート番号。 PFM - Manager および PFM - Base がインストールされているホストで設定される。
JP1/SLM 連携機能	JP1/ITSLM	-	20905	JP1/SLM で設定されるポート番号。

(凡例)

- : なし

これらの PFM - Agent が使用するポート番号で通信できるように、ネットワークを設定してください。

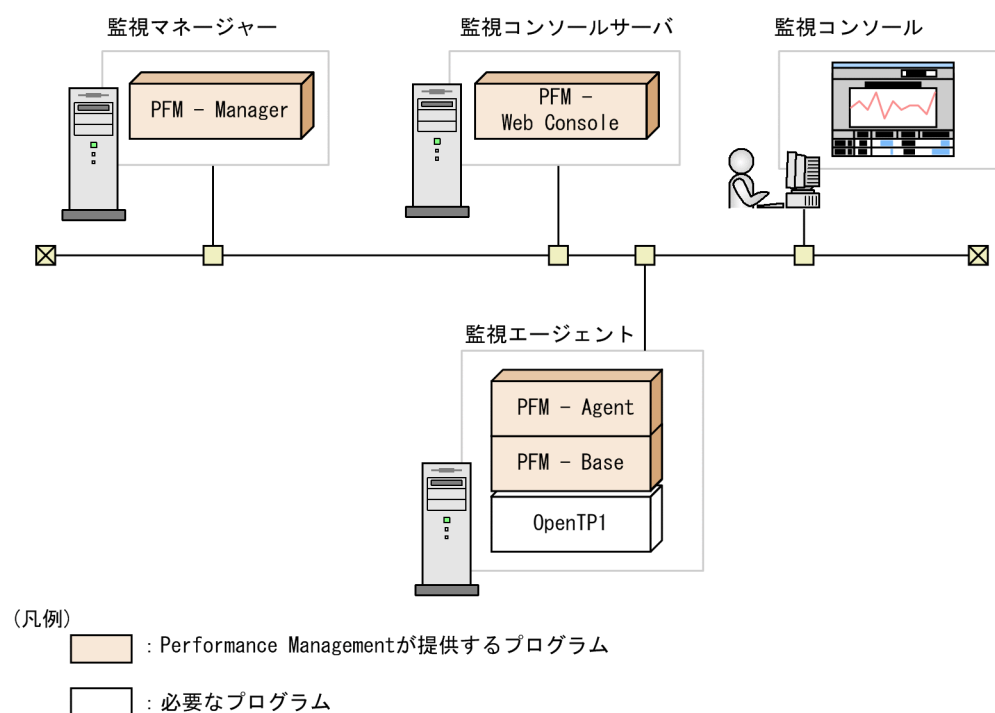
### 3.2.3 インストールに必要な OS ユーザー権限について

PFM - Agent for OpenTP1 をインストールするときは、必ず、ローカルホストのスーパーユーザー権限を持つアカウントを使用してください。

### 3.2.4 前提プログラム

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 をインストールする場合に必要な前提プログラムを説明します。プログラムの構成図を次に示します。

図 3-2 プログラムの構成図



#### (1) 監視対象プログラム

PFM - Agent for OpenTP1 の監視対象プログラムを次に示します。

- uCosminexus TP1/Server Base
- uCosminexus TP1/FS/Direct Access
- uCosminexus TP1/FS/Table Access
- uCosminexus TP1/Message Control
- uCosminexus TP1/NET/Library
- uCosminexus TP1/NET/TCP/IP
- uCosminexus TP1/Server Base(64)
- uCosminexus TP1/FS/Direct Access(64)

- uCosminexus TP1/FS/Table Access(64)
- uCosminexus TP1/Message Control(64)
- uCosminexus TP1/NET/Library(64)
- uCosminexus TP1/NET/TCP/IP(64)

これらの監視対象プログラムは、PFM - Agent for OpenTP1 と同一ホストにインストールする必要があります。

## (2) Performance Management プログラム

監視エージェントには、PFM - Agent と PFM - Base をインストールします。PFM - Base は PFM - Agent の前提プログラムです。同一ホストに複数の PFM - Agent をインストールする場合でも、PFM - Base は 1 つだけでかまいません。

ただし、PFM - Manager と PFM - Agent を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base は不要です。

また、PFM - Agent for OpenTP1 を使って OpenTP1 の稼働監視を行うためには、PFM - Manager および PFM - Web Console が必要です。

### 3.2.5 クラスタシステムでのインストールとセットアップについて

クラスタシステムでのインストールとセットアップは、前提となるネットワーク環境やプログラム構成が、通常の構成のセットアップとは異なります。また、実行系ノードと待機系ノードでの作業が必要になります。詳細については、「第 2 編 4. クラスタシステムでの運用」を参照してください。

### 3.2.6 障害発生時の資料採取の準備

トラブルが発生した場合に調査資料として、コアダンプファイルが必要になることがあります。コアダンプファイルの出力はユーザーの環境設定に依存するため、次に示す設定を確認しておいてください。

コアダンプファイルのサイズ設定

コアダンプファイルの最大サイズは、root ユーザーのコアダンプファイルのサイズ設定 (ulimit -c) によって制限されます。次のようにスクリプトを設定してください。

```
ulimit -c unlimited
```

この設定が、ご使用のマシンのセキュリティポリシーに反する場合は、これらのスクリプトの設定を次のようにコメント行にしてください。

```
# ulimit -c unlimited
```



## 注意事項

コメント行にした場合、プロセスで発生したセグメンテーション障害やバス障害などのコアダンプファイルの出力契機に、コアダンプが出力されないため、調査できないおそれがあります。

コアダンプに関連するカーネルパラメーターの設定 (Linux 限定)

Linux のカーネルパラメーター (`kernel.core_pattern`) で、コアダンプファイルの出力先、およびファイル名をデフォルトの設定から変更している場合、コアダンプファイルを採取できないことがあります。このため、Linux のカーネルパラメーター (`kernel.core_pattern`) の設定は変更しないことをお勧めします。

## 3.2.7 インストール前の注意事項

ここでは、Performance Management をインストールおよびセットアップするときの注意事項を説明します。

### (1) 環境変数に関する注意事項

Performance Management では `JPC_HOSTNAME` を環境変数として使用しているため、ユーザー独自に環境変数として設定しないでください。設定した場合は、Performance Management が正しく動作しません。

### (2) 同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストール、セットアップするときの注意事項

Performance Management は、同一ホストに PFM - Manager, PFM - Web Console, および PFM - Agent をインストールすることもできます。その場合の注意事項を次に示します。

- PFM - Manager と PFM - Agent を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base は不要です。この場合、PFM - Agent の前提プログラムは PFM - Manager になるため、PFM - Manager をインストールしてから PFM - Agent をインストールしてください。
- PFM - Base と PFM - Manager は同一ホストにインストールできません。PFM - Base と PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールする場合は、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Manager → PFM - Agent の順でインストールしてください。また、PFM - Manager と PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合も同様に、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Base → PFM - Agent の順でインストールしてください。
- PFM - Manager がインストールされているホストに PFM - Agent をインストールすると、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先 PFM - Manager をリモートホストの PFM - Manager に変更できません。リモートホストの PFM - Manager に接続

したい場合は、インストールするホストに PFM - Manager がインストールされていないことを確認してください。

- PFM - Agent がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールすると、PFM - Agent の接続先 PFM - Manager は自ホスト名に設定し直されます。共通メッセージログに設定結果が出力されています。結果を確認してください。
- PFM - Web Console がインストールされているホストに、PFM - Agent をインストールする場合は、ブラウザの画面をすべて閉じてからインストールを実施してください。
- Performance Management プログラムを新規にインストールした場合は、ステータス管理機能がデフォルトで有効になります。ただし、07-50 から 08-00 以降にバージョンアップインストールした場合は、ステータス管理機能の設定状態はバージョンアップ前のままとなります。ステータス管理機能の設定を変更する場合は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

## ポイント

システムの性能や信頼性を向上させるため、PFM - Manager, PFM - Web Console, および PFM - Agent はそれぞれ別のホストで運用することをお勧めします。

### (3) バージョンアップの注意事項

Performance Management プログラムをバージョンアップする場合の注意事項については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップの章にある、バージョンアップの注意事項について説明している個所を参照してください。

PFM - Agent for OpenTP1 をバージョンアップする場合の注意事項については、「付録 H バージョンアップ手順とバージョンアップ時の注意事項」を参照してください。

なお、バージョンアップについての詳細は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録を参照してください。

### (4) その他の注意事項

- Performance Management のプログラムをインストールする場合、次に示すセキュリティ関連プログラムがインストールされていないかどうか確認してください。インストールされている場合、以下の説明に従って対処してください。
  - セキュリティ監視プログラム  
セキュリティ監視プログラムを停止するかまたは設定を変更して、Performance Management のプログラムのインストールを妨げないようにしてください。
  - ウィルス検出プログラム  
ウィルス検出プログラムを停止してから Performance Management のプログラムをインストールすることをお勧めします。

Performance Management のプログラムのインストール中にウィルス検出プログラムが稼働している場合、インストールの速度が低下したり、インストールが実行できなかつたり、または正しくインストールできなかつたりすることがあります。

- プロセス監視プログラム

プロセス監視プログラムを停止するかまたは設定を変更して、Performance Management のサービスまたはプロセス、および共通コンポーネントのサービスまたはプロセスを監視しないようにしてください。

Performance Management のプログラムのインストール中に、プロセス監視プログラムによって、これらのサービスまたはプロセスが起動されたり停止されたりすると、インストールに失敗することがあります。

- Performance Management のプログラムが 1 つもインストールされていない環境に新規インストールする場合は、インストール先ディレクトリにファイルやディレクトリがないことを確認してください。
- インストール時のステータスバーに「Installation failed.」と表示されてインストールが失敗した場合、インストールログを採取してください。インストールログの詳細については、「[8.4.2\(2\) トラブルシューティング時に採取する Performance Management の情報](#)」を参照してください。なお、このログファイルは、次にインストールすると上書きされるため、必要に応じてバックアップを採取してください。
- インストール先ディレクトリにリンクを張り Performance Management プログラムをインストールした場合、全 Performance Management プログラムのアンインストールをしても、リンク先のディレクトリに一部のファイルやディレクトリが残る場合があります。削除する場合は、手動で行ってください。また、リンク先にインストールする場合、リンク先に同名のファイルやディレクトリがあるときは、Performance Management プログラムのインストール時に上書きされるので、注意してください。

## 3.3 インストール手順

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 のプログラムをインストールする順序と提供媒体からプログラムをインストールする手順を説明します。

### 3.3.1 プログラムのインストール順序

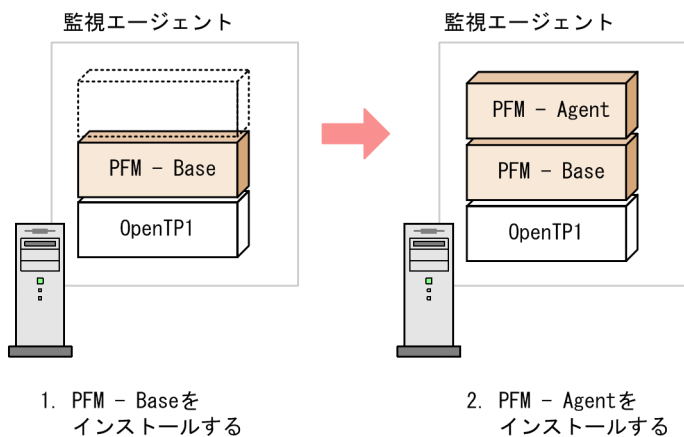
プログラムのインストール順序を次に示します。

- PFM - Base と同一ホストに PFM - Agent をインストールする場合  
PFM - Base → PFM - Agent の順でインストールしてください。PFM - Base がインストールされていないホストに PFM - Agent をインストールすることはできません。
- PFM - Manager と同一ホストに PFM - Agent をインストールする場合  
PFM - Manager → PFM - Agent の順でインストールしてください。PFM - Manager がインストールされていないホストに PFM - Agent をインストールすることはできません。

また、Store データベースのバージョン 1.0 からバージョン 2.0 にバージョンアップする場合、PFM - Agent と PFM - Agent の前提プログラムである PFM - Manager または PFM - Base のインストール条件によって、セットアップ方法が異なります。Store バージョン 2.0 のセットアップ方法については、「[3.7.3 Store バージョン 2.0 への移行](#)」を参照してください。

同一ホストに複数の PFM - Agent をインストールする場合、PFM - Agent 相互のインストール順序は問いません。

図 3-3 プログラムのインストール順序



## 3.3.2 PFM - Agent for OpenTP1 のインストール手順

UNIX ホストに Performance Management プログラムをインストールするには、提供媒体を使用する方法と、JP1/NETM/DM (JP1/NETM/DM は日本国内の製品名称です。) を使用してリモートインストールする方法があります。JP1/NETM/DM を使用する方法については、次のマニュアルを参照してください。

- 「JP1/NETM/DM Manager」
- 「JP1/NETM/DM SubManager (UNIX(R)用)」
- 「JP1/NETM/DM Client (UNIX(R)用)」

提供媒体を使用する場合のインストール手順を OS ごとに説明します。

### (1) AIX の場合

1. プログラムをインストールするホストに、スーパーユーザーでログインするか、またはsu コマンドでユーザーをスーパーユーザーに変更する。
2. ローカルホストで起動している Performance Management のサービスがあれば、すべて停止する。  
停止するサービスは、物理ホストおよび論理ホスト上の Performance Management のサービスです。  
サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
3. 提供媒体をセットする。
4. mount コマンドを実行して、該当する装置をマウントする。  
例えば、該当する装置を/cdrom にマウントする場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
/usr/sbin/mount -r -v cdrfs /dev/cd0 /cdrom
```

5. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。

```
マウントディレクトリ/AIX/setup マウントディレクトリ
```

Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。

6. 初期画面で「I」を入力する。  
インストールできるプログラムの一覧が表示されます。
7. インストールしたいプログラムを選択して、「I」を入力する。  
選択したプログラムがインストールされます。なお、プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースキーで選択します。
8. インストールが正常終了したら、「Q」を入力する。  
Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

## (2) Linux の場合

1. プログラムのインストール先ディレクトリが実ディレクトリであることを確認する。
2. プログラムをインストールするホストに、スーパーユーザーでログインするか、またはsu コマンドでユーザーをスーパーユーザーに変更する。
3. ローカルホストで起動している Performance Management のサービスがあれば、すべて停止する。  
停止するサービスは、物理ホストおよび論理ホスト上の Performance Management のサービスです。  
サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
4. 提供媒体をセットする。
5. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。※

```
マウントディレクトリ/X64LIN/setup マウントディレクトリ
```

Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。

6. 初期画面で「I」を入力する。  
インストールできるプログラムの一覧が表示されます。
7. インストールしたいプログラムを選択して、「I」を入力する。  
選択したプログラムがインストールされます。なお、プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースキーで選択します。
8. インストールが正常終了したら、「Q」を入力する。  
Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

### 注※

自動マウント機能を解除している環境では、Hitachi PP Installer を起動する前に、`/bin/mount` コマンドを次のように指定して該当する装置をマウントしてください。

```
/bin/mount -r -o mode=0544 /dev/cdrom /media/cdrecorder
```

なお、指定するコマンド、下線部のデバイススペシャルファイル名およびマウントディレクトリ名は、使用する環境によって異なります。

## 3.4 セットアップ

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 を運用するための、セットアップについて説明します。

〈オプション〉は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

### 3.4.1 LANG 環境変数の設定 〈オプション〉

PFM - Agent for OpenTP1 で使用できる LANG 環境変数を次の表に示します。

なお、これらの LANG 環境変数を設定する前に、設定する言語環境が正しくインストール・構築されていることを確認しておいてください。正しくインストール・構築されていない場合、文字化けが発生したり、定義データが不当に書き換わってしまったりすることがあります。

#### 注意

共通メッセージログの言語は、サービス起動時やコマンド実行時に設定されている LANG 環境変数によって決まります。そのため、日本語や英語など、複数の言語コードの文字列が混在することがあります。

表 3-2 PFM - Agent for OpenTP1 で使用できる LANG 環境変数

OS	言語種別		LANG 環境変数の値
AIX	日本語	Shift-JIS コード	Ja_JP
		EUC コード	ja_JP
	英語（日本語なし）		C
Linux	日本語	Shift-JIS コード	（該当なし）
		EUC コード	（該当なし）
		UTF-8 コード	ja_JP.UTF-8
	英語（日本語なし）		C

### 3.4.2 PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for OpenTP1 の登録

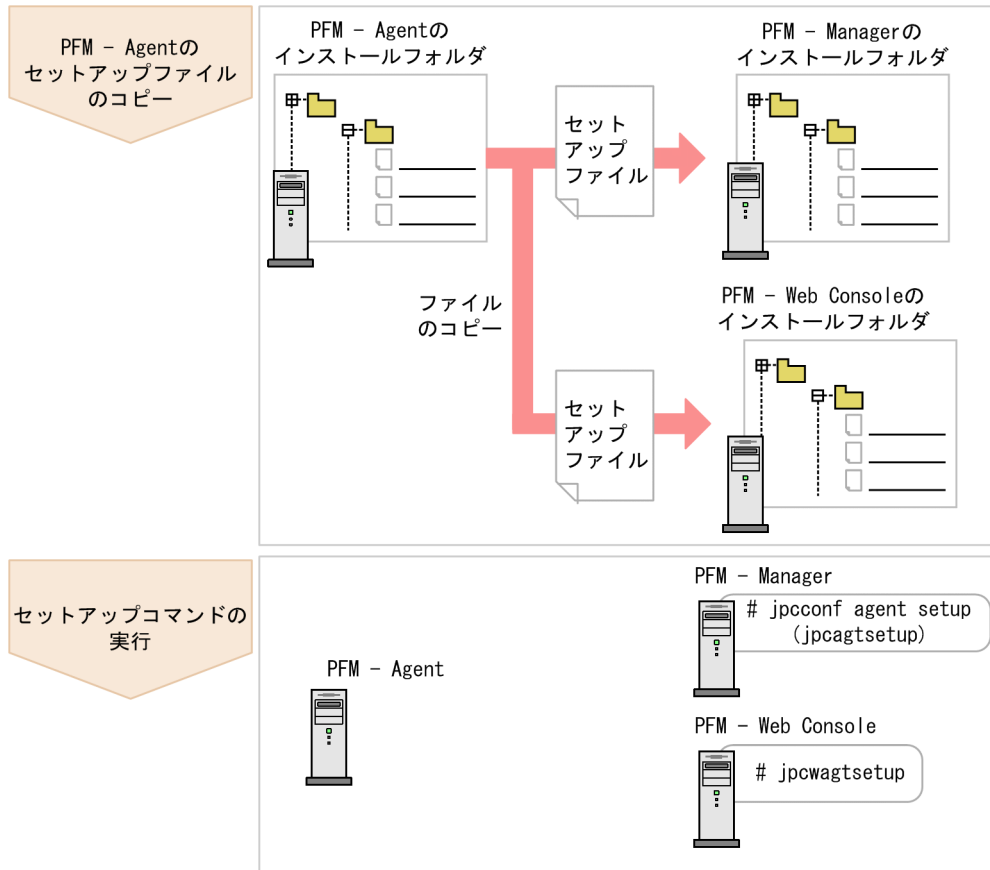
PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent を一元管理するために、PFM - Manager および PFM - Web Console に PFM - Agent for OpenTP1 を登録する必要があります。

PFM - Manager のバージョンが 08-50 以降の場合、PFM - Agent の登録は自動で行われるため、ここで説明する手順は不要です。

ただし、PFM - Manager よりリリース時期が新しい PFM - Agent または PFM - RM については手動登録が必要になる場合があります。手動登録の要否については、PFM - Manager のリリースノートを参照してください。

PFM - Agent の登録の流れを次の図に示します。

図 3-4 PFM - Agent の登録の流れ



## 注意事項

- PFM - Agent の登録は、インスタンス環境を設定する前に実施してください。
- すでに PFM - Agent for OpenTP1 の情報が登録されている Performance Management システムに、新たに同じバージョンの PFM - Agent for OpenTP1 を追加した場合、PFM - Agent の登録は必要ありません。
- バージョンが異なる PFM - Agent for OpenTP1 を、異なるホストにインストールする場合、古いバージョン、新しいバージョンの順でセットアップしてください。
- PFM - Manager と同じホストに PFM - Agent をインストールした場合、`jpcconf agent setup` コマンドが自動的に実行されます。共通メッセージログに「KAVE05908-I エージェント追加セットアップは正常に終了しました」と出力されるので、結果を確認してください。コマンドが正しく実行されていない場合は、コマンドを実行し直してください。コマンドの実行方法に



については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドの章を参照してください。

## (1) PFM - Agent for OpenTP1 のセットアップファイルをコピーする

PFM - Agent for OpenTP1 をインストールしたホストにあるセットアップファイルを PFM - Manager および PFM - Web Console をインストールしたホストにコピーします。手順を次に示します。

1. PFM - Manager および PFM - Web Console のサービスが起動されている場合は、停止する。  
サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
2. PFM - Agent のセットアップファイルをバイナリーモードでコピーする。  
ファイルが格納されている場所およびファイルをコピーする場所を次の表に示します。

表 3-3 コピーするセットアップファイル

コピー先			PFM - Agent の セットアップファイル
PFM プログラム名	OS	コピー先ディレクトリ	
PFM - Manager	Windows	PFM - Manager のインストール先 フォルダ¥setup¥	/opt/jp1pc/setup/jpcagthw.EXE
	UNIX	/opt/jp1pc/setup/	/opt/jp1pc/setup/jpcagthu.Z
PFM - Web Console	Windows	PFM - Web Console のインストール 先フォルダ¥setup¥	/opt/jp1pc/setup/jpcagthw.EXE
	UNIX	/opt/jp1pcwebcon/setup/	/opt/jp1pc/setup/jpcagthu.Z

## (2) PFM - Manager ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Manager で PFM - Agent for OpenTP1 をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpccconf agent setup -key OpenTP1
```

### 注意事項

コマンドを実行するローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止していない状態で `jpccconf agent setup` コマンドを実行した場合、エラーが発生することがあります。その場合は、Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止したことを確認したあと、再度 `jpccconf agent setup` コマンドを実行してください。

PFM - Manager ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは、この作業が終了したあと、削除してもかまいません。

### (3) PFM - Web Console ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Web Console で PFM - Agent for OpenTP1 をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcwagtsetup
```

PFM - Web Console ホストにある PFM - Agent のセットアップファイルは、この作業が終了したあと削除してもかまいません。

#### 3.4.3 インスタンス環境の設定

PFM - Agent for OpenTP1 で監視する OpenTP1 システムのインスタンス情報を設定します。インスタンス情報の設定は、PFM - Agent ホストで実施します。

設定するインスタンス情報を次の表に示します。セットアップの操作を始める前に、次の情報をあらかじめ確認してください。OpenTP1 システムのインスタンス情報の詳細については、OpenTP1 のマニュアルを参照してください。

表 3-4 PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス情報

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
DCDIR	監視対象 OpenTP1 システムの環境変数 DCDIR の値 (OpenTP1 ディレクトリのパス)。	Linux の場合：20 バイト以内の半角文字列 Linux 以外の場合：50 バイト以内の半角文字列	—
DCCONFPATH	監視対象 OpenTP1 システムの環境変数 DCCONFPATH の値 (OpenTP1 システム定義ファイル格納ディレクトリのパス)。	512 バイト以内の半角文字列	—
OPENTP1_ADMIN	OpenTP1 管理者のユーザー名。	255 バイト以内の半角文字列	—
OPENTP1_LIBPATH	OpenTP1 管理者の共用ライブラリーパス。 AIX の場合：環境変数 LIBPATH と同じ値 Linux の場合：環境変数 LD_LIBRARY_PATH と同じ値	512 バイト以内の半角文字列	—
Store Version※	使用する Store バージョン。	{1.0   2.0}	2.0

(凡例)

—：なし

注※

次に示すどちらかの場合で、初めてインスタンス環境を設定するときに必要です。

- PFM - Agent と同一ホスト上の PFM - Base が 08-10 以降の場合

- PFM - Agent と同一ホスト上の PFM - Manager が 08-10 以降の場合

## 注意

インスタンス環境を設定していない場合、PFM - Agent for OpenTP1 のサービスを起動できません。

インスタンス環境を構築するには、`jpccconf inst setup` コマンドを使用します。インスタンス環境の構築手順を次に示します。

### 1. サービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpccconf inst setup` コマンドを実行する。

例えば、PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス名 SDC のインスタンス環境を構築する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst setup -key OpenTP1 -inst SDC
```

### 2. OpenTP1 システムのインスタンス情報を設定する。

表 3-4 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力してください。各項目とも省略はできません。デフォルトで表示されている値を、項目の入力とする場合はリターンキーだけを押してください。

すべての入力終了すると、インスタンス環境が構築されます。構築時に入力したインスタンス情報を変更したい場合は、再度 `jpccconf inst setup` コマンドを実行し、インスタンス環境を更新してください。インスタンス環境の更新については、「[3.7.2 インスタンス環境の更新の設定](#)」を参照してください。

構築されるインスタンス環境を次に示します。

- インスタンス環境のディレクトリ構成

次のディレクトリ下にインスタンス環境が構築されます。

物理ホストの場合：/opt/jp1pc/agth

論理ホストの場合：環境ディレクトリ<sup>※</sup>/jp1pc/agth

注※

環境ディレクトリとは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

構築されるインスタンス環境のディレクトリ構成を次の表に示します。

表 3-5 インスタンス環境のディレクトリ構成

ディレクトリ名・ファイル名		説明	
agent	インスタンス名	jpccagt. ini	Agent Collector サービス起動情報ファイル
		jpccagt. ini. model <sup>※1</sup>	Agent Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル
		log	ログファイル格納ディレクトリ
store	インスタンス名	jpccsto. ini	Agent Store サービス起動情報ファイル
		jpccsto. ini. model <sup>※1</sup>	Agent Store サービス起動情報ファイルのモデルファイル
		import <sup>※2</sup>	インポート先ディレクトリ

### 3. インストールとセットアップ (UNIX の場合)

ディレクトリ名・ファイル名		説明	
store	インスタンス名	partial*2	部分バックアップ先ディレクトリ
		*.DAT	データモデル定義ディレクトリ
		dump	エクスポート先ディレクトリ
		backup	バックアップ先ディレクトリ
		log	ログファイル格納ディレクトリ

#### 注※1

インスタンス環境を構築した時点の設定値に戻したいときに使用します。

#### 注※2

Store バージョン 2.0 を使用しているときだけ作成されます。

- インスタンス環境のサービス ID

インスタンス環境のサービス ID は次のようになります。

**プロダクトID 機能ID インスタンス番号 インスタンス名 [ホスト名]**

PFM - Agent for OpenTP1 の場合、インスタンス名には `jpconf inst setup` コマンドで指定したインスタンス名が表示されます。

サービス ID については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録を参照してください。

### 3.4.4 ネットワークの設定 オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合にだけ必要な設定です。

ネットワークの設定では次の 2 つの項目を設定できます。

- IP アドレスを設定する

Performance Management を複数の LAN に接続されたネットワークで使用するときには設定します。複数の IP アドレスを設定するには、`jpchosts` ファイルにホスト名と IP アドレスを定義します。設定した `jpchosts` ファイルは Performance Management システム全体で統一させてください。

詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

- ポート番号を設定する

Performance Management が使用するポート番号を設定できます。運用での混乱を避けるため、ポート番号とサービス名は、Performance Management システム全体で統一させてください。

ポート番号の設定の詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

### 3.4.5 ログのファイルサイズ変更 オプション

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。このファイルサイズを変更したい場合に必要設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

### 3.4.6 パフォーマンスデータの格納先の変更 オプション

PFM - Agent for OpenTP1 で管理されるパフォーマンスデータの格納先を変更したい場合に、必要な設定です。

パフォーマンスデータの格納先は次のとおりです。

- 保存先：/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/
- バックアップ先：/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/backup/
- 部分バックアップ先※：/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/partial/
- エクスポート先：/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/dump/
- インポート先※：/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/import/

注※

Store バージョン 2.0 を使用しているときだけ設定できます。

注意

論理ホストで運用する場合のデフォルトの保存先については、「/opt/jp1pc」を「環境ディレクトリ/jp1pc」に読み替えてください。

詳細については、「3.7.1 パフォーマンスデータの格納先の変更」を参照してください。

### 3.4.7 PFM - Agent for OpenTP1 の接続先 PFM - Manager の設定

PFM - Agent がインストールされているホストで、その PFM - Agent を管理する PFM - Manager を設定します。接続先の PFM - Manager を設定するには、`jpccconf mgrhost define` コマンドを使用します。

#### 注意事項

- 同一ホスト上に、複数の PFM - Agent がインストールされている場合でも、接続先に指定できる PFM - Manager は、1 つだけです。PFM - Agent ごとに異なる PFM - Manager を接続先に設定することはできません。

- PFM - Agent と PFM - Manager が同じホストにインストールされている場合、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先の PFM - Manager をほかの PFM - Manager に変更できません。

手順を次に示します。

### 1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する

セットアップを実施する前に、ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

jpccnf mgrhost define コマンド実行時に、Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、停止を問い合わせるメッセージが表示されます。

2. 接続先の PFM - Manager ホストのホスト名を指定して、jpccnf mgrhost define コマンドを実行する  
例えば、接続先の PFM - Manager がホスト host01 上にある場合、次のように指定します。

```
jpccnf mgrhost define -host host01
```

## 3.4.8 動作ログ出力の設定 オプション

PFM サービスの起動・停止時、または PFM - Manager との接続状態の変更時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

設定方法については、「付録」 [動作ログの出力](#) を参照してください。

## 3.4.9 OS 固有の環境変数の設定 オプション

PFM - Agent for OpenTP1 は、次の表に示す OS 固有の環境変数に固定値を設定して動作しています。

表 3-6 PFM - Agent for OpenTP1 が設定する OS 固有の環境変数

OS	環境変数名	値
AIX	LDR_CNTRL	MAXDATA=0x40000000
	PSALLOC	early
Linux	—	—

(凡例)

— : なし

上記の表の環境変数に設定する値を変更して運用する場合、環境変数に変更したい値を設定し、環境変数「JPCAGTH\_SKIPSETENV」に「Y」または「y」を設定してから、PFMサービスを起動してください。環境変数「JPCAGTH\_SKIPSETENV」に「Y」または「y」を設定することで、PFM - Agent for OpenTP1は上記の表の環境変数への固定値の設定を行わず、PFMサービス起動時の環境で動作します。

## 3.5 アンインストール

---

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 をアンインストールおよびアンセットアップする手順を示します。

### 3.5.1 アンインストール前の注意事項

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 をアンインストールおよびアンセットアップするときの注意事項を次に示します。

#### (1) アンインストールに必要な OS ユーザー権限に関する注意事項

PFM - Agent をアンインストールするときは、必ず、ローカルホストのスーパーユーザー権限を持つアカウントを使用してください。

#### (2) ネットワークに関する注意事項

Performance Management プログラムをアンインストールしても、`services` ファイルに定義されたポート番号は削除されません。

#### (3) プログラムに関する注意事項

- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラムを起動したままアンインストールした場合、ファイルやディレクトリが残ることがあります。この場合は、手動でインストール先ディレクトリ以下をすべて削除してください。
- PFM - Base と PFM - Agent がインストールされているホストの場合、PFM - Base のアンインストールは PFM - Agent をアンインストールしないと実行できません。この場合、PFM - Agent → PFM - Base の順にアンインストールしてください。また、PFM - Manager と PFM - Agent がインストールされているホストの場合も同様に、PFM - Manager のアンインストールは PFM - Agent をアンインストールしないと実行できません。この場合、PFM - Agent → PFM - Manager の順にアンインストールしてください。

#### (4) サービスに関する注意事項

PFM - Agent をアンインストールしただけでは、`jpctool service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。この場合、`jpctool service delete` コマンドを使用してサービスの情報を削除してください。

#### (5) その他の注意事項

PFM - Web Console がインストールされているホストから、Performance Management プログラムをアンインストールする場合は、ブラウザの画面をすべて閉じてからアンインストールを実施してください。



## 3.5.2 インスタンス環境のアンセットアップ

インスタンス環境をアンセットアップするには、まず、インスタンス名を確認し、インスタンス環境を削除します。インスタンス環境の削除は、PFM - Agent ホストで実施します。

インスタンス名を確認するには、`jpccconf inst list` コマンドを使用します。また、構築したインスタンス環境を削除するには、`jpccconf inst unsetup` コマンドを使用します。

インスタンス環境をアンセットアップする手順を次に示します。

### 1. インスタンス名を確認する。

PFM - Agent for OpenTP1 を示すサービスキーを指定して、`jpccconf inst list` コマンドを実行します。

```
jpccconf inst list -key OpenTP1
```

設定されているインスタンス名が SDC の場合、SDC と表示されます。

### 2. インスタンス環境の PFM - Agent のサービスが起動されている場合は、停止する。

サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。

### 3. インスタンス環境を削除する。

PFM - Agent for OpenTP1 を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpccconf inst unsetup` コマンドを実行します。

設定されているインスタンス名が SDC の場合、次のように指定します。

```
jpccconf inst unsetup -key OpenTP1 -inst SDC
```

`jpccconf inst unsetup` コマンドが正常終了すると、インスタンス環境として構築されたディレクトリ、サービス ID が削除されます。

## 注意

インスタンス環境をアンセットアップしても、`jpctool service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。この場合、`jpctool service delete` コマンドを使用してサービスの情報を削除してください。次に指定例を示します。

- インスタンス名：SDC
- ホスト名：host01
- Agent Collector サービスのサービス ID：HA1SDC[host01]
- Agent Store サービスのサービス ID：HS1SDC[host01]

```
jpctool service delete -id サービスID -host host01
```

コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

### 3.5.3 接続先 PFM - Manager の解除

接続先 PFM - Manager を解除する場合は、対象の PFM - Manager に接続している PFM - Agent for OpenTP1 のサービス情報を削除する必要があります。

サービス情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップ（UNIX の場合）の章の、サービス情報の削除手順について説明している箇所を参照してください。

なお、接続先を別の PFM - Manager に変更する場合は、「3.4.7 PFM - Agent for OpenTP1 の接続先 PFM - Manager の設定」を参照してください。

### 3.5.4 アンインストール手順

PFM - Agent for OpenTP1 をアンインストールする手順を説明します。

1. Performance Management プログラムをアンインストールするホストに、スーパーユーザーでログインするか、またはsu コマンドでユーザーをスーパーユーザーに変更する。
2. ローカルホストで Performance Management プログラムのサービスが起動されていないか確認する。起動されている場合は、すべて停止する。  
サービス情報を表示して、サービスが起動されていないか確認してください。サービス情報の表示方法およびサービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management を運用するための操作について説明している章を参照してください。Performance Management プログラムのサービスが起動されていた場合、アンインストール時に自動的に停止されます。
3. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。

Linux の場合

```
/etc/hitachi_x64setup
```

Linux 以外の場合

```
/etc/hitachi_setup
```

Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。

4. 初期画面で「D」を入力する。  
アンインストールできるプログラムの一覧が表示されます。
5. アンインストールしたい Performance Management プログラムを選択して、「D」を入力する。  
選択したプログラムがアンインストールされます。なお、プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースキーで選択します。

6. アンインストールが正常終了したら、「Q」を入力する。

Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

## 3.6 PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成の変更

---

監視対象システムのネットワーク構成の変更や、ホスト名の変更などに応じて、PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成を変更する場合があります。ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成を変更する手順を説明します。

PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成を変更する場合、PFM - Manager や PFM - Web Console の設定変更もあわせて変更する必要があります。Performance Management のシステム構成を変更する手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。なお、物理ホスト名またはエイリアス名を変更するときに、固有の追加作業が必要な PFM - Agent もありますが、PFM - Agent for OpenTP1 の場合、固有の追加作業は必要ありません。

## 3.7 PFM - Agent for OpenTP1 の運用方式の変更

収集した稼働監視データの運用手順の変更などで、PFM - Agent for OpenTP1 の運用方式を変更する場合があります。ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 の運用方式を変更する手順を説明します。Performance Management 全体の運用方式を変更する手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

### 3.7.1 パフォーマンスデータの格納先の変更

PFM - Agent for OpenTP1 で収集したパフォーマンスデータは、PFM - Agent for OpenTP1 の Agent Store サービスの Store データベースで管理しています。ここでは、パフォーマンスデータの格納先の変更方法について説明します。

#### (1) jpcconf db define コマンドを使用して設定を変更する

Store データベースで管理されるパフォーマンスデータの、次のデータ格納先ディレクトリを変更したい場合は、jpcconf db define コマンドで設定します。Store データベースの格納先ディレクトリを変更する前に収集したパフォーマンスデータが必要な場合は、jpcconf db define コマンドの -move オプションを使用してください。jpcconf db define コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

- 保存先ディレクトリ
- バックアップ先ディレクトリ
- 部分バックアップ先ディレクトリ※
- エクスポート先ディレクトリ
- インポート先ディレクトリ※

注※

Store バージョン 2.0 を使用しているときだけ設定できます。

jpcconf db define コマンドで設定するオプション名、設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 3-7 パフォーマンスデータの格納先を変更するコマンドの設定項目

説明	オプション名	設定できる値 (Store バージョン 1.0)	設定できる値 (Store バージョン 2.0)	デフォルト値※
パフォーマンスデータの保存先ディレクトリ	sd	1~127 バイトの半角英数字	1~214 バイトの半角英数字	/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名

説明	オプション名	設定できる値 (Storeバージョン 1.0)	設定できる値 (Storeバージョン 2.0)	デフォルト値※
パフォーマンスデータのバックアップ先ディレクトリ	bd	1~127バイトの半角英数字	1~211バイトの半角英数字	/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/backup
パフォーマンスデータの部分バックアップ先ディレクトリ	pbd	—	1~214バイトの半角英数字	/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/partial
パフォーマンスデータを退避する場合の最大世代番号	bs	1~9	1~9	5
パフォーマンスデータのエクスポート先ディレクトリ	dd	1~127バイトの半角英数字	1~127バイトの半角英数字	/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/dump
パフォーマンスデータのインポート先ディレクトリ	id	—	1~222バイトの半角英数字	/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/import

(凡例)

—：設定できません。

注※

論理ホストで運用する場合のデフォルト値については、「/opt/jp1pc」を「環境ディレクトリ/jp1pc」に読み替えてください。

## (2) jpcsto.ini ファイルを編集して設定を変更する (Store バージョン 1.0 の場合だけ)

Store バージョン 1.0 を使用しているときは、jpcsto.ini を直接編集して変更できます。

### (a) jpcsto.ini ファイルの設定項目

jpcsto.ini ファイルで編集するラベル名、設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 3-8 パフォーマンスデータの格納先の設定項目 (jpcsto.ini の[Data Section]セクション)

説明	ラベル名	設定できる値※1	デフォルト値※2
パフォーマンスデータの保存先ディレクトリ	Store Dir※3	1~127バイトの半角英数字	/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名
パフォーマンスデータのバックアップ先ディレクトリ	Backup Dir※3	1~127バイトの半角英数字	/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/backup

説明	ラベル名	設定できる値※1	デフォルト値※2
パフォーマンスデータをバックアップする場合の最大世代番号	Backup Save	1～9	5
パフォーマンスデータのエクスポート先ディレクトリ	Dump Dir※3	1～127バイトの半角英数字	/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/dump

#### 注※1

- ディレクトリ名は、Store データベースのデフォルト格納先ディレクトリ（/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名）からの相対パスか、または絶対パスで指定してください。
- 指定できる文字は、次の文字を除く、半角英数字、半角記号および半角空白です。  
; , \* ? ' " < > |
- 指定値に誤りがある場合、Agent Store サービスは起動できません。

#### 注※2

論理ホストで運用する場合のデフォルト値については、[/opt/jp1pc] を「環境ディレクトリ/jp1pc」に読み替えてください。

#### 注※3

Store Dir, Backup Dir, および Dump Dir には、それぞれ重複したディレクトリを指定できません。

### (b) jpcsto.ini ファイルの編集前の準備

- Store データベースの格納先ディレクトリを変更する場合は、変更後の格納先ディレクトリを事前に作成しておいてください。
- Store データベースの格納先ディレクトリを変更すると、変更前に収集したパフォーマンスデータを使用できなくなります。変更前に収集したパフォーマンスデータが必要な場合は、次に示す手順でデータを引き継いでください。
  - jpctool db backup コマンドで Store データベースに格納されているパフォーマンスデータのバックアップを採取する。
  - 「(c) jpcsto.ini ファイルの編集手順」に従って Store データベースの格納先ディレクトリを変更する。
  - jpctool db restore コマンドで変更後のディレクトリにバックアップデータをリストアする。

### (c) jpcsto.ini ファイルの編集手順

手順を次に示します。

#### 1. PFM - Agent のサービスを停止する。

ローカルホストで PFM - Agent のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。

2. テキストエディターなどで、jpcsto.ini ファイルを開く。

3. パフォーマンスデータの格納先ディレクトリなどを変更する。

次に示す網掛け部分を、必要に応じて修正してください。

```
      :  
[Data Section]  
Store Dir=.  
Backup Dir=./backup  
Backup Save=5  
Dump Dir=./dump  
      :
```

### 注意事項

- 行頭および「=」の前後には空白文字を入力しないでください。
- 各ラベルの値の「.」は、Agent Store サービスの Store データベースのデフォルト格納先ディレクトリ (/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名) を示します。格納先を変更する場合、その格納先ディレクトリからの相対パスか、または絶対パスで記述してください。
- jpcsto.ini ファイルには、データベースの格納先ディレクトリ以外にも、定義情報が記述されています。[Data Section]セクション以外の値は変更しないようにしてください。[Data Section]セクション以外の値を変更すると、Performance Management が正常に動作しなくなることがあります。

4. jpcsto.ini ファイルを保存して閉じる。

5. Performance Management のプログラムおよびサービスを起動する。

### 注意

この手順で Store データベースの保存先ディレクトリを変更した場合、パフォーマンスデータファイルは変更前のディレクトリから削除されません。これらのファイルが不要な場合は、次に示すファイルだけを削除してください。

- 拡張子が .DB のすべてのファイル
- 拡張子が .IDX のすべてのファイル

## 3.7.2 インスタンス環境の更新の設定

インスタンス環境を更新する手順を次に示します。

複数のインスタンス環境を更新する場合は、この手順を繰り返し実施します。



インスタンス名を確認するには、`jpccconf inst list` コマンドを使用します。また、インスタンス環境を更新するには、`jpccconf inst setup` コマンドを使用します。

### 1. インスタンス名を確認する。

インスタンス環境で動作している PFM - Agent for OpenTP1 を示すサービスキーを指定して、`jpccconf inst list` コマンドを実行します。

例えば、PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス名を確認したい場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst list -key OpenTP1
```

設定されているインスタンス名が SDC の場合、SDC と表示されます。

### 2. 更新する情報を確認する。

インスタンス環境で更新できる情報を、次の表に示します。

表 3-9 PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス情報

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
DCDIR	監視対象 OpenTP1 システムの環境変数 DCDIR の値 (OpenTP1 ディレクトリのパス)。	Linux の場合：20 バイト以内の半角文字列 Linux 以外の場合：50 バイト以内の半角文字列	—
DCCONFPATH	監視対象 OpenTP1 システムの環境変数 DCCONFPATH の値 (OpenTP1 システム定義ファイル格納ディレクトリのパス)。	512 バイト以内の半角文字列	—
OPENTP1_ADMIN	OpenTP1 管理者のユーザー名。	255 バイト以内の半角文字列	—
OPENTP1_LIBPATH	OpenTP1 管理者の共用ライブラリーパス。 AIX の場合：環境変数 LIBPATH と同じ値 Linux の場合：環境変数 LD_LIBRARY_PATH と同じ値	512 バイト以内の半角文字列	—

(凡例)

—：なし

### 3. 更新したいインスタンス環境の PFM - Agent for OpenTP1 のサービスが起動されている場合は、停止する。

`jpccconf inst setup` コマンド実行時に、更新したいインスタンス環境のサービスが起動されている場合は、確認メッセージが表示され、サービスを停止できます。サービスを停止した場合は、更新処理が続行されます。サービスを停止しなかった場合は、更新処理が中断されます。

### 4. 更新したいインスタンス環境の PFM - Agent for OpenTP1 を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpccconf inst setup` コマンドを実行する。

例えば、PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス名 SDC のインスタンス環境を更新する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst setup -key OpenTP1 -inst SDC
```

### 5. OpenTP1 のインスタンス情報を更新する。

表 3-9 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力します。現在設定されている値が表示されます。表示された値を変更しない場合は、リターンキーだけを押してください。すべての入力終了すると、インスタンス環境が更新されます。

### 6. 更新したインスタンス環境のサービスを再起動する。

サービスの起動方法および停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、サービスの起動と停止について説明している章を参照してください。コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

## 3.7.3 Store バージョン 2.0 への移行

Store データベースの保存形式には、バージョン 1.0 と 2.0 の 2 種類があります。Store バージョン 1.0 および Store バージョン 2.0 の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」を参照してください。

Store バージョン 2.0 は、PFM - Base または PFM - Manager のバージョン 08-10 以降の環境に、08-10 以降の PFM - Agent for OpenTP1 を新規インストールした場合にだけデフォルトで利用できます。それ以外の場合は、Store バージョン 1.0 形式のままとなっているため、セットアップコマンドによって Store バージョン 2.0 に移行してください。

何らかの理由によって Store バージョン 1.0 に戻す必要がある場合は、Store バージョン 2.0 のアンセットアップを行ってください。

インストール条件に対応する Store バージョン 2.0 の利用可否と利用手順を次の表に示します。

表 3-10 Store バージョン 2.0 の利用可否および利用手順

インストール条件		Store バージョン 2.0 の利用可否	Store バージョン 2.0 の利用手順
インストール済みの PFM - Base, または PFM - Manager のバージョン	PFM - Agent のインストール方法		
08-10 より前	上書きインストール	利用できない	PFM - Base, または, PFM - Manager を 08-10 にバージョンアップ後, セットアップコマンドを実行
	新規インストール		
08-10 以降	上書きインストール	セットアップ後利用できる	セットアップコマンドを実行
	新規インストール	利用できる	設定不要

# (1) Store バージョン 2.0 のセットアップ

Store バージョン 2.0 へ移行する場合のセットアップ手順について説明します。

## 1. システムリソース見積もりと保存期間の設定

Store バージョン 2.0 の導入に必要なシステムリソースが、実行環境に適しているかどうかを確認してください。必要なシステムリソースを次に示します。

- ディスク容量
- ファイル数
- 1 プロセスがオープンするファイル数

これらの値は保存期間の設定によって調節できます。実行環境の保有しているリソースを考慮して保存期間を設定してください。システムリソースの見積もりについては、リリースノートを参照してください。

## 2. ディレクトリの設定

Store バージョン 2.0 に移行する場合に、Store バージョン 1.0 でのディレクトリ設定では、Agent Store サービスが起動しないことがあります。このため、Agent Store サービスが使用するディレクトリの設定を見直す必要があります。Agent Store サービスが使用するディレクトリの設定は `jpccconf db define` コマンドを使用して表示・変更できます。`jpccconf db define` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

Store バージョン 2.0 は、Store データベースの保存先ディレクトリやバックアップ先ディレクトリの最大長が Store バージョン 1.0 と異なります。Store バージョン 1.0 でディレクトリの設定を相対パスに変更している場合、絶対パスに変換した値が Store バージョン 2.0 でのディレクトリ最大長の条件を満たしているかどうかを確認してください。Store バージョン 2.0 のディレクトリ最大長は 214 バイトです。ディレクトリ最大長の条件を満たしていない場合は、Agent Store サービスが使用するディレクトリの設定を変更したあと、手順 3.以降に進んでください。

## 3. セットアップコマンドの実行

Store バージョン 2.0 に移行するため、次のコマンドを実行します。

```
jpccconf db vrset -ver 2.0 -key OpenTP1
```

`jpccconf db vrset` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

## 4. 保存期間の設定

手順 1.の見積もり時に設計した保存期間を設定します。Agent Store サービスを起動して、PFM - Web Console で設定してください。

## (2) Store バージョン 2.0 のアンセットアップ

Store バージョン 2.0 のアンセットアップは `jpccconf db vrset -ver 1.0` コマンドを使用します。Store バージョン 2.0 をアンセットアップすると、Store データベースのデータはすべて初期化され、Store バージョン 1.0 に戻ります。

`jpccconf db vrset` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

## (3) 注意事項

移行についての注意事項を次に示します。

### (a) Store バージョン 1.0 から Store バージョン 2.0 に移行する場合

Store データベースを Store バージョン 1.0 から Store バージョン 2.0 に移行した場合、PI レコードタイプのレコードの保存期間の設定は引き継がれます。ただし、PD レコードタイプのレコードについては、以前の設定値（保存レコード数）に関係なくデフォルトの保存日数がレコードごとに設定され、保存日数以前に収集されたデータは削除されます。

例えば、Store バージョン 1.0 で、Collection Interval が 3,600 秒の PD レコードの保存レコード数を 1,000 に設定していた場合、PD レコードは 1 日に 24 レコード保存されることになるので、 $1,000 \div 24 \approx 42$  日分のデータが保存されています。この Store データベースを Store バージョン 2.0 へ移行した結果、デフォルトの保存日数が 10 日に設定されたとすると、11 日以上前のデータは削除されて参照できなくなります。

したがって、Store バージョン 2.0 へ移行する前に、PD レコードタイプのレコードについて保存レコード数の設定を確認してください。Store バージョン 2.0 でのデフォルトの保存日数以上のデータが保存される設定となっている場合は、`jpctool db dump` コマンドでデータベース内のデータを出力してください。Store バージョン 2.0 でのデフォルト保存日数については、リリースノートを参照してください。

### (b) Store バージョン 2.0 から Store バージョン 1.0 に戻す場合

Store バージョン 2.0 をアンセットアップすると、データは初期化されます。このため、Store バージョン 2.0 をアンセットアップして Store バージョン 1.0 に戻す前に、`jpctool db dump` コマンドで Store バージョン 2.0 の情報を出力してください。

## 3.8 バックアップとリストア

PFM - Agent for OpenTP1 のバックアップおよびリストアについて説明します。

障害が発生してシステムが壊れた場合に備えて、PFM - Agent for OpenTP1 の設定情報のバックアップを取得してください。また、PFM - Agent for OpenTP1 をセットアップしたときなど、システムを変更した場合にもバックアップを取得してください。

なお、Performance Management システム全体のバックアップおよびリストアについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」のバックアップとリストアについて説明している章を参照してください。

### 3.8.1 バックアップ

バックアップはファイルをコピーするなど、任意の方法で取得してください。バックアップを取得する場合は、PFM - Agent for OpenTP1 のサービスを停止した状態で取得してください。

PFM - Agent for OpenTP1 の設定情報のバックアップ対象ファイルを次の表に示します。

表 3-11 PFM - Agent for OpenTP1 のバックアップ対象ファイル

ファイル名	説明
/opt/jp1pc/agth/agent/インスタンス名/*.ini	Agent Collector サービスの設定ファイル
/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/*.ini	Agent Store サービスの設定ファイル

#### 注意

論理ホストで運用する場合のファイル名については、「/opt/jp1pc」を「環境ディレクトリ/jp1pc」に読み替えてください。

PFM - Agent for OpenTP1 のバックアップを取得する際は、取得した環境の製品バージョン番号を管理するようにしてください。製品バージョン番号の詳細については、リリースノートを参照してください。

### 3.8.2 リストア

PFM - Agent for OpenTP1 の設定情報をリストアする場合は、次に示す前提条件の内容を確認した上で、バックアップ対象ファイルを元の位置にコピーしてください。バックアップした設定情報ファイルで、ホスト上の設定情報ファイルを上書きします。

#### 前提条件

- PFM - Agent for OpenTP1 がインストール済みであること。
- PFM - Agent for OpenTP1 のサービスが停止していること。

- システム構成がバックアップしたときと同じであること。
- それぞれのホストで、バックアップしたホスト名とリストアするホスト名が一致していること。
- バックアップ環境の PFM 製品構成情報がリストア対象の PFM 製品構成情報と一致していること。

## ■ 注意事項

PFM - Agent for OpenTP1 の設定情報をリストアする場合、バックアップを取得した環境とリストアする環境の製品バージョン番号が完全に一致している必要があります。製品バージョン番号の詳細については、リリースノートを参照してください。リストアの可否についての例を次に示します。

### リストアできるケース

PFM - Agent for OpenTP1 10-00 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for OpenTP1 10-00 にリストアする。

### リストアできないケース

- PFM - Agent for OpenTP1 10-00 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for OpenTP1 09-00 にリストアする。
- PFM - Agent for OpenTP1 08-00 でバックアップした設定情報を PFM - Agent for OpenTP1 08-00-10 にリストアする。

## 3.9 Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定

Performance Management では、PFM - Web Console がインストールされているホストに、プログラムプロダクトに標準添付されているマニュアル提供媒体からマニュアルをコピーすることで、Web ブラウザでマニュアルを参照できるようになります。なお、PFM - Web Console をクラスタ運用している場合は、実行系、待機系それぞれの物理ホストでマニュアルをコピーしてください。

### 3.9.1 マニュアルを参照するための設定

#### (1) PFM - Web Console のヘルプからマニュアルを参照する場合

1. PFM - Web Console のセットアップ手順に従い、PFM - Web Console に PFM - Agent を登録する (PFM - Agent の追加セットアップを行う)。
2. PFM - Web Console がインストールされているホストに、マニュアルのコピー先ディレクトリを作成する。
  - Windows の場合：Web Console のインストール先フォルダ¥doc¥ja¥××××
  - UNIX の場合：/opt/jp1pcwebcon/doc/ja/××××××××には、PFM - Agent のヘルプ ID を指定してください。ヘルプ ID については、「[付録 C 識別子一覧](#)」を参照してください。
3. 上記で作成したディレクトリの直下に、マニュアル提供媒体から次のファイルおよびディレクトリをコピーする。

##### HTML マニュアルの場合

Windows の場合：該当するドライブ¥MAN¥3021¥資料番号 (03004A0D など) 下の、すべての HTML ファイルおよび FIGURE フォルダ

UNIX の場合：/提供媒体のマウントポイント/MAN/3021/資料番号 (03004A0D など) 下の、すべての HTML ファイルおよび FIGURE ディレクトリ

##### PDF マニュアルの場合

Windows の場合：該当するドライブ¥MAN¥3021¥資料番号 (03004A0D など) 下の PDF ファイル

UNIX の場合：/提供媒体のマウントポイント/MAN/3021/資料番号 (03004A0D など) 下の PDF ファイル

コピーの際、HTML マニュアルの場合は INDEX.HTM ファイルが、PDF マニュアルの場合は PDF ファイル自体が、作成したディレクトリ直下に配置されるようにしてください。

4. PFM - Web Console を再起動する。

## (2) お使いのマシンのハードディスクからマニュアルを参照する場合

提供媒体から直接 HTML ファイル、STYLE2.CSS ファイル、PDF ファイル、および GIF ファイルを任意のディレクトリにコピーしてください。HTML マニュアルの場合、次のディレクトリ構成になるようにしてください。

html (HTML ファイル、STYLE2.CSS ファイル、および PDF ファイルを格納)

└─FIGURE (GIF ファイルを格納)

### 3.9.2 マニュアルの参照手順

マニュアルの参照手順を次に示します。

1. PFM - Web Console の [メイン] 画面のメニューバーフレームにある [ヘルプ] メニューをクリックし、[ヘルプ選択] 画面を表示する。

2. マニュアル名またはマニュアル名の後ろの [PDF] をクリックする。

マニュアル名をクリックすると HTML 形式のマニュアルが表示されます。[PDF] をクリックすると PDF 形式のマニュアルが表示されます。

#### Web ブラウザでの文字の表示に関する注意事項

Windows の場合、[スタート] メニューからオンラインマニュアルを表示させると、すでに表示されている Web ブラウザの画面上に HTML マニュアルが表示されることがあります。



# 4

## クラスタシステムでの運用

この章では、クラスタシステムで PFM - Agent for OpenTP1 を運用する場合のインストール、セットアップ、クラスタシステムで PFM - Agent for OpenTP1 を運用しているときの処理の流れなどについて説明します。

## 4.1 クラスタシステムの概要

---

クラスタシステムとは、複数のサーバシステムを連携して1つのシステムとして運用するシステムです。PFM - Agent for OpenTP1 の監視対象プログラムである、OpenTP1 は、次のクラスタシステムで運用できます。

- HA (High Availability) クラスタシステム構成の OpenTP1

ここでは、クラスタシステムで PFM - Agent for OpenTP1 を運用する場合の構成について説明します。クラスタシステムの概要、および Performance Management システムをクラスタシステムで運用する場合のシステム構成については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

なお、この章で、単に「クラスタシステム」と記述している場合は、HA クラスタシステムのことを指します。

### 4.1.1 HA クラスタシステム

#### (1) HA クラスタシステムでの OpenTP1 の構成

OpenTP1 を HA クラスタシステムで運用すると、障害発生時にフェールオーバーすることができ、可用性が向上します。

OpenTP1 を HA クラスタシステムで運用する場合、一般的には、実行系ノードと待機系ノードの両方で同じ OpenTP1 のインスタンスが実行できる環境を構築し、OpenTP1 のデータ（データファイル、構成ファイル、ログファイルなど）一式を共有ディスクに格納した構成にします。なお、HA クラスタシステム上で OpenTP1 を運用する場合、一般的にはクラスタソフトから OpenTP1 を制御するためのソリューション製品を使用します。また、クラスタシステムでの OpenTP1 の構成や運用方法は、システムによって異なる場合があります。

#### (2) HA クラスタシステムでの PFM - Agent for OpenTP1 の構成

PFM - Agent for OpenTP1 は、HA クラスタシステムで運用でき、クラスタ構成の OpenTP1 を監視できます。HA クラスタシステムで PFM - Agent for OpenTP1 を運用する場合は、次の図のような構成で運用します。

図 4-1 HA クラスタシステムでの PFM - Agent for OpenTP1 の構成例

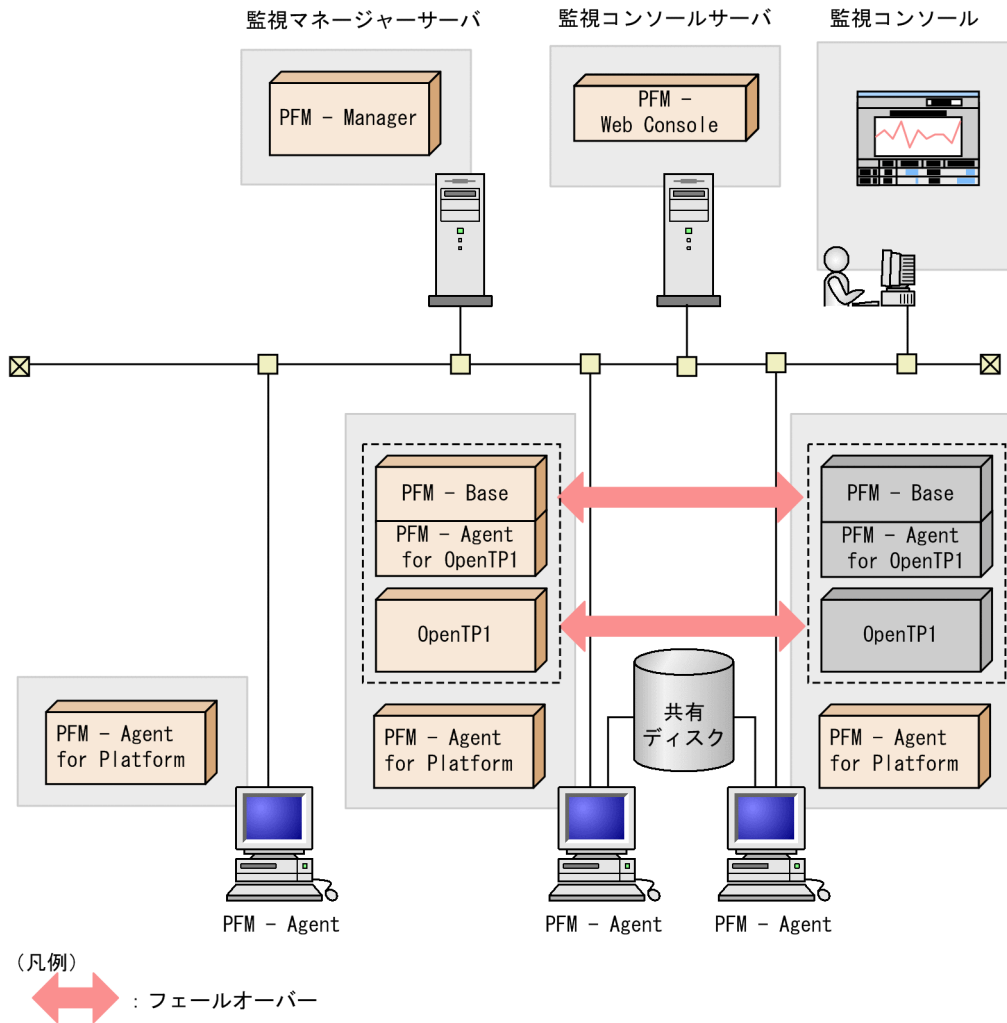


図 4-1 に示すように、PFM - Agent for OpenTP1 はクラスタ構成の OpenTP1 と同じ論理ホスト環境で動作し、OpenTP1 を監視します。障害発生時は OpenTP1 のフェールオーバーに連動して PFM - Agent for OpenTP1 もフェールオーバーし、監視を継続できます。

また、共有ディスクに定義情報やパフォーマンス情報を格納し、フェールオーバー時に引き継ぎます。1 つの論理ホストに複数の Performance Management のプログラムがある場合は、それぞれが同じ共有ディレクトリを使います。

1 つのノードで PFM - Agent for OpenTP1 を複数実行できます。クラスタ構成の OpenTP1 が複数ある構成（アクティブ・アクティブ構成）の場合、それぞれの論理ホスト環境で、PFM - Agent for OpenTP1 を実行してください。それぞれの PFM - Agent for OpenTP1 は独立して動作し、別々にフェールオーバーできます。

## 4.2 フェールオーバー時の処理

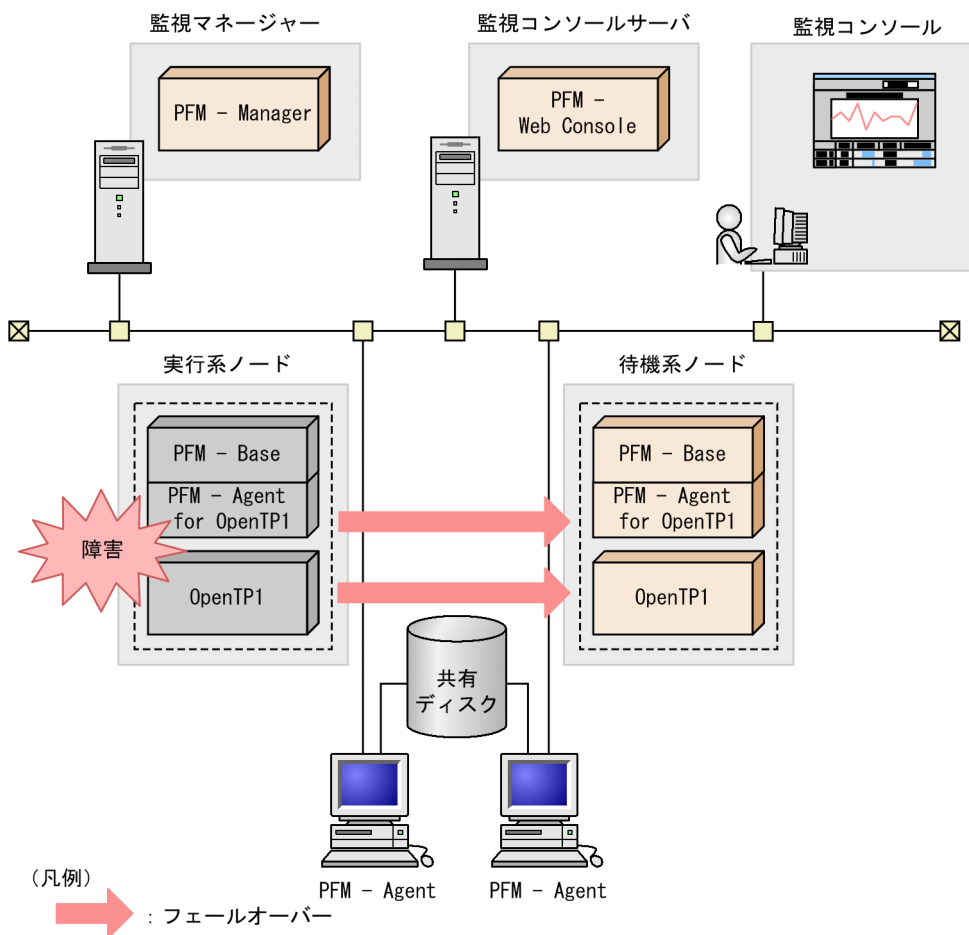
実行系ホストに障害が発生すると、処理が待機系ホストに移ります。

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 に障害が発生した場合のフェールオーバー時の処理について説明します。また、PFM - Manager に障害が発生した場合の、PFM - Agent for OpenTP1 への影響について説明します。

### 4.2.1 PFM - Agent ホストに障害が発生した場合のフェールオーバー

PFM - Agent for OpenTP1 を実行している PFM - Agent ホストでフェールオーバーが発生した場合の処理を次の図に示します。

図 4-2 PFM - Agent ホストでフェールオーバーが発生した場合の処理



PFM - Agent for OpenTP1 のフェールオーバー中に、PFM - Web Console で操作すると、「There was no answer(-6)」というメッセージが表示されます。この場合は、フェールオーバーが完了するまで待ってから操作してください。

PFM - Agent for OpenTP1 のフェールオーバー後に、PFM - Web Console で操作すると、フェールオーバー先のノードで起動した PFM - Agent for OpenTP1 に接続されます。

## 4.2.2 PFM - Manager が停止した場合の影響

PFM - Manager が停止すると、Performance Management システム全体に影響があります。

PFM - Manager は、各ノードで動作している PFM - Agent for OpenTP1 のエージェント情報を一括管理しています。また、PFM - Agent for OpenTP1 がパフォーマンス監視中にしきい値を超えた場合のアラームイベントの通知や、アラームイベントを契機としたアクションの実行を制御しています。このため、PFM - Manager が停止すると、Performance Management システムに次の表に示す影響があります。

表 4-1 PFM - Manager が停止した場合の PFM - Agent for OpenTP1 への影響

プログラム名	影響	対処
PFM - Agent for OpenTP1	<p>PFM - Agent for OpenTP1 の動作中に、PFM - Manager が停止した場合、次のように動作する。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>パフォーマンスデータは継続して収集される。</li><li>発生したアラームイベントを PFM - Manager に通知できないため、アラーム定義ごとにアラームイベントが保持され、PFM - Manager が起動するまで通知をリトライする。保持しているアラームイベントが3つを超えると、古いアラームイベントは上書きされる。また、PFM - Agent for OpenTP1 を停止すると、保持しているアラームイベントは削除される。</li><li>PFM - Manager に通知済みのアラームステータスは、PFM - Manager が再起動したときに一度リセットされる。その後、PFM - Manager が PFM - Agent for OpenTP1 の状態を確認したあと、アラームステータスは最新の状態になる。</li><li>PFM - Agent for OpenTP1 を停止しようとした場合、PFM - Manager に停止することを通知できないため、停止に時間が掛かる。</li></ul>	<p>PFM - Manager を起動する。動作中の PFM - Agent for OpenTP1 はそのまま運用できる。ただし、アラームが期待したとおり通知されない場合があるため、PFM - Manager 復旧後に、共通メッセージログに出力されているメッセージ KAVE00024-I を確認すること。</p>

PFM - Manager が停止した場合の影響を考慮の上、運用方法を検討してください。なお、トラブル以外にも、構成変更やメンテナンスの作業などで PFM - Manager の停止が必要になる場合もあります。運用への影響が少ないときに、メンテナンスをすることをお勧めします。

## 4.3 インストールとセットアップ (Windows の場合)

---

ここでは、クラスタシステムでの PFM - Agent for OpenTP1 のインストールとセットアップの手順について説明します。

なお、PFM - Manager のインストールとセットアップの手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

### 4.3.1 インストールとセットアップの前に確認すること

インストールおよびセットアップを開始する前に前提条件、必要な情報、および注意事項について説明します。

#### (1) 前提条件

PFM - Agent for OpenTP1 をクラスタシステムで使用する場合、次に示す前提条件があります。

##### (a) クラスタシステム

次の条件が整っていることを確認してください。

- クラスタシステムがクラスタソフトによって制御されていること。
- クラスタソフトが論理ホスト運用する PFM - Agent for OpenTP1 の起動や停止などを制御するように設定されていること。このとき、PFM - Agent for OpenTP1 が、監視対象の OpenTP1 と連動してフェールオーバーするように設定すること。

#### 注意

- Windows では、アプリケーションエラーが発生すると、Microsoft へエラーを報告するダイアログボックスが表示されます。このダイアログボックスが表示されるとフェールオーバーできないおそれがあるため、エラー報告を抑止する必要があります。ダイアログボックスの抑止手順については、OS のマニュアルを参照してください。

##### (b) 共有ディスク

次の条件が整っていることを確認してください。

- 論理ホストごとに共有ディスクがあり、実行系ノードから待機系ノードへ引き継げること。
- 共有ディスクが、各ノードに物理的に Fibre Channel や SCSI で接続されていること。  
Performance Management では、ネットワークドライブや、ネットワーク経由でレプリケーションしたディスクを共有ディスクとして使う構成はサポートされていません。

- フェールオーバーの際に、何らかの問題によって共有ディスクを使用中のプロセスが残った場合でも、クラスタソフトなどの制御によって強制的に共有ディスクをオフラインにしてフェールオーバーできること。
- 1つの論理ホストで複数の PFM 製品を運用する場合、共有ディスクのディレクトリ名が同じであること。なお、Store データベースについては格納先を変更して、共有ディスク上のほかのディレクトリに格納できます。

## (c) 論理ホスト名, 論理 IP アドレス

次の条件が整っていることを確認してください。

- 論理ホストごとに論理ホスト名、および論理ホスト名と対応する論理 IP アドレスがあり、実行系ノードから待機系ノードに引き継げること。
- 論理ホスト名と論理 IP アドレスが、hosts ファイルやネームサーバに設定されていること。
- DNS 運用している場合は、FQDN (Fully Qualified Domain Name) ではなく、ドメイン名を除いたホスト名を論理ホスト名として使用していること。
- 物理ホスト名と論理ホスト名は、システムの中でユニークであること。

### 注意

- 論理ホスト名に、物理ホスト名 (hostname コマンドで表示されるホスト名) を指定しないでください。正常に通信処理がされなくなるおそれがあります。
- 論理ホスト名に使用できる文字は、1~32 バイトの半角英数字です。次の記号および空白文字は指定できません。  
/ ¥ ; \* ? ' " < > | & = , .
- 論理ホスト名には、"localhost", IP アドレス, "-" から始まるホスト名を指定できません。

## (2) 論理ホスト運用する PFM - Agent for OpenTP1 のセットアップに必要な情報

論理ホスト運用する PFM - Agent for OpenTP1 をセットアップするには、通常の PFM - Agent for OpenTP1 のセットアップで必要になる環境情報に加えて、次の表の情報がが必要です。

表 4-2 論理ホスト運用の PFM - Agent for OpenTP1 のセットアップに必要な情報

項目	例
論理ホスト名	jp1-haltp1
論理 IP アドレス	172.16.92.100
共有ディスク	S:¥jp1

なお、1つの論理ホストで論理ホスト運用する Performance Management のプログラムが複数ある場合も、同じ共有ディスクのディレクトリを使用します。

共有ディスクに必要な容量については、「付録 A 構築前のシステム見積もり」を参照してください。

### (3) PFM - Agent for OpenTP1 で論理ホストをフェールオーバーさせる場合の注意事項

PFM - Agent for OpenTP1 を論理ホスト運用するシステム構成の場合、PFM - Agent for OpenTP1 の障害によって論理ホスト全体をフェールオーバーさせるかどうかを検討してください。

PFM - Agent for OpenTP1 の障害で論理ホスト全体をフェールオーバーさせると、PFM - Agent for OpenTP1 が監視対象としている同じ論理ホストで運用する業務アプリケーションもフェールオーバーすることになり、業務に影響を与える可能性があります。

通常は、PFM - Agent for OpenTP1 に異常が発生しても、OpenTP1 の動作に影響がないように、次のどちらかのようにクラスタソフトで設定することをお勧めします。

- PFM - Agent for OpenTP1 の動作監視をしない
- PFM - Agent for OpenTP1 の異常を検知してもフェールオーバーしない

### (4) 論理ホスト運用時のバージョンアップに関する注意事項

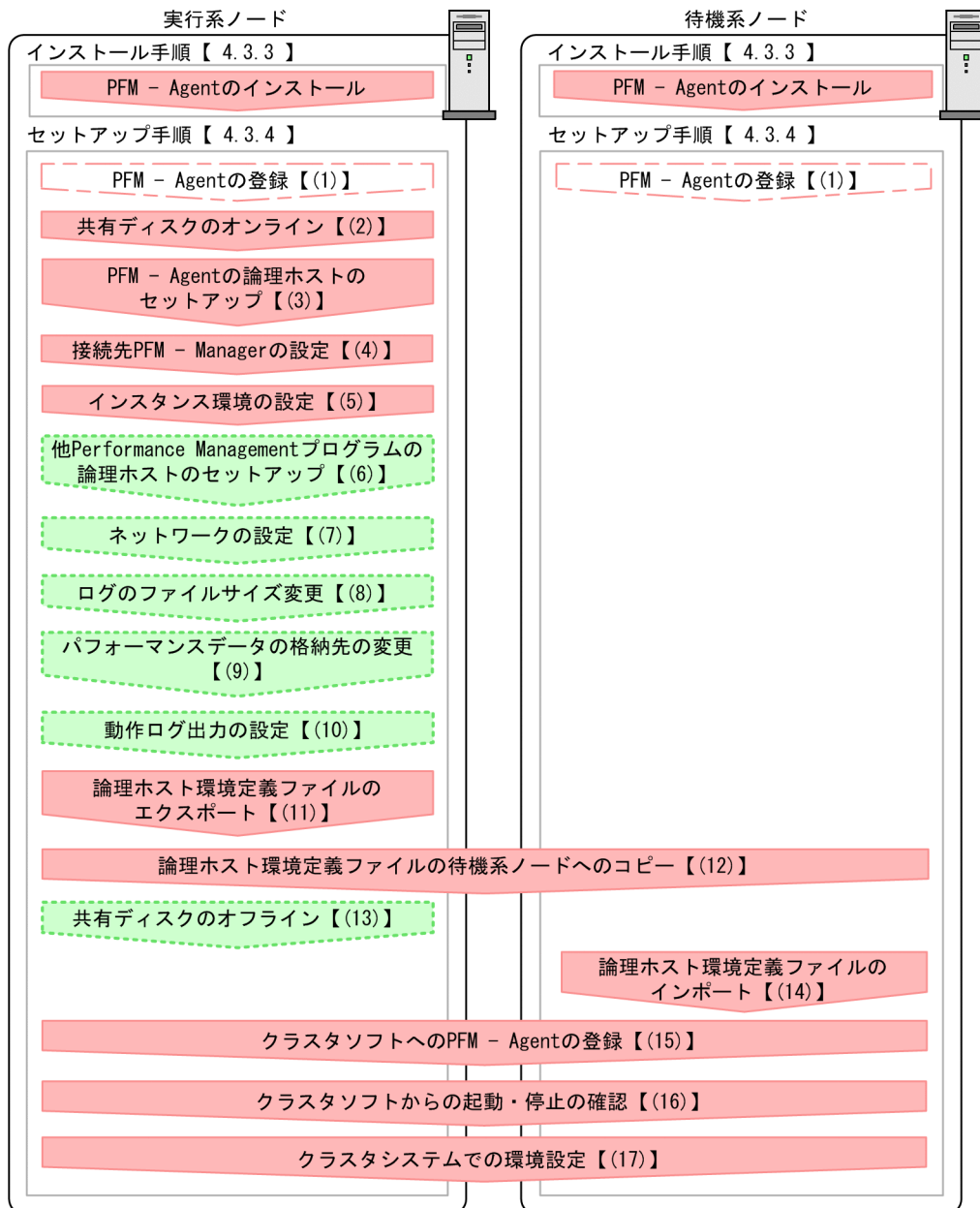
論理ホスト運用の PFM - Agent for OpenTP1 をバージョンアップする場合は、実行系ノードまたは待機系ノードのどちらか一方で、共有ディスクをオンラインにする必要があります。

## 4.3.2 クラスタシステムでのインストールとセットアップの流れ (Windows の場合)

クラスタシステムで、論理ホスト運用する PFM - Agent for OpenTP1 のインストールおよびセットアップの流れを次の図に示します。



図 4-3 クラスタシステムで論理ホスト運用する PFM - Agent for OpenTP1 のインストールおよびセットアップの流れ (Windows の場合)



- (凡例)
- : 必須セットアップ項目
  - : 場合によって必須となるセットアップ項目
  - : オプションのセットアップ項目
  - 【 】 : 参照先

## 注意

論理ホスト環境の PFM - Agent をセットアップしても、物理ホスト環境の PFM - Agent の定義内容は引き継がれません。論理ホスト環境および物理ホスト環境では、インスタンス環境を設定した時点で、新規に環境が作成されます。

### 4.3.3 クラスタシステムでのインストール手順 (Windows の場合)

実行系ノードおよび待機系ノードのそれぞれに PFM - Agent for OpenTP1 をインストールします。

#### 注意事項

インストール先はローカルディスクです。共有ディスクにはインストールしないでください。

インストール手順は非クラスタシステムの場合と同じです。インストール手順については、「[2.3 インストール](#)」を参照してください。

### 4.3.4 クラスタシステムでのセットアップ手順 (Windows の場合)

ここでは、クラスタシステムで Performance Management を運用するための、セットアップについて説明します。

セットアップ手順には、実行系ノードの手順と、待機系ノードの手順があります。実行系ノード、待機系ノードの順にセットアップしてください。

**実行系** は実行系ノードで行う項目を、**待機系** は待機系ノードで行う項目を示します。また、**オプション** は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

#### (1) PFM - Agent の登録 **実行系** **待機系** **オプション**

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent を一元管理するために、PFM - Manager および PFM - Web Console に PFM - Agent for OpenTP1 を登録する必要があります。

PFM - Agent for OpenTP1 を登録する必要があるのは次の場合です。

- Performance Management システムに新しく PFM - Agent for OpenTP1 を追加する場合
- すでに登録している PFM - Agent for OpenTP1 のデータモデルのバージョンを更新する場合

登録は PFM - Manager 上および PFM - Web Console 上で実施します。手順は非クラスタシステムの場合と同じです。

手順については、「[2.4.2 PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for OpenTP1 の登録](#)」を参照してください。

## (2) 共有ディスクのオンライン 実行系

共有ディスクがオンラインになっていることを確認します。共有ディスクがオンラインになっていない場合は、クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをオンラインにしてください。

## (3) PFM - Agent の論理ホストのセットアップ 実行系

jpccconf ha setup コマンドを実行して論理ホスト環境を作成します。コマンドを実行すると、共有ディスクに必要なデータがコピーされ、論理ホスト用の定義が設定されて、論理ホスト環境が作成されます。

### 注意

コマンドを実行する前に、Performance Management システム全体で、Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止してください。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

手順を次に示します。

1. jpccconf ha setup コマンドを実行して、PFM - Agent for OpenTP1 の論理ホスト環境を作成する。  
次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha setup -key OpenTP1 -lhost jp1-haltp1 -d S:¥jp1
```

論理ホスト名は、-lhost オプションで指定します。ここでは、論理ホスト名を jp1-haltp1 としています。DNS 運用をしている場合はドメイン名を省略した論理ホスト名を指定してください。

共有ディスクのディレクトリ名は、-d オプションの環境ディレクトリ名に指定します。例えば -d S:¥jp1 と指定すると S:¥jp1¥jp1pc が作成されて、論理ホスト環境のファイルが作成されます。

2. jpccconf ha list コマンドを実行して、論理ホストの設定を確認する。  
次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha list -key all
```

作成した論理ホスト環境が正しいことを確認してください。

## (4) 接続先 PFM - Manager の設定 実行系

jpccconf mgrhost define コマンドを実行して、PFM - Agent for OpenTP1 を管理する PFM - Manager を設定します。

1. jpccconf mgrhost define コマンドを実行して、接続先 PFM - Manager を設定する。  
次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf mgrhost define -host jp1-hal -lhost jp1-haltp1
```

接続先 PFM - Manager のホスト名は、`-host` オプションで指定します。接続先 PFM - Manager が論理ホスト運用されている場合は、`-host` オプションに接続先 PFM - Manager の論理ホスト名を指定します。ここでは、PFM - Manager の論理ホスト名を `jpl-hal` としています。

また、PFM - Agent for OpenTP1 の論理ホスト名は、`-lhost` オプションで指定します。ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 の論理ホスト名を `jpl-haltp1` としています。

## (5) インスタンス環境の設定 実行系

`jpccconf inst setup` コマンドを実行して、PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス環境を設定します。

設定手順は、非クラスタシステムの場合と同じです。ただし、クラスタシステムの場合、`jpccconf inst setup` コマンドの実行時に、「`-lhost`」で論理ホスト名を指定する必要があります。

クラスタシステムの場合の `jpccconf inst setup` コマンドの指定方法を次に示します。

```
jpccconf inst setup -key OpenTP1 -lhost 論理ホスト名 -inst インスタンス名
```

このほかの設定内容、および手順については、「[2.4.3 インスタンス環境の設定](#)」を参照してください。

## (6) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ 実行系 オプション

PFM - Agent for OpenTP1 のほかに、同じ論理ホストにセットアップする PFM - Manager や PFM - Agent がある場合は、この段階でセットアップしてください。

セットアップ手順については、マニュアル「[JP1/Performance Management 運用ガイド](#)」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章、または各 PFM - Agent マニュアルの、クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

## (7) ネットワークの設定 実行系 オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合にだけ必要な設定です。

ネットワークの設定では次の 2 つの項目を設定できます。

### • IP アドレスを設定する

複数の LAN に接続されたネットワーク環境で Performance Management を運用する場合に使用する IP アドレスを指定したいときは、`jpchosts` ファイルの内容を直接編集します。

このとき、編集した `jpchosts` ファイルは、実行系ノードから待機系ノードにコピーしてください。

IP アドレスの設定方法については、マニュアル「[JP1/Performance Management 設計・構築ガイド](#)」のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

### • ポート番号を設定する

ファイアウォール経由で Performance Management のプログラム間の通信をする場合には、`jpconf port` コマンドを使用してポート番号を設定します。

ポート番号の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章、およびマニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

## (8) ログのファイルサイズ変更 実行系 オプション

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。このファイルサイズを変更したい場合に必要な設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

## (9) パフォーマンスデータの格納先の変更 実行系 オプション

PFM - Agent で管理されるパフォーマンスデータを格納するデータベースの保存先、バックアップ先、エクスポート先、またはインポート先のフォルダを変更したい場合に必要な設定です。

設定方法については、「[2.4.6 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。

## (10) 動作ログ出力の設定 実行系 オプション

アラーム発生時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

設定方法については、「[付録 動作ログの出力](#)」を参照してください。

## (11) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート 実行系

PFM - Agent for OpenTP1 の論理ホスト環境が作成できたら、環境定義をファイルにエクスポートします。エクスポートでは、その論理ホストにセットアップされている Performance Management のプログラムの定義情報を一括してファイル出力します。同じ論理ホストにはほかの Performance Management のプログラムをセットアップする場合は、セットアップが一とおり済んだあとにエクスポートしてください。

論理ホスト環境定義をエクスポートする手順を次に示します。

### 1. `jpconf ha export` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をエクスポートする。

これまでの手順で作成した論理ホスト環境の定義情報を、エクスポートファイルに出力します。エクスポートファイル名は任意です。

例えば、`lhostexp.txt` ファイルに論理ホスト環境定義をエクスポートする場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha export -f lhostexp.txt
```

## (12) 論理HOST環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー 実行系 待機系

「(11) 論理HOST環境定義ファイルのエクスポート」でエクスポートした論理HOST環境定義ファイルを、実行系ノードから待機系ノードにコピーします。

## (13) 共有ディスクのオフライン 実行系 オプション

クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをオフラインにして、作業を終了します。なお、その共有ディスクを続けて使用する場合は、オフラインにする必要はありません。

## (14) 論理HOST環境定義ファイルのインポート 待機系

実行系ノードからコピーしたエクスポートファイルを、待機系ノードにインポートします。

実行系ノードで作成した論理HOSTのPerformance Managementのプログラムを、待機系ノードで実行するための設定には、jpccconf ha import コマンドを使用します。1つの論理HOSTに複数のPerformance Managementのプログラムがセットアップされている場合は、一括してインポートされます。

なお、このコマンドを実行するときには、共有ディスクをオンラインにしておく必要はありません。

### 1. jpccconf ha import コマンドを実行して、論理HOST環境定義をインポートする。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha import -f lhostexp.txt
```

コマンドを実行すると、待機系ノードの環境を、エクスポートファイルの内容と同じ環境になるように設定変更します。これによって、論理HOSTのPFM - Agent for OpenTP1を起動するための設定が実施されます。

また、セットアップ時にjpccconf port コマンドで固定のポート番号を設定している場合も、同様に設定されます。

### 2. jpccconf ha list コマンドを実行して、論理HOST設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha list -key all
```

実行系ノードでjpccconf ha list を実行した時と同じ内容が表示されることを確認してください。

## (15) クラスタソフトへのPFM - Agentの登録 実行系 待機系

Performance Managementのプログラムを論理HOST環境で運用する場合は、クラスタソフトに登録して、クラスタソフトからの制御でPerformance Managementのプログラムを起動したり停止したりするように環境設定します。

クラスタソフトへ PFM - Agent for OpenTP1 を登録する方法については、クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

PFM - Agent for OpenTP1 をクラスタソフトに登録するときの設定内容を、WSFC に登録する項目を例として説明します。

PFM - Agent for OpenTP1 の場合、次の表のサービスをクラスタに登録します。

表 4-3 クラスタソフトに登録する PFM - Agent for OpenTP1 のサービス

項番	リソース名	サービス名	依存関係
1	PFM - Agent Store for OpenTP1 インスタンス名 [LHOST]	JP1PCAGT_HS_インスタンス名 [LHOST]	IP アドレスリソース 物理ディスクリソース OpenTP1 リソース
2	PFM - Agent for OpenTP1 インスタンス名 [LHOST]	JP1PCAGT_HA_インスタンス名 [LHOST]	項番 1 のクラスタリソース
3	PFM - Action Handler [LHOST]	JP1PCMGR_PH [LHOST]	IP アドレスリソース 物理ディスクリソース

[LHOST]の部分は、論理ホスト名に置き換えてください。インスタンス名が SDC1、論理ホスト名が jp1-haltp1 の場合、サービスのリソース名は「PFM - Agent Store for OpenTP1 SDC1 [jp1-haltp1]」、サービス名は「JP1PCAGT\_HS\_SDC1 [jp1-haltp1]」のようになります。

WSFC の場合は、これらのサービスを WSFC のリソースとして登録します。各リソースの設定は次のようにします。下記の [ ] は、WSFC の設定項目です。

- [リソースの種類] は「汎用サービス」として登録する。
- [リソース名]、[依存関係]、および [サービス名] を表 4-3 のとおりに設定する。  
なお、リソース名はサービスを表示するときの名称で、サービス名は WSFC から制御するサービスを指定するときの名称です。
- [セットアップパラメータ] および [レジストリのレプリケーション] は設定しない。
- プロパティの [ポリシー] タブは、Performance Management のプログラムの障害時にフェールオーバーするかしないかの運用に合わせて設定する。

例えば、PFM - Agent for OpenTP1 の障害時に、フェールオーバーするように設定するには、次のように設定します。

[リソースが失敗状態になった場合は、現在のノードで再起動を試みる]：チェックする

[再起動に失敗した場合は、このサービスまたはアプリケーションのすべてのリソースをフェールオーバーする]：チェックする

[指定期間内での再起動の試行回数]：3※

注※

[指定期間内での再起動の試行回数] は 3 回を目安に設定してください。

## 注意

- クラスタに登録するサービスは、クラスタから起動および停止を制御しますので、OS 起動時に自動起動しないよう [スタートアップの種類] を [手動] に設定してください。なお、`jpccconf ha setup` コマンドでセットアップした直後のサービスは [手動] に設定されています。また、次のコマンドで強制停止しないでください。

```
jpccspm stop -key all -lhost 論理ホスト名 -kill immediate
```

- PFM - Agent for OpenTP1 は、OS 固有の環境変数に固定値を設定して動作しています。OS 固有の環境変数に設定する値を変更して運用する場合、クラスタソフトに登録するスクリプトで、環境変数に変更したい値を設定し、環境変数「JPCAGTH\_SKIPSETENV」に「Y」または「y」を設定してから、PFM サービスを起動するようにしてください。PFM - Agent for OpenTP1 が固定値を設定する環境変数については、「3.4.9 OS 固有の環境変数の設定」を参照してください。

## (16) クラスタソフトからの起動・停止の確認 実行系 待機系

クラスタソフトからの操作で、Performance Management のプログラムの起動および停止を各ノードで実行し、正常に動作することを確認してください。

## (17) クラスタシステムでの環境設定 実行系 待機系

Performance Management のプログラムのセットアップ終了後、PFM - Web Console から、運用に合わせて監視対象の稼働状況についてのレポートを表示できるようにしたり、監視対象で問題が発生したときにユーザーに通知できるようにしたりするために、Performance Management のプログラムの環境を設定します。

Performance Management のプログラムの環境設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。



## 4.4 クラスタシステムでのインストールとセットアップ (UNIX の場合)

ここでは、クラスタシステムでの PFM - Agent for OpenTP1 のインストールとセットアップの手順について説明します。

なお、PFM - Manager のインストールとセットアップの手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

### 4.4.1 クラスタシステムでのインストールとセットアップの前に確認すること (UNIX の場合)

インストールおよびセットアップを開始する前に前提条件、必要な情報、および注意事項について説明します。

#### (1) 前提条件

PFM - Agent for OpenTP1 をクラスタシステムで使用する場合、次に示す前提条件があります。

##### (a) クラスタシステム

次の条件が整っていることを確認してください。

- クラスタシステムがクラスタソフトによって制御されていること。
- クラスタソフトが論理ホスト運用する PFM - Agent for OpenTP1 の起動や停止などを制御するように設定されていること。このとき、PFM - Agent for OpenTP1 が、監視対象の OpenTP1 と連動してフェールオーバーするように設定すること。

##### (b) 共有ディスク

次の条件が整っていることを確認してください。

- 論理ホストごとに共有ディスクがあり、実行系ノードから待機系ノードへ引き継げること。
- 共有ディスクが、各ノードに物理的に Fibre Channel や SCSI で接続されていること。  
Performance Management では、ネットワークドライブや、ネットワーク経由でレプリケーションしたディスクを共有ディスクとして使う構成はサポートされていません。
- フェールオーバーの際に、何らかの問題によって共有ディスクを使用中のプロセスが残った場合でも、クラスタソフトなどの制御によって強制的に共有ディスクをアンマウントしてフェールオーバーできること。
- 1つの論理ホストで複数の PFM 製品を運用する場合、共有ディスクのディレクトリ名が同じであること。  
なお、Store データベースについては格納先を変更して、共有ディスク上のほかのディレクトリに格納できます。

## (c) 論理ホスト名, 論理 IP アドレス

次の条件が整っていることを確認してください。

- 論理ホストごとに論理ホスト名, および論理ホスト名と対応する論理 IP アドレスがあり, 実行系ノードから待機系ノードに引き継げること。
- 論理ホスト名と論理 IP アドレスが, hosts ファイルやネームサーバに設定されていること。
- DNS 運用している場合は, FQDN (Fully Qualified Domain Name) ではなく, ドメイン名を除いたホスト名を論理ホスト名として使用していること。
- 物理ホスト名と論理ホスト名は, システムの中でユニークであること。

### 注意

- 論理ホスト名に, 物理ホスト名 (uname -n コマンドで表示されるホスト名) を指定しないでください。正常に通信処理がされなくなる可能性があります。
- 論理ホスト名に使用できる文字は, 1~32 バイトの半角英数字です。次の記号および空白文字は指定できません。  
/ ¥ : ; \* ? ' " < > | & = , .
- 論理ホスト名には, "localhost", IP アドレス, "-" から始まるホスト名を指定できません。

## (2) 論理ホスト運用する PFM - Agent for OpenTP1 のセットアップに必要な情報

論理ホスト運用する PFM - Agent for OpenTP1 をセットアップするには, 通常の PFM - Agent for OpenTP1 のセットアップで必要になる環境情報に加えて, 次の表の情報がが必要です。

表 4-4 論理ホスト運用の PFM - Agent for OpenTP1 のセットアップに必要な情報

項目	例
論理ホスト名	jp1-haltpl
論理 IP アドレス	172.16.92.100
共有ディスク	/jp1

なお, 1 つの論理ホストで論理ホスト運用する Performance Management のプログラムが複数ある場合も, 同じ共有ディスクのディレクトリを使用します。

共有ディスクに必要な容量については, 「付録 A 構築前のシステム見積もり」を参照してください。

### (3) PFM - Agent for OpenTP1 で論理ホストをフェールオーバーさせる場合の注意事項

PFM - Agent for OpenTP1 を論理ホスト運用するシステム構成の場合、PFM - Agent for OpenTP1 の障害によって論理ホスト全体をフェールオーバーさせるかどうかを検討してください。

PFM - Agent for OpenTP1 の障害で論理ホスト全体をフェールオーバーさせると、PFM - Agent for OpenTP1 が監視対象としている同じ論理ホストで運用する業務アプリケーションもフェールオーバーすることになり、業務に影響を与える可能性があります。

通常は、PFM - Agent for OpenTP1 に異常が発生しても、OpenTP1 の動作に影響がないように、次のどちらかのようにクラスタソフトで設定することをお勧めします。

- PFM - Agent for OpenTP1 の動作監視をしない
- PFM - Agent for OpenTP1 の異常を検知してもフェールオーバーしない

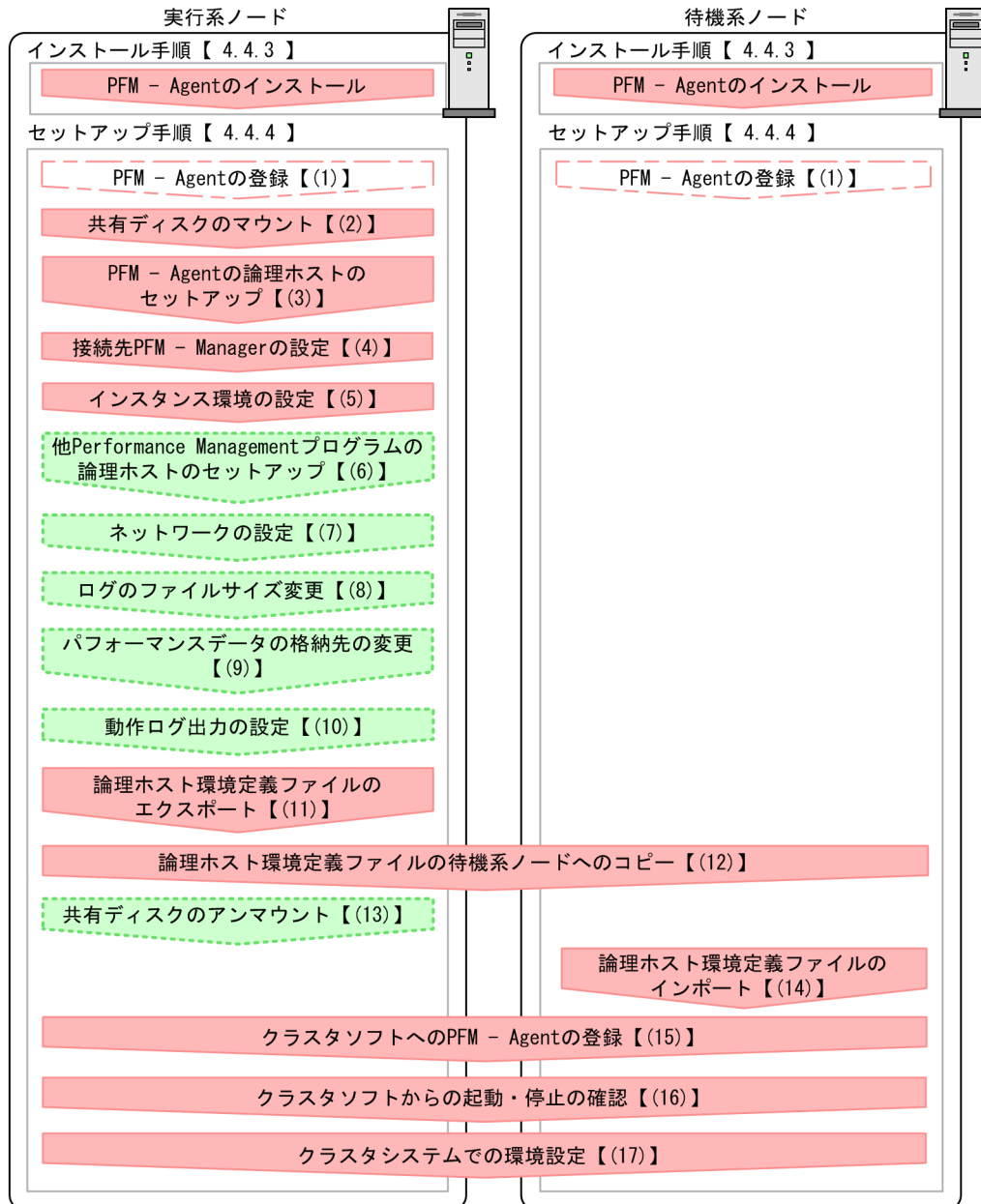
### (4) 論理ホスト運用時のバージョンアップに関する注意事項

論理ホスト運用の PFM - Agent for OpenTP1 をバージョンアップする場合は、実行系ノードまたは待機系ノードのどちらか一方で、共有ディスクをマウントする必要があります。

## 4.4.2 クラスタシステムでのインストールとセットアップの流れ (UNIX の場合)

クラスタシステムで、論理ホスト運用する PFM - Agent for OpenTP1 のインストールおよびセットアップの流れを次の図に示します。

図 4-4 クラスタシステムで論理ホスト運用する PFM - Agent for OpenTP1 のインストールおよびセットアップの流れ (UNIX の場合)



- (凡例)
- : 必須セットアップ項目
  - : 場合によって必須となるセットアップ項目
  - : オプションのセットアップ項目
  - 【 】** : 参照先

## 注意

論理ホスト環境の PFM - Agent をセットアップしても、物理ホスト環境の PFM - Agent の定義内容は引き継がれません。論理ホスト環境および物理ホスト環境では、インスタンス環境を設定した時点で、新規に環境が作成されます。

### 4.4.3 クラスタシステムでのインストール手順 (UNIX の場合)

実行系ノードおよび待機系ノードのそれぞれに PFM - Agent for OpenTP1 をインストールします。

#### 注意事項

インストール先はローカルディスクです。共有ディスクにはインストールしないでください。

インストール手順は非クラスタシステムの場合と同じです。インストール手順については、「[3.3 インストール手順](#)」を参照してください。

### 4.4.4 クラスタシステムでのセットアップ手順 (UNIX の場合)

ここでは、クラスタシステムで Performance Management を運用するための、セットアップについて説明します。

セットアップ手順には、実行系ノードの手順と、待機系ノードの手順があります。実行系ノード、待機系ノードの順にセットアップしてください。

**実行系** は実行系ノードで行う項目を、**待機系** は待機系ノードで行う項目を示します。また、**オプション** は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

#### (1) PFM - Agent の登録 **実行系** **待機系** **オプション**

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - Agent を一元管理するために、PFM - Manager および PFM - Web Console に PFM - Agent for OpenTP1 を登録する必要があります。

PFM - Agent for OpenTP1 を登録する必要があるのは次の場合です。

- Performance Management システムに新しく PFM - Agent for OpenTP1 を追加する場合
- すでに登録している PFM - Agent for OpenTP1 のデータモデルのバージョンを更新する場合

登録は PFM - Manager 上および PFM - Web Console 上で実施します。手順は非クラスタシステムの場合と同じです。

手順については、「[3.4.2 PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for OpenTP1 の登録](#)」を参照してください。

#### (2) 共有ディスクのマウント **実行系**

共有ディスクがマウントされていることを確認します。共有ディスクがマウントされていない場合は、クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをマウントしてください。

### (3) PFM - Agent の論理ホストのセットアップ 実行系

jpccconf ha setup コマンドを実行して論理ホスト環境を作成します。コマンドを実行すると、共有ディスクに必要なデータがコピーされ、論理ホスト用の定義が設定されて、論理ホスト環境が作成されます。

#### 注意

コマンドを実行する前に、Performance Management システム全体で、Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止してください。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management を運用するための操作について説明している章を参照してください。

手順を次に示します。

1. jpccconf ha setup コマンドを実行して、PFM - Agent for OpenTP1 の論理ホスト環境を作成する。  
次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha setup -key OpenTP1 -lhost jp1-haltp1 -d /jp1
```

論理ホスト名は、-lhost オプションで指定します。ここでは、論理ホスト名を jp1-haltp1 としています。DNS 運用をしている場合はドメイン名を省略した論理ホスト名を指定してください。

共有ディスクのディレクトリ名は、-d オプションの環境ディレクトリ名に指定します。例えば -d /jp1 と指定すると /jp1/jp1pc が作成されて、論理ホスト環境のファイルが作成されます。

2. jpccconf ha list コマンドを実行して、論理ホストの設定を確認する。  
次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha list -key all
```

作成した論理ホスト環境が正しいことを確認してください。

### (4) 接続先 PFM - Manager の設定 実行系

jpccconf mgrhost define コマンドを実行して、PFM - Agent for OpenTP1 を管理する PFM - Manager を設定します。

1. jpccconf mgrhost define コマンドを実行して、接続先 PFM - Manager を設定する。  
次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf mgrhost define -host jp1-hal -lhost jp1-haltp1
```

接続先 PFM - Manager のホスト名は、-host オプションで指定します。接続先 PFM - Manager が論理ホスト運用されている場合は、-host オプションに接続先 PFM - Manager の論理ホスト名を指定します。ここでは、PFM - Manager の論理ホスト名を jp1-hal としています。

また、PFM - Agent for OpenTP1 の論理ホスト名は、-lhost オプションで指定します。ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 の論理ホスト名を jp1-haltp1 としています。

## (5) インスタンス環境の設定 実行系

jpccnf inst setup コマンドを実行して、PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス環境を設定します。

設定手順は、非クラスタシステムの場合と同じです。ただし、クラスタシステムの場合、jpccnf inst setup コマンドの実行時に、「-lhost」で論理ホスト名を指定する必要があります。

クラスタシステムの場合のjpccnf inst setup コマンドの指定方法を次に示します。

```
jpccnf inst setup -key OpenTP1 -lhost 論理ホスト名 -inst インスタンス名
```

このほかの設定内容、および手順については、「[3.4.3 インスタンス環境の設定](#)」を参照してください。

## (6) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ 実行系 オプション

PFM - Agent for OpenTP1 のほかに、同じ論理ホストにセットアップする PFM - Manager や PFM - Agent がある場合は、この段階でセットアップしてください。

セットアップ手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章、または各 PFM - Agent マニュアルの、クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

## (7) ネットワークの設定 実行系 オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合にだけ必要な設定です。

ネットワークの設定では次の 2 つの項目を設定できます。

### • IP アドレスを設定する

複数の LAN に接続されたネットワーク環境で Performance Management を運用する場合に使用する IP アドレスを指定したいときは、jpchosts ファイルの内容を直接編集します。

このとき、編集したjpchosts ファイルは、実行系ノードから待機系ノードにコピーしてください。

IP アドレスの設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

### • ポート番号を設定する

ファイアウォール経由で Performance Management のプログラム間の通信をする場合には、jpccnf port コマンドを使用してポート番号を設定します。

ポート番号の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章、およびクラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

## (8) ログのファイルサイズ変更 実行系 オプション

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。このファイルサイズを変更したい場合に必要の設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

## (9) パフォーマンスデータの格納先の変更 実行系 オプション

PFM - Agent で管理されるパフォーマンスデータを格納するデータベースの保存先、バックアップ先、エクスポート先、またはインポート先のフォルダを変更したい場合にだけ必要な設定です。

設定方法については、「3.4.6 パフォーマンスデータの格納先の変更」を参照してください。

## (10) 動作ログ出力の設定 実行系 オプション

アラーム発生時に動作ログを出力したい場合に必要の設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

設定方法については、「付録」動作ログの出力」を参照してください。

## (11) 論理HOST環境定義ファイルのエクスポート 実行系

PFM - Agent for OpenTP1 の論理HOST環境が作成できたら、環境定義をファイルにエクスポートします。エクスポートでは、その論理HOSTにセットアップされている Performance Management のプログラムの定義情報を一括してファイル出力します。同じ論理HOSTにはほかの Performance Management のプログラムをセットアップする場合は、セットアップが一とおり済んだあとにエクスポートしてください。

論理HOST環境定義をエクスポートする手順を次に示します。

### 1. jpcconf ha export コマンドを実行して、論理HOST環境定義をエクスポートする。

これまでの手順で作成した論理HOST環境の定義情報を、エクスポートファイルに出力します。エクスポートファイル名は任意です。

例えば、lhostexp.txt ファイルに論理HOST環境定義をエクスポートする場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpcconf ha export -f lhostexp.txt
```

## (12) 論理HOST環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー 実行系 待機系

「(11) 論理HOST環境定義ファイルのエクスポート」でエクスポートした論理HOST環境定義ファイルを、実行系ノードから待機系ノードにコピーします。



## (13) 共有ディスクのアンマウント 実行系 オプション

ファイルシステムをアンマウントして、作業を終了します。なお、その共有ディスクを続けて使用する場合は、ファイルシステムをアンマウントする必要はありません。

### 注意

共有ディスクがアンマウントされていても、指定した環境ディレクトリにjp1pc ディレクトリがあり、jp1pc ディレクトリ以下にファイルがある場合は、共有ディスクをマウントしないでセットアップしています。この場合は次の手順で対処してください。

1. ローカルディスク上の指定した環境ディレクトリにあるjp1pc ディレクトリをtar コマンドでアーカイブする。
2. 共有ディスクをマウントする。
3. 共有ディスク上に指定した環境ディレクトリがない場合は、環境ディレクトリを作成する。
4. 共有ディスク上の環境ディレクトリにtar ファイルを展開する。
5. 共有ディスクをアンマウントする。
6. ローカルディスク上の指定した環境ディレクトリにあるjp1pc ディレクトリ以下を削除する。

## (14) 論理ホスト環境定義ファイルのインポート 待機系

実行系ノードからコピーしたエクスポートファイルを、待機系ノードにインポートします。

実行系ノードで作成した論理ホストの Performance Management のプログラムを、待機系ノードで実行するための設定には、`jpccconf ha import` コマンドを使用します。1つの論理ホストに複数の Performance Management のプログラムがセットアップされている場合は、一括してインポートされます。

なお、このコマンドを実行するときには、共有ディスクをマウントしておく必要はありません。

1. `jpccconf ha import` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をインポートする。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha import -f lhostexp.txt
```

コマンドを実行すると、待機系ノードの環境を、エクスポートファイルの内容と同じ環境になるように設定変更します。これによって、論理ホストの PFM - Agent for OpenTP1 を起動するための設定が実施されます。

また、セットアップ時に `jpccconf port` コマンドで固定のポート番号を設定している場合も、同様に設定されます。

2. `jpccconf ha list` コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha list -key all
```

実行系ノードで `jpccconf ha list` を実行した時と同じ内容が表示されることを確認してください。

## (15) クラスタソフトへの PFM - Agent の登録 実行系

待機系

Performance Management のプログラムを論理ホスト環境で運用する場合は、クラスタソフトに登録して、クラスタソフトからの制御で Performance Management のプログラムを起動したり停止したりするように環境設定します。

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 をクラスタソフトに登録するときに設定する内容を説明します。

一般に UNIX のクラスタソフトに、アプリケーションを登録する場合に必要な項目は「起動」「停止」「動作監視」「強制停止」の 4 つがあります。

PFM - Agent for OpenTP1 での設定方法を次の表に示します。

表 4-5 クラスタソフトに登録する PFM - Agent for OpenTP1 の制御方法

項目	説明
起動	<p>次のコマンドを順に実行して、PFM - Agent for OpenTP1 を起動する。</p> <pre style="border: 1px solid black; padding: 5px;">/opt/jp1pc/tools/jpcspm start -key AH -lhost 論理ホスト名 /opt/jp1pc/tools/jpcspm start -key OpenTP1 -lhost 論理ホスト名 -inst インスタ ンス名</pre> <p>起動するタイミングは、共有ディスクおよび論理 IP アドレスが使用できる状態になったあととする。</p>
停止	<p>次のコマンドを順に実行して、PFM - Agent for OpenTP1 を停止する。</p> <pre style="border: 1px solid black; padding: 5px;">/opt/jp1pc/tools/jpcspm stop -key OpenTP1 -lhost 論理ホスト名 -inst インスタ ス名 /opt/jp1pc/tools/jpcspm stop -key AH -lhost 論理ホスト名</pre> <p>停止するタイミングは、共有ディスクおよび論理 IP アドレスを使用できない状態にする前とする。</p> <p>なお、障害などでサービスが停止しているときは、jpcspm stop コマンドの戻り値が 3 になる。この場合はサービスが停止されているので、正常終了と扱う。戻り値で実行結果を判定するクラスタソフトの場合は、戻り値を 0 にするなどに対応すること。</p>
動作監視	<p>次のプロセスが動作していることを、ps コマンドで確認する。</p> <pre style="border: 1px solid black; padding: 5px;">ps -ef   grep "プロセス名 論理ホスト名"   grep -v "grep 監視対象のプロセス"</pre> <p>監視対象のプロセスは、次のとおり。</p> <pre style="border: 1px solid black; padding: 5px;">jpcagth, agth/jpcsto, jpcah</pre> <p>プロセス名については、「付録 D プロセス一覧」およびマニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録を参照のこと。</p> <p>なお、運用中にメンテナンスなどで Performance Management を一時的に停止する場合を想定して、動作監視を抑止する方法（例えば、メンテナンス中のファイルがあると監視をしないなど）を用意しておくことを勧める。</p>
強制停止	<p>強制停止が必要な場合は、次のコマンドを実行する。</p> <pre style="border: 1px solid black; padding: 5px;">/opt/jp1pc/tools/jpcspm stop -key all -lhost 論理ホスト名 -kill immediate</pre> <p>第 1 引数のサービスキーに指定できるのは、all だけである。</p>

項目	説明
強制停止	<p><b>注意</b></p> <p>コマンドを実行すると、指定した論理ホスト環境すべての Performance Management のプロセスが、SIGKILL 送信によって強制停止される。このとき、サービス単位ではなく、論理ホスト単位で Performance Management が強制停止される。</p> <p>なお、強制停止は、通常の停止を実行しても停止できない場合に限って実行するよう設定すること。</p>

## 注意

- クラスタに登録する Performance Management のプログラムは、クラスタから起動および停止を制御しますので、OS 起動時の自動起動設定をしないでください。
- Performance Management のプログラムを日本語環境で実行する場合、クラスタソフトに登録するスクリプトで LANG 環境変数を設定してから、Performance Management のコマンドを実行するようにしてください。
- クラスタソフトがコマンドの戻り値で実行結果を判定する場合は、Performance Management のコマンドの戻り値をクラスタソフトの期待する値に変換するように設定してください。Performance Management のコマンドの戻り値については、各コマンドのリファレンスを確認してください。
- ps コマンドで動作を監視する場合、事前に ps コマンドを実行して、論理ホスト名とインスタンス名をつなげた文字列がすべて表示されることを確認してください。文字列が途中までしか表示されない場合は、インスタンス名を短くしてください。

## (16) クラスタソフトからの起動・停止の確認 実行系 待機系

クラスタソフトからの操作で、Performance Management のプログラムの起動および停止を各ノードで実行し、正常に動作することを確認してください。

## (17) クラスタシステムでの環境設定 実行系 待機系

Performance Management のプログラムのセットアップ終了後、PFM - Web Console から、運用に合わせて監視対象の稼働状況についてのレポートを表示できるようにしたり、監視対象で問題が発生したときにユーザーに通知できるようにしたりするために、Performance Management のプログラムの環境を設定します。

Performance Management のプログラムの環境設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

## 4.5 クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ (Windows の場合)

---

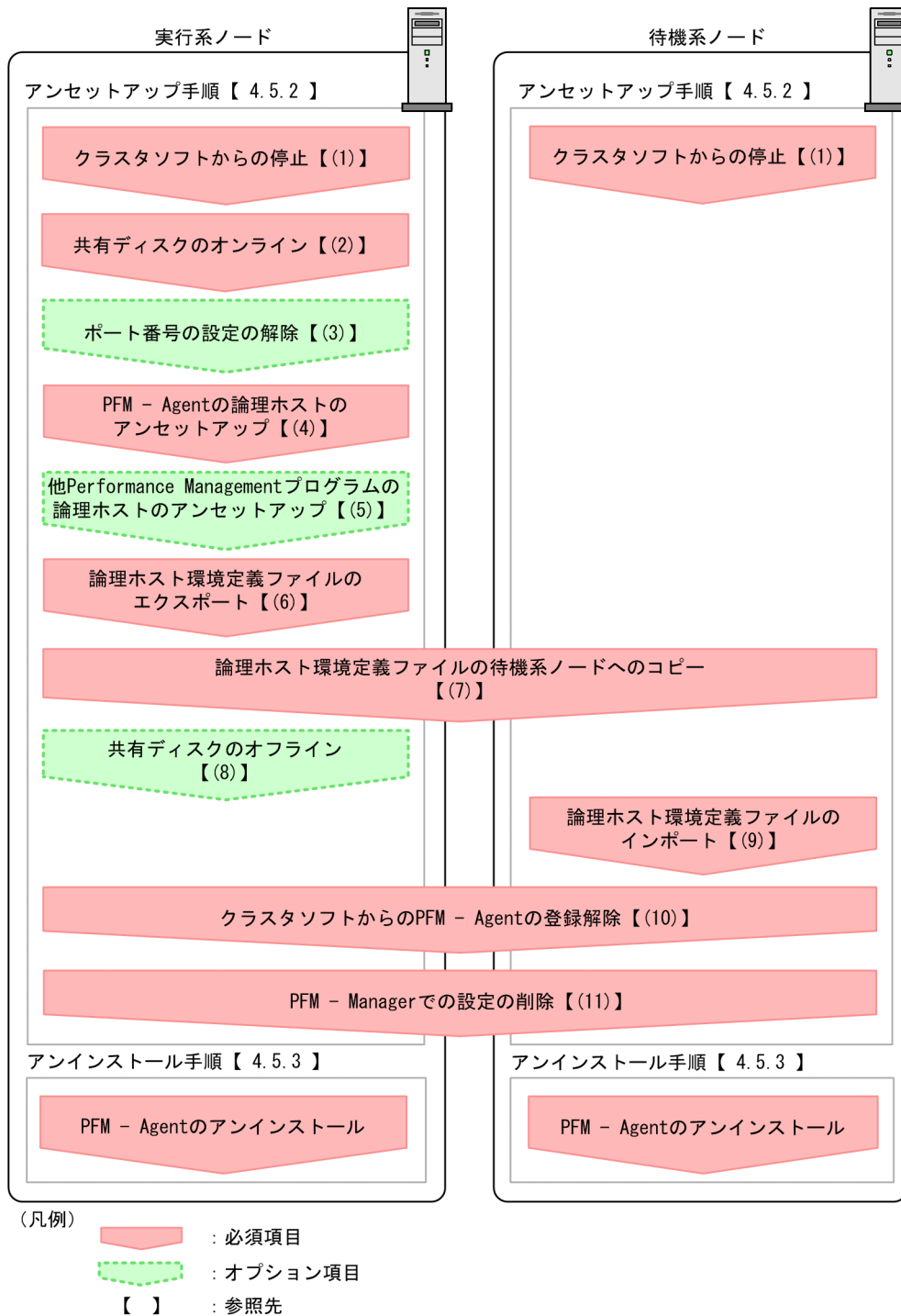
ここでは、クラスタシステムで運用していた PFM - Agent for OpenTP1 を、アンインストールする方法とアンセットアップする方法について説明します。

なお、PFM - Manager のアンインストールとアンセットアップについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

### 4.5.1 クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップの流れ (Windows の場合)

クラスタシステムで運用していた PFM - Agent for OpenTP1 のアンインストールおよびアンセットアップの流れを次の図に示します。

図 4-5 クラスタシステムで論理ホスト運用する PFM - Agent for OpenTP1 のアンインストールおよびアンセットアップの流れ (Windows の場合)



## 4.5.2 クラスタシステムでのアンセットアップ手順 (Windows の場合)

論理ホスト環境をアンセットアップします。アンセットアップ手順には、実行系ノードの手順と、待機系ノードの手順があります。実行系ノード、待機系ノードの順にアンセットアップしてください。

**実行系** は実行系ノードで行う項目を、**待機系** は待機系ノードで行う項目を示します。また、**オプション** は使用する環境によって必要になるアンセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのアンセットアップ項目を示します。

PFM - Agent for OpenTP1 のアンセットアップ手順について説明します。

## (1) クラスタソフトからの停止 **実行系** **待機系**

クラスタソフトからの操作で、実行系ノードと待機系ノードで起動している Performance Management のプログラムおよびサービスを停止してください。停止する方法については、クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

## (2) 共有ディスクのオンライン **実行系**

共有ディスクがオンラインになっていることを確認します。共有ディスクがオンラインになっていない場合は、クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをオンラインにしてください。

## (3) ポート番号の設定の解除 **実行系** **オプション**

この手順は、ファイアウォールを使用する環境で、セットアップ時に `jpccconf port` コマンドでポート番号を設定した場合にだけ必要な手順です。

ポート番号の解除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章、およびマニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

## (4) PFM - Agent の論理ホストのアンセットアップ **実行系**

手順を次に示します。

### 注意

共有ディスクがオフラインになっている状態で論理ホスト環境を削除した場合は、物理ホスト上に存在する論理ホストの設定だけが削除され、共有ディスク上のディレクトリやファイルは削除されません。この場合、共有ディスクをオンラインにし、環境ディレクトリ以下の `jp1pc` ディレクトリを手動で削除する必要があります。

### 1. `jpccconf ha list` コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha list -key all -lhost jp1-haltp1
```

論理ホスト環境をアンセットアップする前に、現在の設定を確認します。論理ホスト名や共有ディスクのパスなどを確認してください。

## 2. PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス環境を削除する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf inst unsetup -key OpenTP1 -lhost jp1-haltp1 -inst SDC1
```

jpccconf inst unsetup コマンドを実行すると、論理ホストのインスタンスを起動するための設定が削除されます。また、共有ディスク上のインスタンス用のファイルが削除されます。

## 3. jpccconf ha unsetup コマンドを実行して、PFM - Agent for OpenTP1 の論理ホスト環境を削除する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha unsetup -key OpenTP1 -lhost jp1-haltp1
```

jpccconf ha unsetup コマンドを実行すると、論理ホストの PFM - Agent for OpenTP1 を起動するための設定が削除されます。また、共有ディスク上の論理ホスト用のファイルが削除されます。

## 4. jpccconf ha list コマンドで、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha list -key all
```

論理ホスト環境から PFM - Agent for OpenTP1 が削除されていることを確認してください。

## (5) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのアンセットアップ 実行系 オプション

PFM - Agent for OpenTP1 のほかに、同じ論理ホストからアンセットアップする Performance Management プログラムがある場合は、この段階でアンセットアップしてください。

アンセットアップ手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章、または各 PFM - Agent マニュアルの、クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

## (6) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート 実行系

論理ホストの PFM - Agent for OpenTP1 を削除したら、環境定義をファイルにエクスポートします。

Performance Management では、環境定義のエクスポートおよびインポートによって実行系と待機系の環境を合わせる方式を採っています。

実行系ノードでエクスポートした環境定義（Performance Management の定義が削除されている）を、待機系ノードにインポートすると、待機系ノードの既存の環境定義（Performance Management の定義が削除前のままの状態）と比較して差分（実行系ノードで削除された部分）を確認して Performance Management の環境定義を削除します。

手順を次に示します。

1. `jpccconf ha export` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をエクスポートする。

Performance Management の論理ホスト環境の定義情報を、エクスポートファイルに出力します。エクスポートファイル名は任意です。

例えば、`lhostexp.txt` ファイルに論理ホスト環境定義をエクスポートする場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha export -f lhostexp.txt
```

## (7) 論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー 実行系 待機系

「(6) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート」でエクスポートしたファイルを、実行系ノードから待機系ノードにコピーします。

## (8) 共有ディスクのオフライン 実行系 オプション

クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをオフラインにして、作業を終了します。なお、その共有ディスクを続けて使用する場合は、オフラインにする必要はありません。

## (9) 論理ホスト環境定義ファイルのインポート 待機系

実行系ノードからコピーしたエクスポートファイルを、待機系ノードに反映させるためにインポートします。なお、待機系ノードでは、インポート時に共有ディスクをオフラインにする必要はありません。

手順を次に示します。

1. `jpccconf ha import` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をインポートする。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha import -f lhostexp.txt
```

コマンドを実行すると、待機系ノードの環境を、エクスポートファイルの内容と同じ環境になるように設定変更します。これによって、論理ホストの PFM - Agent for OpenTP1 を起動するための設定が削除されます。ほかの論理ホストの Performance Management のプログラムをアンセットアップしている場合は、それらの設定も削除されます。

また、セットアップ時に `jpccconf port` コマンドで固定のポート番号を設定している場合も、解除されます。

2. `jpccconf ha list` コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha list -key all
```

実行系ノードで `jpccconf ha list` コマンドを実行したときと同じ内容が表示されることを確認してください。



## (10) クラスタソフトからの PFM - Agent の登録解除 実行系 待機系

クラスタソフトから、論理ホストの PFM - Agent for OpenTP1 に関する設定を削除してください。

設定を削除する方法については、クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

## (11) PFM - Manager での設定の削除 実行系 待機系

PFM - Web Console で PFM - Manager にログインし、アンセットアップする PFM - Agent for OpenTP1 に関連する定義を削除してください。

手順を次に示します。

1. PFM - Web Console から、エージェントを削除する。

2. PFM - Manager のエージェント情報を削除する。

例えば、PFM - Manager が論理ホスト jp1-hal 上で動作し、PFM - Agent for OpenTP1 が論理ホスト jp1-haltp1 上で動作している場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpctool service delete -id サービスID -host jp1-haltp1 -lhost jp1-hal
```

サービス ID には削除するエージェントのサービス ID を指定してください。

3. PFM - Manager サービスを再起動する。

サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

4. PFM - Web Console を再起動する。

サービス情報の削除を PFM - Web Console で有効にするには、PFM - Manager サービスを再起動したあと、PFM - Web Console を再起動する必要があります。

### 4.5.3 クラスタシステムでのアンインストール手順 (Windows の場合)

PFM - Agent for OpenTP1 を実行系ノード、待機系ノードそれぞれからアンインストールします。

アンインストール手順は、非クラスタシステムの場合と同じです。詳細については、「2.5.4 アンインストール手順」を参照してください。

#### 注意

- PFM - Agent for OpenTP1 をアンインストールする場合は、PFM - Agent for OpenTP1 をアンインストールするノードの Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止してください。
- 論理ホスト環境を削除しないで PFM - Agent for OpenTP1 をアンインストールした場合、環境ディレクトリが残ることがあります。その場合は、環境ディレクトリを削除してください。

## 4.6 クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ (UNIX の場合)

---

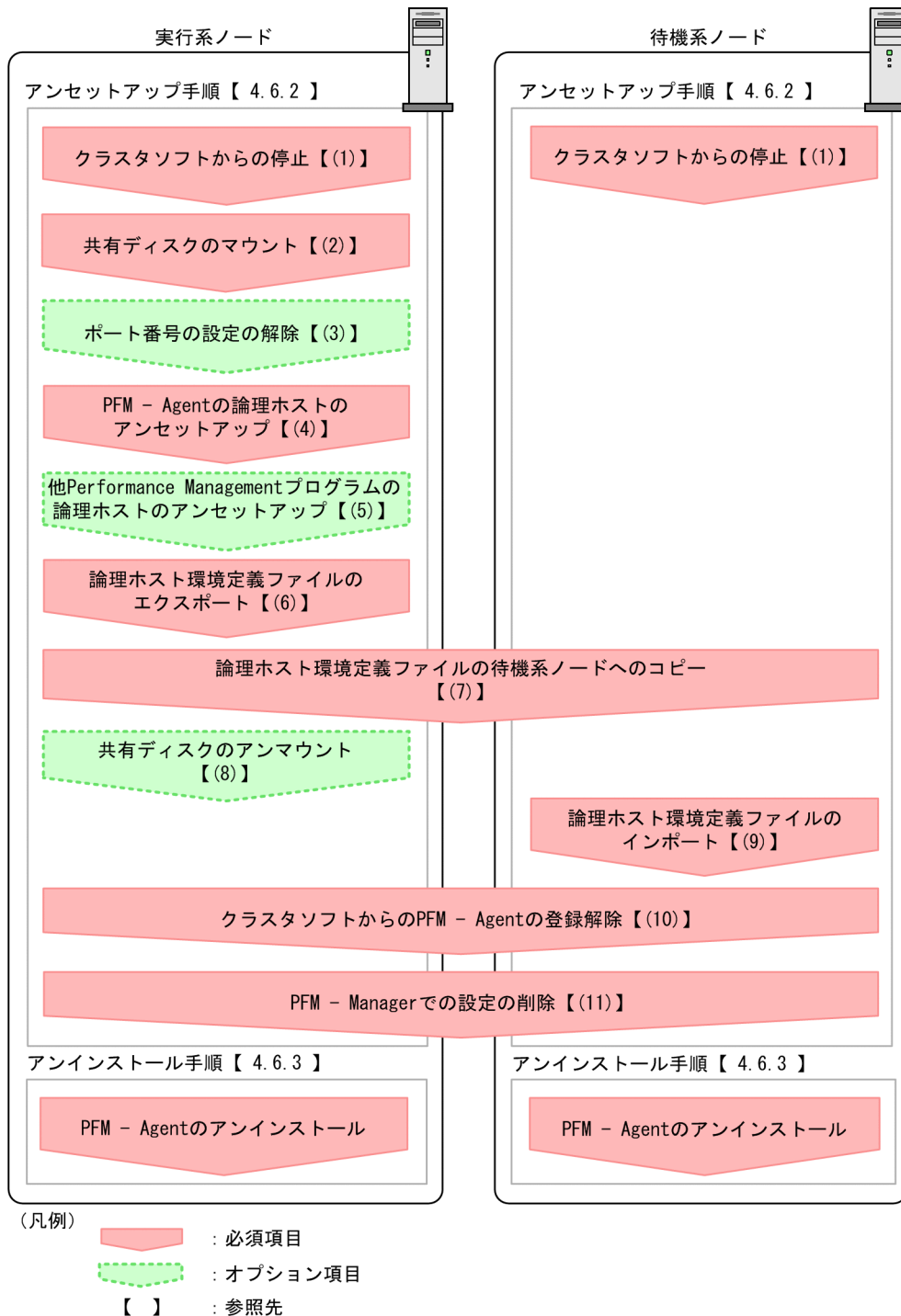
ここでは、クラスタシステムで運用していた PFM - Agent for OpenTP1 を、アンインストールする方法とアンセットアップする方法について説明します。

なお、PFM - Manager のアンインストールとアンセットアップについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

### 4.6.1 クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップの流れ (UNIX の場合)

クラスタシステムで運用していた PFM - Agent for OpenTP1 のアンインストールおよびアンセットアップの流れを次の図に示します。

図 4-6 クラスタシステムで論理ホスト運用する PFM - Agent for OpenTP1 のアンインストールおよびアンセットアップの流れ (UNIX の場合)



## 4.6.2 クラスタシステムでのアンセットアップ手順 (UNIX の場合)

論理ホスト環境をアンセットアップします。アンセットアップ手順には、実行系ノードの手順と、待機系ノードの手順があります。実行系ノード、待機系ノードの順にアンセットアップしてください。

**実行系** は実行系ノードで行う項目を、**待機系** は待機系ノードで行う項目を示します。また、**オプション** は使用する環境によって必要になるアンセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのアンセットアップ項目を示します。

PFM - Agent for OpenTP1 のアンセットアップ手順について説明します。

## (1) クラスタソフトからの停止 **実行系** **待機系**

クラスタソフトからの操作で、実行系ノードと待機系ノードで起動している Performance Management のプログラムおよびサービスを停止してください。停止する方法については、クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

## (2) 共有ディスクのマウント **実行系**

共有ディスクがマウントされていることを確認します。共有ディスクがマウントされていない場合は、クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをマウントしてください。

### 注意

共有ディスクがアンマウントされていても、アンセットアップする論理ホストの環境ディレクトリに `jp1pc` ディレクトリがあり、`jp1pc` ディレクトリ以下にファイルがある場合は、共有ディスクをマウントしないでセットアップしています。この場合は次の手順で対処してください。

1. ローカルディスク上のアンセットアップする論理ホストの環境ディレクトリにある `jp1pc` ディレクトリを `tar` コマンドでアーカイブする。
2. 共有ディスクをマウントする。
3. 共有ディスク上にアンセットアップする論理ホストの環境ディレクトリがない場合は、環境ディレクトリを作成する。
4. 共有ディスク上のアンセットアップする論理ホストの環境ディレクトリに `tar` ファイルを展開する。
5. 共有ディスクをアンマウントする。
6. ローカルディスク上のアンセットアップする論理ホストの環境ディレクトリにある `jp1pc` ディレクトリ以下を削除する。

## (3) ポート番号の設定の解除 **実行系** **オプション**

この手順は、ファイアウォールを使用する環境で、セットアップ時に `jpccconf port` コマンドでポート番号を設定した場合にだけ必要な手順です。

ポート番号の解除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章、およびクラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

## (4) PFM - Agent の論理ホストのアンセットアップ 実行系

手順を次に示します。

### 注意

共有ディスクがマウントされていない状態で論理ホスト環境を削除した場合は、物理ホスト上に存在する論理ホストの設定が削除され、共有ディスク上のディレクトリやファイルは削除されません。この場合、共有ディスクをマウントして、環境ディレクトリ以下の jplpc ディレクトリを手動で削除する必要があります。

#### 1. jpccconf ha list コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha list -key all -lhost jp1-haltp1
```

論理ホスト環境をアンセットアップする前に、現在の設定を確認します。論理ホスト名や共有ディスクのパスなどを確認してください。

#### 2. PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス環境を削除する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf inst unsetup -key OpenTP1 -lhost jp1-haltp1 -inst SDC1
```

jpccconf inst unsetup コマンドを実行すると、論理ホストのインスタンスを起動するための設定が削除されます。また、共有ディスク上のインスタンス用のファイルが削除されます。

#### 3. jpccconf ha unsetup コマンドを実行して、PFM - Agent for OpenTP1 の論理ホスト環境を削除する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha unsetup -key OpenTP1 -lhost jp1-haltp1
```

jpccconf ha unsetup コマンドを実行すると、論理ホストの PFM - Agent for OpenTP1 を起動するための設定が削除されます。また、共有ディスク上の論理ホスト用のファイルが削除されます。

#### 4. jpccconf ha list コマンドで、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha list -key all
```

論理ホスト環境から PFM - Agent for OpenTP1 が削除されていることを確認してください。

## (5) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのアンセットアップ 実行系 オプション

PFM - Agent for OpenTP1 のほかに、同じ論理ホストからアンセットアップする PFM - Agent がある場合は、この段階でアンセットアップしてください。

アンセットアップ手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章、または各 PFM - Agent マニュアルの、クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

## (6) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート 実行系

論理ホストの PFM - Agent for OpenTP1 を削除したら、環境定義をファイルにエクスポートします。

Performance Management では、環境定義のエクスポートおよびインポートによって実行系と待機系の環境を合わせる方式を採っています。

実行系ノードでエクスポートした環境定義（Performance Management の定義が削除されている）を、待機系ノードにインポートすると、待機系ノードの既存の環境定義（Performance Management の定義が削除前のままの状態）と比較して差分（実行系ノードで削除された部分）を確認して Performance Management の環境定義を削除します。

手順を次に示します。

1. `jpccconf ha export` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をエクスポートする。

Performance Management の論理ホスト環境の定義情報を、エクスポートファイルに出力します。エクスポートファイル名は任意です。

例えば、`lhostexp.txt` ファイルに論理ホスト環境定義をエクスポートする場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha export -f lhostexp.txt
```

## (7) 論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー 実行系 待機系

「(6) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート」でエクスポートしたファイルを、実行系ノードから待機系ノードにコピーします。

## (8) 共有ディスクのアンマウント 実行系 オプション

ファイルシステムをアンマウントして、作業を終了します。なお、その共有ディスクを続けて使用する場合は、ファイルシステムをアンマウントする必要はありません。

## (9) 論理ホスト環境定義ファイルのインポート 待機系

実行系ノードからコピーしたエクスポートファイルを、待機系ノードに反映させるためにインポートします。なお、待機系ノードでは、インポート時に共有ディスクをアンマウントする必要はありません。

手順を次に示します。

1. `jpccconf ha import` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をインポートする。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha import -f lhostexp.txt
```

コマンドを実行すると、待機系ノードの環境を、エクスポートファイルの内容と同じ環境になるように設定変更します。これによって、論理ホストの PFM - Agent for OpenTP1 を起動するための設定が削除されます。ほかの論理ホストの Performance Management のプログラムをアンセットアップしている場合は、それらの設定も削除されます。

また、セットアップ時に `jpccconf port` コマンドで固定のポート番号を設定している場合も、解除されます。

## 2. `jpccconf ha list` コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha list -key all
```

実行系ノードで `jpccconf ha list` コマンドを実行したときと同じ内容が表示されることを確認してください。

## (10) クラスタソフトからの PFM - Agent の登録解除 実行系 待機系

クラスタソフトから、論理ホストの PFM - Agent for OpenTP1 に関する設定を削除してください。

設定を削除する方法については、クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

## (11) PFM - Manager での設定の削除 実行系 待機系

PFM - Web Console で PFM - Manager にログインし、アンセットアップする PFM - Agent for OpenTP1 に関連する定義を削除してください。

手順を次に示します。

### 1. PFM - Web Console から、エージェントを削除する。

### 2. PFM - Manager のエージェント情報を削除する。

例えば、PFM - Manager が論理ホスト `jp1-hal` 上で動作し、PFM - Agent for OpenTP1 が論理ホスト `jp1-haltp1` 上で動作している場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpctool service delete -id サービスID -host jp1-haltp1 -lhost jp1-hal
```

サービス ID には削除するエージェントのサービス ID を指定してください。

### 3. PFM - Manager サービスを再起動する。

サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

### 4. PFM - Web Console を再起動する。

サービス情報の削除を PFM - Web Console で有効にするには、PFM - Manager サービスを再起動したあと、PFM - Web Console を再起動する必要があります。

### 4.6.3 クラスタシステムでのアンインストール手順 (UNIX の場合)

PFM - Agent for OpenTP1 を実行系ノード、待機系ノードそれぞれからアンインストールします。

アンインストール手順は、非クラスタシステムの場合と同じです。詳細は、「3.5.4 アンインストール手順」を参照してください。

#### 注意

- PFM - Agent for OpenTP1 をアンインストールする場合は、PFM - Agent for OpenTP1 をアンインストールするノードの Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止してください。
- 論理ホスト環境を削除しないで PFM - Agent for OpenTP1 をアンインストールした場合、環境ディレクトリが残ることがあります。その場合は、環境ディレクトリを削除してください。



## 4.7 PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成の変更

---

監視対象システムのネットワーク構成の変更や、ホスト名の変更などに応じて、PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成を変更する場合があります。

PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成を変更する場合、PFM - Manager や PFM - Web Console の設定変更もあわせて行う必要があります。Performance Management のシステム構成を変更する手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。なお、論理ホスト名を変更するとき、固有の追加作業が必要な PFM - Agent もありますが、PFM - Agent for OpenTP1 の場合、固有の追加作業は必要ありません。

## 4.8 クラスタシステムでの PFM - Agent for OpenTP1 の運用方式の変更

ここでは、クラスタシステムで PFM - Agent for OpenTP1 の運用方式を変更する手順を説明します。Performance Management 全体の運用方式を変更する手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

### 4.8.1 クラスタシステムでのインスタンス環境の更新の設定

クラスタシステムでインスタンス環境を更新したい場合は、論理ホスト名とインスタンス名を確認し、インスタンス情報を更新します。インスタンス情報の設定は、実行系ノードの PFM - Agent ホストで実施します。

更新する情報については、Windows の場合は「[2.7.2 インスタンス環境の更新の設定](#)」、UNIX の場合は「[3.7.2 インスタンス環境の更新の設定](#)」を参照して、あらかじめ確認してください。OpenTP1 のインスタンス情報の詳細については、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」の環境設定の説明を参照してください。

論理ホスト名とインスタンス名を確認するには、`jpccconf ha list` コマンドを使用します。また、インスタンス環境を更新するには、`jpccconf inst setup` コマンドを使用します。

インスタンス環境を更新する手順を次に示します。複数のインスタンス環境を更新する場合は、この手順を繰り返し実施します。

#### 1. 論理ホスト名とインスタンス名を確認する。

更新したいインスタンス環境で動作している PFM - Agent for OpenTP1 を示すサービスキーを指定して、`jpccconf ha list` コマンドを実行します。

例えば、PFM - Agent for OpenTP1 の論理ホスト名とインスタンス名を確認したい場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf ha list -key OpenTP1
```

#### 2. 更新したいインスタンス環境の PFM - Agent for OpenTP1 のサービスが起動されている場合は、クラスタソフトからサービスを停止する。

#### 3. 手順 2 で共有ディスクがアンマウントされる場合は、クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをマウントする。

#### 4. 更新したいインスタンス環境の PFM - Agent for OpenTP1 を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpccconf inst setup` コマンドを実行する。

例えば、PFM - Agent for OpenTP1 の論理ホスト名が `jp1-haltp1`、インスタンス名が `SDC1` のインスタンス環境を更新する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst setup -key OpenTP1 -lhost jp1-haltp1 -inst SDC1
```

## 5. OpenTP1 のインスタンス情報を更新する。

PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス情報を、コマンドの指示に従って入力します。PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス情報については、Windows の場合は「[2.7.2 インスタンス環境の更新の設定](#)」、UNIX の場合は「[3.7.2 インスタンス環境の更新の設定](#)」を参照してください。現在設定されている値が表示されます。表示された値を変更しない場合は、リターンキーだけを押してください。すべての入力終了すると、インスタンス環境が更新されます。

## 6. 更新したインスタンス環境のサービスを、クラスタソフトから再起動する。

サービスの起動方法および停止方法については、マニュアル「[JP1/Performance Management 運用ガイド](#)」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

### 注意

更新できない項目の値を変更したい場合は、インスタンス環境を削除したあと、再作成してください。

コマンドについては、マニュアル「[JP1/Performance Management リファレンス](#)」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

## 4.8.2 クラスタシステムでの論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポート

論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポートは、次の操作を実行した場合だけ実施します。

- 論理ホストのセットアップ、またはインスタンス環境の設定時に、論理ホスト上のノード構成を変更した。

PFM - Agent の論理ホストのセットアップ方法については、次の個所を参照してください。

- Windows の場合：「[4.3.4\(3\) PFM - Agent の論理ホストのセットアップ](#)」
- UNIX の場合：「[4.4.4\(3\) PFM - Agent の論理ホストのセットアップ](#)」

また、インスタンス環境の設定方法については、次の個所を参照してください。

- Windows の場合：「[4.3.4\(5\) インスタンス環境の設定](#)」
- UNIX の場合：「[4.4.4\(5\) インスタンス環境の設定](#)」
- 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ時に、論理ホスト環境定義ファイルのエクスポートが必要な操作を実行した。

他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ方法については、次の個所を参照してください。

- Windows の場合：「[4.3.4\(6\) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ](#)」
- UNIX の場合：「[4.4.4\(6\) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ](#)」
- ネットワークの設定時に、ポート番号を設定した。

ネットワークの設定方法については、次の個所を参照してください。

- Windows の場合：「[4.3.4\(7\) ネットワークの設定](#)」
- UNIX の場合：「[4.4.4\(7\) ネットワークの設定](#)」

論理HOST環境定義ファイルのエクスポート・インポートの手順については次の個所を参照してください。

- Windows の場合：「[4.3.4\(11\) 論理HOST環境定義ファイルのエクスポート](#)」～「[4.3.4\(14\) 論理HOST環境定義ファイルのインポート](#)」
- UNIX の場合：「[4.4.4\(11\) 論理HOST環境定義ファイルのエクスポート](#)」～「[4.4.4\(14\) 論理HOST環境定義ファイルのインポート](#)」

なお、インスタンス環境の更新だけを実施した場合は、論理HOST環境定義ファイルのエクスポート・インポートは不要です。

インスタンス環境の更新方法については、「[4.8.1 クラスタシステムでのインスタンス環境の更新の設定](#)」を参照してください。

# 5

## 監視テンプレート

この章では、PFM - Agent for OpenTP1 の監視テンプレートについて説明します。

## 監視テンプレートの概要

---

Performance Management では、次の方法でアラームとレポートを定義できます。

- PFM - Agent で定義されているアラームやレポートをそのまま使用する
- PFM - Agent で定義されているアラームやレポートをコピーしてカスタマイズする
- ウィザードを使用して新規に定義する

PFM - Agent で用意されているアラームやレポートを「監視テンプレート」と呼びます。監視テンプレートのレポートとアラームは、必要な情報があらかじめ定義されているので、コピーしてそのまま使用したり、ユーザーの環境に合わせてカスタマイズしたりできます。ウィザードを使用して新規に定義をしなくてもよいので、監視対象の運用状況を監視する準備が容易になります。

この章では、PFM - Agent for OpenTP1 で定義されている監視テンプレートのアラームとレポートの設定内容について説明します。

監視テンプレートの使用方法の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成またはアラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

## アラームの記載形式

---

ここでは、アラームの記載形式を示します。アラームは、アルファベット順に記載しています。記載形式を次に示します。

### アラーム名

監視テンプレートのアラーム名を示します。

### 概要

このアラームで監視できる監視対象の概要について説明します。

### 主な設定

このアラームの主な設定値を表で説明します。この表では、アラームの設定値と、PFM - Web Console の [アラーム階層] 画面でアラームアイコンをクリックし、[プロパティの表示] メソッドをクリックしたときに表示される [プロパティ] 画面の設定項目との対応を示しています。各アラームの設定の詳細については、PFM - Web Console のアラームの [プロパティ] 画面で確認してください。

設定値の「-」は、設定が常に無効であることを示します。

なお、条件式で異常条件と警告条件が同じ場合は、アラームイベントは異常条件のものだけが発行されます。

### 関連レポート

このアラームに関連する、監視テンプレートのレポートを示します。PFM - Web Console の [エージェント階層] 画面でエージェントアイコンをクリックし、[アラームの状態の表示] メソッドで表示される



アイコンをクリックすると、このレポートを表示できます。

## アラーム一覧

1つ以上のアラームを1つのテーブルにまとめたものを「アラームテーブル」と呼びます。PFM - Agent for OpenTP1 の監視テンプレートで定義されているアラームは、アラームテーブルの形式で、PFM - Web Console の [アラーム階層] タブに表示される「OpenTP1」フォルダに格納されています。

アラームテーブル名を次に示します。

- 「PFM OpenTP1 Template Alarms 09.00」

### アラームテーブル名末尾の「09.00」

アラームテーブルのバージョンを示します。

監視テンプレートで定義されているアラームを次の表に示します。

表 5-1 アラーム一覧

アラーム名	監視対象
Rcv Msg Count	受信メッセージ数を監視する。
Rollbacks	トランザクションのロールバック決着回数を監視する。
RPC Time Out	RPC タイムアウトが発生した回数を監視する。
RTS Branch Time	トランザクションの同期点処理が完了するまでの実時間を監視する（サービス単位）。
RTS JNL Write Time	ジャーナルの出力時間を監視する。
RTS Rollbacks	トランザクションのロールバック決着回数を監視する（サービス単位）。
RTS RPC Time Out	RPC タイムアウトの発生件数を監視する（サービス単位）。
RTS SCD Stay Time	サービス要求のスケジュールキュー滞留時間を監視する（サーバ単位）。
RTS SCD Waits	スケジュールキューに滞留したサービス要求数を監視する（サーバ単位）。
RTS Svc Time	ユーザーサービスの実行時間を監視する（サービス単位）。
RTS UAP Terminates	UAP が異常終了した回数を監視する（サーバ単位）。
UAP Terminates	UAP が異常終了した回数を監視する。



# Rcv Msg Count

## 概要

Rcv Msg Count アラームは、MCF サービスグループの受信メッセージ数を監視します。

## 主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する。	なし
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	MCF Service Group Status (PD_MCFG)
	フィールド	Rcv Msg Count
	異常条件	Rcv Msg Count > 100
	警告条件	Rcv Msg Count > 50
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常

## 関連レポート

OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/MCF Service Group Detail (5.0)

# Rollbacks

## 概要

Rollbacks アラームは、トランザクションのロールバック決着回数を監視します。

## 主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する。	なし
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	System Summary (PI)
	フィールド	Rollbacks
	異常条件	Rollbacks > 2
	警告条件	Rollbacks > 1
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常

## 関連レポート

Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/Message Log

# RPC Time Out

## 概要

RPC Time Out アラームは、RPC タイムアウトが発生した回数を監視します。

## 主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する。	なし
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	System Summary (PI)
	フィールド	RPC Timeouts
	異常条件	RPC Timeouts > 50
	警告条件	RPC Timeouts > 10
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常

## 関連レポート

Reports/OpenTPI/Troubleshooting/Real-Time/Schedule Detail

# RTS Branch Time

## 概要

RTS Branch Time アラームは、トランザクションの同期点処理が完了するまでの実時間を監視します。

## 主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する。	なし
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	RTS Summary (PI_RTSS)
	フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name, Average
	異常条件	Event ID = 1906 AND Sv Name = "basespp"※1 AND Svc Name = "update"※2 AND Average ≥ 2,000,000
	警告条件	Event ID = 1906 AND Sv Name = "basespp"※1 AND Svc Name = "update"※2 AND Average ≥ 1,000,000
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常

### 注※1

ご使用の環境の監視対象のサーバ名に変更してください。

### 注※2

ご使用の環境の監視対象のサービス名に変更してください。

## 関連レポート

OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/Transaction Detail

# RTS JNL Write Time

## 概要

RTS JNL Write Time アラームは、ジャーナルの出力時間を監視します。なお、このアラームは、次に示す場合には使用できません。

- 監視対象が TP1/Server Base で、かつバージョンが 07-01 より古いとき
- 監視対象が TP1/LiNK のとき

## 主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する。	なし
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	RTS Summary (PI_RTSS)
	フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name, Average
	異常条件	Event ID = 1104 AND Sv Name = "_SYSTEM" AND Svc Name = "_SYSTEM ONLY" AND Average $\geq$ 2,000,000
	警告条件	Event ID = 1104 AND Sv Name = "_SYSTEM" AND Svc Name = "_SYSTEM ONLY" AND Average $\geq$ 1,000,000
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常

## 関連レポート

OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/Journal Detail

# RTS Rollbacks

## 概要

RTS Rollbacks アラームは、トランザクションのロールバック決着回数を監視します。

## 主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する。	なし
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	RTS Summary (PI_RTSS)
	フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name, Counts
	異常条件	Event ID = 1901 AND Sv Name = "basespp"*1 AND Svc Name = "update"*2 AND Counts ≥ 2
	警告条件	Event ID = 1901 AND Sv Name = "basespp"*1 AND Svc Name = "update"*2 AND Counts ≥ 1
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常

### 注※1

ご使用の環境の監視対象のサーバ名に変更してください。

### 注※2

ご使用の環境の監視対象のサービス名に変更してください。

## 関連レポート

OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/Message Log

# RTS RPC Time Out

## 概要

RTS RPC Time Out アラームは、RPC タイムアウトの発生件数を監視します。

## 主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する。	なし
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	RTS Summary (PI_RTSS)
	フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name, Counts
	異常条件	Event ID = 1731 AND Sv Name = "basespp"* <sup>1</sup> AND Svc Name = "update"* <sup>2</sup> AND Counts ≥ 50
	警告条件	Event ID = 1731 AND Sv Name = "basespp"* <sup>1</sup> AND Svc Name = "update"* <sup>2</sup> AND Counts ≥ 10
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常

### 注※1

ご使用の環境の監視対象のサーバ名に変更してください。

### 注※2

ご使用の環境の監視対象のサービス名に変更してください。

## 関連レポート

OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/Schedule Detail

# RTS SCD Stay Time

## 概要

RTS SCD Stay Time アラームは、サービス要求のスケジュールキュー滞留時間を監視します。

## 主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する。	なし
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	RTS Summary(PI_RTSS)
	フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name, Average
	異常条件	Event ID = 1804 AND Sv Name = "basespp"※ AND Svc Name = "_SERVER ONLY" AND Average ≥ 2,000,000
	警告条件	Event ID = 1804 AND Sv Name = "basespp"※ AND Svc Name = "_SERVER ONLY" AND Average ≥ 1,000,000
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常

### 注※

ご使用の環境の監視対象のサーバ名に変更してください。

## 関連レポート

OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/Schedule Detail



# RTS SCD Waits

## 概要

RTS SCD Waits アラームは、スケジュールキューに滞留したサービス要求数を監視します。

## 主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する。	なし
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	RTS Summary (PI_RTSS)
	フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name, Average
	異常条件	Event ID = 1800 AND Sv Name = "basespp"※ AND Svc Name = "_SERVER ONLY" AND Average ≥ 600
	警告条件	Event ID = 1800 AND Sv Name = "basespp"※ AND Svc Name = "_SERVER ONLY" AND Average ≥ 400
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常

### 注※

ご使用の環境の監視対象のサーバ名に変更してください。

## 関連レポート

OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/Schedule Detail

# RTS Svc Time

## 概要

RTS Svc Time アラームは、ユーザーサービス実行時間を監視します。

## 主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する。	なし
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	RTS Summary (PI_RTSS)
	フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name, Average
	異常条件	Event ID = 1730 AND Sv Name = "basespp"*1 AND Svc Name = "update"*2 AND Average $\geq$ 2,000,000
	警告条件	Event ID = 1730 AND Sv Name = "basespp"*1 AND Svc Name = "update"*2 AND Average $\geq$ 1,000,000
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常

### 注※1

ご使用の環境の監視対象のサーバ名に変更してください。

### 注※2

ご使用の環境の監視対象のサービス名に変更してください。

## 関連レポート

OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/Schedule Detail

# RTS UAP Terminates

## 概要

RTS UAP Terminates アラームは、UAP が異常終了した回数を監視します。

## 主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する。	なし
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	RTS Summary (PI_RTSS)
	フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name, Counts
	異常条件	Event ID = 1501 AND Sv Name = "basespp"※ AND Svc Name = "_SERVER ONLY" AND Counts ≥ 3
	警告条件	Event ID = 1501 AND Sv Name = "basespp"※ AND Svc Name = "_SERVER ONLY" AND Counts ≥ 2
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常

### 注※

ご使用の環境の監視対象のサーバ名に変更してください。

## 関連レポート

OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/Message Log

# UAP Terminates

## 概要

UAP Terminates アラームは、UAP が異常終了した回数を監視します。

## 主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	アラーム通知	状態が変化した時に通知する
	通知対象	アラームの状態変化
	すべてのデータを評価する	しない
	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する。	なし
	回しきい値超過	2
	インターバル中	3
アラーム条件式	レコード	System Summary (PI)
	フィールド	UAP Terminations
	異常条件	UAP Terminations > 3
	警告条件	UAP Terminations > 2
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常

## 関連レポート

Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/Message Log

## レポートの記載形式

---

ここでは、レポートの記載形式を示します。レポートは、アルファベット順に記載しています。記載形式を次に示します。

### レポート名

監視テンプレートのレポート名を示します。

### 概要

このレポートで表示できる情報の概要について説明します。

### 格納先

このレポートの格納先を示します。

### レコード

このレポートで使用するパフォーマンスデータが、格納されているレコードを示します。履歴レポートを表示するためには、この欄に示すレコードを収集するように、あらかじめ設定しておく必要があります。レポートを表示する前に、PFM - Web Console の [エージェント階層] 画面でエージェントのプロパティを表示して、このレコードが「Log = Yes」に設定されているか確認してください。リアルタイムレポートの場合、設定する必要はありません。

### フィールド

このレポートで使用するレコードのフィールドについて、表で説明します。

### ドリルダウンレポート (レポートレベル)

このレポートに関連づけられた、監視テンプレートのレポートを表で説明します。このドリルダウンレポートを表示するには、PFM - Web Console のレポートウィンドウのドリルダウンレポートプルダウンメニューから、該当するドリルダウンレポート名を選択し、[レポートの表示] をクリックしてください。なお、レポートによってドリルダウンレポートを持つものと持たないものがあります。

### ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

このレポートのフィールドに関連づけられた、監視テンプレートのレポートを表で説明します。このドリルダウンレポートを表示するには、PFM - Web Console のレポートウィンドウのグラフ、一覧、または表をクリックしてください。履歴レポートの場合、時間項目からドリルダウンレポートを表示することで、より詳細な時間間隔でレポートを表示できます。なお、レポートによってドリルダウンレポートを持つものと持たないものがあります。

## レポートのフォルダ構成

PFM - Agent for OpenTP1 の監視テンプレートで定義されているレポートは、PFM - WebConsole の [レポート階層] 画面に表示される「OpenTP1」フォルダに格納されます。「OpenTP1」フォルダには、次のフォルダがあります。

```
<OpenTP1>
+-- <Monthly Trend>
|   +-- Process Trend
|   +-- RPC Trend
|   +-- Schedule Trend
|   +-- Transaction Trend
|   +--<Advanced>
|       +--RTS Process Trend(5.2)
|       +--RTS RPC Trend(5.2)
|       +--RTS Schedule Trend(5.2)
|       +--RTS Transaction Trend(5.2)
+-- <Status Reporting>
|   +-- <Daily Trend>
|       +-- Checkpoint Dump Status
|       +-- Journal Status
|       +-- Lock Status
|       +-- Name Status
|       +-- Process Status
|       +-- RPC Status
|       +-- Schedule Status
|       +-- Shared Memory Status
|       +-- Transaction Status
|       +--<Advanced>
|           +--DAM Status
|           +--MCF Status(5.0)
|           +--RTS Checkpoint Dump Status(5.2)
|           +--RTS DAM Status(5.2)
|           +--RTS Journal Status(5.2)
|           +--RTS Lock Status(5.2)
|           +--RTS Name Status(5.2)
|           +--RTS Process Status(5.2)
|           +--RTS RPC Status(5.2)
|           +--RTS Schedule Status(5.2)
|           +--RTS Shared Memory Status(5.2)
|           +--RTS TAM Status(5.2)
|           +--RTS Transaction Status(5.2)
|           +--TAM Status
+-- <Troubleshooting>
|   +-- <Real-Time>
|       +-- Checkpoint Dump Detail
|       +-- DAM File Detail
|       +-- Journal Detail
|       +-- Lock Detail
|       +-- MCF Connection Detail(5.0)
|       +-- MCF Logical Terminal Detail(5.0)
|       +-- MCF Service Group Detail(5.0)
|       +-- Message Log
|       +-- Process Detail
|       +-- Schedule Detail
```

+-- Shared Memory Detail  
+-- TAM Table Detail  
+-- Transaction Detail

各フォルダの説明を次に示します。

- 「Monthly Trend」フォルダ  
最近 1 か月間の 1 日ごとに集計された情報を表示するレポートが格納されています。1 か月のシステムの傾向を分析するために使用します。
- 「Status Reporting」フォルダ  
日、または週ごとに集計された情報を表示するレポートが格納されています。システムの総合的な状態を見るために使用します。また、履歴レポートのほかにリアルタイムレポートの表示もできます。
  - 「Daily Trend」フォルダ  
最近 24 時間の 1 時間ごとに集計された情報を表示するレポートが格納されています。1 日ごとにシステムの状態を確認するために使用します。
- 「Troubleshooting」フォルダ  
トラブルを解決するのに役立つ情報を表示するレポートが格納されています。システムに問題が発生した場合、問題の原因を調査するために使用します。
  - 「Real-Time」フォルダ  
現在のシステムの状態を確認するためのリアルタイムレポートが格納されています。
- 「Advanced」フォルダ  
デフォルトで「Log = No」に設定されているレコードを使用しているレポートが格納されています。このフォルダのレポートを表示するには、使用しているレコードの設定を PFM - Web Console で「Log = Yes」にする必要があります。

## レポート一覧

監視テンプレートで定義されているレポートをカテゴリ別に次の表に示します。

表 5-2 レポート一覧

カテゴリ		レポート名	表示する情報	格納先
プロセス	履歴 (日単位)	Process Trend	OpenTP1 で発生したプロセスの、最近 1 か月間の 1 日ごとのプロセス数について履歴情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Monthly Trend/
	履歴 (時単位)	Process Status	OpenTP1 で発生したプロセスの、最近 1 日間の 1 時間ごとの実行状況について履歴情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/
	リアルタイム	Process Detail	ある時点での OpenTP1 管理下のプロセスについてリアルタイム情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/
RPC コール	履歴 (日単位)	RPC Trend	OpenTP1 で発行される RPC の、最近 1 か月間の 1 日ごとの応答時間について履歴情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Monthly Trend/
	履歴 (時単位)	RPC Status	OpenTP1 で発生した RPC の、最近 1 日間の 1 時間ごとの実行状況について履歴情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/
スケジュール	履歴 (日単位)	Schedule Trend	OpenTP1 で発生したスケジュール待ち状況について最近 1 か月間の 1 日ごとの履歴情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Monthly Trend/
	履歴 (時単位)	Schedule Status	OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとのスケジュール発生状況について履歴情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/
	リアルタイム	Schedule Detail	ある時点での OpenTP1 スケジュールサービスのサーバごとのスケジュール状況につ	Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/



カテゴリー		レポート名	表示する情報	格納先
スケジュール	リアルタイム	Schedule Detail	いてリアルタイム情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/
トランザクション	履歴（日単位）	Transaction Trend	OpenTP1 で発生したトランザクションの、最近 1 か月間の 1 日ごとの実行数について履歴情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Monthly Trend/
	履歴（時単位）	Transaction Status	OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとのトランザクション実行状況について履歴情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/
	リアルタイム	Transaction Detail	トランザクションマネージャが管理しているトランザクションについて、ある時点での最近 1 日間の 1 時間ごとのリアルタイム情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/
ジャーナル	履歴（時単位）	Journal Status	OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとのジャーナル取得状況について履歴情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/
	リアルタイム	Journal Detail	ある時点でのジャーナル取得状況についてのリアルタイム情報を表示する。 監視対象が TP1/LiNK の場合は使用できない。	Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/
チェックポイントダンプ	履歴（時単位）	Checkpoint Dump Status	OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとのチェックポイントダンプ取得状況について履歴情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/
	リアルタイム	Checkpoint Dump Detail	ある時点でのチェックポイントダンプについてリアルタイム情報を表示する。 監視対象が TP1/LiNK の場合は使用できない。	Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/
ロック	履歴（時単位）	Lock Status	OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとの排	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/

カテゴリー		レポート名	表示する情報	格納先
ロック	履歴（時単位）	Lock Status	他制御状況について履歴情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/
	リアルタイム	Lock Detail	ある時点での排他制御についてのリアルタイム情報を表示する。 監視対象が TP1/LiNK の場合は使用できない。	Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/
ネーム	履歴（時単位）	Name Status	OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとのネームサービス状況について履歴情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/
共用メモリー	履歴（時単位）	Shared Memory Status	OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとの共用メモリー使用状況について履歴情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/
	リアルタイム	Shared Memory Detail	共用メモリー使用状況についてリアルタイム情報を表示する。 監視対象が TP1/LiNK の場合は使用できない。	Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/
メッセージログ	リアルタイム	Message Log	最近 1 時間以内の OpenTP1 出力メッセージについての情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/
DAM	履歴（時単位）	DAM Status	OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとの DAM ファイルアクセス状況について履歴情報を表示する。 監視対象が TP1/LiNK の場合は使用できない。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
	リアルタイム	DAM File Detail	ある時点での DAM ファイルのリアルタイム情報を表示する。 監視対象が TP1/LiNK の場合は使用できない。	Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/
RTS	履歴（日単位）	RTS Process Trend (5.2)	最近 1 か月間の 1 日ごとのプロセス数について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示する。	Reports/OpenTP1/Monthly Trend/Advanced/

カテゴリー		レポート名	表示する情報	格納先
RTS	履歴（日単位）	RTS RPC Trend (5.2)	最近 1 か月間の 1 日ごとの RPC 処理時間について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示する。	Reports/OpenTP1/Monthly Trend/Advanced/
	履歴（日単位）	RTS Schedule Trend (5.2)	最近 1 か月間の 1 日ごとのユーザーサーバのスケジュールキューに滞留したサービス要求数について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示する。	Reports/OpenTP1/Monthly Trend/Advanced/
	履歴（日単位）	RTS Transaction Trend (5.2)	最近 1 か月間の 1 日ごとの同期点処理が完了するまでの実時間について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示する。	Reports/OpenTP1/Monthly Trend/Advanced/
	履歴（時単位）	RTS Checkpoint Dump Status (5.2)	最近 1 日間の 1 時間ごとのチェックポイントダンプ取得状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示する。 監視対象が TP1/LiNK の場合は使用できない。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
	履歴（時単位）	RTS DAM Status (5.2)	最近 1 日間の 1 時間ごとの DAM ファイルアクセス状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示する。 監視対象が TP1/LiNK の場合は使用できない。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
	履歴（時単位）	RTS Journal Status (5.2)	最近 1 日間の 1 時間ごとのジャーナル取得状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示する。 監視対象が TP1/LiNK の場合は使用できない。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
	履歴（時単位）	RTS Lock Status (5.2)	最近 1 日間の 1 時間ごとの排他制御状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示する。 監視対象が TP1/LiNK の場合は使用できない。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

カテゴリー		レポート名	表示する情報	格納先
RTS	履歴（時単位）	RTS Name Status (5.2)	最近1日間の1時間ごとのネームサービス状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示する。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
	履歴（時単位）	RTS Process Status (5.2)	最近1日間の1時間ごとのプロセス状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示する。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
	履歴（時単位）	RTS RPC Status (5.2)	最近1日間の1時間ごとのRPC実行状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示する。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
	履歴（時単位）	RTS Schedule Status (5.2)	最近1日間の1時間ごとのスケジュール状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示する。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
	履歴（時単位）	RTS Shared Memory Status (5.2)	最近1日間の1時間ごとの共用メモリー使用状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示する。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
	履歴（時単位）	RTS TAM Status (5.2)	最近1日間の1時間ごとのTAMファイルアクセス状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示する。 監視対象がTP1/LiNKの場合は使用できない。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
	履歴（時単位）	RTS Transaction Status (5.2)	最近1日間の1時間ごとのトランザクション状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示する。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
TAM	履歴（時単位）	TAM Status	OpenTP1での最近1日間の1時間ごとのTAMファイルアクセス状況について履歴情報を表示する。 監視対象がTP1/LiNKの場合は使用できない。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

カテゴリー		レポート名	表示する情報	格納先
TAM	リアルタイム	TAM Table Detail	ある時点での TAM テーブルの状態についてリアルタイム情報を表示する。 監視対象が TP1/LiNK の場合は使用できない。	Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/
MCF	履歴 (時単位)	MCF Status (5.0)	最近 1 日間の 1 時間ごとの MCF キューアクセス状況についての履歴情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/
	リアルタイム	MCF Connection Detail (5.0)	ある時点での MCF コネクション状態についてのリアルタイム情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/
	リアルタイム	MCF Logical Terminal Detail (5.0)	ある時点での MCF 論理端末についてのリアルタイム情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/
	リアルタイム	MCF Service Group Detail (5.0)	ある時点での MCF サービスグループについてのリアルタイム情報を表示する。	Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/

# Checkpoint Dump Detail

---

## 概要

Checkpoint Dump Detail レポートは、ある時点でのチェックポイントダンプについてのリアルタイム情報を表示します。表示形式は表です。

なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレポートは使用できません。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/

## レコード

Checkpoint Dump Status (PD\_CPD)

## フィールド

フィールド名	説明
FG Name	ファイルグループ名。
Gen No	世代番号。
Gen St	世代状態。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• a：上書きできない状態</li><li>• u：上書きできる、または書き込み中の状態</li><li>• r：予約の状態</li></ul>
Ov Wr Blk No	オーバーライトポインターのジャーナルブロック番号。
Ov Wr FG Name	オーバーライトポインターのジャーナルファイルグループ名。
Sv Name	サーバ名。

# Checkpoint Dump Status

---

## 概要

Checkpoint Dump Status レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとのチェックポイントダンプ取得状況について履歴情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/

## レコード

System Summary (PI)

## フィールド

フィールド名	説明
Avg CPD Put Interval	前回のチェックポイントから今回のチェックポイントまでの時間間隔の平均値（ミリ秒）。
Avg CPD Valid Time	チェックポイントダンプ取得契機が発生し、各システムサーバで取得処理を開始してから有効化が完了するまでの時間の平均値（マイクロ秒）。
CPD Puts	チェックポイントダンプの契機数。
Max CPD Put Interval	前回のチェックポイントから今回のチェックポイントまでの時間間隔の最大値（ミリ秒）。
Max CPD Valid Time	チェックポイントダンプ取得契機が発生し、各システムサーバで取得処理を開始してから有効化が完了するまでの時間の最大値（マイクロ秒）。
Min CPD Put Interval	前回のチェックポイントから今回のチェックポイントまでの時間間隔の最小値（ミリ秒）。
Min CPD Valid Time	チェックポイントダンプ取得契機が発生し、各システムサーバで取得処理を開始してから有効化が完了するまでの時間の最小値（ミリ秒）。

# DAM File Detail

## 概要

DAM File Detail レポートは、ある時点での DAM ファイルのリアルタイム情報を表示します。表示形式は表です。

なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレポートは使用できません。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/

## レコード

DAM File Status (PD\_DAM)

## フィールド

フィールド名	説明
Add Date	追加日時。
Attr	DAM ファイルの属性。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• Quick write：即書き</li><li>• Deferred write：ディファード</li><li>• No recovery：回復対象外</li><li>• Cache less：回復対象外およびキャッシュレスアクセス</li></ul>
Blk Size	ブロック長 (バイト)。
Blks	ブロック数。
LG-File Name	論理ファイル名。
PH-File Name	物理ファイル名。
Security	セキュリティの有無。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• Y：セキュリティあり</li><li>• N：セキュリティなし</li></ul>
Shutdown	DAM ファイルの閉塞状態。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• Not shutdown：未閉塞</li><li>• Logical shutdown：論理閉塞</li><li>• Error shutdown：障害閉塞</li><li>• Under shutdown request：閉塞要求中</li></ul>



# DAM Status

## 概要

DAM Status レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとの DAM ファイルアクセス状況について履歴情報を表示します。表示形式は表です。

なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレポートは使用できません。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

## レコード

DAM Summary (PI\_DAMS)

## フィールド

フィールド名	説明
Avg DAM Read Size	dc_dam_read 関数を発行した単位での DAM ファイルのデータの入力長の平均値 (バイト)。
Avg DAM Trans	DAM を使用するトランザクション数の平均値。
Avg DAM Write Size	dc_dam_write 関数または dc_dam_rewrite 関数を発行した単位での DAM ファイルのデータ出力長の平均値 (バイト)。
Avg RM-SHM Use Rate	リソースマネージャ用共用メモリープールの使用率の平均値 (%)。
Avg Upd-Buf Use Size	更新バッファ使用量の平均値 (バイト)。
DAM Write Faults	実際のディスクとの I/O 時に発生した出力障害回数。
DAM_Read Faults	dc_dam_read 関数の中で、OS とのインターフェース部分で発生した出力障害数。
DAM Reads	dc_dam_read 関数を発行した回数。
DAM Writes	dc_dam_write 関数または dc_dam_rewrite 関数を発行した回数。
Deferred Write Trans	デファイアード更新指定の DAM ファイルを更新したトランザクション数を 10 で割った回数。
FJ Puts	回復用ジャーナル (FJ) の取得回数。
Max DAM Read Size	dc_dam_read 関数を発行した単位での DAM ファイルのデータの入力長の最大値 (バイト)。
Max DAM Trans	DAM を使用するトランザクション数の最大値。
Max DAM Write Size	dc_dam_write 関数または dc_dam_rewrite 関数を発行した単位での DAM ファイルのデータ出力長の最大値 (バイト)。
Max RM-SHM Use Rate	リソースマネージャ用共用メモリープールの使用率の最大値 (%)。
Max Upd-Buf Use Size	更新バッファ使用量の最大値 (バイト)。
Min DAM Read Size	dc_dam_read 関数を発行した単位での DAM ファイルのデータの入力長の最小値 (バイト)。

フィールド名	説明
Min DAM Trans	DAM を使用するトランザクション数の最小値。
Min DAM Write Size	dc_dam_write 関数または dc_dam_rewrite 関数を発行した単位での DAM ファイルのデータ出力長の最小値 (バイト)。
Min RM-SHM Use Rate	リソースマネージャ用共用メモリープールの使用率の最小値 (%)。
Min Upd-Buf Use Size	更新バッファ使用量の最小値 (バイト)。
SHM Gets	リソースマネージャ用共用メモリープール内に確保する DAM ファイルのデータ用ブロックを確保した回数。

# Journal Detail

## 概要

Journal Detail レポートは、ある時点でのジャーナル取得状況についてのリアルタイム情報を表示します。表示形式は表です。

なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレポートは使用できません。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/

## レコード

Journal Status (PD\_JNL)

## フィールド

フィールド名	説明
Arch	ファイルグループのアーカイブの状態。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• u：アーカイブ待ち</li><li>• -：アーカイブ済み</li></ul>
FG Name	ファイルグループ名。
FG Upd	ファイルグループが上書きできるか、できないかの状態。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• d：上書きできない</li><li>• -：上書きできる</li></ul>
File Type	ファイル種別。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• sys：システムジャーナルファイル</li></ul>
Fst Blk No	先頭ブロック番号。
Gen No	世代番号。
Lst Blk No	最終ブロック番号。
Opn	ファイルグループのオープン状態。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• o：オープン中</li><li>• c：クローズ中</li></ul>
RG Name	システムジャーナルファイルの場合 システムジャーナルサービス定義のファイル名。
Run ID	ファイルが使用されたときのジャーナルサービス、またはグローバルサービスのラン ID。
St	ファイルグループの状態。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• c：現用</li><li>• s：待機中</li></ul>

フィールド名	説明
St	<ul style="list-style-type: none"> <li>• n：予約</li> </ul>
Unld	ファイルグループのアンロード状態。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• u：アンロード待ち</li> <li>• -：アンロード済み</li> </ul>
Unmat	ファイルグループの不整合状態。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• c：障害発生後現用のままとっている要素ファイルがある</li> <li>• -：正しく処理されているファイル</li> </ul>
Use	ファイルグループの OpenTP1 での状態。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• b：使用中</li> <li>• -：未使用</li> </ul>

# Journal Status

## 概要

Journal Status レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとのジャーナル取得状況について履歴情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/

## レコード

System Summary (PI)

## フィールド

フィールド名	説明
Avg JNL Input Size	ジャーナルファイルから入力したデータ長の平均値 (バイト)。
Avg JNL Put Wait Bufs	ジャーナル出力完了時に出力待ちをしているバッファ面数の平均値 (面数 * 100)。
Avg JNL Swap Time	ジャーナルファイルをスワップする際のオーバーヘッド時間の平均値 (マイクロ秒)。
Avg JNL-Blk Put Len	ジャーナルブロックのデータ長の平均値 (バイト)。
JNL Buf Fulls	ジャーナルレコードをこのカレントバッファにバッファリングしようとしたときにバッファの空きエリアが小さく、該当するバッファにバッファリングできない状態が発生した回数。
JNL Buf Fulls/min	収集間隔の間で発生したジャーナルバッファ満杯発生件数 (分単位) ※。
JNL Buf Waits	ジャーナルレコードをこのカレントバッファにバッファリングしようとしたときにバッファの空きエリアが小さく、該当するバッファにバッファリングできない状態の発生回数。
JNL Buf Waits/min	収集間隔の間で発生したジャーナルバッファ空き待ち発生件数 (分単位) ※。
JNL Inputs	ジャーナルファイルから入力した回数。
JNL Puts	ジャーナル出力完了回数。
JNL Read Faults	ジャーナルファイルからの入力時に発生した障害の件数。
JNL Reads	ジャーナルデータだけでなく、ジャーナルスワップ時のファイル管理情報も含めたシステムの内部的な入力回数。
JNL Swaps	ジャーナルファイルをスワップした回数。
JNL Swaps/min	収集間隔の間で発生したジャーナルファイルスワップ回数の平均値 (分単位) ※。
JNL Writes	ジャーナルデータだけでなく、ジャーナルスワップ時のファイル管理情報も含めたシステムの内部的な出力回数。
JNL Write Faults	ジャーナルファイルへの出力時に発生した障害の件数。
JNL-Blk Puts	ジャーナルブロックの出力回数。

フィールド名	説明
Max JNL Input Size	ジャーナルファイルから入力したデータ長の最大値 (バイト)。
Max JNL Put Wait Bufs	ジャーナル出力完了時に出力待ちをしているバッファ面数の最大値 (面数 * 100)。
Max JNL Swap Time	収集間隔の間で発生したジャーナルスワップ発生回数 (分単位)。
Max JNL-Blk Put Len	ジャーナルブロックのデータ長の最大値 (バイト)。
Min JNL Input Size	ジャーナルファイルから入力したデータ長の最小値 (バイト)。
Min JNL Put Wait Bufs	ジャーナル出力完了時に出力待ちをしているバッファ面数の最小値 (面数 * 100)。
Min JNL Swap Time	ジャーナルファイルをスワップする際のオーバーヘッド時間の最小値 (マイクロ秒)。
Min JNL-Blk Put Len	ジャーナルブロックのデータ長の最小値 (バイト)。

注※

分単位の平均値を設定する場合は、次の式に基づいて計算された値が設定されます。

$$\text{設定する値} = (\text{今回収集した値} - \text{前回収集した値}) * 60 / \text{収集間隔 (秒)}$$

ただし、初回または収集エラー直後の収集要求時には、0 が設定されます。

# Lock Detail

## 概要

Lock Detail レポートは、ある時点での排他制御についてのリアルタイム情報を表示します。表示形式は表です。

なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレポートは使用できません。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/

## レコード

Lock Status (PD\_LCK)

## フィールド

フィールド名	説明
Deadlock Pri	デッドロックプライオリティ。
Ex Mode	排他制御モード。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>EX：ほかの UAP に参照・更新を許可しない</li><li>PR：ほかの UAP に参照だけを許可する</li></ul>
Ex Wait Pri	排他待ちプライオリティ。
PID	プロセス ID。
Req Type	要求種別。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>MIGRATE：TAM またはユーザーのロック要求</li><li>BRANCH：DAM サービスのロック要求</li></ul>
Res Name	リソース名。 なお、lckls コマンドが出力するリソース名を 16 バイト固定で使用するため、リソース名の長さが 16 バイトより短い場合は後ろに空白文字が付加されたデータとなる。
Sv ID	サーバ ID。
Sv Name	サーバ名。
Wait Time	待ち時間 (秒)。 占有情報の場合は 0 が表示される。

# Lock Status

---

## 概要

Lock Status レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとの排他制御状況について履歴情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/

## レコード

System Summary (PI)

## フィールド

フィールド名	説明
Avg Lock Que Len	ロック待ちが発生した時の待ち行列長の平均値。
Avg Lock Wait Time	ロック待ちが発生した時の待ち状態になってから待ち状態が解除されるまでの時間の平均値 (ミリ秒)。
Deadlocks	デッドロックの発生件数。
Lock Waits	ロック待ちの発生件数。
Max Lock Que Len	ロック待ちが発生した時の待ち行列長の最大値。
Max Lock Wait Time	ロック待ちが発生した時の待ち状態になってから待ち状態が解除されるまでの時間の最大値 (ミリ秒)。
Min Lock Que Len	ロック待ちが発生した時の待ち行列長の最小値。
Min Lock Wait Time	ロック待ちが発生した時の待ち状態になってから待ち状態が解除されるまでの時間の最小値 (ミリ秒)。



# MCF Connection Detail (5.0)

## 概要

MCF Connection Detail (5.0) レポートは、ある時点での MCF コネクション状態についてのリアルタイム情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/

## レコード

PD MCF Connection Status (PD\_MCFC)

## フィールド

フィールド名	説明
Connection ID	コネクション ID。
Connection Status	コネクション状態。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• ACT：確立状態</li><li>• ACT/B：確立処理中状態</li><li>• DCT：解放状態</li><li>• DCT/B：解放処理中状態</li></ul>
Detail Status	詳細ステータス（保守情報）※。
MCF Identifier	MCF 識別子。
Protocol Kind	プロトコル種別。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• TCP：TCP/IP プロトコル (TP1/NET/TCP/IP)</li></ul>

## 注※

出力される詳細ステータスは、OpenTP1 の mcftlscn（コネクションの状態表示）コマンドで出力される値と同じです。値の詳細については、各コネクションの通信プロトコルに対応する OpenTP1 のプロトコル製品のマニュアルを参照してください。

# MCF Logical Terminal Detail (5.0)

## 概要

MCF Logical Terminal Detail (5.0) レポートは、ある時点での MCF 論理端末についてのリアルタイム情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/

## レコード

PD MCF Logical Terminal Status (PD\_MCFL)

## フィールド

フィールド名	説明
IO Msg Count	非同期型問い合わせ応答メッセージの未送信メッセージ数。
LG-Term Name	論理端末の名称。
LG-Term Status	論理端末の状態。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• ACT：閉塞解除状態</li><li>• DCT：閉塞状態</li></ul>
Max IO Msg Ser No	非同期型問い合わせ応答メッセージの未送信メッセージ最大通番。
Max NORM Msg Ser No	非同期型一方送信メッセージ（一般）の未送信メッセージ最大通番。
Max PRIO Msg Ser No	非同期型一方送信メッセージ（優先）の未送信メッセージ最大通番。
Max SYNC Msg Ser No	同期型メッセージの未送信メッセージ最大通番。
MCF Identifier	MCF 識別子。
Min IO Msg Ser No	非同期型問い合わせ応答メッセージの未送信メッセージ最小通番。
Min NORM Msg Ser No	非同期型一方送信メッセージ（一般）の未送信メッセージ最小通番。
Min PRIO Msg Ser No	非同期型一方送信メッセージ（優先）の未送信メッセージ最小通番。
Min SYNC Msg Ser No	同期型メッセージの未送信メッセージ最小通番。
NORM Msg Count	非同期型一方送信メッセージ（一般）の未送信メッセージ数。
PRIO Msg Count	非同期型一方送信メッセージ（優先）の未送信メッセージ数。
SYNC Msg Count	同期型メッセージの未送信メッセージ数。

# MCF Service Group Detail (5.0)

---

## 概要

MCF Service Group Detail (5.0) レポートは、ある時点での MCF サービスグループについてのリアルタイム情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/

## レコード

PD MCF Service Group Status (PD\_MCFG)

## フィールド

フィールド名	説明
MCF Identifier	MCF 識別子。
Rcv Msg Count	受信メッセージ数。
Svg Input	サービスグループの状態 (入力)。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• ACT：閉塞解除</li><li>• DCT：閉塞</li><li>• ***：SPP のサービスグループの場合</li></ul>
Svg Name	サービスグループ名。
Svg Schedule	サービスグループの状態 (スケジュール)。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• ACT：閉塞解除</li><li>• DCT：閉塞</li><li>• ***：SPP のサービスグループの場合</li></ul>

# MCF Status (5.0)

---

## 概要

MCF Status (5.0) レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとの MCF キューアクセス状況についての履歴情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

## レコード

PI MCF Summary (PI\_MCFS)

## フィールド

フィールド名	説明
Connection Faults	OpenTP1 ノード内で発生した接続障害回数。
Disk Que Outputs	OpenTP1 ノード内のディスクキューからのメッセージ取り出し回数。
Disk Que Inputs	OpenTP1 ノード内のディスクキューに対するメッセージ書き込み回数。
Memory Que Outputs	OpenTP1 ノード内のメモリーキューからのメッセージ取り出し回数。
Memory Que Inputs	OpenTP1 ノード内のメインキャッシュに対する、メッセージ書き込み回数。

# Message Log

---

## 概要

Message Log レポートは、最近 1 時間以内の OpenTP1 出力メッセージについての情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/

## レコード

OpenTP1 Message (PD\_MLOG)

## フィールド

フィールド名	説明
Host	ホスト名。
Log Date	年月日（年/月/日の形式）。
Log Time	時刻（時:分:秒の形式）。
Message Text	メッセージテキスト。
Msg ID	メッセージ ID。
PID	プロセス ID。
Proc Ser No	プロセス内メッセージ通番。
Prog	プログラム ID。
Ser No	メッセージ通番。
SID	システム ID。

# Name Status

---

## 概要

Name Status レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとのネームサービス状況について履歴情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/

## レコード

System Summary (PI)

## フィールド

フィールド名	説明
Name Svc Cache Hit %	サービス情報参照時のサービス情報キャッシュ領域ヒット率 (%)。
Name Svc Cache Hits	サービス情報キャッシュ領域に設定されたサービス情報の該当するノードでの参照回数。
Name Svc Local Hits	サービス情報ローカル領域に設定されたサービス情報の該当するノードでの参照回数。
Name Svc Reqs	該当するノードでのサービス情報の参照要求。

# Process Detail

---

## 概要

Process Detail レポートは、ある時点での OpenTP1 管理下のプロセスについてのリアルタイム情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/

## レコード

Process Status (PD\_PRC)

## フィールド

フィールド名	説明
Exe File	該当するサーバと連動しているデバッガの実行形式ファイル。
Group ID	グループ ID。 プロセスサービスから生成された子プロセス以外のプロセスの場合は、「*」が表示される。
PID	プロセス ID。
Sv Name	サーバ名。
Sv St	サーバの状態。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• D：サーバ開始処理中または終了処理中</li><li>• L：サーバ実行中</li><li>• *：デバッガプロセス</li></ul>
Svg Name	サービスグループ名。
User ID	ユーザー ID。 プロセスサービスから生成された子プロセス以外のプロセスの場合は、「*」が表示される。

# Process Status

---

## 概要

Process Status レポートは、OpenTP1 で発生したプロセスの、最近 1 日間の 1 時間ごとの実行状況について履歴情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/

## レコード

System Summary (PI)

## フィールド

フィールド名	説明
Avg Processes	OpenTP1 システムで起動されているシステムサービスと UAP プロセス数の平均値。
Max Processes	OpenTP1 システムで起動されているシステムサービスと UAP プロセス数の最大値。
Min Processes	OpenTP1 システムで起動されているシステムサービスと UAP プロセス数の最小値。
Sys Svr Terminations	システムサービスを行うサーバプロセスが異常終了した回数。
UAP Terminations	UAP プロセスが異常終了した回数。



# Process Trend

---

## 概要

Process Trend レポートは、OpenTP1 で発生したプロセスの、最近 1 か月間の 1 日ごとのプロセス数について履歴情報を表示します。表示形式は折れ線グラフと表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Monthly Trend/

## レコード

System Summary (PI)

## フィールド

フィールド名	説明
Avg Processes	OpenTP1 システムで起動されているシステムサービスと UAP プロセス数の平均値。
Max Processes	OpenTP1 システムで起動されているシステムサービスと UAP プロセス数の最大値。

# RPC Status

## 概要

RPC Status レポートは、OpenTP1 で発生した RPC の、最近 1 日間の 1 時間ごとの実行状況について履歴情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/

## レコード

System Summary (PI)

## フィールド

フィールド名	説明
Avg RPC Res Time	クライアント側でサーバに要求を送信してからサーバから応答を受け取るまでの時間の平均値 (マイクロ秒)。
Avg Svc Time	要求したサービス関数の実行時間の平均値 (マイクロ秒)。
Max RPC Res Time	クライアント側でサーバに要求を送信してからサーバから応答を受け取るまでの時間の最大値 (マイクロ秒)。
Max SvcTime	要求したサービス関数の実行時間の最大値 (マイクロ秒)。
Min RPC Res Time	クライアント側でサーバに要求を送信してからサーバから応答を受け取るまでの時間の最小値 (マイクロ秒)。
Min SvcTime	要求したサービス関数の実行時間の最小値 (マイクロ秒)。
RPC Calls	RPC コールの発生件数。
RPC Calls/min	収集間隔の間で発生した RPC コール発生件数の平均値 (分単位) ※。
RPC Faults	RPC の処理の内部で発生した障害件数。
RPC Timeouts	RPC 応答待ちの処理で発生したタイムアウトエラー発生件数。

## 注※

分単位の平均値を設定する場合は、次の式に基づいて計算された値が設定されます。

$\text{設定する値} = (\text{今回収集した値} - \text{前回収集した値}) * 60 / \text{収集間隔 (秒)}$
---

ただし、初回または収集エラー直後の収集要求時には、0 が設定されます。

# RPC Trend

## 概要

RPC Trend レポートは、OpenTP1 で発行される RPC の、最近 1 か月間の 1 日ごとの応答時間について履歴情報を表示します。表示形式は折れ線グラフと表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Monthly Trend/

## レコード

System Summary (PI)

## フィールド

フィールド名	説明
Avg RPC Res Time	クライアント側でサーバに要求を送信してからサーバから応答を受け取るまでの時間の平均値 (マイクロ秒)。
Max RPC Res Time	クライアント側でサーバに要求を送信してからサーバから応答を受け取るまでの時間の最大値 (マイクロ秒)。
Min RPC Res Time	クライアント側でサーバに要求を送信してからサーバから応答を受け取るまでの時間の最小値 (マイクロ秒)。
RPC Calls	RPC コールの発生件数。
RPC Calls/min	収集間隔の間で発生した RPC コール発生件数の平均値 (分単位) ※。

## 注※

分単位の平均値を設定する場合は、次の式に基づいて計算された値が設定されます。

設定する値=(今回収集した値-前回収集した値)\*60/収集間隔 (秒)

ただし、初回または収集エラー直後の収集要求時には、0 が設定されます。

## RTS Checkpoint Dump Status (5.2)

### 概要

RTS Checkpoint Dump Status (5.2) レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとのチェックポイントダンプ取得状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示します。表示形式は表です。

なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレポートは使用できません。

### 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

### レコード

RTS Summary (PI\_RTSS)

### フィールド

フィールド名	説明
Node ID	OpenTP1 ノード識別子。
Event ID	リアルタイム統計情報項目 ID。
Event	リアルタイム統計情報項目名。
Sv Name	サーバ名（取得対象名 1）。
Svc Name	サービス名（取得対象名 2）。
Counts	発生件数。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Maximum	最大値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Minimum	最小値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Average	平均値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Units	単位。

### フィルター

項目	説明
フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name
条件式	Event ID $\geq$ 1000 AND Event ID $\leq$ 1001 AND Sv Name = サーバ名（取得対象名 1） AND Svc Name = サービス名（取得対象名 2）

## RTS DAM Status (5.2)

### 概要

RTS DAM Status (5.2) レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとの DAM ファイルアクセス状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示します。表示形式は表です。

なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレポートは使用できません。

### 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

### レコード

RTS Summary (PI\_RTSS)

### フィールド

フィールド名	説明
Node ID	OpenTP1 ノード識別子。
Event ID	リアルタイム統計情報項目 ID。
Event	リアルタイム統計情報項目名。
Sv Name	サーバ名（取得対象名 1）。
Svc Name	サービス名（取得対象名 2）。
Counts	発生件数。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Maximum	最大値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Minimum	最小値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Average	平均値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Units	単位。

### フィルター

項目	説明
フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name
条件式	Event ID $\geq$ 2000 AND Event ID $\leq$ 2007 AND Sv Name = サーバ名（取得対象名 1） AND Svc Name = サービス名（取得対象名 2）

## RTS Journal Status (5.2)

### 概要

RTS Journal Status (5.2) レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとのジャーナル取得状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示します。表示形式は表です。

なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレポートは使用できません。

### 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

### レコード

RTS Summary (PI\_RTSS)

### フィールド

フィールド名	説明
Node ID	OpenTP1 ノード識別子。
Event ID	リアルタイム統計情報項目 ID。
Event	リアルタイム統計情報項目名。
Sv Name	サーバ名（取得対象名 1）。
Svc Name	サービス名（取得対象名 2）。
Counts	発生件数。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Maximum	最大値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Minimum	最小値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Average	平均値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Units	単位。

### フィルター

項目	説明
フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name
条件式	Event ID $\geq$ 1100 AND Event ID $\leq$ 1107 AND Sv Name = サーバ名（取得対象名 1） AND Svc Name = サービス名（取得対象名 2）

## RTS Lock Status (5.2)

### 概要

RTS Lock Status (5.2) レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとの排他制御状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示します。表示形式は表です。

なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレポートは使用できません。

### 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

### レコード

RTS Summary (PI\_RTSS)

### フィールド

フィールド名	説明
Node ID	OpenTP1 ノード識別子。
Event ID	リアルタイム統計情報項目 ID。
Event	リアルタイム統計情報項目名。
Sv Name	サーバ名（取得対象名 1）。
Svc Name	サービス名（取得対象名 2）。
Counts	発生件数。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Maximum	最大値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Minimum	最小値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Average	平均値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Units	単位。

### フィルター

項目	説明
フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name
条件式	Event ID $\geq$ 1200 AND Event ID $\leq$ 1202 AND Sv Name = サーバ名（取得対象名 1） AND Svc Name = サービス名（取得対象名 2）

## RTS Name Status (5.2)

---

### 概要

RTS Name Status (5.2) レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとのネームサービス状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示します。表示形式は表です。

### 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

### レコード

RTS Summary (PI\_RTSS)

### フィールド

フィールド名	説明
Node ID	OpenTP1 ノード識別子。
Event ID	リアルタイム統計情報項目 ID。
Event	リアルタイム統計情報項目名。
Sv Name	サーバ名（取得対象名 1）。
Svc Name	サービス名（取得対象名 2）。
Counts	発生件数。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Units	単位。

### フィルター

項目	説明
フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name
条件式	Event ID $\geq$ 1300 AND Event ID $\leq$ 1302 AND Sv Name = サーバ名（取得対象名 1） AND Svc Name = サービス名（取得対象名 2）



## RTS Process Status (5.2)

### 概要

RTS Process Status (5.2) レポートは、OpenTP1 で発生したプロセスの、最近 1 日間の 1 時間ごとの実行状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示します。表示形式は表です。

### 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

### レコード

RTS Summary (PI\_RTSS)

### フィールド

フィールド名	説明
Node ID	OpenTP1 ノード識別子。
Event ID	リアルタイム統計情報項目 ID。
Event	リアルタイム統計情報項目名。
Sv Name	サーバ名（取得対象名 1）。
Svc Name	サービス名（取得対象名 2）。
Counts	発生件数。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Maximum	最大値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Minimum	最小値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Average	平均値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Units	単位。

### フィルター

項目	説明
フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name
条件式	Event ID $\geq$ 1500 AND Event ID $\leq$ 1504 AND Sv Name = サーバ名（取得対象名 1） AND Svc Name = サービス名（取得対象名 2）

## RTS Process Trend (5.2)

---

### 概要

RTS Process Trend (5.2) レポートは、OpenTP1 で発生したプロセスの、最近 1 か月間の 1 日ごとのプロセス数について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示します。表示形式は折れ線グラフと表です。

### 格納先

Reports/OpenTP1/Monthly Trend/Advanced/

### レコード

RTS Summary (PI\_RTSS)

### フィールド

フィールド名	説明
Node ID	OpenTP1 ノード識別子。
Event ID	リアルタイム統計情報項目 ID。
Event	リアルタイム統計情報項目名。
Sv Name	サーバ名（取得対象名 1）。
Svc Name	サービス名（取得対象名 2）。
Counts	発生件数。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Units	単位。

### フィルター

項目	説明
フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name
条件式	Event ID = 1500 AND Sv Name = サーバ名（取得対象名 1） AND Svc Name = サービス名（取得対象名 2）

## RTS RPC Status (5.2)

### 概要

RTS RPC Status (5.2) レポートは、OpenTP1 で発生した RPC の、最近 1 日間の 1 時間ごとの実行状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示します。表示形式は表です。

### 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

### レコード

RTS Summary (PI\_RTSS)

### フィールド

フィールド名	説明
Node ID	OpenTP1 ノード識別子。
Event ID	リアルタイム統計情報項目 ID。
Event	リアルタイム統計情報項目名。
Sv Name	サーバ名（取得対象名 1）。
Svc Name	サービス名（取得対象名 2）。
Counts	発生件数。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Maximum	最大値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Minimum	最小値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Average	平均値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Units	単位。

### フィルター

項目	説明
フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name
条件式	(Event ID = 1700 OR Event ID = 1701 OR Event ID = 1730 OR Event ID = 1731) AND Sv Name = サーバ名（取得対象名 1） AND Svc Name = サービス名（取得対象名 2）

## RTS RPC Trend (5.2)

### 概要

RTS RPC Trend (5.2) レポートは、OpenTP1 で発行される RPC の、最近 1 か月間の 1 日ごとの処理時間について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示します。表示形式は折れ線グラフと表です。

### 格納先

Reports/OpenTP1/Monthly Trend/Advanced/

### レコード

RTS Summary (PI\_RTSS)

### フィールド

フィールド名	説明
Node ID	OpenTP1 ノード識別子。
Event ID	リアルタイム統計情報項目 ID。
Event	リアルタイム統計情報項目名。
Sv Name	サーバ名（取得対象名 1）。
Svc Name	サービス名（取得対象名 2）。
Counts	発生件数。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Maximum	最大値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Average	平均値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Units	単位。

### フィルター

項目	説明
フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name
条件式	Event ID = 1730 AND Sv Name = サーバ名（取得対象名 1） AND Svc Name = サービス名（取得対象名 2）

## RTS Schedule Status (5.2)

### 概要

RTS Schedule Status (5.2) レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとのスケジュール発生状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示します。表示形式は表です。

### 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

### レコード

RTS Summary (PI\_RTSS)

### フィールド

フィールド名	説明
Node ID	OpenTP1 ノード識別子。
Event ID	リアルタイム統計情報項目 ID。
Event	リアルタイム統計情報項目名。
Sv Name	サーバ名（取得対象名 1）。
Svc Name	サービス名（取得対象名 2）。
Counts	発生件数。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Maximum	最大値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Minimum	最小値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Average	平均値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Units	単位。

### フィルター

項目	説明
フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name
条件式	Event ID $\geq$ 1800 AND Event ID $\leq$ 1804 AND Sv Name = サーバ名（取得対象名 1） AND Svc Name = サービス名（取得対象名 2）

## RTS Schedule Trend (5.2)

### 概要

RTS Schedule Trend (5.2) レポートは、OpenTP1 で発生したユーザーサーバのスケジュールキューに滞留したサービス要求数（行列長）について最近 1 か月間の 1 日ごとの履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示します。表示形式は折れ線グラフと表です。

### 格納先

Reports/OpenTP1/Monthly Trend/Advanced/

### レコード

RTS Summary (PI\_RTSS)

### フィールド

フィールド名	説明
Node ID	OpenTP1 ノード識別子。
Event ID	リアルタイム統計情報項目 ID。
Event	リアルタイム統計情報項目名。
Sv Name	サーバ名（取得対象名 1）。
Svc Name	サービス名（取得対象名 2）。
Counts	発生件数。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Maximum	最大値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Average	平均値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Units	単位。

### フィルター

項目	説明
フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name
条件式	Event ID = 1800 AND Sv Name = サーバ名（取得対象名 1） AND Svc Name = サービス名（取得対象名 2）

## RTS Shared Memory Status (5.2)

### 概要

RTS Shared Memory Status (5.2) レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとの共用メモリー使用状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示します。表示形式は表です。

### 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

### レコード

RTS Summary (PI\_RTSS)

### フィールド

フィールド名	説明
Node ID	OpenTP1 ノード識別子。
Event ID	リアルタイム統計情報項目 ID。
Event	リアルタイム統計情報項目名。
Sv Name	サーバ名（取得対象名 1）。
Svc Name	サービス名（取得対象名 2）。
Counts	発生件数。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Maximum	最大値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Minimum	最小値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Average	平均値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Units	単位。

### フィルター

項目	説明
フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name
条件式	Event ID $\geq$ 1400 AND Event ID $\leq$ 1403 AND Sv Name = サーバ名（取得対象名 1） AND Svc Name = サービス名（取得対象名 2）

## RTS TAM Status (5.2)

### 概要

RTS TAM Status (5.2) レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとの TAM ファイルアクセス状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示します。表示形式は表です。

なお、監視対象が TP1/LINK の場合、このレポートは使用できません。

### 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

### レコード

RTS Summary (PI\_RTSS)

### フィールド

フィールド名	説明
Node ID	OpenTP1 ノード識別子。
Event ID	リアルタイム統計情報項目 ID。
Event	リアルタイム統計情報項目名。
Sv Name	サーバ名（取得対象名 1）。
Svc Name	サービス名（取得対象名 2）。
Counts	発生件数。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Maximum	最大値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Minimum	最小値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Average	平均値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Units	単位。

### フィルター

項目	説明
フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name
条件式	Event ID $\geq$ 2100 AND Event ID $\leq$ 2107 AND Sv Name = サーバ名（取得対象名 1） AND Svc Name = サービス名（取得対象名 2）



## RTS Transaction Status (5.2)

### 概要

RTS Transaction Status (5.2) レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとのトランザクション実行状況について履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示します。表示形式は表です。

### 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

### レコード

RTS Summary (PI\_RTSS)

### フィールド

フィールド名	説明
Node ID	OpenTP1 ノード識別子。
Event ID	リアルタイム統計情報項目 ID。
Event	リアルタイム統計情報項目名。
Sv Name	サーバ名（取得対象名 1）。
Svc Name	サービス名（取得対象名 2）。
Counts	発生件数。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Maximum	最大値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Minimum	最小値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Average	平均値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Units	単位。

### フィルター

項目	説明
フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name
条件式	Event ID $\geq$ 1900 AND Event ID $\leq$ 1907 AND Sv Name = サーバ名（取得対象名 1） AND Svc Name = サービス名（取得対象名 2）

## RTS Transaction Trend (5.2)

### 概要

RTS Transaction Trend (5.2) レポートは、OpenTP1 で発生したトランザクションの同期点処理が完了するまでの実時間について最近 1 か月間の 1 日ごとの履歴情報（リアルタイム統計情報）を表示します。表示形式は折れ線グラフと表です。

### 格納先

Reports/OpenTP1/Monthly Trend/Advanced/

### レコード

RTS Summary (PI\_RTSS)

### フィールド

フィールド名	説明
Node ID	OpenTP1 ノード識別子。
Event ID	リアルタイム統計情報項目 ID。
Event	リアルタイム統計情報項目名。
Sv Name	サーバ名（取得対象名 1）。
Svc Name	サービス名（取得対象名 2）。
Counts	発生件数。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Maximum	最大値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Average	平均値。詳細は、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照。
Units	単位。

### フィルター

項目	説明
フィールド	Event ID, Sv Name, Svc Name
条件式	Event ID = 1906 AND Sv Name = サーバ名（取得対象名 1） AND Svc Name = サービス名（取得対象名 2）

# Schedule Detail

---

## 概要

Schedule Detail レポートは、ある時点での OpenTP1 スケジュールサービスのサーバごとのスケジュール状況についてリアルタイム情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/

## レコード

Schedule Status (PD\_SCD)

## フィールド

フィールド名	説明
Max Buf Unuse Size	メッセージ格納用プールの現在の最大連続未使用サイズ (バイト)。
Max Buf Use Size	メッセージ格納用プールの最大使用サイズ (バイト)。
Max Req Que Len	スケジュールキューに滞留したサービス要求の最大数。
Msg Buf Unuse Size	メッセージ格納用プールの現在の未使用サイズ (バイト)。
Msg Buf Use Size	メッセージ格納用プールの現在の使用サイズ。
Req Que Len	スケジュールキューに滞留しているサービス要求数。
Sv Name	サーバ名。
Sv St	該当するサーバの状態。 <ul style="list-style-type: none"><li>• S：サーバ準備中</li><li>• A：スケジューリングできる状態</li><li>• E：サーバ終了処理中</li><li>• H：サーバ閉塞中</li><li>• P：サービス要求を受け付けられる状態で閉塞中</li></ul>
Svg Name	サービスグループ名。

# Schedule Status

## 概要

Schedule Status レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとのスケジュール発生状況について履歴情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/

## レコード

System Summary (PI)

## フィールド

フィールド名	説明
Avg Buf Pool Use Size	ユーザーサーバのメッセージ格納バッファプールの使用中サイズの平均値 (バイト)。
Avg SCD Fault Size	ユーザーサーバへのサービス要求のうち、メッセージ格納バッファプール不足によって、スケジュールできなかったサービス要求メッセージ長の平均値 (バイト)。
Avg SCD Que Len	ユーザーサーバのスケジュールキューに滞留したサービス要求数の平均値。
Avg Svc Req Msg Size	ユーザーサーバが受信したサービス要求メッセージ長の平均値 (バイト)。
Max Buf Pool Use Size	ユーザーサーバのメッセージ格納バッファプールの使用中サイズの最大値 (バイト)。
Max SCD Fault Size	ユーザーサーバへのサービス要求のうち、メッセージ格納バッファプール不足によって、スケジュールできなかったサービス要求メッセージ長の最大値 (バイト)。
Max SCD Que Len	ユーザーサーバのスケジュールキューに滞留したサービス要求数の最大値。
Max Svc Req Msg Size	ユーザーサーバが受信したサービス要求メッセージ長の最大値 (バイト)。
Min Buf Pool Use Size	ユーザーサーバのメッセージ格納バッファプールの使用中サイズの最小値 (バイト)。
Min SCD Fault Size	ユーザーサーバへのサービス要求のうち、メッセージ格納バッファプール不足によって、スケジュールできなかったサービス要求メッセージ長の最小値 (バイト)。
Min SCD Que Len	ユーザーサーバのスケジュールキューに滞留したサービス要求数の最小値。
Min Svc Req Msg Size	ユーザーサーバが受信したサービス要求メッセージ長の最小値 (バイト)。
SCD Faults	クライアントがユーザーサーバに対して行ったサービス要求のうち、メッセージ格納バッファプール不足でスケジュールできなかった数。
SCD Reqs	クライアントが該当するユーザーサーバに対して行ったサービス要求の回数。

# Schedule Trend

---

## 概要

Schedule Trend レポートは、OpenTP1 で発生したスケジュール待ち（行列長）について最近 1 か月間の 1 日ごとの履歴情報を表示します。表示形式は折れ線グラフと表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Monthly Trend/

## レコード

System Summary (PI)

## フィールド

フィールド名	説明
Avg SCD Que Len	ユーザーサーバのスケジュールキューに滞留したサービス要求数の平均値。
Max SCD Que Len	ユーザーサーバのスケジュールキューに滞留したサービス要求数の最大値。

# Shared Memory Detail

---

## 概要

Shared Memory Detail レポートは、ある時点での共用メモリー使用状況についてリアルタイム情報を表示します。表示形式は表です。

なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレポートは使用できません。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/

## レコード

Shared Memory Status (PD\_SHM)

## フィールド

フィールド名	説明
Max Size	共用メモリーの最大使用量 (バイト)。
Pool Size	共用メモリープールの大きさ (バイト)。
Pool Type	共用メモリープールの種別。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• static : 静的共用メモリー</li><li>• dynamic : 動的共用メモリー</li></ul>
Use Rate	現在の共用メモリーの使用率 (%)。
Use Size	現在使用中の共用メモリーの合計 (バイト)。

# Shared Memory Status

## 概要

Shared Memory Status レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとの共用メモリー使用状況について履歴情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/

## レコード

System Summary (PI)

## フィールド

フィールド名	説明
Avg Dy-SHM Size	動的共用メモリーブロックの最大使用サイズの平均値 (バイト)。
Avg Dy-SHM Total Size	動的共用メモリーブロックの確保・解放処理後の動的共用メモリーブロックの現在の総使用サイズの平均値 (バイト)。
Avg St-SHM Size	静的共用メモリーブロックの最大使用サイズの平均値 (バイト)。
Avg St-SHM Total Size	静的共用メモリーブロックの確保・解放処理後の静的共用メモリーブロックの現在の総使用サイズの平均値 (バイト)。
Dy-SHM Gets	編集対象時間内に取得した統計情報ジャーナルの件数+動的共用メモリー確保・解放関数発行回数。
Max Dy-SHM Size	動的共用メモリーブロックの最大使用サイズの最大値 (バイト)。
Max Dy-SHM Total Size	動的共用メモリーブロックの確保・解放処理後の動的共用メモリーブロックの現在の総使用サイズの最大値 (バイト)。
Max St-SHM Size	静的共用メモリーブロックの最大使用サイズの最大値 (バイト)。
Max St-SHM Total Size	静的共用メモリーブロックの確保・解放処理後の静的共用メモリーブロックの現在の総使用サイズの最大値 (バイト)。
Min Dy-SHM Size	動的共用メモリーブロックの最大使用サイズの最小値 (バイト)。
Min Dy-SHM Total Size	動的共用メモリーブロックの確保・解放処理後の動的共用メモリーブロックの現在の総使用サイズの最小値 (バイト)。
Min St-SHM Size	静的共用メモリーブロックの最大使用サイズの最小値 (バイト)。
Min St-SHM Total Size	静的共用メモリーブロックの確保・解放処理後の静的共用メモリーブロックの現在の総使用サイズの最小値 (バイト)。
St-SHM Gets	編集対象時間内に取得した統計情報ジャーナルの件数+静的共用メモリー確保・解放関数発行回数。

# TAM Status

---

## 概要

TAM Status レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとの TAM ファイルアクセス状況について履歴情報を表示します。表示形式は表です。

なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレポートは使用できません。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

## レコード

TAM Summary (PI\_TAMS)

## フィールド

フィールド名	説明
Avg Ref Recs	1 回のトランザクションで参照したレコード数の平均値。
Avg TAM Upd Size	TAM ファイルに対し、1 回に実更新したデータのバイト数の平均値 (バイト)。
Avg Upd Recs	1 回のトランザクションで更新したレコード数の平均値。
Max Ref Recs	1 回のトランザクションで参照したレコード数の最大値。
Max TAM Upd Size	TAM ファイルに対し、1 回に実更新したデータのバイト数の最大値 (バイト)。
Max Upd Recs	1 回のトランザクションで更新したレコード数の最大値。
Min Ref Recs	1 回のトランザクションで参照したレコード数の最小値。
Min TAM Upd Size	TAM ファイルに対し、1 回に実更新したデータのバイト数の最小値 (バイト)。
Min Upd Recs	1 回のトランザクションで更新したレコード数の最小値。
TAM Ref Trans	TAM 参照トランザクション数。
TAM Updates	TAM ファイルにデータを更新した回数の総和。
TAM Upd Trans	TAM 更新トランザクション数。



# TAM Table Detail

## 概要

TAM Table Detail レポートは、ある時点での TAM テーブルの状態についてリアルタイム情報を表示します。表示形式は表です。

なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレポートは使用できません。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/

## レコード

TAM Table Status (PD\_TAM)

## フィールド

フィールド名	説明
Access	アクセス形態。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• read：参照型</li><li>• rewrite：追加・削除できない更新型</li><li>• write：追加・削除できる更新型</li><li>• reclk：テーブル排他を確保しない、追加・削除できる更新型</li></ul>
Auth Chk	アクセス権限のチェック。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• Y：チェックする</li><li>• N：チェックしない</li></ul>
Fail Proc	入出力エラー時の TAM ファイルの障害処理形態。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• continue：処理を続行</li><li>• stop：障害閉塞状態として処理を中止</li></ul>
File Name	TAM ファイル名。
File State	TAM ファイル状態。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• normal：未閉塞</li><li>• failure shutdown：障害閉塞</li></ul>
Idx	インデックス種別。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• tree：ツリー形式</li><li>• hash：ハッシュ形式</li></ul>
JNL Mode	ジャーナルを取得するモード。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• condense：部分ジャーナルを取得するモード</li><li>• no condense：レコード全体をジャーナルに取得するモード</li></ul>
Loading	ローディング契機。有効な値は次のとおり。

フィールド名	説明
Loading	<ul style="list-style-type: none"> <li>• start : tamadd コマンド実行時</li> <li>• cmd : tamload コマンド実行時</li> <li>• lib : dc_tam_open 関数発行時</li> </ul>
Table Name	TAM テーブル名。
Table State	<p>TAM テーブル状態。有効な値は次のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• normal : 未閉塞</li> <li>• logical shutdown : 論理閉塞</li> <li>• failure shutdown : 障害閉塞</li> <li>• failure recovery : 障害回復待ち</li> </ul>

# Transaction Detail

## 概要

Transaction Detail レポートは、トランザクションマネージャが管理しているトランザクションについて、ある時点での最近 1 日間の 1 時間ごとのリアルタイム情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Troubleshooting/Real-Time/

## レコード

Transaction Status (PD\_TRN)

## フィールド

フィールド名	説明
Br Des	ブランチ記述子。 ルートトランザクションブランチの場合は「*****」が表示される。
Gbl Trm ID	グローバルトランザクション識別子。
PID	プロセス ID。
Pr Br Des	親トランザクション記述子。 ルートトランザクションブランチの場合は「*****」が表示される。
Sv Name	サーバ名。
Svc Name	サービス名。
Trm Br ID	トランザクションブランチ識別子。
Trm Des	トランザクション記述子。
Trm St 1	トランザクション第 1 状態。有効な値は次のとおり。 <ul style="list-style-type: none"><li>• BEGINNING：トランザクションブランチ開始処理中</li><li>• ACTIVE：実行中</li><li>• SUSPENDED：中断中</li><li>• IDLE：同期点処理へ移行</li><li>• PREPARE：コミット（1 相目）処理中</li><li>• READY：コミット（2 相目）処理待ち</li><li>• HEURISTIC_COMMIT：ヒューリスティック決定コミット処理中</li><li>• HEURISTIC_ROLLBACK：ヒューリスティック決定ロールバック処理中</li><li>• COMMIT：コミット処理中</li><li>• ROLLBACK_ACTIVE：ロールバック処理待ち状態</li><li>• ROLLBACK：ロールバック処理中状態</li><li>• HEURISTIC_FORGETTING：ヒューリスティック決定後のトランザクションブランチ終了処理中</li></ul>

フィールド名	説明
Trn St 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>• FORGETTING：トランザクションブランチ終了処理中</li> </ul>
Trn St 2	<p>トランザクション第 2 状態。有効な値は次のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• u：ユーザーサーバプロセスでのユーザーサーバ実行中</li> <li>• r：トランザクション回復プロセスでのトランザクションブランチ回復処理実行中</li> <li>• p：トランザクション回復プロセスでのほかのトランザクションブランチの回復処理完了待ち</li> </ul>
Trn St 3	<p>トランザクション第 3 状態。有効な値は次のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• s：送信中</li> <li>• r：受信済</li> <li>• n：送受信済ではない</li> </ul>

# Transaction Status

---

## 概要

Transaction Status レポートは、OpenTP1 での最近 1 日間の 1 時間ごとのトランザクション実行状況について履歴情報を表示します。表示形式は表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Status Reporting/Daily Trend/

## レコード

System Summary (PI)

## フィールド

フィールド名	説明
Commits	トランザクションのコミット決着回数。
Rollbacks	トランザクションのロールバック決着回数。
Trans/min	収集間隔の間で発生したトランザクション数の平均値（分単位）※。
Transactions	トランザクション数（コミット決着回数とロールバック決着回数の合計値）。

## 注※

分単位の平均値を設定する場合は、次の式に基づいて計算された値が設定されます。

$$\text{設定する値} = (\text{今回収集した値} - \text{前回収集した値}) * 60 / \text{収集間隔 (秒)}$$

ただし、初回または収集エラー直後の収集要求時には、0 が設定されます。

# Transaction Trend

---

## 概要

Transaction Trend レポートは、OpenTP1 で発生したトランザクションの、最近 1 か月間の 1 日ごとの実行数について履歴情報を表示します。表示形式は折れ線グラフと表です。

## 格納先

Reports/OpenTP1/Monthly Trend/

## レコード

System Summary (PI)

## フィールド

フィールド名	説明
Commits	トランザクションのコミット決着回数。
Rollbacks	トランザクションのロールバック決着回数。
Transactions	OpenTP1 システムで発生したトランザクション数。コミット決着回数とロールバック決着回数の合計値。
Trans/min	トランザクション数の平均値 (分単位)。

# 6

## レコード

この章では、PFM - Agent for OpenTP1 のレコードについて説明します。各レコードのパフォーマンスデータの収集方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能、または「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

## データモデルについて

---

各 PFM - Agent が持つレコードおよびフィールドの総称を「データモデル」と呼びます。各 PFM - Agent と、その PFM - Agent が持つデータモデルには、それぞれ固有のバージョン番号が与えられています。PFM - Agent for OpenTP1 のデータモデルのバージョンについては、「[付録 I バージョン互換](#)」を参照してください。

各 PFM - Agent のデータモデルのバージョンは、PFM - Web Console の [エージェント階層] 画面でエージェントアイコンをクリックし、[プロパティの表示] メソッドをクリックして表示される [プロパティ] 画面で確認してください。

データモデルについては、マニュアル「[JP1/Performance Management 設計・構築ガイド](#)」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。



## レコードの記載形式

この章では、PFM - Agent for OpenTP1 のレコードをアルファベット順に記載しています。各レコードの説明は、次の項目から構成されています。

### 機能

各レコードに格納されるパフォーマンスデータの概要および注意事項について説明します。

### デフォルト値および変更できる値

各レコードに設定されているパフォーマンスデータの収集条件のデフォルト値およびユーザーが変更できる値を表で示します。「デフォルト値および変更できる値」に記載している項目とその意味を次の表に示します。この表で示す各項目については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

表 6-1 デフォルト値および変更できる値

項目	意味	変更可否
Collection Interval	パフォーマンスデータの収集間隔 (秒)。	○：変更できる。 ×：変更できない。
Collection Offset <sup>※1</sup>	パフォーマンスデータの収集を開始するオフセット値 (秒)。 オフセット値については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。 また、パフォーマンスデータの収集開始時刻については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照のこと。	
Log	収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうか。 Yes：記録する。ただし、「Collection Interval=0」の場合、記録しない。 No：記録しない。	
LOGIF	収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうかの条件。	
Over 10 Sec Collection Time <sup>※2</sup>	システム構成によって、レコードの収集に 10 秒以上掛かることがあるかどうか。 Yes：10 秒以上掛かることがある。 No：10 秒掛からない。	
Sync Collection With <sup>※3</sup>	収集の同期を取るレコード (レコード種別, レコード ID)。	
Realtime Report Data Collection Mode <sup>※2</sup>	リアルタイムレポートの表示モードを指定。 Reschedule：再スケジュールモード Temporary Log：一時保存モード	

項目	意味	変更可否
Realtime Report Data Collection Mode*2	なお、Over 10 Sec Collection Time の値が「Yes」のレコードには、一時保存モード (Temporary Log) を指定する必要がある。	○：変更できる。 ×：変更できない。

#### 注※1

指定できる値は、0～32,767 秒 (Collection Interval で指定した値の範囲内) です。これは、複数のデータを収集する場合に、一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので、収集処理の負荷を分散するために使用します。なお、データ収集の記録時間は、Collection Offset の値に関係なく、Collection Interval と同様の時間となります。

Collection Offset の値を変更する場合は、収集処理の負荷を考慮した上で値を指定してください。

#### 注※2

履歴収集優先機能が有効の場合に表示されます。

#### 注※3

Sync Collection With の表示がある場合、Collection Interval と Collection Offset は表示されません。

## ODBC キーフィールド

PFM - Manager または PFM - Base で、Store データベースに格納されているレコードのデータを利用する場合に必要な主キーを示します。ODBC キーフィールドには、各レコード共通のものと各レコード固有のものがあります。ここで示すのは、各レコード固有の ODBC キーフィールドです。複数インスタンスレコードだけが、固有の ODBC キーフィールドを持っています。

各レコード共通の ODBC キーフィールドについては、この章の「[ODBC キーフィールド一覧](#)」を参照してください。

## ライフタイム

各レコードに収集されるパフォーマンスデータの一貫性が保証される期間を示します。ライフタイムについては、マニュアル「[JP1/Performance Management 設計・構築ガイド](#)」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

## レコードサイズ

1 回の収集で各レコードに格納されるパフォーマンスデータの容量を示します。

## フィールド

各レコードのフィールドについて表で説明します。表の各項目について次に説明します。

- PFM - View 名 (PFM - Manager 名)
  - PFM - View 名  
PFM - Web Console で表示されるフィールド名を示します。

- PFM - Manager 名

PFM - Manager で、SQL を使用して Store データベースに格納されているフィールドのデータを利用する場合、SQL 文で記述するフィールド名 (PFM - Manager 名) を示します。

SQL 文では、先頭に各レコードのレコード ID を付けた形式で記述します。例えば、System Summary (PI) レコードの Commits (COMMITTS) フィールドの場合、「PI\_COMMITTS」と記述します。

- 説明

各フィールドに格納されるパフォーマンスデータについて説明します。

- 形式

char 型や float 型など、各フィールドの値のデータ型を示します。データ型については、この章の「[データ型一覧](#)」を参照してください。

- デルタ

累積値として収集するデータに対し、変化量でデータを表すことを「[デルタ](#)」と呼びます。デルタについては、この章の「[フィールドの値](#)」を参照してください。

- データソース

該当するフィールドの値の計算方法または取得先を示します。フィールドの値については、この章の「[フィールドの値](#)」を参照してください。

- 要約

Agent Store がデータを要約するときの方法 (要約ルール) を示します。要約ルールについては、この章の「[要約ルール](#)」を参照してください。

## ODBC キーフィールド一覧

ODBC キーフィールドには、各レコード共通のものと各レコード固有のものがあります。ここで示すのは、各レコード共通の ODBC キーフィールドです。PFM - Manager で Store データベースに格納されているレコードのデータを利用する場合、ODBC キーフィールドが必要です。

各レコード共通の ODBC キーフィールド一覧を次の表に示します。各レコード固有の ODBC キーフィールドについては、各レコードの説明を参照してください。

表 6-2 各レコード共通の ODBC キーフィールド一覧

ODBC キーフィールド	ODBC フォーマット	データ	説明
レコード ID_DATE	SQL_INTEGER	内部	レコードが生成された日付を表すレコードのキー。
レコード ID_DATETIME	SQL_INTEGER	内部	レコード ID_DATE フィールドとレコード ID_TIME フィールドの組み合わせ。
レコード ID_DEVICEID	SQL_VARCHAR	内部	インスタンス名[ホスト名]。
レコード ID_DRAWER_TYPE	SQL_VARCHAR	内部	区分。有効な値を次に示す。 m：分 H：時 D：日 W：週 M：月 Y：年
レコード ID_PROD_INST	SQL_VARCHAR	内部	PFM - Agent のインスタンス名。
レコード ID_PRODID	SQL_VARCHAR	内部	PFM - Agent のプロダクト ID。
レコード ID_RECORD_TYPE	SQL_VARCHAR	内部	レコードタイプを表す識別子（4 バイト）。
レコード ID_TIME	SQL_INTEGER	内部	レコードが生成された時刻（グリニッジ標準時）。

## 要約ルール

PI レコードタイプのレコードでは、Collection Interval に設定された間隔で収集されるデータと、あらかじめ定義されたルールに基づき一定の期間（分、時、日、週、月、または年単位）ごとに要約されたデータが、Store データベースに格納されます。要約の種類はフィールドごとに定義されています。この定義を「要約ルール」と呼びます。

要約ルールによっては、要約期間中の中間データを保持する必要があるものがあります。この場合、中間データを保持するためのフィールドが Store データベース内のレコードに追加されます。このフィールドを「追加フィールド」と呼びます。追加フィールドの一部は、PFM - Web Console でレコードのフィールドとして表示されます。PFM - Web Console に表示される追加フィールドは、履歴レポートに表示するフィールドとして使用できます。

なお、要約によって追加される「追加フィールド」と区別するために、ここでは、この章の各レコードの説明に記載されているフィールドを「固有フィールド」と呼びます。

追加フィールドのフィールド名は次のようになります。

- Store データベースに格納される追加フィールド名  
固有フィールドの PFM - Manager 名にサフィックスが付加されたフィールド名になります。
- PFM - Web Console で表示される追加フィールド名  
固有フィールドの PFM - View 名にサフィックスが付加されたフィールド名になります。

PFM - Manager 名に付加されるサフィックスと、それに対応する PFM - View 名に付加されるサフィックス、およびフィールドに格納されるデータを次の表に示します。

表 6-3 追加フィールドのサフィックス一覧

PFM - Manager 名	PFM - View 名	格納データ
_TOTAL	(Total)	要約期間内のレコードのフィールドの値の総和
_COUNT	—	要約期間内の収集レコード数
_HI	(Max)	要約期間内のレコードのフィールド値の最大値
_LO	(Min)	要約期間内のレコードのフィールド値の最小値

(凡例)

—：追加フィールドがないことを示します。

要約ルールの一覧を次の表に示します。

表 6-4 要約ルール一覧

要約 ルール名	要約ルール
COPY	要約期間内の最新のレコードのフィールド値がそのまま格納される。
AVG	要約期間内のフィールド値の平均値が格納される。 次に計算式を示す。 (フィールド値の総和)/(収集レコード数) 追加フィールド (Store データベース) <ul style="list-style-type: none"> <li>• _TOTAL</li> <li>• _COUNT</li> </ul> 追加フィールド (PFM - Web Console) ※1※2 <ul style="list-style-type: none"> <li>• (Total)</li> </ul>
HI	要約期間内のフィールド値の最大値が格納される。
LO	要約期間内のフィールド値の最小値が格納される。
HILO	要約期間内のデータの最大値, 最小値, および平均値が格納される。 固有フィールドには平均値が格納される。 次に計算式を示す。 (フィールド値の総和)/(収集レコード数) 追加フィールド (Store データベース) <ul style="list-style-type: none"> <li>• _HI</li> <li>• _LO</li> <li>• _TOTAL</li> <li>• _COUNT</li> </ul> 追加フィールド (PFM - Web Console) ※1※2 <ul style="list-style-type: none"> <li>• (Max)</li> <li>• (Min)</li> <li>• (Total)</li> </ul>
—	要約されないことを示す。

注※1

PFM - Manager 名に「\_AVG」が含まれる utime 型のフィールドは、PFM - Web Console に追加される「(Total)」フィールドを履歴レポートで利用できません。

注※2

PFM - Manager 名に次の文字列が含まれるフィールドは、PFM - Web Console に追加される (Total) フィールドを履歴レポートで利用できません。

「\_PER\_」, 「PCT」, 「PERCENT」, 「\_AVG」, 「\_RATE\_TOTAL」

## データ型一覧

各フィールドの値のデータ型と、対応する C および C++ のデータ型の一覧を次の表に示します。この表で示す「データ型」の「フィールド」の値は、各レコードのフィールドの表にある「形式」の列に示されています。

表 6-5 データ型一覧

データ型		サイズ (バイト)	説明
フィールド	C および C++		
char(n)	char( )	( )内の数	n バイトの長さを持つ文字データ。
double	double	8	数値(1.7E±308(15桁))。
float	float	4	数値(3.4E±38(7桁))。
long	long	4	数値(-2,147,483,648~2,147,483,647)。
short	short	2	数値(-32,768~32,767)。
string(n)	char[ ]	( )内の数	n バイトの長さを持つ文字列。最後の文字は、「null」。
time_t	unsigned long	4	数値(0~4,294,967,295)。
timeval	構造体	8	数値 (最初の 4 バイトは秒, 次の 4 バイトはマイクロ秒を表す)。
ulong	unsigned long	4	数値(0~4,294,967,295)。
utime	構造体	8	数値 (最初の 4 バイトは秒, 次の 4 バイトはマイクロ秒を表す)。
word	unsigned short	2	数値(0~65,535)。
(該当なし)	unsigned char	1	数値(0~255)。

## フィールドの値

ここでは、各フィールドに格納される値について説明します。

### データソース

各フィールドには、Performance Management や監視対象プログラムから取得した値や、これらの値をある計算式に基づいて計算した値が格納されます。PFM - Agent for OpenTP1 の「データソース」列の文字列は、各フィールドの値の取得先を示します。例を次に示します。

#### 「Agent Collector」と書かれている場合

そのフィールドに格納される値の取得先が、Agent Collector サービスであることを示します。

#### OpenTP1 のコマンド名が書かれている場合

そのフィールドに格納される値の取得先が、OpenTP1 のコマンドであることを示します。

OpenTP1 のコマンドの詳細についてはマニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照してください。

### デルタ

変化量でデータを表すことを「デルタ」と呼びます。例えば、1 回目に収集されたパフォーマンスデータが「3」、2 回目に収集されたパフォーマンスデータが「4」とすると、変化量として「1」が格納されます。各フィールドの値がデルタ値かどうかは、フィールドの表の「デルタ」列で示します。

PFM - Agent for OpenTP1 で収集されるパフォーマンスデータは、次の表のように異なります。

表 6-6 PFM - Agent for OpenTP1 で収集されるパフォーマンスデータ

レコードタイプ	デルタ	データ種別	[デルタ値で表示] の チェック*	レコードの値
PI レコードタイプ	Yes	リアルタイムデータ	あり	変化量が表示される。
			なし	収集時点の値が表示される。
		<ul style="list-style-type: none"><li>履歴データ</li><li>アラームの監視データ</li></ul>	—	変化量が表示される。
	No	リアルタイムデータ	あり	収集時点の値が表示される。
			なし	収集時点の値が表示される。
		<ul style="list-style-type: none"><li>履歴データ</li><li>アラームの監視データ</li></ul>	—	収集時点の値が表示される。
PD レコードタイプ	Yes	リアルタイムデータ	あり	変化量が表示される。
			なし	累積値が表示される。
	<ul style="list-style-type: none"><li>履歴データ</li><li>アラームの監視データ</li></ul>	—	累積値が表示される。	



レコードタイプ	デルタ	データ種別	[デルタ値で表示] の チェック※	レコードの値
PD レコードタイプ	No	リアルタイムデータ	あり	収集時点の値が表示される。
			なし	収集時点の値が表示される。
		<ul style="list-style-type: none"> <li>• 履歴データ</li> <li>• アラームの監視データ</li> </ul>	—	収集時点の値が表示される。

(凡例)

— : 該当しない

注※

次に示す PFM - Web Console の画面の項目でチェックされていることを示します。

- レポートウィザードの [編集 > 表示設定 (リアルタイムレポート)] 画面の [デルタ値で表示]
- レポートウィンドウの [Properties] タブの [表示設定 (リアルタイムレポート)] の [デルタ値で表示]

パフォーマンスデータが収集される際の注意事項を次に示します。

- PI レコードタイプのレコードが保存されるためには、2 回以上パフォーマンスデータが収集されている必要があります。

PI レコードタイプのレコードには、PFM - Web Console で設定した収集間隔ごとにパフォーマンスデータが収集されます。しかし、パフォーマンスデータの Store データベースへの格納は、PFM - Web Console でパフォーマンスデータの収集の設定をした時点では実行されません。

PI レコードタイプの履歴データには、前回の収集データとの差分を必要とするデータ (デルタ値など) が含まれているため、2 回分のデータが必要になります。このため、履歴データが Store データベースに格納されるまでには、設定した時間の最大 2 倍の時間が掛かります。

例えば、PFM - Web Console でパフォーマンスデータの収集間隔を 18:32 に 300 秒 (5 分) で設定した場合、最初のデータ収集は 18:35 に開始されます。次のデータ収集は 18:40 に開始されます。その後、18:35 と 18:40 に収集されたデータを基に履歴のデータが作成され、8 分後に履歴データとして Store データベースに格納されます。

- リアルタイムレポートには、データ収集時の値が表示されます。ただし、「デルタ値で表示」がチェックされている場合、「デルタ」が「Yes」のフィールドは前回のデータを必要とするため、初回のデータ収集では 0 が表示されます。

## Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド

Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールドを次の表に示します。

表 6-7 Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	形式	デルタ	サポートバージョン	データソース
Agent Host (DEVICEID)	PFM - Agent が動作しているホスト名。	string(256)	No	すべて	—
Agent Instance (PROD_INST)	PFM - Agent のインスタンス名。	string(256)	No	すべて	—
Agent Type (PRODID)	PFM - Agent のプロダクト ID。1 バイトの識別子で表される。	char	No	すべて	—
Date (DATE)	レコードが作成された日。グリニッジ標準時※1※2。	char(3)	No	すべて	—
Date and Time (DATETIME)	Date(DATE)フィールドと Time(TIME)フィールドの組み合わせ※2。	char(6)	No	すべて	—
Drawer Type (DRAWER_TYPE)	PI レコードタイプのレコードの場合、データが要約される区分。PFM - Web Console のレポートで表示する場合と ODBC ドライバを使用して表示する場合とで、区分の表示が異なる。	char	No	すべて	—
GMT Offset (GMT_ADJUST)	グリニッジ標準時とローカル時間の差(秒)。	long	No	すべて	—
Time (TIME)	レコードが作成された時刻。グリニッジ標準時※1※2。	char(3)	No	すべて	—

(凡例)

— : OpenTP1 から取得したパフォーマンスデータを加工してフィールドの値を設定していないことを意味します。

注※1

PI レコードタイプのレコードでは、データが要約されるため、要約される際の基準となる時刻が設定されます。レコード区分ごとの設定値を次の表に示します。

表 6-8 レコード区分ごとの設定値

区分	レコード区分ごとの設定値
分	レコードが作成された時刻の 0 秒

区分	レコード区分ごとの設定値
時	レコードが作成された時刻の0分0秒
日	レコードが作成された日の0時0分0秒
週	レコードが作成された週の月曜日の0時0分0秒
月	レコードが作成された月の1日の0時0分0秒
年	レコードが作成された年の1月1日の0時0分0秒

注※3

レポートによるデータ表示を行った場合、Date フィールドは YYYYMMDD 形式で、Date and Time フィールドは YYYYMMDD hh:mm:ss 形式で、Time フィールドは hh:mm:ss 形式で表示されます。

## Store データベースに格納されているデータをエクスポートすると出力されるフィールド

---

jpctool db dump コマンドで、Store のデータベースに格納されているデータをエクスポートすると、次のフィールドが出力されます。これらのフィールドも、Store データベースに記録される時追加されるフィールドですが、PFM - Web Console では表示されないため、レポートに表示するフィールドとして使用できません。これらのフィールドは、PFM - Agent for OpenTP1 が内部で使用するフィールドであるため使用しないでください。

- レコード ID\_DATE\_F
- レコード ID\_DEVICEID\_F
- レコード ID\_DRAWER\_TYPE\_F
- レコード ID\_DRAWER\_COUNT
- レコード ID\_DRAWER\_COUNT\_F
- レコード ID\_INST\_SEQ
- レコード ID\_PRODID\_F
- レコード ID\_PROD\_INST\_F
- レコード ID\_RECORD\_TYPE
- レコード ID\_RECORD\_TYPE\_F
- レコード ID\_SEVERITY
- レコード ID\_SEVERITY\_F
- レコード ID\_TIME\_F
- レコード ID\_UOWID
- レコード ID\_UOWID\_F
- レコード ID\_UOW\_INST
- レコード ID\_UOW\_INST\_F
- レコード ID\_PFM - Manager 名\_SEC
- レコード ID\_PFM - Manager 名\_MSEC

## レコードの注意事項

---

レコードを収集する場合の注意事項を次に示します。

### OpenTP1 の環境設定

監視対象である OpenTP1 から必要な情報を収集するため、OpenTP1 で次の設定をしてください。

- システム統計情報の出力指定 (PI, PI\_DAMS, PI\_TAMS, または PI\_MCFS レコードを使用する場合)  
dcreport コマンドで有効な情報を収集するために、OpenTP1 のシステム共通定義で定義句 `statistics` に `Y` を指定する必要があります。dcreport コマンドの詳細、および OpenTP1 のシステム定義方法の詳細については、マニュアル「OpenTP1 システム定義」(監視対象が TP1/LiNK の場合、TP1/LiNK 製品に同梱されているドキュメント) を参照してください。
- リアルタイム統計情報サービスの設定 (PI\_RTSS レコードを使用する場合)  
リアルタイム統計情報を収集する場合、次に示す設定が必要です。リアルタイム統計情報の詳細については、マニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照してください。
  - リアルタイム統計情報サービスの実行環境の設定
  - リアルタイム統計情報サービス定義およびリアルタイム取得項目定義の作成

### PFM - Agent for OpenTP1 運用上の注意事項

PFM - Agent for OpenTP1 を運用する上での注意事項を、次に示します。

- MCF 関連データの収集対象  
PFM - Agent for OpenTP1 でサポート対象としている OpenTP1 プロトコル製品は次のとおりです。
  - TP1/NET/TCP/IPなお、PFM - Agent for OpenTP1 では監視対象の OpenTP1 システムで稼働しているすべての OpenTP1 プロトコル製品の情報を収集します。ただし、サポート対象外の OpenTP1 プロトコル製品の情報はデータの正当性を保証しません。
- PI\_RTSS レコードを使用してデータを収集する場合の収集間隔  
PI\_RTSS レコードを使用してデータを収集する場合の収集間隔は、リアルタイム統計情報サービスの取得間隔と同じにすることをお勧めします。  
PFM - Agent for OpenTP1 がデータを収集する場合、リアルタイム統計情報の取得日時が、前回データを収集したときと同じならばレコードを生成しません。これは収集したデータの重複による不正なアラーム評価を避けるためです。
- OpenTP1 の起動・停止処理中のデータ収集  
PFM - Agent for OpenTP1 が、OpenTP1 の起動・停止処理中にデータを収集した場合、データの収集に失敗し、KAVF20105-W が出力されることがありますが、データの収集処理は続行します。

## OpenTP1 運用上の注意事項

監視対象である OpenTP1 を運用する上での注意事項を、次に示します。

- システム統計情報のリセットについて

PI, PI\_DAMS, PI\_MCFS, および PI\_TAMS レコードで使用するシステム統計情報は、OpenTP1 の再起動、`dcreport` コマンド (`-r` オプション指定) または `dcstats` コマンドの実行によって値がリセットされますが、リセットが行われるとデータの継続性が失われます。

次の場合にはリセット実行時に注意が必要です。

- 有効な値を継続的に収集したい場合

有効な値 (特にデルタ値) を継続的に収集したい場合は、`dcreport` コマンド (`-r` オプション指定) の実行は避けてください。

- リアルタイムレポートを一定時間間隔で実行している場合

システム統計情報をリセットするとトランザクション数のように通常単調増加するフィールド (デルタ値が 0 以上となるフィールド) の値が前回より小さな値となり、正しい値を得られません。

このため、リアルタイムレポートを一定時間間隔で実行中にリセットした場合、PFM - Web Console のレポートウィンドウで [最新情報に更新] をクリックする必要があります。

`dcreport` コマンドおよび `dcstats` コマンドの詳細についてはマニュアル「OpenTP1 システム定義」およびマニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照してください。

- リアルタイム統計情報サービスの開始

PI\_RTSS レコードを使用してデータを収集する場合、リアルタイム統計情報サービスを開始 (RTSSUP を起動) させておく必要があります。

## データを取得できない場合のレコード生成結果

フィールドに格納するデータを取得できない場合のレコード生成結果について説明します。

- レコードが生成されない

次の場合、レコードは生成されません。

- ODBC キーフィールドとして定義されたフィールドに格納するパフォーマンスデータを PFM - Agent for OpenTP1 が収集できない場合
- OpenTP1 の性能値を表すフィールドに格納するパフォーマンスデータを PFM - Agent for OpenTP1 が収集できない場合

## レコード一覧

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 で収集できるレコードの一覧を記載します。

PFM - Agent for OpenTP1 で収集できるレコードおよびそのレコードに格納される情報を、カテゴリー別に次の表に示します。

表 6-9 PFM - Agent for OpenTP1 のレコード一覧

カテゴリー	レコード名	レコード ID	格納される情報
共用メモリー	Shared Memory Status	PD_SHM	共用メモリー使用状況を示す情報。 監視対象が TP1/LiNK の場合はサポート対象外。
システム	System Summary	PI	OpenTP1 システムの主な稼働統計情報をベースとし、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
ジャーナル	Journal Status	PD_JNL	ジャーナル取得状況を示す情報。 監視対象が TP1/LiNK の場合はサポート対象外。
スケジュール	Schedule Status	PD_SCD	サービスのスケジュール状態を示す情報。
チェックポイントダンプ	Checkpoint Dump Status	PD_CPD	チェックポイントダンプ取得状態を示す情報。 監視対象が TP1/LiNK の場合はサポート対象外。
トランザクション	Transaction Status	PD_TRN	トランザクション状態を示す情報。
プロセス	Process Status	PD_PRC	プロセス状態を示す情報。
メッセージログ	OpenTP1 Message	PD_MLOG	ログファイルに保存されたメッセージの内、直近 1 時間以内に出力された分の情報。
ロック	Lock Status	PD_LCK	排他制御状態を示す情報。 監視対象が TP1/LiNK の場合はサポート対象外。
DAM	DAM Summary	PI_DAMS	DAM ファイルサービスに関する稼働統計情報をベースとし、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。 監視対象が TP1/LiNK の場合はサポート対象外。
	DAM File Status	PD_DAM	DAM ファイル状態を示す情報。 監視対象が TP1/LiNK の場合はサポート対象外。
MCF	MCF Connection Status	PD_MCFC	MCF コネクション状態を示す情報。
	MCF Service Group Status	PD_MCFG	MCF サービスグループ状態を示す情報。
	MCF Logical Terminal Status	PD_MCFL	MCF 論理端末状態を示す情報。
	MCF Summary	PI_MCFS	MCF サービスに関する稼働統計情報をベースとし、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。

カテゴリー	レコード名	レコード ID	格納される情報
TAM	TAM Table Status	PD_TAM	TAM テーブル状態を示す情報。 監視対象が TP1/LiNK の場合はサポート対象外。
	TAM Summary	PI_TAMS	TAM サービスに関する稼働統計情報をベースとし、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。 監視対象が TP1/LiNK の場合はサポート対象外。
RTS	RTS Summary	PI_RTSS	OpenTP1 のシステム全体、サーバ、およびサービス単位のリアルタイム統計情報をベースとし、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
予約レコード	Product Detail	PD	予約レコードのため使用できない。



# Checkpoint Dump Status (PD\_CPD)

## 機能

Checkpoint Dump Status (PD\_CPD) レコードには、ある時点でのチェックポイントダンプ取得状態を示すデータが格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。サーバ名とファイルグループ名の組み合わせごとに作成されます。なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレコードはサポート対象外です。

## デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	17	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

## ODBC キーフィールド

PD\_CPD\_SV\_NAME

PD\_CPD\_FG\_NAME

## ライフタイム

なし

## レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：37 バイト

## フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
FG Name (FG_NAME)	ファイルグループ名。	—	string(9)	No	jnl ls -j cpd
Gen No (GEN_NO)	世代番号。	—	ulong	No	jnl ls -j cpd
Gen St	世代状態。	—	string(2)	No	jnl ls -j cpd

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
(GEN_ST)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• a: 上書きできない状態</li> <li>• u: 上書きできる, または書き込み中の状態</li> <li>• r: 予約の状態</li> </ul>	—	string(2)	No	jnl1s -j cpd
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	—	ulong	No	Agent Collector
Ov Wr Blk No (OV_WR_BLK_NO)	オーバーライトポイントのジャーナルブロック番号。	—	ulong	No	jnl1s -j cpd
Ov Wr FG Name (OV_WR_FG_NAME)	オーバーライトポイントのジャーナルファイルグループ名。	—	string(9)	No	jnl1s -j cpd
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「CPD」。	—	char(8)	No	Agent Collector
Sv Name (SV_NAME)	サーバ名。	—	string(9)	No	jnl1s -j cpd

# DAM File Status (PD\_DAM)

## 機能

DAM File Status (PD\_DAM) レコードには、ある時点での DAM ファイル状態を示すデータが格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。DAM ファイルごとに作成されます。なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレコードはサポート対象外です。

## デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	26	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

## ODBC キーフィールド

PD\_DAM\_LG\_FILE\_NAME

## ライフタイム

なし

## レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：163 バイト

## フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Add Date (ADD_DATE)	追加日時。	—	string(18 )	No	damlS
Attr (ATTR)	DAM ファイルの属性。 <ul style="list-style-type: none"><li>• Quick write：即書き</li><li>• Deferred write：デファイアード</li><li>• No recovery：回復対象外</li><li>• Cache less：回復対象外およびキャッシュレスアクセス</li></ul>	—	string(31 )	No	damlS

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Blk Size (BLK_SIZE)	ブロック長 (バイト)。	—	long	No	daml s
Blks (BLKS)	ブロック数。	—	long	No	daml s
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	—	ulong	No	Agent Collector
LG-File Name (LG_FILE_NAME)	論理ファイル名。	—	string(9)	No	daml s
PH-File Name (PH_FILE_NAME)	物理ファイル名。	—	string(64 )	No	daml s
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_T YPE)	レコード種別。常に「DAM」。	—	char(8)	No	Agent Collector
Security (SECURITY)	セキュリティの有無。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Y: セキュリティあり</li> <li>• N: セキュリティなし</li> </ul>	—	string(2)	No	daml s
Shutdown (SHUTDOWN)	DAM ファイルの閉塞状態。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Not shutdown: 未閉塞</li> <li>• Logical shutdown: 論理閉塞</li> <li>• Error shutdown: 障害閉塞</li> <li>• Under shutdown request: 閉塞要求中</li> </ul>	—	string(31 )	No	daml s

# DAM Summary (PI\_DAMS)

## 機能

DAM Summary (PI\_DAMS) レコードには、DAM サービスに関する稼働統計情報をベースとし、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレコードはサポート対象外です。

## デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Sync Collection With	PI	×

## ODBC キーフィールド

なし

## ライフタイム

監視対象の OpenTP1 が停止するか、OpenTP1 の `dcreport` コマンド (`-r` オプション) が実行されるまで。

## レコードサイズ

- 固定部：1,077 バイト
- 可変部：0 バイト

## フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Avg DAM Read Size (AVG_DAM_READ_SIZE)	dc_dam_read を発行した単位での DAM ファイルのデータの入力長の平均値 (バイト)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg DAM Read Size/Intval (AVG_DAM_READ_SIZE_INTVAL)	dc_dam_read を発行した単位での DAM ファイルのデータの入力長の収集間隔ごとの平均値 (バイト) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c ※1
Avg DAM Trans (AVG_DAM_TRANS)	DAM を使用するトランザクション数の平均値。	HILO	long	No	dcreport -c

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Avg DAM Write Size (AVG_DAM_WRITE_SIZE)	dc_dam_write または dc_dam_rewrite を発行した単位での DAM ファイルのデータ出力長の平均値 (バイト)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg DAM Write Size/Intval (AVG_DAM_WRITE_SIZE_INTVAL)	dc_dam_write または dc_dam_rewrite を発行した単位での DAM ファイルのデータ出力長の収集間隔ごとの平均値 (バイト) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c ※1
Avg RM-SHM Use Rate (AVG_RM_SHM_USE_RATE)	リソースマネージャ用共用メモリープールの使用率の平均値 (%)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg RM-SHM Use Rate/Intval (AVG_RM_SHM_USE_RATE_INTVAL)	リソースマネージャ用共用メモリープールの使用率の収集間隔ごとの平均値 (%) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c ※1
Avg Upd-Buf Use Size (AVG_UPD_BUF_USE_SIZE)	更新バッファ使用量の平均値 (バイト)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg Upd-Buf Use Size/Intval (AVG_UPD_BUF_USE_SIZE_INTVAL)	更新バッファ使用量の収集間隔ごとの平均値 (バイト) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c ※1
DAM Read Faults (DAM_READ_FAULTS)	dc_dam_read の中で、OS とのインターフェース部分で発生した出力障害数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
DAM Reads (DAM_READS)	dc_dam_read を発行した回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
DAM Write Faults (DAM_WRITE_FAULTS)	実際のディスクとの I/O 時に発生した出力障害回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
DAM Writes (DAM_WRITES)	dc_dam_write または dc_dam_rewrite を発行した回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Deferred Write Trans (DEFERRED_WRITE_TRANS)	ディファード更新指定の DAM ファイルを更新したトランザクション数を 10 で割った回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
FJ Puts (FJ_PUTS)	回復用ジャーナル(FJ)の取得回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	COPY	ulong	No	Agent Collector

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Max DAM Read Size (MAX_DAM_READ_SIZE)	dc_dam_read を発行した単位での DAM ファイルのデータの入力長の最大値 (バイト)。	HI	long	No	dcreport -c
Max DAM Trans (MAX_DAM_TRANS)	DAM を使用するトランザクション数の最大値。	HI	long	No	dcreport -c
Max DAM Write Size (MAX_DAM_WRITE_SIZE)	dc_dam_write または dc_dam_rewrite を発行した単位での DAM ファイルのデータ出力長の最大値 (バイト)。	HI	long	No	dcreport -c
Max RM-SHM Use Rate (MAX_RM_SHM_USE_RATE)	リソースマネージャ用共用メモリープールの使用率の最大値 (%)。	HI	long	No	dcreport -c
Max Upd-Buf Use Size (MAX_UPD_BUF_USE_SIZE)	更新バッファ使用量の最大値 (バイト)。	HI	long	No	dcreport -c
Min DAM Read Size (MIN_DAM_READ_SIZE)	dc_dam_read を発行した単位での DAM ファイルのデータの入力長の最小値 (バイト)。	LO	long	No	dcreport -c
Min DAM Trans (MIN_DAM_TRANS)	DAM を使用するトランザクション数の最小値。	LO	long	No	dcreport -c
Min DAM Write Size (MIN_DAM_WRITE_SIZE)	dc_dam_write または dc_dam_rewrite を発行した単位での DAM ファイルのデータ出力長の最小値 (バイト)。	LO	long	No	dcreport -c
Min RM-SHM Use Rate (MIN_RM_SHM_USE_RATE)	リソースマネージャ用共用メモリープールの使用率の最小値 (%)。	LO	long	No	dcreport -c
Min Upd-Buf Use Size (MIN_UPD_BUF_USE_SIZE)	更新バッファ使用量の最小値 (バイト)。	LO	long	No	dcreport -c
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	COPY	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「DAMS」。	COPY	char(8)	No	Agent Collector
SHM Gets (SHM_GETS)	リソースマネージャ用共用メモリープール内に確保する	AVG	ulong	Yes	dcreport -c

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
SHM Gets (SHM_GETS)	DAM ファイルのデータ用ブロックを確保した回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Total DAM Reads (TOTAL_DAM_READS)	dc_dam_read を発行した回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total DAM Read Faults (TOTAL_DAM_READ_FAULTS)	dc_dam_read の中で、OS とのインターフェース部分で発生した出力障害数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total DAM Writes (TOTAL_DAM_WRITES)	dc_dam_write または dc_dam_rewrite を発行した回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total DAM Write Faults (TOTAL_DAM_WRITE_FAULTS)	実際のディスクとの I/O 時に発生した出力障害回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total Deferred Write Trans (TOTAL_DEFERRED_WRITE_TRANS)	ディファード更新指定の DAM ファイルを更新したトランザクション数を 10 で割った回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total FJ Puts (TOTAL_FJ_PUTS)	回復用ジャーナル (FJ) の取得回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total SHM Gets (TOTAL_SHM_GETS)	リソースマネージャ用共用メモリープール内に確保する DAM ファイルのデータ用ブロックを確保した回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c

#### 注※1

dcreport -c の出力結果そのものではなく、出力結果から計算した値が設定されます。

#### 注※2

収集間隔ごとの平均値には、次の式に基づいて計算された値が設定されます。

$$\text{設定する値} = (\text{今回収集した平均値(累計値)} * \text{今回収集した件数(累計値)} - \text{前回収集した平均値(累計値)} * \text{前回収集した件数(累計値)}) / (\text{今回収集した件数(累計値)} - \text{前回収集した件数(累計値)})$$

ただし、初回または収集エラー直後の収集要求時には、0 が設定されます。



# Journal Status (PD\_JNL)

## 機能

Journal Status (PD\_JNL) レコードには、ある時点でのジャーナル取得状況を示すデータが格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。ファイルグループごとに作成されます。なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレコードはサポート対象外です。

## デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	14	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

## ODBC キーフィールド

PD\_JNL\_FILE\_TYPE

PD\_JNL\_FG\_NAME

## ライフタイム

なし

## レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：52 バイト

## フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Arch (ARCH)	ファイルグループのアーカイブ状態。 • u：アーカイブ待ち • -：アーカイブ済み	-	string(2)	No	jnl ls -j sys
FG Name (FG_NAME)	ファイルグループ名。	-	string(9)	No	jnl ls -j sys
FG Upd (FG_UPD)	ファイルグループが上書きできるか、できないかの状態。	-	string(2)	No	jnl ls -j sys

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
FG Upd (FG_UPD)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• d : 上書きできない</li> <li>• - : 上書きできる</li> </ul>	—	string(2)	No	jnl ls -j sys
File Type (FILE_TYPE)	ファイル種別。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• sys : システムジャーナルファイル</li> </ul>	—	string(4)	No	jnl ls -j sys
Fst Blk No (FST_BLK_NO)	先頭ブロック番号。	—	ulong	No	jnl ls -j sys
Gen No (GEN_NO)	世代番号。	—	ulong	No	jnl ls -j sys
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	—	ulong	No	Agent Collector
Lst Blk No (LST_BLK_NO)	最終ブロック番号。	—	ulong	No	jnl ls -j sys
Opn (OPN)	ファイルグループのオープン状態。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• o : オープン中</li> <li>• c : クローズ中</li> </ul>	—	string(2)	No	jnl ls -j sys
RG Name (RG_NAME)	システムジャーナルファイルの場合、システムジャーナルサービス定義のファイル名。	—	string(9)	No	jnl ls -j sys
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「JNL」。	—	char(8)	No	Agent Collector
Run ID (RUN_ID)	ファイルが使用されたときのジャーナルサービス、またはグローバルサービスのラン ID。	—	ulong	No	jnl ls -j sys
St (ST)	ファイルグループの状態。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• c : 現用</li> <li>• s : 待機中</li> <li>• n : 予約</li> </ul>	—	string(2)	No	jnl ls -j sys
Unld (UNLD)	ファイルグループのアンロード状態。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• u : アンロード待ち</li> <li>• - : アンロード済み</li> </ul>	—	string(2)	No	jnl ls -j sys
Unmat (UNMAT)	ファイルグループの不整合状態。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• c : 障害発生後現用のままとっている要素ファイルがある</li> <li>• - : 正しく処理されているファイル</li> </ul>	—	string(2)	No	jnl ls -j sys
Use	ファイルグループの OpenTP1 での状態。	—	string(2)	No	jnl ls -j sys

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
(USE)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• b : 使用中</li> <li>• - : 未使用</li> </ul>	-	string(2)	No	jnl ls -j sys

## Lock Status (PD\_LCK)

### 機能

Lock Status (PD\_LCK) レコードには、ある時点での排他制御状態を示すデータが格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。各プロセスで使用している排他資源ごとに作成されます。なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレコードはサポート対象外です。

### デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	20	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

### ODBC キーフィールド

PD\_LCK\_PID

PD\_LCK\_RES\_NAME

### ライフタイム

なし

### レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：65 バイト

### フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Deadlock Pri (DEADLOCK_PRI)	デッドロックプライオリティ。	—	long	No	lckls -a
Ex Mode (EX_MODE)	排他制御モード。 • EX：ほかの UAP に参照・更新を許可しない • PR：ほかの UAP に参照だけ許可する	—	string(3)	No	lckls -a
Ex Wait Pri	排他待ちプライオリティ。	—	long	No	lckls -a

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
(EX_WAIT_PRI)	排他待ちプライオリティ。	—	long	No	lckls -a
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	—	ulong	No	Agent Collector
PID (PID)	プロセス ID。	—	string(11 )	No	lckls -a
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_ TYPE)	レコード種別。常に「LCK」。	—	char(8)	No	Agent Collector
Req Type (REQ_TYPE)	要求種別。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• MIGRATE : TAM またはユーザーのロック要求</li> <li>• BRANCH : DAM サービスのロック要求</li> </ul>	—	string(9)	No	lckls -a
Res Name (RES_NAME)	リソース名。 なお、lckls コマンドが出力するリソース名を 16 バイト固定で使用するため、リソース名の長さが 16 バイトより短い場合は後ろに空白文字が付加されたデータとなる。	—	string(17 )	No	lckls -a
Sv ID (SV_ID)	サーバ ID。	—	string(4)	No	lckls -a
Sv Name (SV_NAME)	サーバ名。	—	string(9)	No	lckls -a
Wait Time (WAIT_TIME)	待ち時間 (秒)。 占有情報の場合は 0 を設定する。	—	long	No	lckls -a

# MCF Connection Status (PD\_MCFC)

## 機能

MCF Connection Status (PD\_MCFC) レコードには、ある時点での MCF コネクション状態を示すデータが格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。MCF コネクションごとに作成されます。

## デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset from Top of Minute	35	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

## ODBC キーフィールド

PD\_MCFC\_MCF\_IDENTIFIER

PD\_MCFC\_CONNECTION\_ID

## ライフタイム

なし

## レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：41 バイト

## フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Connection ID (CONNECTION_ID)	コネクション ID。	—	string(9)	No	mcftlscn - c "*"
Connection Status (CONNECTION_STATUS)	コネクション状態。 • ACT：確立状態 • ACT/B：確立処理中状態 • DCT：解放状態 • DCT/B：解放処理中状態	—	string(8)	No	mcftlscn - c "*"

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Detail Status (DETAIL_STATUS)	詳細ステータス（保守情報）※。	—	string(16)	No	mcftlscn - c "*"
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間（秒）。	—	ulong	No	Agent Collector
MCF Identifier (MCF_IDENTIFIER)	MCF 識別子。	—	string(4)	No	mcftlscn - c "*"
Protocol Kind (PROTOCOL_KIND)	プロトコル種別。 • TCP：TCP/IP プロトコル (TP1/NET/TCP/IP)	—	string(4)	No	mcftlscn - c "*"
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンス データの収集終了時刻。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TY PE)	レコード種別。常に「MCFC」。	—	char(8)	No	Agent Collector

#### 注※

出力される詳細ステータスは、OpenTP1 の mcftlscn（接続の状態表示）コマンドで出力される値と同じです。値の詳細については、各接続の通信プロトコルに対応する OpenTP1 のプロトコル製品のマニュアルを参照してください。

# MCF Service Group Status (PD\_MCFG)

## 機能

MCF Service Group Status (PD\_MCFG) レコードには、ある時点での MCF サービスグループ状態を示すデータが格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。MCF サービスグループごとに作成されます。

## デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset from Top of Minute	41	○
Log	N	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

## ODBC キーフィールド

PD\_MCFG\_MCF\_IDENTIFIER

PD\_MCFG\_SVG\_NAME

## ライフタイム

なし

## レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：52 バイト

## フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	—	ulong	No	Agent Collecto r
MCF Identifier (MCF_IDENTIFIER)	MCF 識別子。	—	string(4)	No	mcftlssg -g"*"
Rcv Msg Count (RCV_MSG_COUNT)	受信メッセージ数。	—	long	No	mcftlssg -g"*"



PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集の終了時刻。	—	time_t	No	Agent Collecto r
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「MCFG」。	—	char(8)	No	Agent Collecto r
Svg Input (SVG_INPUT)	サービスグループの状態（入力）。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ACT：閉塞解除</li> <li>• DCT：閉塞</li> <li>• ***：SPP のサービスグループの場合</li> </ul>	—	string(6)	No	mcftlssg -g"*"
Svg Name (SVG_NAME)	サービスグループ名。	—	string(32 )	No	mcftlssg -g"*"
Svg Schedule (SVG_SCHEDULE)	サービスグループの状態（スケジュール）。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ACT：閉塞解除</li> <li>• DCT：閉塞</li> <li>• ***：SPP のサービスグループの場合</li> </ul>	—	string(6)	No	mcftlssg -g"*"

# MCF Logical Terminal Status (PD\_MCFL)

## 機能

MCF Logical Terminal Status (PD\_MCFL) レコードには、ある時点での MCF 論理端末状態を示すデータが格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。MCF 論理端末ごとに作成されます。

## デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset from Top of Minute	38	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

## ODBC キーフィールド

PD\_MCFL\_MCF\_IDENTIFIER

PD\_MCFL\_LG\_TERM\_NAME

## ライフタイム

なし

## レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：82 バイト

## フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
ALT Kind (ALT_KIND)	予備。	—	string(6)	No	mcftlsle - l "*"
ALT LG-Term Name (ALT_LG_TERM_NAME)	予備。	—	string(9)	No	mcftlsle - l "*"
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	—	ulong	No	Agent Collector

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
IO Msg Count (IO_MSG_COUNT)	非同期型問い合わせ応答メッセージの未送信メッセージ数。	—	long	No	mcftlsle - l "*"
LG-Term Status (LG_TERM_STATUS)	論理端末の状態。 • ACT：閉塞解除状態 • DCT：閉塞状態	—	string(6)	No	mcftlsle - l "*"
LG-Term Name (LG_TERM_NAME)	論理端末の名称。	—	string(9)	No	mcftlsle - l "*"
Max IO Msg Ser No (MAX_IO_MSG_SER_NO)	非同期型問い合わせ応答メッセージの未送信メッセージ最大通番。	—	long	No	mcftlsle - l "*"
Max NORM Msg Ser No (MAX_NORM_MSG_SER_NO)	非同期型一方送信メッセージ（一般）の未送信メッセージ最大通番。	—	long	No	mcftlsle - l "*"
Max PRIO Msg Ser No (MAX_PRIO_MSG_SER_NO)	非同期型一方送信メッセージ（優先）の未送信メッセージ最大通番。	—	long	No	mcftlsle - l "*"
Max SYNC Msg Ser No (MAX_SYNC_MSG_SER_NO)	同期型メッセージの未送信メッセージ最大通番。	—	long	No	mcftlsle - l "*"
MCF Identifier (MCF_IDENTIFIER)	MCF 識別子。	—	string(4)	No	mcftlsle - l "*"
Min IO Msg Ser No (MIN_IO_MSG_SER_NO)	非同期型問い合わせ応答メッセージの未送信メッセージ最小通番。	—	long	No	mcftlsle - l "*"
Min NORM Msg Ser No (MIN_NORM_MSG_SER_NO)	非同期型一方送信メッセージ（一般）の未送信メッセージ最小通番。	—	long	No	mcftlsle - l "*"
Min PRIO Msg Ser No (MIN_PRIO_MSG_SER_NO)	非同期型一方送信メッセージ（優先）の未送信メッセージ最小通番。	—	long	No	mcftlsle - l "*"
Min SYNC Msg Ser No (MIN_SYNC_MSG_SER_NO)	同期型メッセージの未送信メッセージ最小通番。	—	long	No	mcftlsle - l "*"
NORM Msg Count (NORM_MSG_COUNT)	非同期型一方送信メッセージ（一般）の未送信メッセージ数。	—	long	No	mcftlsle - l "*"

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
PRIO Msg Count (PRIO_MSG_COUNT)	非同期型一方送信メッセージ（優先）の未送信メッセージ数。	—	long	No	mcftlsle - l "*"
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「MCFL」。	—	char(8)	No	Agent Collector
SYNC Msg Count (SYNC_MSG_COUNT)	同期型メッセージの未送信メッセージ数。	—	long	No	mcftlsle - l "*"

# MCF Summary (PI\_MCFS)

## 機能

MCF Summary (PI\_MCFS) レコードには、MCF サービスに関する稼働統計情報をベースとし、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

## デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Log	N	○
LOGIF	空白	○
Sync Collection With	PI	×
Over 10 Sec Collection Time	No	×

## ODBC キーフィールド

なし

## ライフタイム

監視対象の OpenTP1 が停止するか、OpenTP1 の `dcreport` コマンド (-r オプション) が実行されるまで。

## レコードサイズ

- 固定部：781 バイト
- 可変部：0 バイト

## フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Connection Faults (CONNECTION_FAULTS)	OpenTP1 ノード内で発生した接続障害回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Disk Que Outputs (DISK_QUEUE_OUTPUTS)	OpenTP1 ノード内のディスクキューからのメッセージ取り出し回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Disk Que Inputs (DISK_QUEUE_INPUTS)	OpenTP1 ノード内のディスクキューに対するメッセージ書き込み回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	COPY	ulong	No	AgentCollector

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Memory Que Outputs (MEMORY_QUE_OUTPUTS)	OpenTP1 ノード内のメモリーキューからのメッセージ取り出し回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport - c
Memory Que Inputs (MEMORY_QUE_INPUTS)	OpenTP1 ノード内のメモリーキューに対するメッセージ書き込み回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport - c
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	COPY	time_t	No	AgentCollector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「MCFS」。	COPY	char(8)	No	AgentCollector
Total Connection Faults (TOTAL_CONNECTION_FAULTS)	OpenTP1 ノード内で発生した接続障害回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport - c
Total Disk Que Outputs (TOTAL_DISK_QUE_OUTPUTS)	OpenTP1 ノード内のディスクキューからのメッセージ取り出し回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport - c
Total Disk Que Inputs (TOTAL_DISK_QUE_INPUTS)	OpenTP1 ノード内のディスクキューに対するメッセージ書き込み回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport - c
Total Memory Que Outputs (TOTAL_MEMORY_QUE_OUTPUTS)	OpenTP1 ノード内のメモリーキューからのメッセージ取り出し回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport - c
Total Memory Que Inputs (TOTAL_MEMORY_QUE_INPUTS)	OpenTP1 ノード内のメモリーキューに対するメッセージ書き込み回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport - c

# OpenTP1 Message (PD\_MLOG)

## 機能

OpenTP1 Message (PD\_MLOG) レコードには、ログファイルに保存されたメッセージの内、直近 1 時間以内に出力された分のデータが格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。メッセージごとに作成されます。

## デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3,600	○
Collection Offset	32	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

## ODBC キーフィールド

PD\_MLOG\_LOG\_DATE

PD\_MLOG\_LOG\_TIME

PD\_MLOG\_MSG\_ID

PD\_MLOG\_SER\_NO

## ライフタイム

なし

## レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：520 バイト（データモデルバージョン（5.0）の場合）、843 バイト（データモデルバージョン（5.1）または（5.2）の場合）

## フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Host (HOST)	ホスト名。	—	string(9)	No	logcat -a

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	—	ulong	No	Agent Collector
Log Date (LOG_DATE)	年月日 (年/月/日の形式)。	—	string(11)	No	logcat -a
Log Time (LOG_TIME)	時刻 (時:分:秒の形式)。	—	string(9)	No	logcat -a
Message Text (MESSAGE_TEXT)	メッセージテキスト。	—	データモデルバージョン (5.0) の場合 string(445) データモデルバージョン (5.1) または (5.2) の場合 string(768)	No	logcat -a
Msg ID (MSG_ID)	メッセージ ID。	—	string(12)	No	logcat -a
PID (PID)	プロセス ID。	—	string(11)	No	logcat -a
Proc Ser No (PROC_SER_NO)	プロセス内メッセージ通番。	—	string(8)	No	logcat -a
Prog (PROG)	プログラム ID。	—	string(4)	No	logcat -a
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「MLOG」。	—	char(8)	No	Agent Collector
SID (SID)	システム ID。	—	string(3)	No	logcat -a
Ser No (SER_NO)	メッセージ通番。	—	string(8)	No	logcat -a



## Process Status (PD\_PRC)

### 機能

Process Status (PD\_PRC) レコードには、ある時点でのプロセス状態を示すデータが格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。プロセスごとに作成されます。

### デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	11	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

### ODBC キーフィールド

PD\_PRC\_PID

PD\_PRC\_SV\_NAME

### ライフタイム

なし

### レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：91 バイト

### フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Exe File (EXE_FILE)	実行形式ファイル名。	—	string(15)	No	prcls
Group ID (GROUP_ID)	グループ ID。 プロセスサービスから生成された子プロセス以外のプロセスの場合は、「*」が表示される。	—	string(11)	No	prcls
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	—	ulong	No	Agent Collector

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
PID (PID)	プロセス ID。	—	string(11)	No	prcls
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「PRC」。	—	char(8)	No	Agent Collector
Sv Name (SV_NAME)	サーバ名。	—	string(9)	No	prcls
Sv St (SV_ST)	サーバの状態。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• D：サーバ開始処理中または終了処理中</li> <li>• L：サーバ実行中</li> <li>• *：デバッグプロセス</li> </ul>	—	string(2)	No	prcls
Svg Name (SVG_NAME)	サービスグループ名。	—	string(32)	No	prcls
User ID (USER_ID)	ユーザー ID。 プロセスサービスから生成された子プロセス以外のプロセスの場合は、「*」が表示される。	—	string(11)	No	prcls

# RTS Summary (PI\_RTSS)

## 機能

RTS Summary (PI\_RTSS) レコードには、OpenTP1 のシステム全体、サーバ、およびサービス単位のリアルタイム統計情報をベースとし、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。リアルタイム統計情報項目 ID、サーバ名（取得対象名 1）、およびサービス名（取得対象名 2）の組み合わせによって 1 行で作成されます。

## デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset from Top of Minute	0	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

## ODBC キーフィールド

PI\_RTSS\_EVENT\_ID

PI\_RTSS\_SV\_NAME

PI\_RTSS\_SVC\_NAME

## ライフタイム

監視対象の OpenTP1 が停止するか、リアルタイム統計情報サービスが停止されるまで。

## レコードサイズ

- 固定部：726 バイト
- 可変部：244 バイト

## フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Average (AVERAGE)	リアルタイム統計情報の平均値。	HILO	double	No	rtsls -c
Counts (COUNTS)	リアルタイム統計情報の発生件数。	AVG	double	No	rtsls -c

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
End Time (END_TIME)	リアルタイム統計情報の取得終了日時。	COPY	string(20)	No	rtsls -c
Event (EVENT)	リアルタイム統計情報項目名。	COPY	string(64)	No	rtsls -c
Event ID (EVENT_ID)	リアルタイム統計情報項目ID。	COPY	string(11)	No	rtsls -c
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	COPY	ulong	No	AgentCollector
Maximum (MAXIMUM)	リアルタイム統計情報の最大値。	HI	double	No	rtsls -c
Minimum (MINIMUM)	リアルタイム統計情報の最小値。	LO	double	No	rtsls -c
Node ID (NODE_ID)	OpenTP1 ノード識別子。	COPY	string(5)	No	rtsls -c
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	COPY	time_t	No	AgentCollector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「RTSS」。	COPY	char(8)	No	AgentCollector
Start Time (START_TIME)	リアルタイム統計情報の取得開始日時。	COPY	string(20)	No	rtsls -c
Sv Name (SV_NAME)	サーバ名 (取得対象名 1)。	COPY	string(9)	No	rtsls -c
Svc Name (SVC_NAME)	サービス名 (取得対象名 2) ※。	COPY	string(64)	No	rtsls -c
Type (TYPE)	リアルタイム統計情報種別。	COPY	string(4)	No	rtsls -c
Units (UNITS)	リアルタイム統計情報の単位。	COPY	string(20)	No	rtsls -c

## 注※

次に示す統計情報の場合、出力される情報は `rtsls -c` コマンドの出力結果そのものではなく、PFM - Agent for OpenTP1 によって独自の値が設定されます。なお、△は半角スペースを示します。

- システム全体の統計情報 (Sv Name フィールドが "\_SYSTEM", かつ `rtsls -c` コマンドの出力結果が "△△△△") の場合, "\_SYSTEM△ONLY" が出力されます。

- サーバ単位で取得したリアルタイム統計情報 (rtsls -c コマンドの出力結果が"△△△△") の場合, "\_SERVER△ONLY"が出力されます。
- サービス以外の処理単位で取得したリアルタイム統計情報 (rtsls -c コマンドの出力結果が"\*\*\*\*") の場合, "\_NOT△SERVICE"が出力されます。

# Schedule Status (PD\_SCD)

## 機能

Schedule Status (PD\_SCD) レコードには、ある時点でのサービスのスケジュール状態を示すデータが格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。サーバごとに作成されます。

## デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	8	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

## ODBC キーフィールド

PD\_SCD\_SV\_NAME

## ライフタイム

なし

## レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：67 バイト

## フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	—	ulong	No	Agent Collector
Max Buf Unuse Size (MAX_BUF_UNUSE_SIZE)	メッセージ格納用プールの現在の最大連続未使用サイズ (バイト)。	—	long	No	scdls
Max Buf Use Size (MAX_BUF_USE_SIZE)	メッセージ格納用プールの最大使用サイズ (バイト)。	—	long	No	scdls
Max Req Que Len (MAX_REQ_QUE_LEN)	スケジュールキューに滞留したサービス要求の最大数。	—	long	No	scdls

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Msg Buf Unuse Size (MSG_BUF_UNUSE_SIZE)	メッセージ格納用プールの現在の未使用サイズ (バイト)。	—	long	No	scdls
Msg Buf Use Size (MSG_BUF_USE_SIZE)	メッセージ格納用プールの現在の使用サイズ (バイト)。	—	long	No	scdls
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「SCD」。	—	char(8)	No	Agent Collector
Req Que Len (REQ_QUE_LEN)	スケジュールキューに滞留しているサービス要求数。	—	long	No	scdls
Sv Name (SV_NAME)	サーバ名。	—	string(9)	No	scdls
Sv St (SV_ST)	サーバの状態。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• S:サーバ準備中</li> <li>• A:スケジューリングできる状態</li> <li>• E:サーバ終了処理中</li> <li>• H:サーバ閉塞中</li> <li>• P:サービス要求を受け付けられる状態で閉塞中</li> </ul>	—	string(2)	No	scdls
Svg Name (SVG_NAME)	サービスグループ名。	—	string(32)	No	scdls

# Shared Memory Status (PD\_SHM)

## 機能

Shared Memory Status (PD\_SHM) レコードには、ある時点での共用メモリー使用状況を示すデータが格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。共用メモリープール種別ごとに作成されます。なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレコードはサポート対象外です。

## デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	23	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

## ODBC キーフィールド

PD\_SHM\_POOL\_TYPE

## ライフタイム

なし

## レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：27 バイト

## フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	—	ulong	No	Agent Collector
Max Size (MAX_SIZE)	共用メモリーの最大使用量 (バイト)。	—	ulong	No	dcshmls
Pool Size (POOL_SIZE)	共用メモリープールの大きさ (バイト)。	—	ulong	No	dcshmls
Pool Type (POOL_TYPE)	共用メモリープール種別。 • static：静的共用メモリー	—	string(11)	No	dcshmls



PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Pool Type (POOL_TYPE)	<ul style="list-style-type: none"> <li>dynamic：動的共用メモリー</li> </ul>	—	string(11)	No	dcshmls
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「SHM」。	—	char(8)	No	Agent Collector
Use Rate (USE_RATE)	現在の共用メモリーの使用率 (%)。	—	ulong	No	dcshmls
Use Size (USE_SIZE)	現在使用中の共用メモリーの合計 (バイト)。	—	ulong	No	dcshmls

# System Summary (PI)

## 機能

System Summary (PI) レコードには、OpenTP1 システムの主な稼働統計情報をベースとし、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

## デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	○
Collection Offset	0	○
Log	Yes	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

## ODBC キーフィールド

なし

## ライフタイム

監視対象の OpenTP1 が停止するか、OpenTP1 の `dcreport` コマンド (-r オプション) が実行されるまで。

## レコードサイズ

- 固定部：2,385 バイト
- 可変部：0 バイト

## フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
Avg Buf Pool Use Size (AVG_BUF_POOL_USE_SIZE)	ユーザーサーバのメッセージ格納バッファプールの使用中サイズの平均値 (バイト)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg Buf Pool Use Size/Intval (AVG_BUF_POOL_USE_SIZE _INTVAL)	ユーザーサーバのメッセージ格納バッファプールの使用中サイズの収集間隔ごとの平均値 (バイト) *2。	HILO	long	No	dcreport -c*1
Avg CPD Put Interval (AVG_CPD_PUT_INTERVAL)	前回のチェックポイントから今回のチェックポイントまでの時間間隔の平均値 (ミリ秒)。	HILO	long	No	dcreport -c

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
Avg CPD Put Interval/Intval (AVG_CPD_PUT_INTERVAL_INTVAL)	前回のチェックポイントから今回のチェックポイントまでの時間間隔の収集間隔ごとの平均値 (ミリ秒) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1
Avg CPD Valid Time (AVG_CPD_VALID_TIME)	チェックポイントダンプ取得契機が発生し、各システムサーバで取得処理を開始してから有効化が完了するまでの時間の平均値 (ミリ秒)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg CPD Valid Time/Intval (AVG_CPD_VALID_TIME_INTVAL)	チェックポイントダンプ取得契機が発生し、各システムサーバで取得処理を開始してから有効化が完了するまでの時間の収集間隔ごとの平均値 (ミリ秒) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1
Avg Dy-SHM Size (AVG_DY_SHM_SIZE)	動的共用メモリーブロックの最大使用サイズの平均値 (バイト)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg Dy-SHM Size/Intval (AVG_DY_SHM_SIZE_INTVAL)	動的共用メモリーブロックの最大使用サイズの収集間隔ごとの平均値 (バイト) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1
Avg Dy-SHM Total Size (AVG_DY_SHM_TOTAL_SIZE)	動的共用メモリーブロックの確保・解放処理後の動的共用メモリーブロックの現在の総使用サイズの平均値 (バイト)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg Dy-SHM Total Size/Intval (AVG_DY_SHM_TOTAL_SIZE_INTVAL)	動的共用メモリーブロックの確保・解放処理後の動的共用メモリーブロックの現在の総使用サイズの収集間隔ごとの平均値 (バイト) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1
Avg JNL Input Size (AVG_JNL_INPUT_SIZE)	ジャーナルファイルから入力したデータ長の平均値 (バイト)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg JNL Input Size/Intval (AVG_JNL_INPUT_SIZE_INTVAL)	ジャーナルファイルから入力したデータ長の収集間隔ごとの平均値 (バイト) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1
Avg JNL Put Wait Bufs (AVG_JNL_PUT_WAIT_BUFS)	ジャーナル出力完了時に出力待ちをしているバッファ面数の平均値 (面数*100)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg JNL Put Wait Bufs/Intval (AVG_JNL_PUT_WAIT_BUFS_INTVAL)	ジャーナル出力完了時に出力待ちをしているバッファ面数の収集間隔ごとの平均値 (面数*100) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1
Avg JNL Swap Time (AVG_JNL_SWAP_TIME)	ジャーナルファイルをスワップする際のオーバーヘッド時間の平均値 (マイクロ秒)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg JNL Swap Time/Intval (AVG_JNL_SWAP_TIME_INTVAL)	ジャーナルファイルをスワップする際のオーバーヘッド時間の収集間隔ごとの平均値 (マイクロ秒) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
Avg JNL-Blk Put Len (AVG_JNL_BLK_PUT_LEN)	ジャーナルブロックのデータ長の平均値 (バイト)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg JNL-Blk Put Len/Intval (AVG_JNL_BLK_PUT_LEN_IN TVAL)	ジャーナルブロックのデータ長の収集間隔 ごとの平均値 (バイト) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1
Avg Lock Que Len (AVG_LOCK_QUE_LEN)	ロック待ちが発生したときの待ち行列長の 平均値。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg Lock Que Len/Intval (AVG_LOCK_QUE_LEN_INT VAL)	ロック待ちが発生したときの待ち行列長の 収集間隔ごとの平均値※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1
Avg Lock Wait Time (AVG_LOCK_WAIT_TIME)	ロック待ちが発生したときの待ち状態に なってから待ち状態が解除されるまでの時 間の平均値 (ミリ秒)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg Lock Wait Time/Intval (AVG_LOCK_WAIT_TIME_I NTVAL)	ロック待ちが発生したときの待ち状態に なってから待ち状態が解除されるまでの時 間の収集間隔ごとの平均値 (ミリ秒) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1
Avg Processes (AVG_PROCESSES)	OpenTP1 システムで起動されているシス テムサービスと UAP プロセス数の平均値。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg RPC Res Time (AVG_RPC_RES_TIME)	クライアント側でサーバに要求を送信して からサーバから応答を受け取るまでの時間 の平均値 (マイクロ秒)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg RPC Res Time/Intval (AVG_RPC_RES_TIME_INTV AL)	クライアント側でサーバに要求を送信して からサーバから応答を受け取るまでの時間 の収集間隔ごとの平均値 (マイクロ秒) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1
Avg SCD Fault Size (AVG_SCD_FAULT_SIZE)	ユーザーサーバへのサービス要求のうち、 メッセージ格納バッファプール不足によっ て、スケジュールできなかったサービス要 求メッセージ長の平均値 (バイト)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg SCD Fault Size/Intval (AVG_SCD_FAULT_SIZE_IN TVAL)	ユーザーサーバへのサービス要求のうち、 メッセージ格納バッファプール不足によっ て、スケジュールできなかったサービス要 求メッセージ長の収集間隔ごとの平均値 (バイト) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1
Avg SCD Que Len (AVG_SCD_QUE_LEN)	ユーザーサーバのスケジュールキューに滞 留したサービス要求数の平均値。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg SCD Que Len/Intval (AVG_SCD_QUE_LEN_INTV AL)	ユーザーサーバのスケジュールキューに滞 留したサービス要求数の収集間隔ごとの平 均値※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
Avg St-SHM Size (AVG_ST_SHM_SIZE)	静的共用メモリーブロックの最大使用サイズの平均値 (バイト)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg St-SHM Size/Intval (AVG_ST_SHM_SIZE_INTVAL)	静的共用メモリーブロックの最大使用サイズの収集間隔ごとの平均値 (バイト) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1
Avg St-SHM Total Size (AVG_ST_SHM_TOTAL_SIZE)	静的共用メモリーブロックの確保・解放処理後の静的共用メモリーブロックの現在の総使用サイズの平均値 (バイト)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg St-SHM Total Size/Intval (AVG_ST_SHM_TOTAL_SIZE_INTVAL)	静的共用メモリーブロックの確保・解放処理後の静的共用メモリーブロックの現在の総使用サイズの収集間隔ごとの平均値 (バイト) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1
Avg Svc Req Msg Size (AVG_SVC_REQ_MSG_SIZE)	ユーザーサーバが受信したサービス要求メッセージ長の平均値 (バイト)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg Svc Req Msg Size/Intval (AVG_SVC_REQ_MSG_SIZE_INTVAL)	収集間隔の間で発生したサービス要求について、ユーザーサーバが受信したサービス要求メッセージ長の収集間隔ごとの平均値 (バイト) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1
Avg Svc Time (AVG_SVC_TIME)	要求したサービス関数の実行時間の平均値 (マイクロ秒)。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg Svc Time/Intval (AVG_SVC_TIME_INTVAL)	要求したサービス関数の実行時間の収集間隔ごとの平均値 (マイクロ秒) ※2。	HILO	long	No	dcreport -c※1
CPD Puts (CPD_PUTS)	チェックポイントダンプの契機数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Commits (COMMITTS)	トランザクションのコミット決着回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Deadlocks (DEADLOCKS)	デッドロックの発生件数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Dy-SHM Gets (DY_SHM_GETS)	編集対象時間内に取得した統計情報ジャーナルの件数+動的共用メモリー確保・解放関数発行回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	COPY	ulong	No	Agent Collector
JNL Buf Fulls (JNL_BUF_FULLS)	ジャーナルレコードをカレントバッファにバッファリングしようとしたときにバッファの空きエリアが小さく、該当するバッファにバッファリングできない状態が発生した回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
JNL Buf Fulls/min (JNL_BUF_FULLS_MIN)	収集間隔の間で発生したジャーナルバッファへのバッファリング失敗回数の平均値 (分単位) ※3。	AVG	float	No	dcreport -c※1
JNL Buf Waits (JNL_BUF_WAITS)	ジャーナルバッファがすべて満杯、または出力中の場合にジャーナルレコードをすぐにはバッファリングできないで、バッファが空くのを待っている状態の発生回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
JNL Buf Waits/min (JNL_BUF_WAITS_MIN)	収集間隔の間で発生したジャーナルバッファの空き待ち回数の平均値 (分単位) ※3。	AVG	float	No	dcreport -c※1
JNL Inputs (JNL_INPUTS)	ジャーナルファイルから入力した回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
JNL Puts (JNL_PUTS)	ジャーナル出力完了回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
JNL Read Faults (JNL_READ_FAULTS)	ジャーナルファイルからの入力時に起きた障害の発生件数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
JNL Reads (JNL_READS)	ジャーナルデータだけでなく、ジャーナルスワップ時のファイル管理情報も含めたシステムの内部的な入力回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
JNL Swaps (JNL_SWAP_NUM)	ジャーナルファイルをスワップした回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
JNL Swaps/min (JNL_SWAPS_MIN)	収集間隔の間で発生したジャーナルファイルスワップ回数の平均値 (分単位) ※3。	AVG	float	No	dcreport -c※1
JNL Write Faults (JNL_WRITE_FAULTS)	ジャーナルファイルへの出力時に起きた障害の発生件数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
JNL Writes (JNL_WRITES)	ジャーナルデータだけでなく、ジャーナルスワップ時のファイル管理情報も含めたシステムの内部的な出力回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
JNL-Blk Puts (JNL_BLK_PUTS)	ジャーナルブロックの出力回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Lock Waits (LOCK_WAIT_NUM)	ロック待ちの発生件数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Max Buf Pool Use Size (MAX_BUF_POOL_USE_SIZE)	ユーザーサーバのメッセージ格納バッファプールの使用中サイズの最大値 (バイト)。	HI	long	No	dcreport -c
Max CPD Put Interval (MAX_CPD_PUT_INTERVAL)	前回のチェックポイントから今回のチェックポイントまでの時間間隔の最大値 (ミリ秒)。	HI	long	No	dcreport -c

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
Max CPD Valid Time (MAX_CPD_VALID_TIME)	チェックポイントダンプ取得契機が発生し、各システムサーバで取得処理を開始してから有効化が完了するまでの時間の最大値 (ミリ秒)。	HI	long	No	dcreport -c
Max Dy-SHM Size (MAX_DY_SHM_SIZE)	動的共用メモリーブロックの最大使用サイズの最大値 (バイト)。	HI	long	No	dcreport -c
Max Dy-SHM Total Size (MAX_DY_SHM_TOTAL_SIZE)	動的共用メモリーブロックの確保・解放処理後の動的共用メモリーブロックの現在の総使用サイズの最大値 (バイト)。	HI	long	No	dcreport -c
Max JNL Input Size (MAX_JNL_INPUT_SIZE)	ジャーナルファイルから入力したデータ長の最大値 (バイト)。	HI	long	No	dcreport -c
Max JNL Put Wait Bufs (MAX_JNL_PUT_WAIT_BUFS)	ジャーナル出力完了時に出力待ちをしているバッファ面数の最大値 (面数*100)。	HI	long	No	dcreport -c
Max JNL Swap Time (MAX_JNL_SWAP_TIME)	ジャーナルファイルをスワップする際のオーバーヘッド時間の最大値 (マイクロ秒)。	HI	long	No	dcreport -c
Max JNL-Blk Put Len (MAX_JNL_BLK_PUT_LEN)	ジャーナルブロックのデータ長の最大値 (バイト)。	HI	long	No	dcreport -c
Max Lock Que Len (MAX_LOCK_QUE_LEN)	ロック待ちが発生したときの待ち行列長の最大値。	HI	long	No	dcreport -c
Max Lock Wait Time (MAX_LOCK_WAIT_TIME)	ロック待ちが発生したときの待ち状態になってから待ち状態が解除されるまでの時間の最大値 (ミリ秒)。	HI	long	No	dcreport -c
Max Processes (MAX_PROCESSES)	OpenTP1 システムで起動されているシステムサービスと UAP プロセス数の最大値。	HI	long	No	dcreport -c
Max RPC Res Time (MAX_RPC_RES_TIME)	クライアント側でサーバに要求を送信してからサーバから応答を受け取るまでの時間の最大値 (マイクロ秒)。	HI	long	No	dcreport -c
Max SCD Fault Size (MAX_SCD_FAULT_SIZE)	ユーザーサーバへのサービス要求のうち、メッセージ格納バッファプール不足によって、スケジュールできなかったサービス要求メッセージ長の最大値 (バイト)。	HI	long	No	dcreport -c
Max SCD Que Len (MAX_SCD_QUE_LEN)	ユーザーサーバのスケジュールキューに滞留したサービス要求数の最大値。	HI	ong	No	dcreport -c
Max St-SHM Size (MAX_ST_SHM_SIZE)	静的共用メモリーブロックの最大使用サイズの最大値 (バイト)。	HI	long	No	dcreport -c

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
Max St-SHM Total Size (MAX_ST_SHM_TOTAL_SIZE)	静的共用メモリーブロックの確保・解放処理後の静的共用メモリーブロックの現在の総使用サイズの最大値 (バイト)。	HI	long	No	dcreport -c
Max Svc Req Msg Size (MAX_SVC_REQ_MSG_SIZE)	ユーザーサーバが受信したサービス要求メッセージ長の最大値 (バイト)。	HI	long	No	dcreport -c
Max Svc Time (MAX_SVC_TIME)	要求したサービス関数の実行時間の最大値 (マイクロ秒)。	HI	long	No	dcreport -c
Min Buf Pool Use Size (MIN_BUF_POOL_USE_SIZE)	ユーザーサーバのメッセージ格納バッファプールの使用中サイズの最小値 (バイト)。	LO	long	No	dcreport -c
Min CPD Put Interval (MIN_CPD_PUT_INTERVAL)	前回のチェックポイントから今回のチェックポイントまでの時間間隔の最小値 (ミリ秒)。	LO	long	No	dcreport -c
Min CPD Valid Time (MIN_CPD_VALID_TIME)	チェックポイントダンプ取得契機が発生し、各システムサーバで取得処理を開始してから有効化が完了するまでの時間の最小値 (ミリ秒)。	LO	long	No	dcreport -c
Min Dy-SHM Size (MIN_DY_SHM_SIZE)	動的共用メモリーブロックの最大使用サイズの最小値 (バイト)。	LO	long	No	dcreport -c
Min Dy-SHM Total Size (MIN_DY_SHM_TOTAL_SIZE)	動的共用メモリーブロックの確保・解放処理後の動的共用メモリーブロックの現在の総使用サイズの最小値 (バイト)。	LO	long	No	dcreport -c
Min JNL Input Size (MIN_JNL_INPUT_SIZE)	ジャーナルファイルから入力したデータ長の最小値 (バイト)。	LO	long	No	dcreport -c
Min JNL Put Wait Bufs (MIN_JNL_PUT_WAIT_BUFS)	ジャーナル出力完了時に出力待ちをしているバッファ面数の最小値(面数*100)。	LO	long	No	dcreport -c
Min JNL Swap Time (MIN_JNL_SWAP_TIME)	ジャーナルファイルをスワップする際のオーバーヘッド時間の最小値 (マイクロ秒)。	LO	long	No	dcreport -c
Min JNL-Blk Put Len (MIN_JNL_BLK_PUT_LEN)	ジャーナルブロックのデータ長の最小値 (バイト)。	LO	long	No	dcreport -c
Min Lock Que Len (MIN_LOCK_QUE_LEN)	ロック待ちが発生したときの待ち行列長の最小値。	LO	long	No	dcreport -c
Min Lock Wait Time (MIN_LOCK_WAIT_TIME)	ロック待ちが発生したときの待ち状態になってから待ち状態が解除されるまでの時間の最小値 (ミリ秒)。	LO	long	No	dcreport -c
Min Processes (MIN_PROCESSES)	OpenTP1 システムで起動されているシステムサービスと UAP プロセス数の最小値。	LO	long	No	dcreport -c



PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
Min RPC Res Time (MIN_RPC_RES_TIME)	クライアント側でサーバに要求を送信してからサーバから応答を受け取るまでの時間の最小値 (マイクロ秒)。	LO	long	No	dcreport -c
Min SCD Fault Size (MIN_SCD_FAULT_SIZE)	ユーザーサーバへのサービス要求のうち、メッセージ格納バッファプール不足によって、スケジュールできなかったサービス要求メッセージ長の最小値 (バイト)。	LO	long	No	dcreport -c
Min SCD Que Len (MIN_SCD_QUE_LEN)	ユーザーサーバのスケジュールキューに滞留したサービス要求数の最小値。	LO	long	No	dcreport -c
Min St-SHM Size (MIN_ST_SHM_SIZE)	静的共用メモリーブロックの最大使用サイズの最小値 (バイト)。	LO	long	No	dcreport -c
Min St-SHM Total Size (MIN_ST_SHM_TOTAL_SIZE)	静的共用メモリーブロックの確保・解放処理後の静的共用メモリーブロックの現在の総使用サイズの最小値 (バイト)。	LO	long	No	dcreport -c
Min Svc Req Msg Size (MIN_SVC_REQ_MSG_SIZE)	ユーザーサーバが受信したサービス要求メッセージ長の最小値 (バイト)。	LO	long	No	dcreport -c
Min Svc Time (MIN_SVC_TIME)	要求したサービス関数の実行時間の最小値 (マイクロ秒)。	LO	long	No	dcreport -c
Name Svc Cache Hit % (NAME_SVC_CACHE_HIT_RATE)	サービス情報参照時のサービス情報キャッシュ領域ヒット率 (%)。	HILO	ulong	No	dcreport -c*1
Name Svc Cache Hits (NAME_SVC_CACHE_HITS)	サービス情報キャッシュ領域に設定されたサービス情報の該当ノードでの参照回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Name Svc Local Hits (NAME_SVC_LOCAL_HITS)	サービス情報ローカル領域に設定されたサービス情報の該当ノードでの参照回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Name Svc Reqs (NAME_SVC_REQS)	該当ノードでのサービス情報の参照要求。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
RPC Calls (RPC_CALLS)	RPC コールの発生件数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
RPC Calls/min (RPC_CALLS_MIN)	収集間隔の間で発生した RPC コール発生件数の平均値 (分単位) *3。	AVG	float	No	dcreport -c*1
RPC Faults (RPC_FAULTS)	RPC の処理の内部で発生した障害件数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
RPC Timeouts (RPC_TIMEOUTS)	RPC 応答待ちの処理で発生したタイムアウトエラー発生件数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	COPY	time_t	No	Agent Collecto r
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「PI」。	COPY	char(8)	No	Agent Collecto r
Rollbacks (ROLLBACKS)	トランザクションのロールバック決着回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
SCD Faults (SCD_FAULTS)	クライアントがユーザーサーバに対して行ったサービス要求のうち、メッセージ格納バッファプール不足でスケジュールできなかった数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
SCD Reqs (SCD_REQS)	クライアントが該当するユーザーサーバに対して行ったサービス要求の回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
St-SHM Gets (ST_SHM_GETS)	編集対象の時間内に取得した統計情報ジャーナルの件数+静的共用メモリ確保・解放関数発行回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Sys Svr Terminations (SYS_SVR_TERMINATIONS)	システムサービスを行うサーバプロセスが異常終了した回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Total Commits (TOTAL_COMMITS)	トランザクションのコミット決着回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total CPD Puts (TOTAL_CPD_PUTS)	チェックポイントダンプの契機数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total Deadlocks (TOTAL_DEADLOCKS)	デッドロックの発生件数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total Dy-SHM Gets (TOTAL_DY_SHM_GETS)	編集対象時間内に取得した統計情報ジャーナルの件数+動的共用メモリ確保・解放関数の発行した回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total JNL Buf Fulls (TOTAL_JNL_BUF_FULLS)	ジャーナルレコードをカレントバッファにバッファリングしようとしたときにバッファの空きエリアが小さく、該当するバッファにバッファリングできない状態が発生した回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total JNL Buf Waits (TOTAL_JNL_BUF_WAITS)	ジャーナルバッファがすべて満杯、または出力中の場合にジャーナルレコードをすぐにはバッファリングできないで、バッファが空くのを待っている状態が発生した回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
Total JNL Inputs (TOTAL_JNL_INPUTS)	ジャーナルファイルから入力した回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total JNL Puts (TOTAL_JNL_PUTS)	ジャーナル出力完了の回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total JNL Reads (TOTAL_JNL_READS)	ジャーナルデータだけでなく、ジャーナルスワップ時のファイル管理情報も含めたシステムの内部的な入力回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total JNL Read Faults (TOTAL_JNL_READ_FAULTS)	ジャーナルファイルからの入力時に起きた障害の発生件数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total JNL Swaps (TOTAL_JNL_SWAP_NUM)	ジャーナルファイルをスワップした回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total JNL Writes (TOTAL_JNL_WRITES)	ジャーナルデータだけでなく、ジャーナルスワップ時のファイル管理情報も含めたシステムの内部的な出力回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total JNL Write Faults (TOTAL_JNL_WRITE_FAULTS)	ジャーナルファイルへの出力時に起きた障害の発生件数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total JNL-Blk Puts (TOTAL_JNL_BLK_PUTS)	ジャーナルブロックの出力回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total Lock Waits (TOTAL_LOCK_WAIT_NUM)	ロック待ちの発生件数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total Name Svc Cache Hits (TOTAL_NAME_SVC_CACHE_HITS)	サービス情報キャッシュ領域に設定されたサービス情報の該当ノードでの参照回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total Name Svc Local Hits (TOTAL_NAME_SVC_LOCAL_HITS)	サービス情報ローカル領域に設定されたサービス情報の該当ノードでの参照回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total Name Svc Reqs (TOTAL_NAME_SVC_REQS)	該当ノードでのサービス情報の参照要求数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total Rollbacks (TOTAL_ROLLBACKS)	トランザクションのロールバック決着回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total RPC Calls (TOTAL_RPC_CALLS)	RPC コールの発生件数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total RPC Faults (TOTAL_RPC_FAULTS)	RPC の処理の内部で発生した障害件数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データ ソース
Total RPC Timeouts (TOTAL_RPC_TIMEOUTS)	RPC 応答待ちの処理で発生したタイムアウトエラー発生件数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total SCD Faults (TOTAL_SCD_FAULTS)	クライアントがユーザーサーバに対して行ったサービス要求のうち、メッセージ格納バッファプール不足でスケジュールできなかった数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total SCD Reqs (TOTAL_SCD_REQS)	クライアントが該当するユーザーサーバに対して行ったサービス要求の回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total St-SHM Gets (TOTAL_ST_SHM_GETS)	編集対象時間内に取得した統計情報ジャーナルの件数+静的共用メモリー確保・解放関数の発行回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total Sys Svr Terminations (TOTAL_SYS_SVR_TERMINATIONS)	システムサービスを行うサーバプロセスが異常終了した回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total Transactions (TOTAL_TRANSACTIONS)	トランザクション数（コミット決着回数とロールバック決着回数の合計値）の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c※1
Total UAP Terminations (TOTAL_UAP_TERMINATIONS)	UAP プロセスが異常終了した回数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Trans/min (TRANS_MIN)	収集間隔の間で発生したトランザクション数の平均値（分単位）※3。	AVG	float	No	dcreport -c※1
Transactions (TRANSACTIONS)	トランザクション数(コミット決着回数とロールバック決着回数の合計値)。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c※1
UAP Terminations (UAP_TERMINATIONS)	UAP プロセスが異常終了した回数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c

#### 注※1

dcreport -c の出力結果そのものではなく、出力結果から計算した値が設定されます。

#### 注※2

収集間隔ごとの平均値には、次の式に基づいて計算された値が設定されます。

$$\text{設定する値} = (\text{今回収集した平均値(累計値)} * \text{今回収集した件数(累計値)} - \text{前回収集した平均値(累計値)} * \text{前回収集した件数(累計値)}) / (\text{今回収集した件数(累計値)} - \text{前回収集した件数(累計値)})$$

ただし、初回または収集エラー直後の収集要求時には、0 が設定されます。

#### 注※3

分単位の平均値には、次の式に基づいて計算された値が設定されます。

$$\text{設定する値} = (\text{今回収集した値} - \text{前回収集した値}) * 60 / \text{収集間隔 (秒)}$$

ただし、初回または収集エラー直後の収集要求時には、0が設定されます。

# TAM Table Status (PD\_TAM)

## 機能

TAM Table Status (PD\_TAM) レコードには、ある時点での TAM テーブル状態を示すデータが格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。TAM テーブルごとに作成されます。なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレコードはサポート対象外です。

## デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	29	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

## ODBC キーフィールド

PD\_TAM\_TABLE\_NAME

## ライフタイム

なし

## レコードサイズ:

- 固定部：681 バイト
- 可変部：242 バイト

## フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Access (ACCESS)	アクセス形態。 <ul style="list-style-type: none"><li>read：参照型</li><li>rewrite：追加・削除できない更新型</li><li>write：追加・削除できる更新型</li><li>reclck：テーブル排他を確保しない、追加・削除できる更新型</li></ul>	—	string(11)	No	tamls -a
Auth Chk (AUTH_CHK)	アクセス権限のチェック。 <ul style="list-style-type: none"><li>Y：チェックする</li><li>N：チェックしない</li></ul>	—	string(2)	No	tamls -a

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Fail Proc (FAIL_PROC)	入出力エラー時の TAM ファイルの障害処理形態。 <ul style="list-style-type: none"> <li>continue : 処理を続行</li> <li>stop : 障害閉塞状態として処理を中止</li> </ul>	—	string(16)	No	tamls -a
File Name (FILE_NAME)	TAM ファイル名。	—	string(64)	No	tamls -a
File State (FILE_STATE)	TAM ファイル状態。 <ul style="list-style-type: none"> <li>normal : 未閉塞</li> <li>failure shutdown : 障害閉塞</li> </ul>	—	string(21)	No	tamls -a
Idx (IDX)	インデックス種別。 <ul style="list-style-type: none"> <li>tree : ツリー形式</li> <li>hash : ハッシュ形式</li> </ul>	—	string(6)	No	tamls -a
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	—	ulong	No	Agent Collector
JNL Mode (JNL_MODE)	ジャーナルを取得するモード。 <ul style="list-style-type: none"> <li>condense : 部分ジャーナルを取得するモード</li> <li>no condense : レコード全体をジャーナルに取得するモード</li> </ul>	—	string(16)	No	tamls -a
Key In Rec (KEY_IN_REC)	レコード内キー領域。	—	string(17)	No	tamls -a
Key Size (KEY_SIZE)	キー長 (バイト)。	—	long	No	tamls -a
Key Top Loc (KEY_TOP_LOC)	キー開始位置。	—	long	No	tamls -a
Loading (LOADING)	ローディング契機。 <ul style="list-style-type: none"> <li>start : tamadd コマンド実行時</li> <li>cmd : tamload コマンド実行時</li> <li>lib : dc_tam_open 関数発行時</li> </ul>	—	string(11)	No	tamls -a
Max Recs (MAX_RECS)	最大レコード数。	—	long	No	tamls -a
Rec Size (REC_SIZE)	TAM レコード長 (バイト)。	—	long	No	tamls -a
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type	レコード種別。常に「TAM」。	—	char(8)	No	Agent Collector

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
(INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「TAM」。	—	char(8)	No	Agent Collector
Table Name (TABLE_NAME)	TAM テーブル名。	—	string(33)	No	tamls -a
Table No (TABLE_NO)	TAM テーブル番号。	—	long	No	tamls -a
Table State (TABLE_STATE)	TAM テーブル状態。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• normal : 未閉塞</li> <li>• logical shutdown : 論理閉塞</li> <li>• failure shutdown : 障害閉塞</li> <li>• failure recovery : 障害回復待ち</li> </ul>	—	string(21)	No	tamls -a
Used Recs (USED_RECS)	使用中レコード数。	—	long	No	tamls -a



# TAM Summary (PI\_TAMS)

## 機能

TAM Summary (PI\_TAMS) レコードには、TAM サービスに関する稼働統計情報をベースとし、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。なお、監視対象が TP1/LiNK の場合、このレコードはサポート対象外です。

## デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×
Sync Collection With	PI	×

## ODBC キーフィールド

なし

## ライフタイム

監視対象の OpenTP1 が停止するか、OpenTP1 の `dcreport` コマンド (`-r` オプション) が実行されるまで。

## レコードサイズ

- 固定部：909 バイト
- 可変部：0 バイト

## フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Avg Ref Recs (AVG_REF_RECS)	1 回のトランザクションで参照したレコード数の平均値。	HILO	long	No	<code>dcreport -c</code>
Avg Ref Recs/Intval (AVG_REF_RECS_INTVAL)	1 回のトランザクションで参照したレコード数の収集間隔ごとの平均値。*2	HILO	long	No	<code>dcreport -c**1</code>
Avg TAM Upd Size (AVG_TAM_UPD_SIZE)	TAM ファイルに対し、1 回に実更新したデータのバイト数の平均値 (バイト)。	HILO	long	No	<code>dcreport -c</code>

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Avg TAM Upd Size/Intval (AVG_TAM_UPD_SIZE_INTVAL)	TAM ファイルに対し、1 回に実 更新したデータのバイト数の収集 間隔ごとの平均値 (バイト)。*2	HILO	long	No	dcreport -c* 1
Avg Upd Recs (AVG_UPD_RECS)	1 回のトランザクションで更新し たレコード数の平均値。	HILO	long	No	dcreport -c
Avg Upd Recs/Intval (AVG_UPD_RECS_INTVAL)	1 回のトランザクションで更新し たレコード数の収集間隔ごとの平 均値。*2	HILO	long	No	dcreport -c* 1
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	COPY	ulong	No	Agent Collector
Max Ref Recs (MAX_REF_RECS)	1 回のトランザクションで参照し たレコード数の最大値。	HI	long	No	dcreport -c
Max TAM Upd Size (MAX_TAM_UPD_SIZE)	TAM ファイルに対し、1 回に実 更新したデータのバイト数の最大 値 (バイト)。	HI	long	No	dcreport -c
Max Upd Recs (MAX_UPD_RECS)	1 回のトランザクションで更新し たレコード数の最大値。	HI	long	No	dcreport -c
Min Ref Recs (MIN_REF_RECS)	1 回のトランザクションで参照し たレコード数の最小値。	LO	long	No	dcreport -c
Min TAM Upd Size (MIN_TAM_UPD_SIZE)	TAM ファイルに対し、1 回に実 更新したデータのバイト数の最小 値 (バイト)。	LO	long	No	dcreport -c
Min Upd Recs (MIN_UPD_RECS)	1 回のトランザクションで更新し たレコード数の最小値。	LO	long	No	dcreport -c
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマ ンスデータの収集終了時刻。	COPY	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード種別。常に「TAMS」。	COPY	char(8)	No	Agent Collector
TAM Ref Trans (TAM_REF_TRANS)	TAM 参照トランザクション数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
TAM Upd Trans (TAM_UPD_TRANS)	TAM 更新トランザクション数。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
TAM Updates (TAM_UPDATES)	TAM ファイルにデータを更新し た回数の総和。	AVG	ulong	Yes	dcreport -c
Total TAM Ref Trans (TOTAL_TAM_REF_TRANS)	TAM 参照トランザクション数の 累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	データソース
Total TAM Updates (TOTAL_TAM_UPDATES)	TAM ファイルにデータを更新した回数の総和の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c
Total TAM Upd Trans (TOTAL_TAM_UPD_TRANS)	TAM 更新トランザクション数の累計値。	COPY	ulong	No	dcreport -c

注※1

dcreport -c の出力結果そのものではなく、出力結果から計算した値が設定されます。

注※2

収集間隔ごとの平均値には、次の式に基づいて計算された値が設定されます。

$$\text{設定する値} = (\text{今回収集した平均値(累計値)} * \text{今回収集した件数(累計値)} - \text{前回収集した平均値(累計値)} * \text{前回収集した件数(累計値)}) / (\text{今回収集した件数(累計値)} - \text{前回収集した件数(累計値)})$$

ただし、初回または収集エラー直後の収集要求時には、0 が設定されます。

# Transaction Status (PD\_TRN)

## 機能

Transaction Status (PD\_TRN) レコードには、ある時点でのトランザクション状態を示すデータが格納されます。このレコードは複数インスタンスレコードです。トランザクションブランチごとに作成されます。

## デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	○
Collection Offset	5	○
Log	No	○
LOGIF	空白	○
Over 10 Sec Collection Time	No	×

## ODBC キーフィールド

PD\_TRN\_GBL\_TRN\_ID

PD\_TRN\_TRN\_BR\_ID

## ライフタイム

なし

## レコードサイズ

- 固定部：681 バイト
- 可変部：145 バイト

## フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デ ル タ	データソース
Br Des (BR_DES)	ブランチ記述子。 ルートトランザクションブランチの場合は 「*****」が表示される。	—	string(11)	No	trnls -ta
Gbl Trm ID (GBL_TRN_ID)	グローバルトランザクション識別子。	—	string(17)	No	trnls -ta
Interval (INTERVAL)	情報が収集される時間 (秒)。	—	ulong	No	Agent Collector

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デ ル タ	データソース
PID (PID)	プロセス ID。	—	string(11)	No	trnls -ta
Pr Br Des (PR_BR_DES)	親トランザクション記述子。 ルートトランザクションブランチの場合は 「*****」が表示される。	—	string(11)	No	trnls -ta
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデー タの収集終了時刻。	—	time_t	No	Agent Collector
Record Type (INPUT_RECORD_ TYPE)	レコード種別。常に「TRN」。	—	char(8)	No	Agent Collector
Sv Name (SV_NAME)	サーバ名。	—	string(9)	No	trnls -ta
Svc Name (SVC_NAME)	サービス名。	—	string(33)	No	trnls -ta
Trn Br ID (TRN_BR_ID)	トランザクションブランチ識別子。	—	string(17)	No	trnls -ta
Trn Des (TRN_DES)	トランザクション記述子。	—	string(11)	No	trnls -ta
Trn St 1 (TRN_ST_1)	トランザクション第 1 状態。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• BEGINNING：トランザクションブラン チ開始処理中状態</li> <li>• ACTIVE：実行中状態</li> <li>• SUSPENDED：中断中状態</li> <li>• IDLE：同期点処理へ移行状態</li> <li>• PREPARE：コミット(1 相目)処理中状態</li> <li>• READY：コミット(2 相目)処理待ち状態</li> <li>• HEURISTIC_COMMIT：ヒューリス ティック決定コミット処理中状態</li> <li>• HEURISTIC_ROLLBACK：ヒューリ スティック決定ロールバック処理中状態</li> <li>• COMMIT：コミット処理中状態</li> <li>• ROLLBACK_ACTIVE：ロールバック 処理待ち状態</li> <li>• ROLLBACK：ロールバック処理中状態</li> <li>• HEURISTIC_FORGETTING：ヒュー リスティック決定後のトランザクション ブランチ終了処理中状態</li> <li>• FORGETTING：トランザクションブラ ンチ終了処理中状態</li> </ul>	—	string(21)	No	trnls -ta

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デ ル タ	データソース
Trn St 2 (TRN_ST_2)	<p>トランザクション第 2 状態。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• u: ユーザーサーバプロセスでのユーザーサーバ実行中状態</li> <li>• r: トランザクション回復プロセスでのトランザクションブランチ回復処理実行中状態</li> <li>• p: トランザクション回復プロセスでのほかのトランザクションブランチの回復処理完了待ち状態</li> </ul>	—	string(2)	No	trnls -ta
Trn St 3 (TRN_ST_3)	<p>トランザクション第 3 状態。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• s: 送信中</li> <li>• r: 受信中</li> <li>• n: 送受信中ではない</li> </ul>	—	string(2)	No	trnls -ta

# 7

## メッセージ

この章では、PFM - Agent for OpenTP1 のメッセージ形式、出力先一覧、syslog と Windows イベントログの一覧、およびメッセージ一覧について説明します。

## 7.1 メッセージの形式

PFM - Agent for OpenTP1 が出力するメッセージの形式と、マニュアルでの記載形式を示します。

### 7.1.1 メッセージの出力形式

PFM - Agent for OpenTP1 が出力するメッセージの形式を説明します。メッセージは、メッセージ ID とそれに続くメッセージテキストで構成されます。形式を次に示します。

**KAVFnnnnn-Yメッセージテキスト**

メッセージ ID は、次の内容を示しています。

K

システム識別子を示します。

AVF

PFM - Agent のメッセージであることを示します。

nnnnn

メッセージの通し番号を示します。PFM - Agent for OpenTP1 のメッセージ番号は、「20xxx」です。

Y

メッセージの種類を示します。

- E：エラー  
処理は中断されます。
- W：警告  
メッセージ出力後、処理は続けられます。
- I：情報  
ユーザーに情報を知らせます。
- Q：応答  
ユーザーに応答を促します。

メッセージの種類と syslog の priority レベルとの対応を次に示します。

-E

- レベル：LOG\_ERR
- 意味：エラーメッセージ。

-W

- レベル：LOG\_WARNING



- 意味：警告メッセージ。

-I

- レベル：LOG\_INFO
- 意味：付加情報メッセージ。

-Q

(出力されない)

メッセージの種類と Windows イベントログの種類との対応を次に示します。

-E

- レベル：エラー
- 意味：エラーメッセージ。

-W

- レベル：警告
- 意味：警告メッセージ。

-I

- レベル：情報
- 意味：付加情報メッセージ。

-Q

(出力されない)

## 7.1.2 メッセージの記載形式

このマニュアルでのメッセージの記載形式を示します。メッセージテキストで太字になっている部分は、メッセージが表示される状況によって表示内容が変わることを示しています。また、メッセージをメッセージ ID 順に記載しています。記載形式の例を次に示します。

### メッセージ ID

英語メッセージテキスト

日本語メッセージテキスト

メッセージの説明文

(S)

システムの処置を示します。

(O)

メッセージが表示されたときに、オペレーターがとる処置を示します。

## 参考

システム管理者がオペレーターから連絡を受けた場合は、「第4編 8. トラブルへの対処方法」を参照してログ情報を採取し、初期調査をしてください。

トラブル要因の初期調査をする場合は、OSのログ情報（syslog）や、PFM - Agent for OpenTP1が出力する各種ログ情報を参照してください。これらのログ情報でトラブル発生時間帯の内容を参照して、トラブルを回避したり、トラブルに対処したりしてください。また、トラブルが発生するまでの操作方法などを記録してください。同時に、できるだけ再現性の有無を確認するようにしてください。

## 7.2 メッセージの出力先一覧

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 が出力する各メッセージの出力先を一覧で示します。

表中では、出力先を凡例のように表記しています。

(凡例)

- ：出力する
- －：出力しない

表 7-1 PFM - Agent for OpenTP1 のメッセージの出力先一覧

メッセージID	出力先						
	syslog	Windows イベントログ	共通メッセージログ	標準出力	標準エラー出力	JP1 システムイベント※1	エージェントイベント※2
KAVF20000-I	○	○	○	－	－	－	－
KAVF20001-I	○	○	○	－	－	－	－
KAVF20002-E	○	○	○	－	－	－	－
KAVF20003-E	○	○	○	－	－	－	－
KAVF20004-E	○	○	○	－	－	－	－
KAVF20005-E	○	○	○	－	－	－	－
KAVF20006-E	○	○	○	－	－	－	－
KAVF20007-E	○	○	○	－	－	－	－
KAVF20008-E	○	○	○	－	－	－	－
KAVF20009-E	○	○	○	－	－	－	－
KAVF20010-E	○	○	○	－	－	－	－
KAVF20011-E	○	○	○	－	－	－	－
KAVF20012-E	○	○	○	－	－	○	○
KAVF20013-E	○	○	○	－	－	－	－
KAVF20014-E	○	－	○	－	－	－	－
KAVF20015-E	○	○	○	－	－	－	－
KAVF20016-E	－	○	○	－	－	－	－
KAVF20017-E	○	○	○	－	－	－	－
KAVF20018-E	○	○	○	－	－	－	－
KAVF20099-E	○	○	○	－	－	－	－

メッセージ ID	出力先						
	syslog	Windows イベントログ	共通メッセージログ	標準出力	標準エラー出力	JP1 システムイベント※1	エージェントイベント※2
KAVF20101-E	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20102-W	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20103-E	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20104-W	—	—	○	—	—	○	○
KAVF20105-W	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20106-E	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20107-W	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20108-E	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20109-E	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20110-E	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20111-E	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20112-W	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20113-E	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20114-E	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20115-E	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20116-W	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20117-W	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20118-E	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20119-W	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20120-W	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20121-W	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20122-E	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20123-W	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20124-I	—	—	○	—	—	—	—
KAVF20125-I	—	—	○	—	—	○	○

注※1

JP1 システムイベントは、エージェントの状態の変化を JP1/IM に通知するイベントです。JP1 システムイベントの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、統合管理製品 (JP1/IM) と連携した稼働監視について説明している章を参照してください。

JP1 システムイベントを発行するための前提プログラムを次の表に示します。

表 7-2 JP1 システムイベントを発行するための前提プログラム

ホスト種別	前提プログラム	バージョン
監視マネージャー	PFM - Manager	09-00 以降
監視コンソールサーバ	PFM - Web Console	08-00 以降
監視エージェント	PFM - Agent for OpenTP1	08-00 以降 (PFM - Agent が出力するイベントを発行するには、09-00 以降が必要です)
	PFM - Manager または PFM - Base	09-00 以降
	JP1/Base	08-50 以降

注※2

エージェントイベントは、エージェントの状態の変化を PFM - Manager に通知するイベントです。エージェントイベントの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、イベントの表示について説明している章を参照してください。

エージェントイベントを発行するための前提プログラムを次の表に示します。

表 7-3 エージェントイベントを発行するための前提プログラム

ホスト種別	前提プログラム	バージョン
監視マネージャー	PFM - Manager	09-00 以降
監視コンソールサーバ	PFM - Web Console	08-00 以降
監視エージェント	PFM - Agent for OpenTP1	09-00 以降
	PFM - Manager または PFM - Base	09-00 以降

## 7.3 syslog と Windows イベントログの一覧

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 が syslog と Windows イベントログに出力するメッセージ情報の一覧を示します。

syslog は、syslog ファイルに出力されます。syslog ファイルの格納場所については、syslog デーモンコンフィギュレーションファイル（デフォルトは /etc/syslogd.conf）を参照してください。

Windows イベントログは、[イベントビューア] ウィンドウの Windows ログ内のアプリケーションログに表示されます。[イベントビューア] ウィンドウは、Windows の [スタート] メニューから表示される [管理ツール] - [イベントビューア] を選択することで表示できます。

PFM - Agent for OpenTP1 が出力するイベントの場合、[イベントビューア] ウィンドウの [ソース] に識別子「PFM-OpenTP1」が表示されます。

PFM - Agent for OpenTP1 が syslog と Windows イベントログに出力するメッセージ情報の一覧を次の表に示します。

表 7-4 syslog と Windows イベントログ出力メッセージ情報一覧

メッセージ ID	syslog		Windows イベントログ	
	ファシリティ	レベル	イベント ID	種類
KAVF20000-I	LOG_DAEMON	LOG_INFO	20000	情報
KAVF20001-I	LOG_DAEMON	LOG_INFO	20001	情報
KAVF20002-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	20002	エラー
KAVF20003-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	20003	エラー
KAVF20004-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	20004	エラー
KAVF20005-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	20005	エラー
KAVF20006-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	20006	エラー
KAVF20007-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	20007	エラー
KAVF20008-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	20008	エラー
KAVF20009-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	20009	エラー
KAVF20010-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	20010	エラー
KAVF20011-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	20011	エラー
KAVF20012-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	20012	エラー
KAVF20013-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	20013	エラー
KAVF20014-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	-	-
KAVF20015-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	20015	エラー

メッセージ ID	syslog		Windows イベントログ	
	ファシリティ	レベル	イベント ID	種類
KAVF20016-E	—	—	20016	エラー
KAVF20017-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	20017	エラー
KAVF20018-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	20018	エラー
KAVF20099-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	20099	エラー

(凡例)

— : 出力しない

## 7.4 メッセージ一覧

---

PFM - Agent for OpenTP1 が出力するメッセージと対処方法について説明します。PFM - Agent for OpenTP1 のメッセージ一覧を次に示します。

### KAVF20000-I

```
Agent Collector has started. (host=ホスト名, service=サービス ID)  
Agent Collector が起動しました (host=ホスト名, service=サービス ID)
```

Agent Collector サービスの起動および初期化が完了しました。

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集を開始します。

### KAVF20001-I

```
Agent Collector has stopped. (host=ホスト名, service=サービス ID)  
Agent Collector が停止しました (host=ホスト名, service=サービス ID)
```

Agent Collector サービスが正常終了しました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

### KAVF20002-E

```
Agent Collector has stopped abnormally. (host=ホスト名, service=サービス ID)  
Agent Collector が異常停止しました (host=ホスト名, service=サービス ID)
```

Agent Collector サービスが異常終了しました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

共通メッセージログに出力されている直前のメッセージを確認し、そのメッセージの対処方法に従ってください。要因が判明しない場合、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

### KAVF20003-E

```
An attempt to start Agent Collector has failed. (host=ホスト名, service=サービス ID)  
Agent Collector が起動失敗しました (host=ホスト名, service=サービス ID)
```



Agent Collector サービスの起動および初期化に失敗したため、Agent Collector サービスの処理を続行できません。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

共通メッセージログに出力されている直前のメッセージを確認し、そのメッセージの対処方法に従ってください。

#### KAVF20004-E

An attempt to move to the instance directory has failed. (directory=ディレクトリパス, reason=理由コード)

インスタンスディレクトリへの移動に失敗しました (directory=ディレクトリパス, reason=理由コード)

ディレクトリへの移動に失敗しました。ディレクトリパスは最大 127 バイト表示されます。

理由コードには errno が出力されます。ただし、該当する値がない場合は 0 が出力されます。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

ディレクトリパスで示すディレクトリの有無と権限を確認してください。また、理由コードを参照して対処してください。

#### KAVF20005-E

An attempt to set an environment variable has failed. (variable=環境変数名)

環境変数の設定に失敗しました (variable=環境変数名)

環境変数の設定に失敗しました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

メモリーなどのシステムリソースが不足していないか確認してください。

#### KAVF20006-E

An attempt to create a pipe has failed. (reason=理由コード)

パイプの生成に失敗しました (reason=理由コード)

パイプの生成に失敗しました。

理由コードには次の値が出力されます。

- UNIX の場合：erno
- Windows の場合：GetLastError 関数値
- 該当する値がない場合：0

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

理由コードを参照して対処してください。

### KAVF20007-E

An attempt to acquire OS system information has failed. (reason=理由コード)

OS のシステム情報の取得に失敗しました (reason=理由コード)

OS のシステム情報の取得に失敗しました。

理由コードには次の値が出力されます。

- UNIX の場合：erno
- Windows の場合：GetLastError 関数値
- 該当する値がない場合：0

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

理由コードを参照して対処してください。

### KAVF20008-E

An attempt to acquire instance information has failed.

インスタンス情報の取得に失敗しました

インスタンス情報の取得に失敗しました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

直前に出力されているメッセージを参照して対処してください。

## KAVF20009-E

An attempt to initialize the Agent Collector has failed.  
Agent Collector の初期化に失敗しました

Agent Collector サービスの初期化に失敗しました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

## KAVF20010-E

An attempt to acquire management information of the service-startup information file has failed. (file=ファイル名)  
サービス起動情報ファイル管理情報の取得に失敗しました (file=ファイル名)

サービス起動情報ファイル管理情報の取得に失敗しました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

## KAVF20011-E

An attempt to acquire information from the service-startup information file has failed. (file=ファイル名, item=項目)  
サービス起動情報ファイルからの情報取得に失敗しました (file=ファイル名, item=項目)

サービス起動情報ファイル(jpcagt.ini)の項目が取得できませんでした。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

サービス起動情報ファイルがないか、サービス起動情報ファイルが壊れているおそれがあります。  
jpcagt.ini.model ファイルを jpcagt.ini ファイルにコピーしてください。この場合、パフォーマンスデータの記録方法の設定内容はインスタンス環境を作成したときの状態になりますので、必要に応じて

再度設定を行ってください。設定方法についてはマニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、パフォーマンスデータの記録方法の変更について説明している章を参照してください。

## KAVF20012-E

An attempt to allocate memory has failed.

メモリ領域確保に失敗しました

メモリー領域確保に失敗しました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

メモリーなどのシステムリソースが不足していないか確認してください。

## KAVF20013-E

An exception occurred.

例外が発生しました

例外が発生しました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

メモリーなどのシステムリソースが不足していないか確認してください。要因が判明しない場合、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

## KAVF20014-E

An attempt to acquire user information of the OpenTP1 administrator has failed.

(user=OpenTP1 管理者のユーザ名, reason=理由コード)

OpenTP1 管理者のユーザ情報の取得に失敗しました (user=OpenTP1 管理者のユーザ名, reason=理由コード)

OpenTP1 管理者のユーザー情報の取得に失敗しました。UNIX の場合だけ出力されます。

理由コードには次の値が出力されます。

- UNIX の場合：errno
- 該当する値がない場合：0

なお、OpenTP1 管理者のユーザ名は最大で 127 バイト表示されます。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

サービス起動情報ファイルの「OPENTP1\_ADMIN」項目の指定を確認してください。

## KAVF20015-E

The value specified in the service-startup information file is illegal.(item=**ラベル名**)  
サービス起動情報ファイルに指定された値が不正です (item=**ラベル名**)

サービス起動情報ファイルに指定された値が不正です。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

サービス起動情報ファイルの該当ラベル項目の指定を確認してください。

## KAVF20016-E

The OpenTP1 product type could not be checked.(reason=**理由コード**)  
OpenTP1 の製品種別を確認できませんでした (reason=**理由コード**)

OpenTP1 の製品情報の取得に失敗したため、OpenTP1 の製品種別(TP1/Server Base,TP1/LiNK)を確認できませんでした。Windows の場合だけ出力されます。

理由コードには次の値が出力されます。

- Windows の場合：GetLastError 関数値
- 該当する値がない場合：0

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

共通メッセージログに出力されている直前のメッセージを確認し、そのメッセージの対処方法に従ってください。直前にメッセージが出力されていない場合は、理由コードを参照して対処してください。

## KAVF20017-E

The same service cannot be started.  
同じサービスを二重起動することはできません。

起動されたサービスは、すでに起動されているため、サービスの起動に失敗しました。

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

jpctool service list コマンドを使用し、サービスの起動状況を確認してください。

## KAVF20018-E

An attempt to initialize a service failed. (info=保守情報)

サービスの初期化処理に失敗しました (info=保守情報)

サービスの初期化処理に失敗しました。

(S)

Agent Collector の処理を終了します。

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

## KAVF20099-E

An unexpected abnormality occurred during Agent Collector processing. (info=保守情報)

Agent Collector の処理中に予期しない異常が発生しました (info=保守情報)

予期しないエラーが発生しました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

## KAVF20101-E

Reception of signal interrupted service processing. (signal=シグナル番号)

シグナル受信によってサービスの処理は中断されました (signal=シグナル番号)

シグナルを受け付けたため Agent Collector サービスが中断されました。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

## KAVF20102-W

Reception of signal caused the service to stop. (signal=シグナル番号)  
シグナル受信によってサービスは停止処理を実行します (signal=シグナル番号)

シグナルを受け付けたため Agent Collector サービスを停止します。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

## KAVF20103-E

The event has failed. (event=イベント名, reason=イベント要求に対するリターン値)  
イベントが失敗しました (event=イベント名, reason=イベント要求に対するリターン値)

レコード収集, エージェント構成情報取得, またはエージェント構成情報更新に対する イベント要求 (NotifyEvent)が失敗しました。

イベント名には次のどれかが表示されます。

- Record collection
- Reference of agent composition information
- Update of agent composition information

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

共通メッセージログに出力されている直前のメッセージを確認し, そのメッセージの対処方法に従ってください。

## KAVF20104-W

OpenTP1 has stopped.  
OpenTP1 が停止状態です

監視対象の OpenTP1 が起動していません。

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

監視対象の OpenTP1 が起動されているか確認してください。

## KAVF20105-W

An attempt to collect records has failed. (record=レコード ID)

レコードの収集に失敗しました (record=レコード ID)

レコード収集処理が失敗しました。

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

共通メッセージログに出力されている直前のメッセージを確認し、そのメッセージの対処方法に従ってください。

## KAVF20106-E

Command processing has failed. (command=OpenTP1 コマンド名)

コマンド処理に失敗しました (command=OpenTP1 コマンド名)

コマンドの実行やコマンド出力結果の収集・編集に失敗しました。

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

共通メッセージログに出力されている直前のメッセージを確認し、そのメッセージの対処方法に従ってください。

## KAVF20107-W

There is no collection data required for record generation. (record=レコード ID)

レコード生成に必要な収集データがありません (record=レコード ID)

レコード生成に必要な収集データがありません。

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

OpenTP1 の `dcreport` コマンドで出力されるべき統計情報 ID に対するデータがすべて出力されるか確認してください。データが出力されない場合は OpenTP1 管理者に問い合わせてください。



## KAVF20108-E

The command file does not exist. (command=OpenTP1 コマンド名)  
コマンドファイルが存在しません (command=OpenTP1 コマンド名)

コマンドファイルが存在しないか、ファイルの権限確認が失敗しました。

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

サービス起動情報ファイルの「DCDIR」項目の指定を確認してください。また、「DCDIR」項目で指定したディレクトリ階層の bin ディレクトリ内にコマンドファイルがあるか確認してください。

## KAVF20109-E

Execution permissions for the command are lacking. (command=OpenTP1 コマンド名, reason=理由コード)  
コマンドの実行権限がありません (command=OpenTP1 コマンド名, reason=理由コード)

コマンドの実行権限がないか、ファイルの権限確認が失敗しました。

理由コードには次の値が出力されます。

- UNIX の場合：errno
- Windows の場合：GetLastError 関数値
- 該当する値がない場合：0

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

理由コードを参照して対処してください。また、サービス起動情報ファイルの「DCDIR」、  
「DCCONFPATH」、  
「OPENTP1\_ADMIN」、  
「OPENTP1\_LIBPATH」項目の指定を確認してください。  
「DCDIR」項目で指定したディレクトリ階層の bin ディレクトリ内にあるコマンドファイルの権限を確認してください。

## KAVF20110-E

An attempt to create a command process has failed. (reason=理由コード)  
コマンドプロセスの生成に失敗しました (reason=理由コード)

OpenTP1 コマンドプロセスの生成に失敗しました。

理由コードには次の値が出力されます。

- UNIX の場合：errno
- Windows の場合：GetLastError 関数値
- 該当する値がない場合：0

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

理由コードを参照して対処してください。また、メモリーなどのシステムリソースが不足していないか確認してください。

## KAVF20111-E

Processing of a command process has failed. (reason=理由コード)  
コマンドプロセスでの処理に失敗しました (reason=理由コード)

OpenTP1 コマンドプロセスのコマンド実行処理の初期化に失敗しました。続いて標準エラー出力にエラー情報を出力するため、KAVF20112-W が出力されます。UNIX の場合だけ出力されます。

理由コードには次の値が出力されます。

- UNIX の場合：errno
- 該当する値がない場合：0

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

共通メッセージログに出力されている直前のメッセージを確認し、そのメッセージの対処方法に従ってください。直前にメッセージが出力されていない場合は、理由コードを参照して対処してください。

## KAVF20112-W

Data was output to the standard error output. (data=標準エラー出力データ)  
標準エラー出力にデータが出力されました (data=標準エラー出力データ)

標準エラー出力にデータが出力されました。標準出力エラー出力データは最初の改行文字までのデータのうち、最大 127 バイト表示されます。

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

標準エラー出力データが示す出力データを参照して対処してください。ただし、このメッセージに続いて KAVF20104-W が出力されている場合は、そのメッセージの対処方法に従ってください。

## KAVF20113-E

An attempt to read data from a pipe has failed. (reason=理由コード)  
パイプからのデータ読み込みに失敗しました (reason=理由コード)

パイプからのデータ読み込み処理に失敗しました。

理由コードには次の値が出力されます。

- UNIX の場合：errno
- Windows の場合：GetLastError 関数値
- 該当する値がない場合：0

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

理由コードを参照して対処してください。

## KAVF20114-E

An attempt to edit command output data has failed. (data=標準出力データ)  
コマンド出力データ編集処理に失敗しました (data=標準出力データ)

OpenTP1 のコマンド出力データ編集処理に失敗しました。

標準出力データは、編集対象である標準出力データが最大 127 バイト表示されます。

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

## KAVF20115-E

An attempt to clear the pipe buffer has failed. (reason=理由コード)  
パイプバッファのクリアに失敗しました (reason=理由コード)

パイプバッファの初期化処理に失敗しました。

理由コードには次の値が出力されます。

- UNIX の場合：errno

- Windows の場合：GetLastError 関数値
- 該当する値がない場合：0

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

理由コードを参照して対処してください。

## KAVF20116-W

A field with an invalid value set exists in the corresponding record. (record=レコード ID, date=レコード収集日時)

当該レコードには無効な値が設定されたフィールドがあります (record=レコード ID, date=レコード収集日時)

レコードに設定する値の一部に無効な値があります。

無効な値が設定されたフィールドについては、このメッセージに続いて出力される KAVF20123-W を参照してください。

なお、同じ要因によってこのメッセージが連続して出力される場合、2 回目以降の出力は抑止されます。ただし、PI\_RTSS レコードのデータ収集の場合は抑止されません。

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

データソースがdcreport -c の場合、レコードフィールドには 0 または前回収集時の値<sup>※</sup>が設定されます。レコードは、レコード ID およびレコード収集日時を基に特定してください。また、このエラーは、OpenTP1 を再起動するか OpenTP1 のシステム統計情報をリセットすれば対処できます。OpenTP1 を再起動、または OpenTP1 のシステム統計情報をリセットした直後の収集時に KAVF20120-W が出力されるので、そのメッセージの対処方法に従ってください。

データソースがdcreport -c 以外の場合、レコードフィールドには 0 が設定されます。レコードは、レコード ID およびレコード収集日時を基に特定してください。また、収集間隔を見直してください。

注※

次の場合には、前回収集時の値が設定されます。

- 「デルタ」が「No」の平均値フィールド（ただし、収集間隔または分単位での平均値フィールドは除く）または累計値フィールドに対して、2 回目以降の収集値が無効な値の場合
- 「デルタ」が「Yes」のフィールドに対して、PFM - View または PFM - Web Console の画面で、[デルタ値で表示] のチェックをしないでリアルタイム収集を行い、2 回目以降の収集値が無効な値の場合

## KAVF20117-W

The OpenTP1 state could not be checked.  
OpenTP1 の状態を確認することができませんでした

OpenTP1 のprcls コマンド処理に失敗しました。

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

共通メッセージログに出力されている直前のメッセージを確認し、そのメッセージの対処方法に従ってください。

## KAVF20118-E

The state of the command process could not be checked.(pid=プロセス ID, reason=理由コード)  
コマンドプロセスの状態を確認することができませんでした (pid=プロセス ID, reason=理由コード)

OpenTP1 のプロセスの状態確認が失敗しました。

理由コードには次の値が出力されます。

- UNIX の場合：errno
- Windows の場合：GetLastError 関数値
- 該当する値がない場合：0

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

プロセス ID が示すコマンドプロセスが残っている場合は、UNIX のときはkill コマンドで、Windows のときはタスクマネージャなどで強制終了させてください。

## KAVF20119-W

An attempt to kill the command process has failed.(pid=プロセス ID, reason=理由コード)  
コマンドプロセスの強制終了に失敗しました (pid=プロセス ID, reason=理由コード)

OpenTP1 のコマンドプロセスの強制終了が失敗しました。

理由コードには次の値が出力されます。

- UNIX の場合：errno
- Windows の場合：GetLastError 関数値

- 該当する値がない場合：0

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

プロセス ID が示すコマンドプロセスが残っている場合は、UNIX の場合はkill コマンドで、Windows の場合はタスクマネージャなどで強制終了させてください。

## KAVF20120-W

An attempt to acquire set valid value in corresponding record has failed.(record=レコード ID, field=レコードフィールド名, info=保守情報)

当該レコードに設定する有効データの取得に失敗しました (record=レコード ID, field=レコードフィールド名, info=保守情報)

レコードに設定する有効データの取得に失敗しました。要因として次のことが考えられます。

- 前回のレコードの収集との間に OpenTP1 を再起動した
- 前回のレコードの収集との間に OpenTP1 のシステム統計情報をリセットした

(S)

レコードは生成されませんが、OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。また、次回のレコードの収集は初回の収集として処理します。

(O)

このメッセージが連続して出力されている場合、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

## KAVF20121-W

The corresponding record cannot be collected for the monitored OpenTP1.(record=レコード ID)

監視対象の OpenTP1 に対して当該レコードは収集できません (record=レコード ID)

監視対象の OpenTP1 に対してレコードは収集できません。要因として次のことが考えられます。

- 監視対象の OpenTP1 がレコードのサポート対象外

(S)

レコードは生成されませんが、OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

レコードを参照するレポートは表示させないでください。また、レコードの履歴データを収集している場合は収集をやめてください。

## KAVF20122-E

The directory does not exist.(directory=ディレクトリパス)  
ディレクトリが存在しません (directory=ディレクトリパス)

ディレクトリが存在しません。ディレクトリパスは最大 127 バイト表示されます。

(S)

Agent Collector サービスの処理を終了します。

(O)

ディレクトリパスの妥当性を確認してください。ディレクトリパスが正しい場合はディレクトリパスが示すディレクトリを作成してください。

## KAVF20123-W

An invalid value was set.(field=フィールド名, fact=要因, key=キー情報, info=保守情報)  
無効な値が設定されました (field=フィールド名, fact=要因, key=キー情報, info=保守情報)

収集したデータが無効な値であったため、直前の KAVF20116-W で出力されたレコードに無効な値が設定されました。なお、同じ要因によってこのメッセージが連続して出力される場合、2 回目以降の出力は抑止されます。ただし、PI\_RTSS レコードのデータ収集の場合は抑止されません。

要因には次のどれかが表示されます。

- Overflow value : データソースの出力結果がオーバーフロー
- Negative value : データソースの出力結果が負数
- Calculation overflow : Agent Collector によって計算した値がオーバーフロー

キー情報には、状況によって次のどれかが表示されます。

- データソースが `dcreport -c` の場合、`dcreport` コマンドの統計情報 ID
- データソースが `rtsls -c` の場合、リアルタイム統計情報項目 ID、サーバ名 (取得対象名 1)、およびサービス名 (取得対象名 2) の値

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

(O)

KAVF20116-W の対処方法に従ってください。

## KAVF20124-I

The suppression of the message output is ended.(msgid=メッセージ ID, info=[メッセージ情報], count=メッセージ出力抑止回数)

メッセージ出力の抑止を終了します (msgid=メッセージ ID, info=[メッセージ情報], count=メッセージ出力抑止回数)

メッセージが同じ要因で連続して出力されないようにメッセージ出力を抑止していましたが、メッセージの出力要因が解消された、または変更されたためメッセージ出力の抑止を終了します。

メッセージ情報には次の情報が出力されます。

- record=レコード ID (メッセージ ID が KAVF20116-W の場合にメッセージ出力の抑止が終了したとき)
- field=フィールド名, fact=要因 (メッセージ ID が KAVF20123-W の場合にメッセージ出力の抑止が終了したとき)

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。

## KAVF20125-I

OpenTP1 has started.

OpenTP1 が起動状態になりました

監視対象の OpenTP1 が停止状態から起動状態になりました。

(S)

OpenTP1 システムのパフォーマンスデータの収集処理を続行します。



# 8

## トラブルへの対処方法

この章では、Performance Management の運用中にトラブルが発生した場合の対処方法などについて説明します。ここでは、主に PFM - Agent でトラブルが発生した場合の対処方法について記載しています。Performance Management システム全体のトラブルへの対処方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

## 8.1 対処の手順

---

Performance Management でトラブルが起きた場合の対処の手順を次に示します。

### 現象の確認

次の内容を確認してください。

- トラブルが発生したときの現象
- メッセージの内容（メッセージが出力されている場合）
- 共通メッセージログなどのログ情報

各メッセージの要因と対処方法については、「[第3編 7. メッセージ](#)」を参照してください。また、Performance Management が出力するログ情報については、「[8.3 トラブルシューティング時に採取するログ情報](#)」を参照してください。

### 資料の採取

トラブルの要因を調べるために資料の採取が必要です。「[8.4 トラブルシューティング時に採取が必要な資料](#)」および「[8.5 トラブルシューティング時に採取する資料の採取方法](#)」を参照して、必要な資料を採取してください。

### 問題の調査

採取した資料を基に問題の要因を調査し、問題が発生している部分、または問題の範囲を切り分けてください。

## 8.2 トラブルシューティング

ここでは、Performance Management 使用時のトラブルシューティングについて記述します。Performance Management を使用しているときにトラブルが発生した場合、まず、この節で説明している現象が発生していないか確認してください。

Performance Management に発生する主なトラブルの内容を次の表に示します。

表 8-1 トラブルの内容

分類	トラブルの内容	記述箇所
セットアップやサービスの起動について	<ul style="list-style-type: none"><li>Performance Management のプログラムのサービスが起動しない。</li><li>サービスの起動要求をしてからサービスが起動するまで時間が掛かる。</li><li>Performance Management のプログラムのサービスを停止した直後に、別のプログラムがサービスを開始したとき、通信が正しく実行されない。</li><li>「ディスク容量が不足しています」というメッセージが出力されたあと Master Store サービスまたは Agent Store サービスが停止する。</li></ul>	8.2.1
コマンドの実行について	<ul style="list-style-type: none"><li>jpctool service list コマンドを実行すると稼働していないサービス名が出力される。</li><li>jpctool db dump コマンドを実行すると、指定した Store データベースと異なるデータが出力される。</li></ul>	8.2.2
レポートの定義について	<ul style="list-style-type: none"><li>履歴レポートに表示されない時間帯がある。</li></ul>	8.2.3
アラームの定義について	<ul style="list-style-type: none"><li>アクション実行で定義したプログラムが正しく動作しない。</li><li>アラームイベントが表示されない。</li><li>アラームしきい値を超えているのに、エージェント階層の「アラームの状態の表示」に表示されているアラームアイコンの色が緑のまま変わらない。</li></ul>	8.2.4
パフォーマンスデータの収集と管理について	<ul style="list-style-type: none"><li>データの保存期間を短く設定したにも関わらず、PFM - Agent の Store データベースのサイズが小さくならない。</li><li>共通メッセージログに「Store データベースに不正なデータが検出されました」というメッセージが出力される。</li><li>PFM - Agent を起動してもパフォーマンスデータが収集されない。</li></ul>	8.2.5

### 8.2.1 セットアップやサービスの起動に関するトラブルシューティング

セットアップやサービスの起動に関するトラブルの対処方法を次に示します。

# (1) Performance Management のプログラムのサービスが起動しない

考えられる要因およびその対処方法を次に示します。

- PFM - Manager が停止している

PFM - Manager と PFM - Agent が同じホストにある場合、PFM - Manager が停止していると、PFM - Agent サービスは起動できません。PFM - Manager サービスが起動されているか確認してください。PFM - Manager サービスが起動されていない場合は、起動してください。サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

- Performance Management のプログラムの複数のサービスに対して同一のポート番号を設定している

Performance Management のプログラムの複数のサービスに対して同一のポート番号を設定している場合、Performance Management のプログラムのサービスは起動できません。デフォルトでは、ポート番号は自動的に割り当てられるため、ポート番号が重複することはありません。Performance Management のセットアップ時に Performance Management のプログラムのサービスに対して固定のポート番号を設定している場合は、ポート番号の設定を確認してください。Performance Management のプログラムの複数のサービスに対して同一のポート番号を設定している場合は、異なるポート番号を設定し直してください。ポート番号の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

- Store データベースの格納ディレクトリの設定に誤りがある

次のディレクトリを、アクセスできないディレクトリまたは存在しないディレクトリに設定していると、Agent Store サービスは起動できません。ディレクトリ名や属性の設定を見直し、誤りがあれば修正してください。

- Store データベースの格納先ディレクトリ
- Store データベースのバックアップディレクトリ
- Store データベースの部分バックアップディレクトリ
- Store データベースのエクスポート先ディレクトリ
- Store データベースのインポート先ディレクトリ

また、これらのディレクトリを複数の Agent Store サービスに対して設定していると、Agent Store サービスは起動できません。ディレクトリ設定を見直し、誤りがあれば修正してください。

- 指定された方法以外の方法でマシンのホスト名を変更した

マシンのホスト名の変更方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。指定された方法以外の方法でホスト名を変更した場合、Performance Management のプログラムのサービスが起動しないことがあります。

- サービスコントロールマネージャでエラーが発生した

Windows で `jpcspm start` コマンドを実行した場合、「Windows のサービスコントロールマネージャでエラーが発生しました」というエラーメッセージが出力され、サービスの起動に失敗することがあり

ます。この現象が発生した場合、`jpcspm start` コマンドを再実行してください。頻繁に同じ現象が発生する場合は、`jpcspm start` コマンド実行時にサービス起動処理がリトライされる間隔および回数を、`jpccomm.ini` ファイルを編集して変更してください。リトライ間隔およびリトライ回数を変更する方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

- **OpenTP1 がインストールされていない**

OpenTP1 がインストールされていない場合、Agent Collector サービスは起動できません。PFM - Agent ホストに OpenTP1 をインストールしてください。

- **インスタンス環境のセットアップ時の設定に誤りがある**

インスタンス環境のセットアップ時に設定した次の項目に誤りがあると、Agent Collector サービスは起動できません。

- DCCONFPATH
- DCDIR
- OPENTP1\_ADMIN
- OPENTP1\_LIBPATH

ただし、Windows の場合、`OPENTP1_ADMIN` および `OPENTP1_LIBPATH` の設定は不要です。

`jpccconf inst setup` コマンドを実行して、各項目の正しい値を設定し直してください。`jpccconf inst setup` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

## (2) サービスの起動要求をしてからサービスが起動するまで時間が掛かる

`jpcspm start` コマンドを実行してから、または [サービス] アイコンでサービスを開始してから、実際にサービスが起動するまで時間が掛かることがあります。次の要因で時間が掛かっている場合、2 回目の起動時からはサービスの起動までに掛かる時間が短縮されます。

- スタンドアロンモードで起動する場合、サービスが起動するまでに時間が掛かることがあります。
- システム停止時にサービスを自動で停止させる設定をしないで、システムを再起動してサービスを起動すると、Store データベースのインデックスが再構築される場合があります。この場合、サービスが起動するまでに時間が掛かることがあります。
- エージェントを新規に追加したあとサービスを起動すると、初回起動時だけ Store データベースのインデックスが作成されます。そのため、サービスが起動するまでに時間が掛かることがあります。
- 電源切断などによって Store サービスが正常な終了処理を行えなかったときは、再起動時に Store データベースのインデックスが再構築されるため、Store サービスの起動に時間が掛かることがあります。

### (3) Performance Management のプログラムのサービスを停止した直後に、別のプログラムがサービスを開始したとき、通信が正しく実行されない

Performance Management のプログラムのサービスを停止した直後に、このサービスが使用していたポート番号で、ほかのプログラムがサービスを開始した場合、通信が正しく実行されないことがあります。この現象を回避するために、次のどちらかの設定をしてください。

- Performance Management のプログラムのサービスに割り当てるポート番号を固定する  
Performance Management のプログラムの各サービスに対して、固定のポート番号を割り当てて運用してください。ポート番号の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
- TCP\_TIMEWAIT 値の設定をする  
TCP\_TIMEWAIT 値で接続待ち時間を設定してください。
  - Windows の場合、接続待ち時間をデフォルトの設定としてください。デフォルト値は、2 分です。
  - AIX の場合、次のように指定して、接続待ち時間を 75 秒以上にしてください。  
`tcp_timewait : 5`
  - Linux の場合、接続待ち時間のデフォルト値 (60 秒) は変更できません。Performance Management のプログラムのサービスに割り当てるポート番号を固定する方法で対応してください。

### (4) 「ディスク容量が不足しています」というメッセージが出力されたあと Master Store サービスまたは Agent Store サービスが停止する

Store データベースが使用しているディスクに十分な空き容量がない場合、Store データベースへのデータの格納が中断されます。この場合、「ディスク容量が不足しています」というメッセージが出力されたあと、Master Store サービスまたは Agent Store サービスが停止します。

このメッセージが表示された場合、次のどちらかの対処をしてください。

- 十分なディスク容量を確保する  
Store データベースのディスク占有量を見積もり、Store データベースの格納先を十分な容量があるディスクに変更してください。Store データベースのディスク占有量を見積もる方法については、「[付録 A 構築前のシステム見積もり](#)」を参照してください。Store データベースの格納先を変更する方法については、Windows の場合は「[第 2 編 2.7.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。UNIX の場合は「[第 2 編 3.7.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。
- Store データベースの保存条件を変更する  
Store データベースの保存条件を変更し、Store データベースのデータ量の上限値を調整してください。Store データベースの保存条件を変更する方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

これらの対処を実施したあとも Master Store サービスまたは Agent Store サービスが起動されない場合、Store データベースに回復できない論理矛盾が発生しています。この場合、バックアップデータから Store データベースをリストアしたあと、Master Store サービスまたは Agent Store サービスを起動してください。利用できるバックアップデータが存在しない場合は、Store データベースを初期化したあと、Master Store サービスまたは Agent Store サービスを起動してください。Store データベースを初期化するには、Store データベースの格納先ディレクトリにある次のファイルをすべて削除してください。

- 拡張子が .DB であるファイル
- 拡張子が .IDX であるファイル

Store データベースの格納先ディレクトリについては、Windows の場合は「[第 2 編 2.7.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。UNIX の場合は「[第 2 編 3.7.1 パフォーマンスデータの格納先の変更](#)」を参照してください。

## 8.2.2 コマンドの実行に関するトラブルシューティング

Performance Management のコマンドの実行に関するトラブルの対処方法を次に示します。

### (1) `jpctool service list` コマンドを実行すると稼働していないサービス名が出力される

考えられる要因およびその対処方法を次に示します。

- Performance Management のプログラムのサービス情報を削除しないで Performance Management のプログラムをアンインストールした  
Performance Management のプログラムをアンインストールしても Performance Management のプログラムのサービス情報はデータベースに残っています。`jpctool service delete` コマンドを実行して、Performance Management のプログラムのサービス情報を削除してください。サービス情報の削除方法については、マニュアル「[JP1/Performance Management 設計・構築ガイド](#)」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
- Performance Management のプログラムのサービス情報を削除しないでマシンのホスト名を変更した  
Performance Management のプログラムのサービス情報を削除しないでマシンのホスト名を変更した場合、以前のホスト名が付けられているサービス ID のサービス情報が、Master Manager サービスが管理しているデータベースに残っています。`jpctool service delete` コマンドを実行して、Performance Management のプログラムのサービス情報を削除してください。サービス情報の削除方法およびホスト名の変更方法については、マニュアル「[JP1/Performance Management 設計・構築ガイド](#)」の、Performance Management のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

## (2) jpctool db dump コマンドを実行すると、指定した Store データベースと異なるデータが出力される

同じ Store サービスに対して、同じエクスポートファイル名を指定して、複数回jpctool db dump コマンドを実行すると、先に実行した出力結果があとから実行された実行結果に上書きされます。同じ Master Store サービスまたは Agent Store サービスに対して、複数回jpctool db dump コマンドを実行する場合は、異なる名称のエクスポートファイルを指定してください。Store データベースのエクスポート方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

### 8.2.3 レポートの定義に関するトラブルの要因

Performance Management のレポートの定義に関するトラブルの要因を次に示します。

#### (1) 履歴レポートに表示されない時間帯がある

PFM - Agent がインストールされたマシンの現在時刻を、現在時刻よりも未来の時刻に変更した場合、変更前の時刻から変更後の時刻までの履歴情報は保存されません。

### 8.2.4 アラームの定義に関するトラブルシューティング

Performance Management のアラームの定義に関するトラブルの対処方法を次に示します。

#### (1) アクション実行で定義したプログラムが正しく動作しない

考えられる要因とその対処方法を次に示します。

- PFM - Manager またはアクション実行先ホストの Action Handler が起動されていない  
PFM - Manager またはアクション実行先ホストの Action Handler が停止していると、アクションが実行されません。アクションを実行する場合は、PFM - Manager およびアクション実行先ホストの Action Handler を起動しておいてください。

#### (2) アラームイベントが表示されない

考えられる要因とその対処方法を次に示します。

- PFM - Manager が起動されていない  
PFM - Manager を停止すると、PFM - Agent からのアラームイベントを正しく発行できません。アラームイベントを監視する場合は、PFM - Manager を起動しておいてください。



### (3) アラームしきい値を超えているのに、エージェント階層の「アラームの状態の表示」に表示されているアラームアイコンの色が緑のまま変わらない

考えられる要因とその対処方法を次に示します。

- PFM - Manager ホストおよび PFM - Agent ホストの LANG 環境変数が日本語にそろっていない環境で、日本語を使用したアラームテーブルをバインドしている

このような場合、日本語を使用したアラームは正常に評価されません。PFM - Manager ホストおよび PFM - Agent ホストの LANG 環境変数を、日本語にそろえて運用してください。LANG 環境変数の設定は共通メッセージログを確認し、最新のサービス起動メッセージが日本語と英語のどちらで出力されているかで確認してください。

なお、PFM - Manager ホストが英語環境の場合、現在の設定のまま日本語環境に変更すると、既存のアラーム定義が文字化けして削除できなくなります。このため、次の作業を実施してください。

1. アラーム定義内に日本語を使用したアラームテーブルが必要な場合は、PFM - Web Console からすべてエクスポートする。  
エクスポートする際に、`jpctool alarm export` コマンドは使用できません。
2. アラーム定義内に日本語を使用したアラームテーブルをすべて削除する。
3. PFM - Manager を停止する。
4. PFM - Manager ホストの LANG 環境変数を日本語に変更する。
5. PFM - Manager を起動する。
6. 手順 1 でアラームテーブルをエクスポートした場合は、PFM - Web Console または `jpctool alarm import` コマンドを使用して、アラームテーブルをインポートする。

また、日本語および英語の混在環境での、その他の注意事項については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、日本語版と英語版の混在環境での注意事項について記載している章を参照してください。

## 8.2.5 パフォーマンスデータの収集と管理に関するトラブルシューティング

Performance Management のパフォーマンスデータの収集と管理に関するトラブルの対処方法を次に示します。

### (1) データの保存期間を短く設定したにも関わらず、PFM - Agent の Store データベースのサイズが小さくならない

Store バージョン 1.0 で Store データベースのファイル容量がすでに限界に達している場合、データの保存期間を短く設定してもファイルサイズは小さくなりません。この場合、保存期間を短く設定したあと、いったん Store データベースをバックアップし、リストアし直してください。

データの保存期間の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。また、Store データベースのバックアップとリストアの方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、バックアップとリストアについて説明している章を参照してください。

## (2) 共通メッセージログに「Store データベースに不正なデータが検出されました」というメッセージが出力される

予期しないサービスの停止またはマシンのシャットダウンによって、Store データベースに不整合なデータが発生したおそれがあります。次の方法で対処をしてください。

- Store データベースをバックアップしてある場合は、Store データベースをリストアしてください。
- Store データベースをバックアップしていない場合は、Agent Store サービスを停止したあと、対応するデータベースファイル (\*.DB ファイルおよび\*.IDX ファイル) を削除し、サービスを再起動してください。

## (3) PFM - Agent を起動してもパフォーマンスデータが収集されない

次の方法で対処してください。

- OpenTP1 の起動状態を確認し、停止している場合は起動してください。
- インスタンス環境のセットアップ時の設定を見直してください。  
jpcconf inst setup コマンドを実行して、各項目の正しい値を設定し直してください。jpcconf inst setup コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

## (4) PFM - Agent が起動した OpenTP1 コマンドプロセスが残ったままになっている

Agent Collector が OpenTP1 コマンドプロセス生成後に異常終了することによって、OpenTP1 コマンドプロセスが残ったままになる場合があります。そのような場合には、次の方法で対処してください。

- UNIX の場合  
ps コマンドで OpenTP1 コマンドプロセス (コマンド名は OpenTP1 コマンド名) が残っていないかを確認し、残っていれば kill コマンド (SIGKILL 指定) で該当するプロセスを強制停止させてください。
- Windows の場合  
タスクマネージャで OpenTP1 コマンドプロセス (コマンド名は OpenTP1 コマンド名) が残っていないかを確認し、残っていればタスクマネージャから該当するプロセスを強制停止させてください。

## 8.2.6 その他のトラブルに関するトラブルシューティング

トラブルが発生したときの現象を確認してください。メッセージが出力されている場合は、メッセージの内容を確認してください。また、Performance Management が出力するログ情報については、「[8.3 トラブルシューティング時に採取するログ情報](#)」を参照してください。

「[8.2.1 セットアップやサービスの起動に関するトラブルシューティング](#)」から「[8.2.5 パフォーマンスデータの収集と管理に関するトラブルシューティング](#)」に示した対処をしても、トラブルが解決できなかった場合、または、これら以外のトラブルが発生した場合、トラブルの要因を調査するための資料を採取し、システム管理者に連絡してください。

採取が必要な資料および採取方法については、「[8.4 トラブルシューティング時に採取が必要な資料](#)」および「[8.5 トラブルシューティング時に採取する資料の採取方法](#)」を参照してください。

## 8.3 トラブルシューティング時に採取するログ情報

---

Performance Management でトラブルが発生した場合、ログ情報を確認して対処方法を検討します。Performance Management を運用しているときに出力されるログ情報には、次の4種類があります。

- システムログ
- 共通メッセージログ
- 稼働状況ログ
- トレースログ

ここでは、4種類のログ情報、および各ログ情報に設定できるログオプションについて説明します。

### 8.3.1 トラブルシューティング時に採取するログ情報の種類

#### (1) システムログ

システムログとは、システムの状態やトラブルを通知するログ情報のことです。このログ情報は次のログファイルに出力されます。

- Windows の場合  
イベントログファイル
- UNIX の場合  
syslog ファイル

ログの出力形式については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、ログ情報について説明している章を参照してください。

#### 論理ホスト運用の場合の注意事項

Performance Management のシステムログのほかに、クラスタソフトによる Performance Management の制御などを確認するためにクラスタソフトのログが必要です。

#### (2) 共通メッセージログ

共通メッセージログとは、システムの状態やトラブルを通知するログ情報のことです。システムログよりも詳しいログ情報が出力されます。共通メッセージログの出力先ファイル名やファイルサイズについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ログ情報の詳細について説明している章を参照してください。また、ログの出力形式については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、ログ情報について説明している章を参照してください。

## 論理ホスト運用の場合の注意事項

論理ホスト運用の Performance Management の場合、共通メッセージログは共有ディスクに出力されます。共有ディスク上にあるログファイルは、フェールオーバーするときにシステムとともに引き継がれますので、メッセージは同じログファイルに記録されます。

### (3) 稼働状況ログ

稼働状況ログとは、PFM - Web Console が出力するログ情報のことです。稼働状況ログの出力先ファイル名やファイルサイズについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。また、ログの出力形式については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、ログ情報について説明している章を参照してください。

### (4) トレースログ

トレースログとは、トラブルが発生した場合に、トラブル発生の経緯を調査したり、各処理の処理時間を測定したりするために採取するログ情報のことです。

トレースログは、Performance Management のプログラムの各サービスが持つログファイルに出力されます。

## 論理ホスト運用の場合の注意事項

論理ホスト運用の Performance Management の場合、トレースログは共有ディスクに出力されます。共有ディスク上にあるログファイルは、フェールオーバーするときにシステムとともに引き継がれますので、メッセージは同じログファイルに記録されます。

## 8.3.2 トラブルシューティング時に参照するログファイルおよびディレクトリ一覧

ここでは、Performance Management から出力されるログ情報について説明します。稼働状況ログの出力先ファイル名やファイルサイズについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

### (1) 共通メッセージログ

共通メッセージログの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ログ情報の詳細について説明している章を参照してください。

### (2) トレースログ

ここでは、Performance Management のログ情報のうち、PFM - Agent のトレースログの出力元であるサービス名または制御名、および格納先ディレクトリ名を、OS ごとに表に示します。

表 8-2 トレースログの格納先フォルダ名 (Windows の場合)

ログ情報の種類	出力元	フォルダ名
トレースログ	Agent Collector サービス	インストール先フォルダ\agth\agent\インスタンス名\log\
	Agent Store サービス	インストール先フォルダ\agth\store\インスタンス名\log\
トレースログ (論理ホスト運用の場合)	Agent Collector サービス	環境フォルダ*\jp1pc\agth\agent\インスタンス名\log\
	Agent Store サービス	環境フォルダ*\jp1pc\agth\store\インスタンス名\log\

注※

環境フォルダは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のフォルダです。

表 8-3 トレースログの格納先ディレクトリ名 (UNIX の場合)

ログ情報の種類	出力元	ディレクトリ名
トレースログ	Agent Collector サービス	/opt/jp1pc/agth/agent/インスタンス名/log/
	Agent Store サービス	/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/log/
トレースログ (論理ホスト運用の場合)	Agent Collector サービス	環境ディレクトリ*/jp1pc/agth/agent/インスタンス名/log/
	Agent Store サービス	環境ディレクトリ*/jp1pc/agth/store/インスタンス名/log/

注※

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

## 8.4 トラブルシューティング時に採取が必要な資料

「8.2 トラブルシューティング」に示した対処をしてもトラブルを解決できなかった場合、トラブルの要因を調べるための資料を採取し、システム管理者に連絡する必要があります。この節では、トラブル発生時に採取が必要な資料について説明します。

Performance Management では、採取が必要な資料を一括採取するためのコマンドを用意しています。PFM - Agent の資料を採取するには、jpcras コマンドを使用します。jpcras コマンドを使用して採取できる資料については、表中に記号で示しています。

### 注意

- jpcras コマンドで採取できる資料は、コマンド実行時に指定するオプションによって異なります。コマンドに指定するオプションと採取できる資料については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。
- PFM - Agent for OpenTP1 固有の情報を採取する場合、OpenTP1 の保守情報の採取のために、OpenTP1 のdcrasget コマンドが実行されます。このとき、OpenTP1 のcore ファイルなどが大量に存在すると、dcrasget コマンドの実行に時間が掛かるおそれがあります。このような場合に、環境変数「JPCAGTH\_COLNOTP1RAS」に 1 を設定することでdcrasget コマンドの処理を抑止し、コマンドの実行時間を短縮できます。

### 論理ホスト運用の場合の注意事項

論理ホスト運用の場合の注意事項を次に示します。

- 論理ホスト運用する場合の Performance Management のログは、共有ディスクに格納されます。なお、共有ディスクがオンラインになっている場合 (Windows)、またはマウントされている場合 (UNIX) は、jpcras コマンドで共有ディスク上のログも一括して採取できます。
- フェールオーバー時の問題を調査するには、フェールオーバーの前後の資料が必要です。このため、実行系と待機系の両方の資料が必要になります。
- 論理ホスト運用の Performance Management の調査には、クラスタソフトの資料が必要です。論理ホスト運用の Performance Management は、クラスタソフトから起動や停止を制御されているので、クラスタソフトの動きと Performance Management の動きを対比して調査するためです。

### 8.4.1 トラブル発生時に Windows 環境で採取が必要な資料

#### (1) トラブルシューティング時に採取する OS のログ情報

OS のログ情報で、採取が必要な情報を次の表に示します。

表 8-4 OS のログ情報 (Windows の場合)

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
システムログ	Windows イベントログ	—	○
プロセス情報	プロセスの一覧	—	○
システムファイル	hosts ファイル	システムフォルダ¥system32¥drivers¥etc¥hosts	○
	services ファイル	システムフォルダ¥system32¥drivers¥etc¥services	○
OS 情報	システム情報	—	○
	ネットワークステータス	—	○
	ホスト名	—	○

(凡例)

- ：採取できる
- ：該当しない

## (2) トラブルシューティング時に採取する Performance Management の情報

Performance Management に関する情報で、採取が必要な情報を次の表に示します。また、ネットワーク接続でのトラブルの場合、接続先マシン上のファイルの採取も必要です。

表 8-5 Performance Management の情報 (Windows の場合)

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
共通メッセージログ	Performance Management から出力されるメッセージログ (シーケンシャルファイル方式)	インストール先フォルダ¥log¥jpclog{01 02}※1	○
	Performance Management から出力されるメッセージログ (ラップアラウンドファイル方式)	インストール先フォルダ¥log¥jpclogw{01 02}※1	○
構成情報	各構成情報ファイル	—	○



情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpccras コマンドでの採取
構成情報	jpccras tool service list コマンドの出力結果	—	○
バージョン情報	製品バージョン	—	○
	履歴情報	—	○
データベース情報	Agent Store	<ul style="list-style-type: none"> <li>Store バージョン 1.0 の場合 インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥*. DB インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥*. IDX</li> <li>Store バージョン 2.0 の場合 インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥STPD インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥STPI フォルダ下の次に示すファイル。 *. DB *. IDX</li> </ul>	○
トレースログ	Performance Management のプログラムの各サービスに対するトレース情報	—※2	○
インストールログ※3	インストール時のメッセージログ	システムフォルダ¥TEMP¥HCDINST フォルダ下の次に示すファイル。 <ul style="list-style-type: none"> <li>HCDMAIN.LOG およびHCDMAINn.LOG※4</li> <li>HCDINST.LOG およびHCDINSTn.LOG※4</li> <li>製品形名.LOG</li> </ul>	×

#### (凡例)

- ：採取できる
- ×
- ：該当しない

#### 注※1

ログファイルの出力方式については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

#### 注※2

トレースログの格納先フォルダについては、「[8.3.2 トラブルシューティング時に参照するログファイルおよびディレクトリ一覧](#)」を参照してください。

#### 注※3

インストールに失敗した場合に採取してください。

#### 注※4

n は数字を示します。

### (3) トラブルシューティング時に採取するオペレーション内容

トラブル発生時のオペレーション内容について、次に示す情報が必要です。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成（各 OS のバージョン、ホスト名、PFM - Manager と PFM - Agent の構成など）
- 再現性の有無
- PFM - Web Console からログインしている場合は、ログイン時の Performance Management ユーザー名

### (4) トラブルシューティング時に採取する OpenTP1 の情報

OpenTP1 に関する情報で、採取が必要な情報を次の表に示します。

表 8-6 OpenTP1 の情報 (Windows の場合)

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
OpenTP1 の保守情報	OpenTP1 のトラブルシューティングに必要な保守資料	OpenTP1 の dcrasget コマンドで採取するファイル。dcrasget コマンドの詳細についてはマニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照してください。	○*

(凡例)

○：採取できる

注※

環境変数 JPCAGTH\_COLNOTP1RAS に 1 を設定して jpcras コマンドを実行した場合は採取されません。

### (5) トラブルシューティング時に採取する画面上のエラー情報

次に示すハードコピーを採取してください。

- アプリケーションエラーが発生した場合は、操作画面のハードコピー
- エラーメッセージダイアログボックスのハードコピー（詳細ボタンがある場合はその内容を含む）
- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、[コマンドプロンプト] ウィンドウまたは [管理者コンソール] ウィンドウのハードコピー

### (6) トラブルシューティング時に採取するユーザーダンプ

Performance Management のプロセスがアプリケーションエラーで停止した場合は、ユーザーダンプを採取してください。

## (7) トラブルシューティング時に採取する問題レポートの採取

Performance Management のプロセスがアプリケーションエラーで停止した場合は、問題レポートを採取してください。

## (8) トラブルシューティング時に採取するその他の情報

上記以外に必要な情報を次に示します。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コマンドに指定した引数
- [アクセサリ] – [システムツール] – [システム情報] の内容
- Windows の [イベントビューア] ウィンドウを開き、左ペイン [Windows ログ] の、[システム] および [アプリケーション] の内容

### 8.4.2 トラブル発生時に UNIX 環境で採取が必要な資料

#### (1) トラブルシューティング時に採取する OS のログ情報

OS のログ情報で、採取が必要な情報を次の表に示します。

表 8-7 OS のログ情報 (UNIX の場合)

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
システムログ	syslog	<ul style="list-style-type: none"><li>• AIX の場合 /var/adm/syslog*</li><li>• Linux の場合 /var/log/messages*</li></ul>	○*
プロセス情報	プロセスの一覧	—	○
システムファイル	hosts ファイル	/etc/hosts	○
	services ファイル	/etc/services	○
OS 情報	パッチ情報	—	○
	カーネル情報	—	○
	バージョン情報	—	○
	ネットワークステータス	—	○
	環境変数	—	○
	ホスト名	—	○
ダンプ情報	core ファイル	—	○

(凡例)

○：採取できる

－：該当しない

注※

デフォルトのパスおよびファイル名以外に出力されるように設定されているシステムでは、収集できません。手動で収集してください。

## (2) トラブルシューティング時に採取する Performance Management の情報

Performance Management に関する情報で、採取が必要な情報を次の表に示します。また、ネットワーク接続でのトラブルの場合、接続先マシン上のファイルの採取も必要です。

表 8-8 Performance Management の情報 (UNIX の場合)

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
共通メッセージログ	Performance Management から出力されるメッセージログ (シーケンシャルファイル方式)	/opt/jp1pc/log/jpclog{01 02}*1	○
	Performance Management から出力されるメッセージログ (ラップアラウンドファイル方式)	/opt/jp1pc/log/jpclogw{01 02}*1	○
構成情報	各構成情報ファイル	－	○
	jpctool service list コマンドの出力結果	－	○
バージョン情報	製品バージョン	－	○
	履歴情報	－	○
データベース情報	Agent Store	<ul style="list-style-type: none"><li>Store バージョン 1.0 の場合 /opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/*.DB /opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/*.IDX</li><li>Store バージョン 2.0 の場合 /opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/STPD /opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/STPI ディレクトリ下の次に示すファイル。</li></ul>	○

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
データベース情報	Agent Store	*.DB *.IDX	○
トレースログ	Performance Management のプログラムの各サービスに対するトレース情報	—※2	○
インストールログ※3	Hitachi PP Installer の標準ログ	/etc/.hitachi/.hitachi.log* /etc/.hitachi/.install.log*	×

(凡例)

- ：採取できる
- ×：採取できない
- ：該当しない

注※1

ログファイルの出力方式については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

注※2

トレースログの格納先ディレクトリについては、「[8.3.2 トラブルシューティング時に参照するログファイルおよびディレクトリ一覧](#)」を参照してください。

注※3

インストールに失敗した場合に採取してください。

### (3) トラブルシューティング時に採取する OpenTP1 の情報

OpenTP1 に関する情報で、採取が必要な情報を次の表に示します。

表 8-9 OpenTP1 の情報 (UNIX の場合)

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
OpenTP1 の保守情報	OpenTP1 のトラブルシューティングに必要な保守資料	OpenTP1 の dcrasget コマンドで採取するファイル。dcrasget コマンドの詳細についてはマニュアル「OpenTP1 運用と操作」を参照してください。	○*

(凡例)

- ：採取できる

注※

環境変数 JPCAGTH\_COLNOTP1RAS に 1 を設定して jpcras コマンドを実行した場合は採取されません。

## (4) トラブルシューティング時に採取するオペレーション内容

トラブル発生時のオペレーション内容について、次に示す情報が必要です。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成 (各 OS のバージョン, ホスト名, PFM - Manager と PFM - Agent の構成など)
- 再現性の有無
- PFM - Web Console からログインしている場合は, ログイン時の Performance Management ユーザー名

## (5) トラブルシューティング時に採取するエラー情報

次に示すエラー情報を採取してください。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は, コンソールに出力されたメッセージ

## (6) トラブルシューティング時に採取するその他の情報

上記以外に必要な情報を次に示します。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は, コマンドに指定した引数

## 8.5 トラブルシューティング時に採取する資料の採取方法

トラブルが発生したときに資料を採取する方法を次に示します。

### 8.5.1 トラブルシューティング時に Windows 環境で採取する資料の採取方法

#### (1) トラブルシューティング時のダンプ情報の採取方法

ダンプ情報の採取手順を次に示します。

1. タスクマネージャを開く。
2. プロセスのタブを選択する。
3. ダンプを取得するプロセス名を右クリックし、「ダンプ ファイルの作成」を選択する。

次のフォルダに、ダンプファイルが格納されます。

```
システムドライブ¥Users¥ユーザー名¥AppData¥Local¥Temp
```

4. 手順 3 のフォルダからダンプファイルを採取する。

手順 3 と異なるフォルダにダンプファイルが出力されるように環境変数の設定を変更している場合は、変更先のフォルダからダンプファイルを採取してください。

#### (2) 資料採取コマンドの実行によるトラブルシューティング資料の採取方法

トラブルの要因を調べるための資料の採取には、jpcras コマンドを使用します。共通メッセージログなど PFM の保守情報に加えて、OpenTP1 独自の保守情報を収集できます。資料採取コマンドの実行手順を次に示します。なお、ここで説明する操作をする場合、ユーザーは OS に Administrators 権限でログオンしてください。

1. 資料採取するサービスがインストールされているホストにログオンする。
2. コマンドプロンプトで次に示すコマンドを実行して、コマンドインタープリターの「コマンド拡張機能」を有効にする。

```
cmd /E:ON
```

3. 採取する資料および資料の格納先フォルダを指定して、jpcras コマンドを実行する。

jpcras コマンドで、採取できるすべての情報を c:¥tmp¥jpc¥agt フォルダに格納する場合の、コマンドの指定例を次に示します。

```
jpcras c:¥tmp¥jpc¥agt all all
```

jpcras コマンドを実行すると、PFM サービスの一覧取得および起動状態の確認のため、内部的に「jpcrtool service list -id \* -host \*」コマンドが実行されます。コマンド実行ホストとほかの Performance Management システムのホストとの間にファイアウォールが設定されていたり、システム構成が大規模だったりすると、「jpcrtool service list -id \* -host \*」コマンドの実行に時間が掛かる場合があります。そのような場合は、環境変数 JPC\_COLCTRLNOHOST に 1 を設定することで「jpcrtool service list -id \* -host \*」コマンドの処理を抑止し、コマンドの実行時間を短縮できます。jpcras コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

## 補足

- PFM - Agent for OpenTP1 固有の情報を採取する場合、サービスキーにall またはagth を指定し、採取資料を選択するオプション ([all | data | dump]) の指定を省略するか、all を指定する必要があります。OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、コマンド実行時にユーザーアカウント制御のダイアログが表示されることがあります。ダイアログが表示された場合は、「続行」ボタンをクリックして資料採取を続行してください。「キャンセル」ボタンをクリックした場合は、資料採取が中止されます。
- PFM - Agent for OpenTP1 固有の情報を採取する場合、OpenTP1 の保守情報を採取するために、OpenTP1 のdcrasget コマンドが実行されます。このとき、OpenTP1 のcore ファイルなどが大量に存在すると、dcrasget コマンドの実行に時間が掛かるおそれがあります。このような場合に、環境変数「JPCAGTH\_COLNOTPIRAS」に 1 を設定することでdcrasget コマンドの処理を抑止し、コマンドの実行時間を短縮できます。

## (3) 資料採取コマンドの実行によるトラブルシューティング資料の採取方法 (論理ホスト運用の場合)

論理ホスト運用の Performance Management の資料は共有ディスクにあり、資料は実行系と待機系の両方で採取する必要があります。

トラブルの要因を調べるための資料の採取には、jpcras コマンドを使用します。資料採取コマンドの実行手順を次に示します。なお、ここで説明する操作は、OS ユーザーとして Administrators 権限を持つユーザーが実行してください。

論理ホスト運用の場合の資料採取コマンドの実行について、手順を説明します。

### 1. 共有ディスクをオンラインにする。

論理ホストの資料は共有ディスクに格納されています。実行系ノードでは、共有ディスクがオンラインになっていることを確認して資料を採取してください。

### 2. 実行系と待機系の両方で、採取する資料および資料の格納先フォルダを指定して、jpcras コマンドを実行する。

jpcras コマンドで、採取できるすべての情報をc:¥tmp¥jpc¥agt フォルダに格納する場合の、コマンドの指定例を次に示します。

```
jpcras c:¥tmp¥jpc¥agt all all
```



jpcras コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

## 補足

- PFM - Agent for OpenTP1 固有の情報を採取する場合、サービスキーにall またはagth を指定し、採取資料を選択するオプション ([all | data | dump]) の指定を省略するか、all を指定する必要があります。OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、コマンド実行時にユーザーアカウント制御のダイアログが表示されることがあります。ダイアログが表示された場合は、「続行」ボタンをクリックして資料採取を続行してください。「キャンセル」ボタンをクリックした場合は、資料採取が中止されます。
- PFM - Agent for OpenTP1 固有の情報を採取する場合、OpenTP1 の保守情報を採取するために、OpenTP1 のdcrasget コマンドが実行されます。このとき、OpenTP1 のcore ファイルなどが大量に存在すると、dcrasget コマンドの実行に時間が掛かるおそれがあります。このような場合に、環境変数「JPCAGTH\_COLNOTP1RAS」に1を設定することでdcrasget コマンドの処理を抑止し、コマンドの実行時間を短縮できます。
- jpcras コマンドをlhost の引数を指定しないで実行すると、そのノードの物理ホストと論理ホストの Performance Management の資料が一とおり採取されます。論理ホスト環境の Performance Management がある場合は、共有ディスク上のログファイルが取得されます。
- 共有ディスクがオフラインになっているノードでjpcras コマンドを実行すると、KAVE05242-W が出力されます。このとき、共有ディスク上のファイルおよび OpenTP1 の保守情報は取得されませんが、jpcras コマンドは正常終了します。

## 注意

実行系ノードと待機系ノードの両方で、資料採取コマンドを実行して資料採取をしてください。フェールオーバーの前後の調査をするには、実行系と待機系の両方の資料が必要です。

### 3. クラスタソフトの資料を採取する。

この資料は、クラスタソフトと Performance Management のどちらでトラブルが発生しているのかを調査するために必要になります。クラスタソフトから Performance Management への起動停止などの制御要求と結果を調査できる資料を採取してください。

## (4) トラブルシューティング時の Windows イベントログ資料の採取方法

Windows の [イベントビューア] ウィンドウで、Windows イベントログをファイルに出力してください。

## (5) トラブルシューティング時に確認するオペレーション内容の採取方法

トラブル発生時のオペレーション内容を確認し、記録しておいてください。確認が必要な情報を次に示します。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成 (各 OS のバージョン、ホスト名、PFM - Manager と PFM - Agent の構成など)

- 再現性の有無
- PFM - Web Console からログインしている場合は、ログイン時の Performance Management ユーザー名

## (6) トラブルシューティング時の画面上のエラー情報の採取方法

次に示すハードコピーを採取してください。

- アプリケーションエラーが発生した場合は、操作画面のハードコピー
- エラーメッセージダイアログボックスのハードコピー  
詳細情報がある場合はその内容をコピーしてください。
- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、[コマンドプロンプト] ウィンドウまたは [管理者コンソール] ウィンドウのハードコピー  
[コマンドプロンプト] ウィンドウまたは [管理者コンソール] ウィンドウのハードコピーを採取する際は、["コマンドプロンプト"のプロパティ] ウィンドウについて次のように設定しておいてください。
  - [オプション] タブの [編集オプション]  
[簡易編集モード] がチェックされた状態にする。
  - [レイアウト] タブ  
[画面バッファのサイズ] の [高さ] に「500」を設定する。

## (7) トラブルシューティング時に採取するその他の資料の採取方法

上記以外に必要な情報を採取してください。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コマンドに指定した引数
- [アクセサリ] - [システムツール] - [システム情報] の内容
- Windows の [イベントビューア] ウィンドウを開き、左ペイン [Windows ログ] の、[システム] および [アプリケーション] の内容

## 8.5.2 トラブルシューティング時に UNIX 環境で採取する資料の採取方法

### (1) 資料採取コマンドの実行によるトラブルシューティング資料の採取方法

トラブルの要因を調べるための資料の採取には、jpcras コマンドを使用します。資料採取コマンドの実行手順を次に示します。なお、ここで説明する操作は、OS ユーザーとして root ユーザー権限を持つユーザーが実行してください。

1. 資料採取するサービスがインストールされているホストにログインする。
2. 採取する資料および資料の格納先ディレクトリを指定して、jpcras コマンドを実行する。

jpcras コマンドで、採取できるすべての情報を/tmp/jpc/agt ディレクトリに格納する場合の、コマンドの指定例を次に示します。

```
jpcras /tmp/jpc/agt all all
```

jpcras コマンドを実行すると、PFM サービスの一覧取得および起動状態の確認のため、内部的に「jpc tool service list -id \* -host \*」コマンドが実行されます。コマンド実行ホストとほかの Performance Management システムのホストとの間にファイアウォールが設定されていたり、システム構成が大規模だったりすると、「jpc tool service list -id \* -host \*」コマンドの実行に時間が掛かる場合があります。そのような場合は、環境変数 JPC\_COLCTRLNOHOST に 1 を設定することで「jpc tool service list -id \* -host \*」コマンドの処理を抑止し、コマンドの実行時間を短縮できます。

jpcras コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

## 補足

- PFM - Agent for OpenTP1 固有の情報を採取する場合、サービスキーにall またはagth を指定し、採取資料を選択するオプション ([all | data | dump]) の指定を省略するか、all を指定する必要があります。
- PFM - Agent for OpenTP1 固有の情報を採取する場合、OpenTP1 の保守情報を採取するために、OpenTP1 のdcrasget コマンドが実行されます。このとき、OpenTP1 のcore ファイルなどが大量に存在すると、dcrasget コマンドの実行に時間が掛かるおそれがあります。このような場合に、環境変数「JPCAGTH\_COLNOTP1RAS」に 1 を設定することでdcrasget コマンドの処理を抑止し、コマンドの実行時間を短縮できます。
- 資料採取コマンドで収集された資料は、tar コマンドおよびcompress コマンドで圧縮された形式で、指定されたディレクトリに格納されます。ファイル名を次に示します。

```
jpcrasYYMMDD.tar.Z
```

YYMMDD の部分は実行年月日を表します。

## (2) 資料採取コマンドの実行によるトラブルシューティング資料の採取方法 (論理ホスト運用の場合)

論理ホスト運用の Performance Management の資料は共有ディスクにあり、資料は実行系と待機系の両方で採取する必要があります。

トラブルの要因を調べるための資料の採取には、jpcras コマンドを使用します。資料採取コマンドの実行手順を次に示します。なお、ここで説明する操作は、OS ユーザーとして root ユーザー権限を持つユーザーが実行してください。

論理ホスト運用の場合の、資料採取コマンドの実行について、手順を説明します。

### 1. 共有ディスクをマウントする。

論理ホストの資料は共有ディスクに格納されています。実行系ノードでは、共有ディスクがマウントされていることを確認して資料を採取してください。

## 2. 実行系と待機系の両方で、採取する資料および資料の格納先ディレクトリを指定して、jpcras コマンドを実行する。

jpcras コマンドで、採取できるすべての情報を/tmp/jpc/agt ディレクトリに格納する場合の、コマンドの指定例を次に示します。

```
jpcras /tmp/jpc/agt all all
```

- 資料採取コマンドで収集された資料は、tar コマンドおよびcompress コマンドで圧縮された形式で、指定されたディレクトリに格納されます。ファイル名を次に示します。  
jpcrasYYMMDD.tar.Z  
YYMMDD の部分は実行年月日を表します。
- jpcras コマンドをlhost の引数を指定しないで実行すると、そのノードの物理ホストと論理ホストの Performance Management の資料が一とおり採取されます。論理ホスト環境の Performance Management がある場合は、共有ディスク上のログファイルが取得されます。
- 共有ディスクがマウントされていないノードでjpcras コマンドを実行すると、KAVE05242-W が出力されます。このとき、共有ディスク上のファイルおよび OpenTP1 の保守情報は取得されませんが、jpcras コマンドは正常終了します。

### 注意

実行系ノードと待機系ノードの両方で、資料採取コマンドを実行して資料採取をしてください。フェールオーバーの前後の調査をするには、実行系と待機系の両方の資料が必要です。

jpcras コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

## 3. クラスタソフトの資料を採取する。

この資料は、クラスタソフトと Performance Management のどちらでトラブルが発生しているのかを調査するために必要になります。クラスタソフトから Performance Management への起動停止などの制御要求と結果を調査できる資料を採取してください。

### (3) トラブルシューティング時に確認するオペレーション内容の採取方法

トラブル発生時のオペレーション内容を確認し、記録しておいてください。確認が必要な情報を次に示します。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成（各 OS のバージョン、ホスト名、PFM - Manager と PFM - Agent の構成など）
- 再現性の有無

- PFM - Web Console からログインしている場合は、ログイン時の Performance Management ユーザー名

#### **(4) トラブルシューティング時のエラー情報の採取方法**

次に示すエラー情報を採取してください。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コンソールに出力されたメッセージ

#### **(5) トラブルシューティング時に採取するその他の資料の採取方法**

上記以外に必要な情報を採取してください。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コマンドに指定した引数

## 8.6 Performance Management の障害検知

---

Performance Management では、ヘルスチェック機能を利用することで Performance Management 自身の障害を検知できます。ヘルスチェック機能では、監視エージェントや監視エージェントが稼働するホストの稼働状態を監視し、監視結果を監視エージェントの稼働状態の変化として PFM - Web Console 上に表示します。

また、PFM サービス自動再起動機能を利用することで、PFM サービスが何らかの原因で異常停止した場合に自動的に PFM サービスを再起動したり、定期的に PFM サービスを再起動したりできます。

ヘルスチェック機能によって監視エージェントの稼働状態を監視したり、PFM サービス自動再起動機能によって PFM サービスを自動再起動したりするには、Performance Management のサービスの詳細な状態を確認するステータス管理機能を使用します。このため、対象となる監視エージェントがステータス管理機能に対応したバージョンであり、ステータス管理機能が有効になっている必要があります。ホストの稼働状態を監視する場合は前提となる条件はありません。

また、Performance Management のログファイルをシステム統合監視製品である JP1/Base で監視することによっても、Performance Management 自身の障害を検知できます。これによって、システム管理者は、トラブルが発生したときに障害を検知し、要因を特定して復旧の対処をします。

Performance Management 自身の障害検知の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

## 8.7 Performance Management システムの障害回復

---

Performance Management のサーバで障害が発生したときに、バックアップファイルを基にして、障害が発生する前の正常な状態に回復する必要があります。

障害が発生する前の状態に回復する手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

# 付録



## 付録 A 構築前のシステム見積もり

---

PFM - Agent for OpenTP1 を使ったシステムを構築する前に、使用するマシンの性能が、PFM - Agent for OpenTP1 を運用するのに十分であるか、見積もっておくことをお勧めします。

### 付録 A.1 メモリー所要量

メモリー所要量は、PFM - Agent for OpenTP1 の設定状況や使用状況によって変化します。メモリー所要量の見積もり式については、リリースノートを参照してください。

### 付録 A.2 ディスク占有量

ディスク占有量は、パフォーマンスデータを収集するレコード数によって変化します。ディスク占有量の見積もりには、システム全体のディスク占有量、Store データベース (Store バージョン 1.0) のディスク占有量、または Store データベース (Store バージョン 2.0) の見積もりが必要になります。これらの見積もり式については、リリースノートを参照してください。

### 付録 A.3 クラスタ運用時のディスク占有量

クラスタ運用時のディスク占有量の見積もりは、クラスタシステムで運用しない場合のディスク占有量の見積もりと同じです。ディスク占有量については、「[付録 A.2 ディスク占有量](#)」を参照してください。

## 付録 B カーネルパラメーター

---

PFM - Agent for OpenTP1 を使用する場合、実行処理に必要なリソースを割り当てるために、OS のカーネルパラメーターを調整します。ここでは、調整が必要なカーネルパラメーターを OS ごとに説明します。

なお、UNIX 環境で PFM - Manager および PFM - Web Console を使用する場合の、カーネルパラメーターの調整については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録に記載されているカーネルパラメーター一覧を参照してください。

### 付録 B.1 AIX の場合

AIX の場合は、カーネルパラメーターの調整は不要です。

### 付録 B.2 Linux の場合

#### (1) PFM - Agent for OpenTP1 が必要とするシステムリソース

Linux 環境で調整が必要なカーネルパラメーターを次の表に示します。

システムリソース	パラメーター	見積もり
セマフォ	SEMMNI	10*複数インスタンスの場合のインスタンス数
	SEMMNS	10*複数インスタンスの場合のインスタンス数

## 付録 C 識別子一覧

PFM - Agent for OpenTP1 を操作したり、PFM - Agent for OpenTP1 の Store データベースからパフォーマンスデータを抽出したりする際、PFM - Agent for OpenTP1 であることを示す識別子が必要な場合があります。PFM - Agent for OpenTP1 の識別子を次の表に示します。

表 C-1 PFM - Agent for OpenTP1 の識別子一覧

用途	名称	識別子	説明
コマンドなど	プロダクト ID	H	プロダクト ID とは、サービス ID の一部。サービス ID は、コマンドを使用して Performance Management のシステム構成を確認する場合や、パフォーマンスデータをバックアップする場合などに必要である。サービス ID については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照のこと。
	サービスキー	agth または OpenTP1	コマンドを使用して PFM - Agent for OpenTP1 を起動する場合や、終了する場合などに必要である。サービスキーについては、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照のこと。
ヘルプ	ヘルプ ID	pcah	PFM - Agent for OpenTP1 のヘルプであることを表す。

## 付録 D プロセス一覧

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 のプロセス一覧を記載します。

PFM - Agent for OpenTP1 のプロセス一覧を次の表に示します。なお、プロセス名の後ろに記載されている値は、同時に起動できるプロセス数です。

### 注意

論理ホストの PFM - Agent for OpenTP1 でも、動作するプロセスおよびプロセス数は同じです。

表 D-1 PFM - Agent for OpenTP1 のプロセス一覧 (Windows 版)

プロセス名 (プロセス数)	機能
jpcagth.exe(n)	Agent Collector サービスプロセス。このプロセスは、PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンスごとの一つ起動する。
jpcsto.exe(n)	Agent Store サービスプロセス。このプロセスは、PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンスごとの一つ起動する。
stpqlpr.exe(1)*	Store データベースのバックアップまたはエクスポート実行プロセス。

### 注※

jpcsto プロセスの子プロセスです。

表 D-2 PFM - Agent for OpenTP1 のプロセス一覧 (UNIX 版)

プロセス名 (プロセス数)	機能
jpcagth(n)	Agent Collector サービスプロセス。このプロセスは、PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンスごとの一つ起動する。
agth/jpcsto(n)	Agent Store サービスプロセス。このプロセスは、PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンスごとの一つ起動する。
stpqlpr(1)*	Store データベースのバックアップまたはエクスポート実行プロセス。

### 注※

jpcsto プロセスの子プロセスです。

## 付録 E ポート番号一覧

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 のポート番号を記載します。

PFM - Manager , PFM - Web Console, および PFM - Base のポート番号およびファイアウォールの通過方向については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録を参照してください。

ポート番号は、ユーザー環境に合わせて任意の番号に変更することもできます。

ポート番号の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。なお、使用するプロトコルは TCP/IP です。

### 注意

Performance Management は、1 対 1 のアドレス変換をする静的 NAT (Basic NAT) に対応しています。

動的 NAT や、ポート変換機能を含む NAPT (IP Masquerade, NAT+) には対応していません。

## 付録 E.1 PFM - Agent for OpenTP1 のポート番号

PFM - Agent for OpenTP1 で使用するポート番号を次の表に示します。

表 E-1 PFM - Agent for OpenTP1 で使用するポート番号

ポート番号	サービス名	パラメーター	用途
—※1	Agent Store	jp1pcstoh[nnn]※2	パフォーマンスデータを記録したり、履歴レポートを取得したりするときに使用する。
—※1	Agent Collector	jp1pcagth[nnn]※2	アラームをバインドしたり、リアルタイムレポートを取得したりするときに使用する。

### 注※1

サービスが再起動されるたびに、システムで使用されていないポート番号が自動的に割り当てられます。

### 注※2

複数インスタンスを作成している場合、2 番目以降に作成したインスタンスに通番 (nnn) が付加されます。最初に作成したインスタンスには、通番は付加されません。

## 付録 E.2 ファイアウォールの通過方向

ファイアウォールを挟んで PFM - Manager と PFM - Agent for OpenTP1 を配置する場合は、PFM - Manager と PFM - Agent のすべてのサービスにポート番号を固定値で設定してください。また、各ポー

ト番号を次の表に示す方向で設定し、すべてのサービスについてファイアウォールを通過させるようにしてください。

表 E-2 ファイアウォールの通過方向 (PFM - Manager と PFM - Agent 間)

サービス名	パラメーター	通過方向
Agent Store	jp1pcstoh[nnn]※	Agent←Manager
Agent Collector	jp1pcagth[nnn]※	Agent←Manager

(凡例)

Manager : PFM - Manager ホスト

Agent : PFM - Agent ホスト

← : 右項から左項への通信 (コネクション) を開始する方向

注※

複数インスタンスを作成している場合、2 番目以降に作成したインスタンスに通番 (nnn) が付加されます。最初に作成したインスタンスには、通番は付加されません。

通信 (コネクション) を開始する時は、接続を受ける側 (矢印が向いている側) が、PFM - Agent for OpenTP1 で使用するポート番号を受信ポートとして使用します。PFM - Agent for OpenTP1 で使用するポート番号については、表 E-1 を参照してください。

接続する側は、OS によって割り当てられる空きポート番号を送信ポートとして使用します。この場合に使用するポート番号の範囲は、OS によって異なります。

上記の Agent←Manager の場合は、Manager で一時的に使用される送信ポートが Agent の受信ポートを通過できるようにファイアウォールを設定してください。

注意

PFM - Agent のホストで `jpctool db dump` コマンドまたは `jpctool service list` コマンドを実行したい場合、次のどちらかの方法でコマンドを実行してください。

- `jpctool db dump` コマンドまたは `jpctool service list` コマンドの `proxy` オプションで、PFM - Manager を経由して通信するように指定してください。`jpctool db dump` コマンドまたは `jpctool service list` コマンドの `proxy` オプションについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。
- 各 PFM - Agent ホスト間で次の表に示す方向でポート番号を設定し、ファイアウォールを通過させるようにしてください。

表 E-3 ファイアウォールの通過方向 (各 PFM - Agent ホスト間)

サービス名	パラメーター	通過方向
Agent Store	jp1pcstoh[nnn]※	Agent←→Agent
Agent Collector	jp1pcagth[nnn]※	Agent←→Agent

(凡例)

Agent : PFM - Agent ホスト

←→ : 左項から右項, および右項から左項への通信 (コネクション) を開始する方向

注※

複数インスタンスを作成している場合, 2 番目以降に作成したインスタンスに通番 (nnn) が付加されます。最初に作成したインスタンスには, 通番は付加されません。

## 付録 F PFM - Agent for OpenTP1 のプロパティ

ここでは、PFM - Web Console で表示される PFM - Agent for OpenTP1 の Agent Store サービスのプロパティ一覧、および Agent Collector サービスのプロパティ一覧を記載します。

### 付録 F.1 Agent Store サービスのプロパティ一覧

PFM - Agent for OpenTP1 の Agent Store サービスのプロパティ一覧を次の表に示します。

表 F-1 PFM - Agent for OpenTP1 の Agent Store サービスのプロパティ一覧

フォルダ名	プロパティ名	説明
-	First Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最初の日時が表示される。
	Last Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最新の日時が表示される。
General	-	ホスト名やディレクトリなどの情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	Directory	サービスの動作するカレントディレクトリ名が表示される。
	Host Name	サービスが動作する物理ホスト名が表示される。
	Process ID	サービスのプロセス ID が表示される。
	Physical Address	サービスが動作するホストの IP アドレスおよびポート番号が表示される。
	User Name	サービスプロセスを実行したユーザー名が表示される。
	Time Zone	サービスで使用されるタイムゾーンが表示される。
System	-	サービスが起動されている OS の、OS 情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	CPU Type	CPU の種類が表示される。
	Hardware ID	ハードウェア ID が表示される。
	OS Type	OS の種類が表示される。
	OS Name	OS 名が表示される。
	OS Version	OS のバージョンが表示される。
Network Services	-	Performance Management 通信共通ライブラリーについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。



フォルダ名		プロパティ名	説明
Network Services		Build Date	Agent Store サービスの作成日が表示される。
		INI File	jpcns.ini ファイルの格納ディレクトリ名が表示される。
Network Services	Service	—	サービスについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		Description	次の形式でホスト名が表示される。 インスタンス名_ホスト名
		Local Service Name	サービス ID が表示される。
		Remote Service Name	接続先 PFM - Manager ホストの Master Manager サービスのサービス ID が表示される。
		EP Service Name	接続先 PFM - Manager ホストの Correlator サービスのサービス ID が表示される。
Retention		—	Store バージョン 1.0 を使用している場合にデータの保存期間を設定する。 データの保存期間の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。
		Product Interval - Minute Drawer	分ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。 次のリストから選択できる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Minute</li> <li>• Hour</li> <li>• Day</li> <li>• 2 Days</li> <li>• 3 Days</li> <li>• 4 Days</li> <li>• 5 Days</li> <li>• 6 Days</li> <li>• Week</li> <li>• Month</li> <li>• Year</li> </ul>
		Product Interval - Hour Drawer	時間ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。 次のリストから選択できる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Hour</li> <li>• Day</li> <li>• 2 Days</li> <li>• 3 Days</li> <li>• 4 Days</li> </ul>

フォルダ名	プロパティ名	説明
Retention	Product Interval - Hour Drawer	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 5 Days</li> <li>• 6 Days</li> <li>• Week</li> <li>• Month</li> <li>• Year</li> </ul>
	Product Interval - Day Drawer	<p>日ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。</p> <p>次のリストから選択できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Day</li> <li>• 2 Days</li> <li>• 3 Days</li> <li>• 4 Days</li> <li>• 5 Days</li> <li>• 6 Days</li> <li>• Week</li> <li>• Month</li> <li>• Year</li> </ul>
	Product Interval - Week Drawer	<p>週ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。</p> <p>次のリストから選択できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Week</li> <li>• Month</li> <li>• Year</li> </ul>
	Product Interval - Month Drawer	<p>月ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。</p> <p>次のリストから選択できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Month</li> <li>• Year</li> </ul>
	Product Interval - Year Drawer	<p>年ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間。Year で固定。</p>
	Product Detail - PD レコードタイプのレコード ID	<p>PD レコードタイプの各レコードの保存レコード数を設定する。</p> <p>0~2,147,483,647 の整数が指定できる。</p> <p><b>注意：</b>範囲外の数値，またはアルファベットなどの文字を指定した場合，エラーメッセージが表示される。</p>
RetentionEx	—	<p>Store バージョン 2.0 を使用している場合にデータの保存期間を設定する。</p> <p>データの保存期間の設定方法については，マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の，稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。</p>

フォルダ名		プロパティ名	説明
RetentionEx	Product Interval - PIレコードタイプの レコードID	Period - Minute Drawer (Day)	PIレコードタイプのレコードIDごとに、分単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（日数）を0～366の整数で指定できる。
		Period - Hour Drawer (Day)	PIレコードタイプのレコードIDごとに、時間単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（日数）を0～366の整数で指定できる。
		Period - Day Drawer (Week)	PIレコードタイプのレコードIDごとに、日単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（週の数）を0～522の整数で指定できる。
		Period - Week Drawer (Week)	PIレコードタイプのレコードIDごとに、週単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（週の数）を0～522の整数で指定できる。
		Period - Month Drawer (Month)	PIレコードタイプのレコードIDごとに、月単位のパフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（月の数）を0～120の整数で指定できる。
		Period - Year Drawer (Year)	PIレコードタイプのレコードIDごとに、年単位のパフォーマンスデータの保存期間が表示される。表示される値は10で固定。
	Product Detail - PDレコードタイプの レコードID	Period (Day)	PDレコードタイプのレコードIDごとに、パフォーマンスデータの保存期間を設定する。 保存期間（日数）を0～366の整数で指定できる。
Disk Usage	—	—	各データベースが使用しているディスク容量が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティには、プロパティを表示した時点でのディスク使用量が表示される。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	Product Interval	—	PIレコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。
	Product Detail	—	PDレコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。
	Product Alarm	—	PAレコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。PFM - Agent for OpenTP1では使用しない。
	Product Log	—	PLレコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。PFM - Agent for OpenTP1では使用しない。
	Total Disk Usage	—	データベース全体で使用されるディスク容量が表示される。

フォルダ名	プロパティ名	説明
Configuration	—	Store バージョンについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは、変更できない。
	Store Version	Store バージョンが表示される。
Multiple Manager Configuration	Primary Manager	監視二重化の場合、プライマリーに設定しているマネージャーのホスト名が表示される。このプロパティは変更できない。
	Secondary Manager	監視二重化の場合、セカンダリーに設定しているマネージャーのホスト名が表示される。このプロパティは変更できない。

(凡例)

—：該当しない

## 付録 F.2 Agent Collector サービスのプロパティ一覧

PFM - Agent for OpenTP1 の Agent Collector サービスのプロパティ一覧を次の表に示します。

表 F-2 PFM - Agent for OpenTP1 の Agent Collector サービスのプロパティ一覧

フォルダ名	プロパティ名	説明
—	First Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最初の日時が表示される。
	Last Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最新の日時が表示される。
	Data Model Version	データモデルのバージョンが表示される。
General	—	ホスト名やディレクトリなどの情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	Directory	サービスの動作するカレントディレクトリ名が表示される。
	Host Name	サービスが動作する物理ホスト名が表示される。
	Process ID	サービスのプロセス ID が表示される。
	Physical Address	サービスが動作するホストの IP アドレスが表示される。
	User Name	サービスプロセスを実行したユーザー名が表示される。
	Time Zone	サービスで使用されるタイムゾーンが表示される。

フォルダ名		プロパティ名	説明
System		—	サービスが起動している OS の、OS 情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		CPU Type	CPU の種類が表示される。
		Hardware ID	ハードウェア ID が表示される。
		OS Type	OS の種類が表示される。
		OS Name	OS 名が表示される。
		OS Version	OS のバージョンが表示される。
Network Services		—	PFM 通信共通ライブラリーについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		Build Date	PFM 通信共通ライブラリーの作成日が表示される。
		INI File	jpcns. ini ファイルの格納フォルダ名が表示される。
Network Services	Service	—	サービス名 (サービス ID) についての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		Description	次の形式でホスト名が表示される。 インスタンス名_ホスト名
		Local Service Name	サービス ID が表示される。
		Remote Service Name	接続先 PFM - Manager ホストの Master Manager サービスのサービス ID が表示される。
		EP Service Name	接続先 PFM - Manager ホストの Correlator サービスのサービス ID が表示される。
		AH Service Name	同一ホストにある Action Handler サービスのサービス ID が表示される。
JP1 Event Configurations		—	JP1 イベントの発行条件を設定する。
		各サービス	Agent Collector サービス, Agent Store サービス, Action Handler サービス, および Status Server サービスのリスト項目から「Yes」または「No」を選択し、サービスごとに JP1 システムイベントを発行するかどうかを指定する。
		JP1 Event Send Host	JP1/Base の接続先イベントサーバ名を指定する。ただし、Action Handler サービスと同一マシンの論理ホストまたは物理ホストで動作しているイベントサーバだけ指定できる。指定できる値は 0~255 バイトの半角英数字および「.」「-」で、範囲外の値が指定された場合は、省略されたと仮定する。値が省略された場合は、Action Handler サービスが動作するホストをイベント発行元

フォルダ名		プロパティ名	説明
JP1 Event Configurations		JP1 Event Send Host	ホストとして使用する。「localhost」が指定された場合は、物理ホストが指定されたものと仮定する。
		Monitoring Console Host	JP1/IM - Manager のモニター起動で PFM - Web Console のブラウザーを起動する場合、起動させる PFM - Web Console ホストを指定する。指定できる値は 0~255 バイトの半角英数字および「.」「-」で、範囲外の値が指定された場合は、省略されたと仮定する。値が省略された場合は、接続先の PFM - Manager ホストを仮定する。
		Monitoring Console Port	起動する PFM - Web Console のポート番号 (http リクエストポート番号) を指定する。指定できる値は 1~65535 で、範囲外の値が指定された場合は、省略されたと仮定する。値が省略された場合は、20358 が設定される。
		Monitoring Console Https	JP1/IM - Manager のモニター起動で PFM - Web Console を起動する場合、PFM - Web Console に https を使用した暗号化通信で接続するかどうかを指定する。デフォルトは No。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Yes：暗号化通信を使用する</li> <li>• No：暗号化通信を使用しない</li> </ul>
JP1 Event Configurations	Alarm	JP1 Event Mode	アラームの状態が変化した時に、JP1 システムイベントと JP1 ユーザーイベントのどちらのイベントを発行するか設定する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• JP1 User Event：JP1 ユーザーイベントを発行する</li> <li>• JP1 System Event：JP1 システムイベントを発行する</li> </ul>
Detail Records		—	PD レコードタイプのレコードのプロパティが格納されている。収集されているレコードのレコード ID は、太字で表示される。
Detail Records	レコード ID※	—	レコードのプロパティが格納されている。
		Description	レコードタイプの説明が表示される。このプロパティは変更できない。
		Log	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し、レコードを Store データベースに記録するかどうかを指定する。この値が「Yes」でかつ、Collection Interval が 0 より大きい値であれば、データベースに記録される。指定がない場合は「No」が設定される。
		Monitoring (ITSLM)	JP1/SLM - Manager と連携する場合に、レコードを JP1/SLM - Manager に送信するかどうかについて、JP1/SLM - Manager での設定が「Yes」または「No」で表示される。連携しない場合は「No」固定で表示される。このプロパティは変更できない。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Detail Records	レコード ID※	Log (ITSLM)	JP1/SLM - Manager と連携する場合に、JP1/SLM - Manager からレコードを PFM - Agent for OpenTP1 の Store データベースに記録するかどうかについて「Yes」または「No」で表示される。連携しない場合は「No」固定で表示される。このプロパティは変更できない。
		Collection Interval	データの収集間隔を指定する。指定できる値は 0～2,147,483,647 秒の範囲の 1 秒単位で指定できる。なお、指定がない場合、または 0 と指定した場合はデータは収集されない。
		Collection Offset	データの収集を開始するオフセット値を指定する。指定できる値は、Collection Interval で指定した値の範囲内で、かつ 0～32,767 秒の範囲の 1 秒単位で指定できる。なお、データ収集の記録時刻は、Collection Offset の値によらないで、Collection Interval で計算された時刻となる。
		Over 10 Sec Collection Time	履歴データの収集をリアルタイムレポートの表示処理より優先する場合（履歴収集優先機能が有効な場合）にだけ表示される。 レコードの収集に 10 秒以上掛かることがあるかどうか「Yes」または「No」で表示される。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Yes：10 秒以上掛かることがある</li> <li>• No：10 秒掛からない</li> </ul> このプロパティは変更できない。
		Realtime Report Data Collection Mode	履歴データの収集をリアルタイムレポートの表示処理より優先する場合（履歴収集優先機能が有効な場合）にだけ表示される。 リアルタイムレポートの表示モードを指定する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Reschedule：再スケジュールモードの場合</li> <li>• Temporary Log：一時保存モードの場合</li> </ul> なお、Over 10 Sec Collection Time の値が「Yes」のレコードには、一時保存モード（Temporary Log）を指定する必要がある。
		LOGIF	レコードをデータベースに記録するときの条件を指定する。条件に合ったレコードだけがデータベースに記録される。PFM - Web Console の【サービス階層】画面で表示されるサービスのプロパティ画面の、下部フレームの【LOGIF】をクリックすると表示される【ログ収集条件設定】ウィンドウで作成した条件式（文字列）が表示される。
Interval Records		—	PI レコードタイプのレコードのプロパティが格納されている。収集されているレコードのレコード ID は、太字で表示される。
Interval Records	レコード ID※1	—	レコードのプロパティが格納されている。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Interval Records	レコード ID <sup>※1</sup>	Description	レコードタイプの説明が表示される。このプロパティは変更できない。
		Log	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し、レコードを Store データベースに記録するかどうかを指定する。この値が「Yes」でかつ、Collection Interval が 0 より大きい値であれば、データベースに記録される。指定がない場合は「No」が設定される。
		Monitoring (ITSLM)	JP1/SLM - Manager と連携する場合に、レコードを JP1/SLM - Manager に送信するかどうかについて、JP1/SLM - Manager での設定が「Yes」または「No」で表示される。連携しない場合は「No」固定で表示される。このプロパティは変更できない。
		Log (ITSLM)	JP1/SLM - Manager と連携する場合に、JP1/SLM - Manager からレコードを PFM - Agent for OpenTP1 の Store データベースに記録するかどうかについて「Yes」または「No」で表示される。連携しない場合は「No」固定で表示される。このプロパティは変更できない。
		Collection Intervall <sup>※2</sup>	データの収集間隔を指定する。指定できる値は 0～2,147,483,647 秒の範囲の 1 秒単位で指定できる。なお、指定がない場合、または 0 と指定した場合はデータは収集されない。
		Collection Offset <sup>※2</sup>	データの収集を開始するオフセット値を指定する。指定できる値は、Collection Interval で指定した値の範囲内で、かつ 0～32,767 秒の範囲の 1 秒単位で指定できる。なお、データ収集の記録時刻は、Collection Offset の値によらないで、Collection Interval で計算された時刻となる。
		Over 10 Sec Collection Time	履歴データの収集をリアルタイムレポートの表示処理より優先する場合（履歴収集優先機能が有効な場合）にだけ表示される。 レコードの収集に 10 秒以上掛かることがあるかどうか「Yes」または「No」で表示される。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Yes：10 秒以上掛かることがある</li> <li>• No：10 秒掛からない</li> </ul> このプロパティは変更できない。
Realtime Report Data Collection Mode	履歴データの収集をリアルタイムレポートの表示処理より優先する場合（履歴収集優先機能が有効な場合）にだけ表示される。 リアルタイムレポートの表示モードを指定する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Reschedule：再スケジュールモードの場合</li> <li>• Temporary Log：一時保存モードの場合</li> </ul>		



フォルダ名		プロパティ名	説明
Interval Records	レコード ID※1	Realtime Report Data Collection Mode	なお、Over 10 Sec Collection Time の値が「Yes」のレコードには、一時保存モード (Temporary Log) を指定する必要がある。
		LOGIF	レコードをデータベースに記録するときの条件を指定する。条件に合ったレコードだけがデータベースに記録される。PFM - Web Console の [サービス階層] 画面で表示されるサービスのプロパティ画面の、下部フレームの [LOGIF] をクリックすると表示される [ログ収集条件設定] ウィンドウで作成した条件式 (文字列) が表示される。
Log Records		—	PL レコードタイプのレコードのプロパティが格納されている。PFM - Agent for OpenTP1 ではこのレコードをサポートしていないため使用しない。
Restart Configurations		—	PFM サービス自動再起動の条件を設定する。PFM - Manager または PFM - Base が 08-50 以降の場合に設定できる。 PFM サービス自動再起動機能については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照のこと。
		Restart when Abnormal Status	Status Server サービスが Action Handler サービス、Agent Collector サービス、および Agent Store サービスの状態を正常に取得できない場合にサービスを自動再起動するかどうかを設定する。
		Restart when Single Service Running	Agent Store サービスと Agent Collector サービスのどちらかしか起動していない場合にサービスを自動再起動するかどうかを設定する。
Restart Configurations	Agent Collector	Auto Restart	Agent Collector サービスに対して自動再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Auto Restart - Interval (Minute)	自動再起動機能を利用する場合、サービスの稼働状態を確認する間隔を設定する。設定できる値は 1~1,440 分で、1 分単位で設定できる。
		Auto Restart - Repeat Limit	自動再起動機能を利用する場合、連続して再起動を試行する回数を 1~10 の整数で設定する。
		Scheduled Restart	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し、Agent Collector サービスに対して、定期再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Scheduled Restart - Interval	定期再起動機能を利用する場合、再起動間隔を 1~1,000 の整数で設定する。
		Scheduled Restart - Interval Unit	定期再起動機能を利用する場合、リスト項目から「Hour」、「Day」、「Week」または「Month」を選択し、再起動間隔の単位を設定する。

フォルダ名		プロパティ名	説明	
Restart Configurations	Agent Collector	Scheduled Restart - Origin - Year	再起動する年を 1971～2035 の整数で指定できる。	
		Scheduled Restart - Origin - Month	再起動する月を 1～12 の整数で指定できる。	
		Scheduled Restart - Origin - Day	再起動する日を 1～31 の整数で指定できる。	
		Scheduled Restart - Origin - Hour	再起動する時間（時）を 0～23 の整数で指定できる。	
		Scheduled Restart - Origin - Minute	再起動する時間（分）を 0～59 の整数で指定できる。	
	Agent Store	Auto Restart	Agent Store サービスに対して自動再起動機能を利用するかどうかを設定する。	
		Auto Restart - Interval (Minute)	自動再起動機能を利用する場合、サービスの稼働状態を確認する間隔を設定する。設定できる値は 1～1,440 分で、1 分単位で設定できる。	
		Auto Restart - Repeat Limit	自動再起動機能を利用する場合、連続して再起動を試行する回数を 1～10 の整数で設定する。	
		Scheduled Restart	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し、Agent Store サービスに対して、定期再起動機能を利用するかどうかを設定する。	
		Scheduled Restart - Interval	定期再起動機能を利用する場合、再起動間隔を 1～1,000 の整数で設定する。	
		Scheduled Restart - Interval Unit	定期再起動機能を利用する場合、リスト項目から「Hour」、「Day」、「Week」または「Month」を選択し、再起動間隔の単位を設定する。	
		Scheduled Restart - Origin - Year	再起動する年を 1971～2035 の整数で指定できる。	
		Scheduled Restart - Origin - Month	再起動する月を 1～12 の整数で指定できる。	
		Scheduled Restart - Origin - Day	再起動する日を 1～31 の整数で指定できる。	
		Scheduled Restart - Origin - Hour	再起動する時間（時）を 0～23 の整数で指定できる。	
		Scheduled Restart - Origin - Minute	再起動する時間（分）を 0～59 の整数で指定できる。	
		Action Handler	Auto Restart	Action Handler サービスに対して自動再起動機能を利用するかどうかを設定する。

フォルダ名		プロパティ名	説明
Restart Configurations	Action Handler	Auto Restart - Interval (Minute)	自動再起動機能を利用する場合、サービスの稼働状態を確認する間隔を設定する。設定できる値は1~1,440分で、1分単位で設定できる。
		Auto Restart - Repeat Limit	自動再起動機能を利用する場合、連続して再起動を試行する回数を1~10の整数で設定する。
		Scheduled Restart	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し、Action Handler サービスに対して、定期再起動機能を利用するかどうかを設定する。
		Scheduled Restart - Interval	定期再起動機能を利用する場合、再起動間隔を1~1,000の整数で設定する。
		Scheduled Restart - Interval Unit	定期再起動機能を利用する場合、リスト項目から「Hour」、「Day」、「Week」または「Month」を選択し、再起動間隔の単位を設定する。
		Scheduled Restart - Origin - Year	再起動する年を1971~2035の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Month	再起動する月を1~12の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Day	再起動する日を1~31の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Hour	再起動する時間（時）を0~23の整数で指定できる。
		Scheduled Restart - Origin - Minute	再起動する時間（分）を0~59の整数で指定できる。
ITSMLM Connection Configuration		—	連携するJP1/SLM - Managerに関する情報が表示される。
ITSMLM Connection Configuration	ITSMLM Connection	—	接続先JP1/SLM - Managerに関する情報が表示される。
		ITSMLM Host	接続しているJP1/SLM - Managerのホスト名が表示される。JP1/SLM - Managerと接続していない場合、本プロパティは表示されない。
		ITSMLM Port	接続しているJP1/SLM - Managerのポート番号が表示される。JP1/SLM - Managerと接続していない場合、本プロパティは表示されない。
	MANAGE ITSMLM CONNECTION	—	JP1/SLM - Managerとの接続を停止するかどうかを設定する。
	DISCONNECT ITSMLM CONNECTION	接続を停止するJP1/SLM - Managerのホスト名をリスト項目から指定する。リスト項目から「(空文字)」を指定した場合は何もしない。JP1/SLM - Managerと接続していない場合、リスト項目には「(空文字)」だけが表示される。	

フォルダ名		プロパティ名	説明
Multiple Manager Configuration		Primary Manager	監視二重化の場合、プライマリーに設定しているマネージャーのホスト名が表示される。このプロパティは変更できない。
		Secondary Manager	監視二重化の場合、セカンダリーに設定しているマネージャーのホスト名が表示される。このプロパティは変更できない。
Agent Configuration		—	Agent Collector の概要が表示される。
		Instance	PFM - Agent for OpenTP1 のインスタンス名が表示される。
Agent Configuration	Parameters	—	Agent Collector サービスのデータ収集プログラムのプロパティが表示される。
		DCDIR	監視対象 OpenTP1 システムの環境変数DCDIR の値 (OpenTP1 ディレクトリのパス) が表示される。
		DCCONFPATH	監視対象 OpenTP1 システムの環境変数DCCONFPATH の値 (OpenTP1 システム定義ファイル格納ディレクトリのパス) が表示される。
		OPENTP1_ADMIN	監視対象 OpenTP1 システムの管理者のユーザー名が表示される。 Windows の場合は表示されない。
		OPENTP1_LIBPATH	監視対象 OpenTP1 システムの共用ライブラリーパスの値が表示される。 <ul style="list-style-type: none"> <li>Windows の場合：表示されない</li> <li>AIX の場合：環境変数LIBPATH と同じ値</li> <li>Linux の場合：環境変数LD_LIBRARY_PATH と同じ値</li> </ul>

(凡例)

—：該当しない

注※1

フォルダ名には、データベース ID を除いたレコード ID が表示されます。各レコードのレコード ID については、「第 3 編 6. レコード」を参照してください。

注※2

Sync Collection With が表示されている場合、Collection Interval と Collection Offset は表示されません。

## 付録 G ファイルおよびディレクトリー一覧

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 のファイルおよびディレクトリー一覧を OS ごとに記載します。

Performance Management のインストール先ディレクトリを OS ごとに示します。

Windows の場合

Performance Management のインストール先フォルダは次のとおりです。

システムドライブ¥Program Files(x86)¥Hitachi¥jp1pc¥

UNIX の場合

Performance Management のインストール先ディレクトリは、[/opt/jp1pc/] です。

### 付録 G.1 Windows の場合

Windows 版 PFM - Agent for OpenTP1 のファイルおよびフォルダ一覧を次の表に示します。

表 G-1 PFM - Agent for OpenTP1 のファイルおよびフォルダ一覧 (Windows 版)

フォルダ名	ファイル名	説明
インストール先フォルダ¥	instagth.ini	PFM - Agent 製品情報ファイル
インストール先フォルダ¥agth¥	—	PFM - Agent for OpenTP1 のルートフォルダ
	insrules.dat	インスタンス起動環境定義ファイル
	PATCHLOG.TXT	パッチ情報ファイル
	readme.txt	README.TXT (日本語)
	VERSION.TXT	バージョン情報
インストール先フォルダ¥agth¥agent¥	—	Agent Collector サービスのルートフォルダ
	agtlst.ini	インスタンスリストファイル
	jpcagt.ini.instmpl	テンプレートファイル
	jpcagth.exe	Agent Collector サービス実行プログラム
インストール先フォルダ¥agth¥agent¥インスタンス名¥	—	Agent Collector サービスのルートフォルダ (インスタンスごと) ※1
	jpcagt.ini	Agent Collector サービス起動情報ファイル (インスタンスごと) ※1
	jpcagt.ini.model	Agent Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル (インスタンスごと) ※1
インストール先フォルダ¥agth¥agent¥インスタンス名¥log¥	—	Agent Collector サービス内部ログファイル格納フォルダ (インスタンスごと) ※1

フォルダ名	ファイル名	説明
インストール先フォルダ¥agth¥lib¥	—	メッセージカタログ格納フォルダ
	jpcagthmsg.dll	メッセージカタログ
インストール先フォルダ¥agth¥store¥	—	Agent Store サービスのルートフォルダ
	jpcsto.ini.instmpl	テンプレートファイル
	stolist.ini	インスタンスリストファイル
	*.DAT	データモデル定義ファイル
インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥	—	Agent Store サービスのルートフォルダ (インスタンスごと) ※1
	*.DB	パフォーマンスデータファイル (インスタンスごと) ※2
	*.IDX	パフォーマンスデータファイルのインデックスファイル (インスタンスごと) ※2
	*.LCK	パフォーマンスデータファイルのロックファイル (インスタンスごと) ※2
	jpcsto.ini	Agent Store サービス起動情報ファイル (インスタンスごと) ※1
	jpcsto.ini.model	Agent Store サービス起動情報ファイルのモデル (インスタンスごと) ※1
	*.DAT	データモデル定義ファイル (インスタンスごと) ※1
インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥backup¥	—	標準のデータベースバックアップ先フォルダ (インスタンスごと) ※1
インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥partial¥※3	—	標準のデータベース部分バックアップ先フォルダ (インスタンスごと) ※1
インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥dump¥	—	標準のデータベースエクスポート先フォルダ (インスタンスごと) ※1
インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥import¥※3	—	標準のデータベースインポート先フォルダ (インスタンスごと) ※1
インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥log¥	—	Agent Store サービス内部ログファイル格納フォルダ (インスタンスごと) ※1
インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥STPD¥※3	—	PD データベースのデータを格納するフォルダ (インスタンスごと) ※1※4
インストール先フォルダ¥agth¥store¥インスタンス名¥STPI¥※3	—	PI データベースのデータを格納するフォルダ (インスタンスごと) ※1※4

フォルダ名	ファイル名	説明
インストール先フォルダ%agth%store%インスタンス名%STPL%※3	—	PL データベースのデータを格納するフォルダ (インスタンスごと) ※1※4
インストール先フォルダ%auditlog%	—	動作ログファイルの標準の出力フォルダ
	jpcaudithn.log※5	動作ログファイル
インストール先フォルダ%patch_files%agth%	—	PFM - Agent パッチ関連ファイル格納フォルダ
インストール先フォルダ%setup%	—	セットアップファイル格納フォルダ
	alarm	監視テンプレートアラーム格納ディレクトリ
	extract	セットアップファイル展開ディレクトリ
	jpcaagthu.Z	PFM - Agent セットアップ用アーカイブファイル (UNIX)
	jpcaagthw.EXE	PFM - Agent セットアップ用アーカイブファイル (Windows)

(凡例)

— : 該当しない

注※1

jpccconf inst setup コマンドの実行で作成されます。

注※2

Agent Store サービス起動時に作成されます。

注※3

Store バージョン 2.0 の場合だけ使用します。

注※4

サブフォルダには、パフォーマンスデータファイル (\*.DB) と、パフォーマンスデータファイルのインデックスファイル (\*.IDX) が格納されます。

注※5

n は数値です。ログファイル数は、jpccomm.ini ファイルで変更できます。

## 付録 G.2 UNIX の場合

UNIX 版 PFM - Agent for OpenTP1 のファイルおよびディレクトリ一覧を次の表に示します。

表 G-2 PFM - Agent for OpenTP1 のファイルおよびディレクトリ一覧 (UNIX 版)

ディレクトリ名	ファイル名	説明
/opt/jp1pc/	instagth.ini	PFM - Agent 製品情報ファイル

ディレクトリ名	ファイル名	説明
/opt/jp1pc/agth/	—	PFM - Agent for OpenTP1 のルートディレクトリ
	insrules.dat	インスタンス起動環境定義ファイル
	PATCHLOG.TXT	パッチ情報ファイル
	patch_history	パッチ履歴ファイル
	lib	共通ライブラリ格納ディレクトリ
/opt/jp1pc/agth/agent/	—	Agent Collector サービスのルートディレクトリ
	agtlst.ini	インスタンスリストファイル
	jpgagt.ini.instmpl	テンプレートファイル
	jpgagth	Agent Collector サービス実行プログラム
/opt/jp1pc/agth/agent/インスタンス名/	—	Agent Collector サービスのルートディレクトリ (インスタンスごと) ※1
	jpgagt.ini	Agent Collector サービス起動情報ファイル (インスタンスごと) ※1
	jpgagt.ini.lck	Agent Collector サービス起動情報ファイル (インスタンスごと) のロックファイル※2
	jpgagt.ini.model	Agent Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル (インスタンスごと) ※1
/opt/jp1pc/agth/agent/インスタンス名/log/	—	Agent Collector サービス内部ログファイル格納フォルダ (インスタンスごと) ※1
/opt/jp1pc/agth/nls/	—	メッセージカタログ格納ディレクトリ
/opt/jp1pc/agth/nls/\$LANG/	—	LANG 値ごとの PFM - Agent for OpenTP1 用メッセージカタログ格納ディレクトリ
	jpgagthmsg.cat	PFM - Agent for OpenTP1 用メッセージカタログ
/opt/jp1pc/agth/store/	—	Agent Store サービスのルートディレクトリ
	jpgcsto.ini.instmpl	テンプレートファイル
	stolist.ini	インスタンスリストファイル
	*.DAT	データモデル定義ファイル
/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/	—	Agent Store サービスのルートディレクトリ (インスタンスごと) ※1
	*.DB	パフォーマンスデータファイル (インスタンスごと) ※3
	*.IDX	パフォーマンスデータファイルのインデックスファイル (インスタンスごと) ※3



ディレクトリ名	ファイル名	説明
/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/	*.LCK	パフォーマンスデータファイルのロックファイル (インスタンスごと) ※3
	jpcsto.ini	Agent Store サービス起動情報ファイル (インスタンスごと) ※1
	jpcsto.ini.model	Agent Store サービス起動情報ファイルのモデル (インスタンスごと) ※1
	*.DAT	データモデル定義ファイル (インスタンスごと) ※1
/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/backup/	—	標準のデータベースバックアップ先ディレクトリ (インスタンスごと) ※1
/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/partial/※4	—	標準のデータベース部分バックアップ先ディレクトリ (インスタンスごと) ※1
/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/dump/	—	標準のデータベースエクスポート先ディレクトリ (インスタンスごと) ※1
/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/import/※4	—	標準のデータベースインポート先ディレクトリ (インスタンスごと) ※1
/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/log/	—	Agent Store サービス内部ログファイル格納ディレクトリ (インスタンスごと) ※1
/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/STPD/※4	—	PD データベースのデータを格納するディレクトリ (インスタンスごと) ※1※5
/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/STPI/※4	—	PI データベースのデータを格納するディレクトリ (インスタンスごと) ※1※5
/opt/jp1pc/agth/store/インスタンス名/STPL/※4	—	PL データベースのデータを格納するディレクトリ (インスタンスごと) ※1※5
/opt/jp1pc/audit log/	—	動作ログファイルの標準の出力ディレクトリ
	jpcauditn.log※6	動作ログファイル
/opt/jp1pc/patch_files/agth/	—	PFM - Agent パッチ関連ファイル格納ディレクトリ
/opt/jp1pc/setup/	—	セットアップファイル格納ディレクトリ
	alarm	監視テンプレートアラーム格納ディレクトリ
	extract	セットアップファイル展開ディレクトリ
	jpcagthu.Z	PFM - Agent セットアップ用アーカイブファイル (UNIX)
	jpcagthw.EXE	PFM - Agent セットアップ用アーカイブファイル (Windows)

#### (凡例)

— : 該当しない

注※1

jpccconf inst setup コマンドの実行で作成されます。

注※2

PFM - Agent for OpenTP1 が内部で使用しているファイルです。変更および削除はしないでください。

注※3

Agent Store サービス起動時に作成されます。

注※4

Store バージョン 2.0 の場合だけ使用します。

注※5

サブディレクトリには、パフォーマンスデータファイル(\*.DB)と、パフォーマンスデータファイルのインデックスファイル(\*.IDX)が格納されます。

注※6

n は数値です。ログファイル数は、jpccomm.ini ファイルで変更できます。

## 付録 H バージョンアップ手順とバージョンアップ時の注意事項

---

PFM - Agent for OpenTP1 をバージョンアップするには、PFM - Agent for OpenTP1 を上書きインストールします。インストールの操作の詳細については、「第 2 編 2. インストールとセットアップ (Windows の場合)」または「第 2 編 3. インストールとセットアップ (UNIX の場合)」を参照してください。

Performance Management プログラムをバージョンアップする場合の注意事項については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップの章および付録にある、バージョンアップの注意事項について説明している個所を参照してください。

ここでは、PFM - Agent for OpenTP1 をバージョンアップする場合の注意事項を示します。

- バージョンアップする際には、古いバージョンの PFM - Agent for OpenTP1 をアンインストールしないでください。アンインストールすると、古いバージョンで作成したパフォーマンスデータなども一緒に削除されてしまうため、新しいバージョンで使用できなくなります。
- PFM - Agent for OpenTP1 のプログラムを上書きインストールすると、次の項目が自動的に更新されます。
  - Agnet Store サービスの Store データベースファイル
  - ini ファイル

## 付録I バージョン互換

PFM - Agent には、製品のバージョンのほかに、データモデルのバージョンがあります。

データモデルは、上位互換を保っているため、古いバージョンで定義したレポートの定義やアラームの定義は、新しいバージョンのデータモデルでも使用できます。

PFM - Agent for OpenTP1 のバージョンの対応を次の表に示します。

表 I-1 PFM - Agent for OpenTP1 のバージョン対応表

PFM - Agent for OpenTP1 のバージョン	データモデルのバージョン	監視テンプレートのアラームテーブルのバージョン
07-50	4.0	7.50
08-00	5.0	8.00
	5.1	
08-10	5.1	8.10
08-11	5.2	8.11
08-50	5.2	8.50
09-00	5.2	09.00
10-00	5.2	
11-00	5.2	
12-00	5.2	

バージョン互換については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録に記載されているバージョン互換を参照してください。

## 付録 J 動作ログの出力

Performance Management の動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

例えば、しきい値オーバーなどの異常が発生したことを示すアラーム発生時に、いつ、どのサービスがアラームを発生させたのかを示す情報が動作ログに出力されます。

動作ログは、PFM - Manager または PFM - Base が 08-10 以降の場合に出力できます。

動作ログは、CSV 形式で出力されるテキストファイルです。定期的に保存して表計算ソフトで加工することで、分析資料として利用できます。

動作ログは、jpccomm.ini の設定によって出力されるようになります。ここでは、PFM - Agent および PFM - Base が出力する動作ログの出力内容と、動作ログを出力するための設定方法について説明します。

### 付録 J.1 動作ログに出力される事象の種別

動作ログに出力される事象の種別および PFM - Agent および PFM - Base が動作ログを出力する契機を次の表に示します。事象の種別とは、動作ログに出力される事象を分類するための、動作ログ内での識別子です。

表 J-1 動作ログに出力される事象の種別

事象の種別	説明	PFM - Agent および PFM - Base が出力する契機
StartStop	ソフトウェアの起動と終了を示す事象。	<ul style="list-style-type: none"><li>PFM サービスの起動・停止</li><li>スタンドアロンモードの開始・終了</li></ul>
ExternalService	JP1 製品と外部サービスとの通信結果を示す事象。 異常な通信の発生を示す事象。	PFM - Manager との接続状態の変更。
ManagementAction	プログラムの重要なアクションの実行を示す事象。 ほかの監査カテゴリーを契機にアクションが実行されたことを示す事象。	自動アクションの実行。

### 付録 J.2 動作ログの保存形式

ここでは、動作ログのファイル保存形式について説明します。

動作ログは規定のファイル（カレント出力ファイル）に出力され、満杯になった動作ログは別のファイル（シフトファイル）として保存されます。動作ログのファイル切り替えの流れは次のとおりです。

1. 動作ログは、カレント出力ファイル「jpcaudit.log」に順次出力されます。

2. カレント出力ファイルが満杯になると、その動作ログはシフトファイルとして保存されます。

シフトファイル名は、カレント出力ファイル名の末尾に数値を付加した名称です。シフトファイル名は、カレント出力ファイルが満杯になるたびにそれぞれ「ファイル名末尾の数値+1」へ変更されます。つまり、ファイル末尾の数値が大きいほど、古いログファイルとなります。

#### 例

カレント出力ファイル「jpcaudit.log」が満杯になると、その内容はシフトファイル「jpcaudit1.log」へ保管されます。

カレント出力ファイルが再び満杯になると、そのログは「jpcaudit1.log」へ移され、既存のシフトファイル「jpcaudit1.log」は「jpcaudit2.log」へリネームされます。

なお、ログファイル数が保存面数（jpccomm.ini ファイルで指定）を超えると、いちばん古いログファイルから削除されます。

3. カレント出力ファイルが初期化され、新たな動作ログが書き込まれます。

動作ログの出力可否、出力先および保存面数は、jpccomm.ini ファイルで設定します。jpccomm.ini ファイルの設定方法については、「付録 J.4 動作ログを出力するための設定」を参照してください。

## 付録 J.3 動作ログの出力形式

Performance Management の動作ログには、監査事象に関する情報が出力されます。動作ログは、ホストごとに 1 ファイル出力されます。動作ログの出力先ホストは次のようになります。

- サービスを実行した場合：実行元サービスが動作するホストに出力
- コマンドを実行した場合：コマンドを実行したホストに出力

動作ログの出力形式、出力先、出力項目について次に説明します。

### (1) 出力形式

```
CALFHM x.x, 出力項目1=値1, 出力項目2=値2, ..., 出力項目n=値n
```

### (2) 出力先

Windows の場合

```
インストール先フォルダ¥auditlog¥
```

UNIX の場合

```
/opt/jp1pc/auditlog/
```

動作ログの出力先は、jpccomm.ini ファイルで変更できます。jpccomm.ini ファイルの設定方法については、「付録 J.4 動作ログを出力するための設定」を参照してください。

### (3) 出力項目

出力項目には2つの分類があります。

- 共通出力項目  
動作ログを出力する JP1 製品が共通して出力する項目です。
- 固有出力項目  
動作ログを出力する JP1 製品が任意に出力する項目です。

#### (a) 共通出力項目

共通出力項目に出力される値と項目の内容を次の表に示します。なお、この表は PFM - Manager が出力する項目や内容も含まれます。

表 J-2 動作ログの共通出力項目

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
1	共通仕様識別子	—	CALFHM	動作ログフォーマットであることを示す識別子
2	共通仕様リビジョン番号	—	X.X	動作ログを管理するためのリビジョン番号
3	通番	seqnum	通し番号	動作ログレコードの通し番号
4	メッセージ ID	msgid	KAVExxxxx-x	製品のメッセージ ID
5	日付・時刻	date	YYYY-MM-DDThh:mm:ss.sssTZD <sup>※</sup>	動作ログの出力日時およびタイムゾーン
6	発生プログラム名	progid	JP1PFM	事象が発生したプログラムのプログラム名
7	発生コンポーネント名	compid	サービス ID	事象が発生したコンポーネント名
8	発生プロセス ID	pid	プロセス ID	事象が発生したプロセスのプロセス ID
9	発生場所	ocp:host	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ホスト名</li> <li>• IP アドレス</li> </ul>	事象が発生した場所
10	事象の種別	ctgry	<ul style="list-style-type: none"> <li>• StartStop</li> <li>• Authentication</li> <li>• ConfigurationAccess</li> <li>• ExternalService</li> <li>• AnomalyEvent</li> <li>• ManagementAction</li> </ul>	動作ログに出力される事象を分類するためのカテゴリ名

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
11	事象の結果	result	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Success (成功)</li> <li>• Failure (失敗)</li> <li>• Occurrence (発生)</li> </ul>	事象の結果
12	サブジェクト識別情報	subj:pid	プロセス ID	次のどれかの情報 <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー操作によって動作するプロセス ID</li> <li>• 事象を発生させたプロセス ID</li> <li>• 事象を発生させたユーザー名</li> <li>• ユーザーに 1:1 で対応づけられた識別情報</li> </ul>
		subj:uid	アカウント識別子 (PFM ユーザー/JP1 ユーザー)	
		subj:uid	実効ユーザー ID (OS ユーザー)	

(凡例)

— : なし

注※

T は日付と時刻の区切りです。

TZD はタイムゾーン指定子です。次のどれかが出力されます。

+hh:mm : UTC から hh:mm だけ進んでいることを示す。

-hh:mm : UTC から hh:mm だけ遅れていることを示す。

Z : UTC と同じであることを示す。

## (b) 固有出力項目

固有出力項目に出力される値と項目の内容を次の表に示します。なお、この表は PFM - Manager が出力する項目や内容も含まれます。

表 J-3 動作ログの固有出力項目

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
1	オブジェクト情報	obj	<ul style="list-style-type: none"> <li>• PFM - Agent のサービス ID</li> <li>• 追加, 削除, 更新されたユーザー名 (PFM ユーザー)</li> </ul>	操作の対象
		obj:table	アラームテーブル名	
		obj:alarm	アラーム名	
2	動作情報	op	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Start (起動)</li> </ul>	事象を発生させた動作情報



項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
2	動作情報	op	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Stop (停止)</li> <li>• Add (追加)</li> <li>• Update (更新)</li> <li>• Delete (削除)</li> <li>• Change Password (パスワード変更)</li> <li>• Activate (有効化)</li> <li>• Inactivate (無効化)</li> <li>• Bind (バインド)</li> <li>• Unbind (アンバインド)</li> </ul>	事象を発生させた動作情報
3	権限情報	auth	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 管理者ユーザー Management</li> <li>• 一般ユーザー Ordinary</li> <li>• Windows Administrator</li> <li>• UNIX SuperUser</li> </ul>	操作したユーザーの権限情報
		auth:mode	<ul style="list-style-type: none"> <li>• PFM 認証モード pfm</li> <li>• JP1 認証モード jp1</li> <li>• OS ユーザー os</li> </ul>	操作したユーザーの認証モード
4	出力元の世界	outp:host	PFM - Manager のホスト名	動作ログの出力元のホスト
5	指示元の世界	subjp:host	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ログイン元ホスト名</li> <li>• 実行ホスト名 (jpctool alarm コマンド実行時だけ)</li> </ul>	操作の指示元のホスト
6	自由記述	msg	メッセージ	アラーム発生時、および自動アクションの実行時に出力されるメッセージ

固有出力項目は、出力契機ごとに出力項目の有無や内容が異なります。出力契機ごとに、メッセージ ID と固有出力項目の内容を次に説明します。

### ■ PFM サービスの起動・停止 (StartStop)

- 出力ホスト：該当するサービスが動作しているホスト
- 出力コンポーネント：起動・停止を実行する各サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	起動：KAVE03000-I 停止：KAVE03001-I
動作情報	op	起動：Start 停止：Stop

## ■ スタンドアロンモードの開始・終了 (StartStop)

- 出力ホスト：PFM - Agent ホスト
- 出力コンポーネント：Agent Collector サービス, Agent Store サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	スタンドアロンモードを開始：KAVE03002-I スタンドアロンモードを終了：KAVE03003-I

注 1 固有出力項目は出力されない。

注 2 PFM - Agent の各サービスは、起動時に PFM - Manager ホストに接続し、ノード情報の登録、最新のアラーム定義情報の取得などを行う。PFM - Manager ホストに接続できない場合、稼働情報の収集など一部の機能だけが有効な状態（スタンドアロンモード）で起動する。その際、スタンドアロンモードで起動することを示すため、KAVE03002-I が出力される。その後、一定期間ごとに PFM - Manager への再接続を試み、ノード情報の登録、定義情報の取得などに成功すると、スタンドアロンモードから回復し、KAVE03003-I が出力される。この動作ログによって、KAVE03002-I と KAVE03003-I が出力されている間は、PFM - Agent が不完全な状態で起動していることを知ることができる。

## ■ PFM - Manager との接続状態の変更 (ExternalService)

- 出力ホスト：PFM - Agent ホスト
- 出力コンポーネント：Agent Collector サービス, Agent Store サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	PFM - Manager へのイベントの送信に失敗（キューイングを開始）： KAVE03300-I PFM - Manager へのイベントの再送が完了：KAVE03301-I

注 1 固有出力項目は出力されない。

注 2 Agent Store サービスは、PFM - Manager へのイベント送信に失敗すると、イベントのキューイングを開始し、以降はイベントごとに最大 3 件がキューに貯められる。KAVE03300-I は、イベント送信に失敗し、キューイングを開始した時点で出力される。PFM - Manager との接続が回復したあと、キューイングされたイベントの送信が完了した時点で、KAVE03301-I が出力される。この動作ログによって、KAVE03300-I と KAVE03301-I が出力されている間は、PFM - Manager へのイベント送信がリアルタイムでできていなかった期間と知ることができる。

注 3 Agent Collector サービスは、通常、Agent Store サービスを経由して PFM - Manager にイベントを送信する。何らかの理由で Agent Store サービスが停止している場合だけ、直接 PFM - Manager にイベントを送信するが、失敗した場合に KAVE03300-I が出力される。この場合、キューイングを開始しないため、KAVE03301-I は出力されない。この動作ログによって、PFM - Manager に送信されなかったイベントがあることを知ることができる。

## ■ 自動アクションの実行 (ManagementAction)

- 出力ホスト：アクションを実行したホスト
- 出力コンポーネント：Action Handler サービス

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	コマンド実行プロセス生成に成功：KAVE03500-I コマンド実行プロセス生成に失敗：KAVE03501-W E-mail 送信に成功：KAVE03502-I E-mail 送信に失敗：KAVE03503-W
自由記述	msg	コマンド実行：cmd=実行したコマンドライン E-mail 送信：mailto=送信先メールアドレス

注 コマンド実行プロセスの生成に成功した時点で KAVE03500-I が出力される。その後、コマンドが実行できたかどうかのログ、および実行結果のログは、動作ログには出力されない。

## (4) 出力例

動作ログの出力例を次に示します。

```
CALFHM 1.0, seqnum=1, msgid=KAVE03000-I, date=2007-01-18T22:46:49.682+09:00,
progid=JP1PFM, compid=TA1host01, pid=2076,
ocp:host=host01, ctgry=StartStop, result=Occurrence,
subj:pid=2076,op=Start
```

## 付録 J.4 動作ログを出力するための設定

動作ログを出力するための設定は、jpccomm.ini ファイルで定義します。設定しない場合、動作ログは出力されません。動作ログを出力するための設定内容とその手順について次に示します。

### (1) 設定手順

動作ログを出力するための設定手順を次に示します。

1. ホスト上の全 PFM サービスを停止させる。
2. テキストエディターなどで、jpccomm.ini ファイルを編集する。
3. jpccomm.ini ファイルを保存して閉じる。

### (2) jpccomm.ini ファイルの詳細

jpccomm.ini ファイルの詳細について説明します。

#### (a) 格納先ディレクトリ

Windows の場合

インストール先フォルダ

UNIX の場合

/opt/jp1pc/

## (b) 形式

jpccomm.ini ファイルには、次の内容を定義します。

- 動作ログの出力の有無
- 動作ログの出力先
- 動作ログの保存面数
- 動作ログのファイルサイズ

指定形式は次のとおりです。

"項目名"=値

設定項目を次の表に示します。

表 J-4 jpccomm.ini ファイルで設定する項目およびデフォルト値

項番	項目	説明
1	[Action Log Section]	セクション名。変更できない。
2	Action Log Mode	動作ログを出力するかどうかを指定する。この項目の設定は省略できない。 <ul style="list-style-type: none"><li>• デフォルト値 0 (出力しない)</li><li>• 指定できる値 0 (出力しない), 1 (出力する)</li></ul> これ以外の値を指定すると、エラーメッセージが出力され、動作ログは出力されない。
3	Action Log Dir	動作ログの出力先を指定する。 制限長を超えるパスを設定した場合や、ディレクトリへのアクセスが失敗した場合は、共通ログにエラーメッセージが出力され、動作ログは出力されない。 <ul style="list-style-type: none"><li>• デフォルト値 Windows の場合 インストール先フォルダ¥auditlog¥ UNIX の場合 /opt/jp1pc/auditlog/</li><li>• 指定できる値 1~185 バイトの文字列</li></ul>
4	Action Log Num	ログファイルの総数の上限（保存面数）を指定する。カレント出力ファイルとシフトファイルの合計を指定する。 <ul style="list-style-type: none"><li>• デフォルト値 5</li><li>• 指定できる値</li></ul>

項番	項目	説明
4	Action Log Num	<p>2～10の整数</p> <p>数値以外の文字列を指定した場合、エラーメッセージが出力され、デフォルト値である5が設定される。</p> <p>範囲外の数値を指定した場合、エラーメッセージを出力し、指定値に最も近い2～10の整数値が設定される。</p>
5	Action Log Size	<p>ログファイルのサイズをキロバイト単位で指定する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• デフォルト値 2048</li> <li>• 指定できる値 512～2096128の整数</li> </ul> <p>数値以外の文字列を指定した場合、エラーメッセージが出力され、デフォルト値である2048が設定される。</p> <p>範囲外の数値を指定した場合、エラーメッセージが出力され、指定値に最も近い512～2096128の整数値が設定される。</p>

## 付録 K JP1/SLM との連携

PFM - Agent for OpenTP1 は、JP1/SLM と連携することによって、監視を強化できます。

PFM - Agent for OpenTP1 は、JP1/SLM 上での監視を実現するために、JP1/SLM 用のデフォルト監視項目を PFM-Manager に提供します。

表 K-1 PFM - Agent for OpenTP1 が PFM-Manager に提供するデフォルト監視項目

JP1/SLM での表示名	説明	レコード (レコード ID)	キー (PFM - Manager 名)	フィールド名
RPC 応答時間の平均値	RPC 応答時間の平均値 (マイクロ秒)	System Summary (PI)	—	AVG_RPC_RES_TIME_ INTVAL
ユーザーサービス実行時間の平均値	ユーザーサービス実行時間の平均値 (マイクロ秒)	System Summary (PI)	—	AVG_SVC_TIME_INT VAL
スケジュール待ち行列長の平均値	スケジュール待ち行列長の平均値	System Summary (PI)	—	AVG_SCD_QUE_LEN_ INTVAL
トランザクション発生件数	トランザクション発生件数	System Summary (PI)	—	TRANSACTIONS

(凡例)

— : なし

これらのデフォルト監視項目は PFM - Agent for OpenTP1 のインストール時に PFM - Manager に自動的に追加されます。PFM - Agent for OpenTP1 側の設定はありません。

## 付録 L 各バージョンの変更内容

---

各バージョンのマニュアルの変更内容を示します。

### 付録 L.1 12-00 の変更内容

- 次の OS をサポートする OS から削除した。
  - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008
  - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2
  - AIX 6.1
- 次のプログラムを監視対象プログラムから削除した。
  - uCosminexus TP1/Messaging

### 付録 L.2 11-00 の変更内容

- 次の OS をサポートする OS から削除した。  
PFM - Manager および PFM - Web Console
  - Microsoft(R) Windows Server(R) 2003
  - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 (R2 以外)
  - HP-UX 11i V3 (IPF)
  - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 (x86)
  - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 (AMD/Intel 64)
  - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64)
  - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 Advanced Platform (x86)
  - Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6 (32-bit x86)
  - Solaris 10
- PFM - Base, PFM - Agent for OpenTP1
  - Microsoft(R) Windows Server(R) 2003
  - Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 (R2 以外)
  - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 (x86)
  - Red Hat Enterprise Linux(R) 5 (AMD/Intel 64)
  - Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6 (32-bit x86)
- 次の OS をサポートした。

- Red Hat Enterprise Linux(R) Server 7.1 以降
- 次のプロパティを追加した。  
Agent Store サービスのプロパティ
  - Multiple Manager Configuration
- Agent Collector サービスのプロパティ
  - Monitoring Console Https
  - Multiple Manager Configuration
  - Over 10 Sec Collection Time
  - Realtime Report Data Collection Mode
- 製品の名称を, JP1/ITSML から JP1/SLM に変更した。
- ネットワーク管理製品 (NNM) との連携を廃止した。
- ODBC 準拠のアプリケーションプログラムを廃止した。

## 付録 L.3 10-00 の変更内容

- 次のデフォルト監視項目を PFM-Manager に提供することによって, JP1/SLM との連携を強化した。
  - AVG\_RPC\_RES\_TIME\_INTVAL
  - AVG\_SVC\_TIME\_INTVAL
  - AVG\_SCD\_QUE\_LEN\_INTVAL
  - TRANSACTIONS

## 付録 L.4 09-00 の変更内容

- PFM - Agent for OpenTP1 固有の情報を採取する場合, 環境変数 [JPCAGTH\_COLNOTP1RAS] に 1 を設定することで dcrasget コマンドの処理を抑止できるようにした。
- 適用 OS が UNIX の場合に, OpenTP1 管理者のユーザー名としてインスタンス情報 [OPENTP1\_ADMIN] 項目に設定可能な値の最大値を拡張した。
- 「ソリューションセット」の名称を「監視テンプレート」に変更した。
- 監視テンプレートのアラームテーブルのバージョンを 8.50 から 09.00 に変更した。
- JP1/IM との連携機能を強化しました。これに伴い, Agent Collector サービスのプロパティ一覧に次のフォルダを追加した。  
JP1 Event Configurations
- メッセージ KAVF20125-I を追加した。



- 08-51 以前のコマンドと互換性を持つ新形式のコマンドが追加されたことに伴い、09-00 以降のコマンドを次のように表記した。

09-00 以降のコマンド (08-51 以前のコマンド)

## 付録 M このマニュアルの参考情報

このマニュアルを読むに当たっての参考情報を示します。

### 付録 M.1 関連マニュアル

関連マニュアルを次に示します。必要に応じてお読みください。

#### JP1/Performance Management 関連

- JP1 Version 12 パフォーマンス管理 基本ガイド (3021-3-D75)
- JP1 Version 12 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド (3021-3-D76)
- JP1 Version 12 JP1/Performance Management 運用ガイド (3021-3-D77)
- JP1 Version 12 JP1/Performance Management リファレンス (3021-3-D78)

#### JP1 関連

- JP1 Version 10 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1 (Windows(R)用) (3021-3-177)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1 (Windows(R)用) (3020-3-S81)
- JP1 Version 6 JP1/NETM/DM Manager (3000-3-841)
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM SubManager (UNIX(R)用) (3020-3-L42)
- JP1 Version 10 JP1/NETM/DM Client (UNIX(R)用) (3021-3-181)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM Client (UNIX(R)用) (3020-3-S85)

#### OpenTP1 関連

- OpenTP1 Version 7 OpenTP1 システム定義 (3000-3-D52)
- OpenTP1 Version 7 OpenTP1 運用と操作 (3000-3-D53)
- OpenTP1 Version 7 TP1/LiNK 使用の手引 (3000-3-D60)
- OpenTP1 Version 7 OpenTP1 使用の手引 Windows(R)編 (3000-3-D64)
- OpenTP1 Version 7 OpenTP1 プロトコル TP1/NET/TCP/IP 編 (3000-3-D70)

### 付録 M.2 マニュアルでの表記

このマニュアルでは、製品名を次のように表記しています。

表記	製品名
AIX	AIX V7.1 以降
HP-UX	HP-UX 11i
	HP-UX 11i V3 (IPF)

表記		製品名	
IPF		Itanium(R) Processor Family	
JP1/Base		JP1/Base	
JP1/IM	JP1/IM - Manager	JP1/Integrated Management - Manager	
		JP1/Integrated Management 2 - Manager	
	JP1/IM - View	JP1/Integrated Management - View	
JP1/ITSLM (10-50 以前)	JP1/ITSLM - Manager	JP1/IT Service Level Management	
	JP1/ITSLM - UR	JP1/IT Service Level Management - User Response	
JP1/NETM/DM		JP1/NETM/DM Client	
		JP1/NETM/DM Manager	
		JP1/NETM/DM SubManager	
JP1/SLM	JP1/SLM - Manager	JP1/Service Level Management - Manager	
	JP1/SLM - UR	JP1/Service Level Management - User Response	
Linux	CentOS	CentOS 6 (x64)	CentOS 6.1 (x64)以降
		CentOS 7	CentOS 7.1 以降
	Linux 6 (x64)		Red Hat Enterprise Linux(R) Server 6.1 (64-bit x86_64)以降
	Linux 7		Red Hat Enterprise Linux(R) Server 7.1 以降
	Oracle Linux	Oracle Linux 6 (x64)	Oracle Linux(R) Operating System 6.1 (x64) 以降
		Oracle Linux 7	Oracle Linux(R) Operating System 7.1 以降
	SUSE Linux	SUSE Linux 12	SUSE Linux(R) Enterprise Server 12
OpenTP1		uCosminexus TP1/FS/Direct Access	
		uCosminexus TP1/FS/Direct Access(64)	
		uCosminexus TP1/FS/Table Access	
		uCosminexus TP1/FS/Table Access(64)	
		uCosminexus TP1/LiNK	
		uCosminexus TP1/Message Control	
		uCosminexus TP1/Message Control(64)	
		uCosminexus TP1/NET/Library	
		uCosminexus TP1/NET/Library(64)	

表記		製品名	
OpenTP1		uCosminexus TP1/NET/TCP/IP	
		uCosminexus TP1/NET/TCP/IP(64)	
		uCosminexus TP1/Server Base	
		uCosminexus TP1/Server Base(64)	
Performance Management		JP1/Performance Management	
PFM - Agent	PFM - Agent for JP1/AJS*	PFM - Agent for JP1/AJS3	JP1/Performance Management - Agent Option for JP1/AJS3
	PFM - Agent for Cosminexus*		JP1/Performance Management - Agent Option for uCosminexus Application Server
	PFM - Agent for DB2		JP1/Performance Management - Agent Option for IBM DB2
	PFM - Agent for Domino		JP1/Performance Management - Agent Option for IBM Lotus Domino
	PFM - Agent for Enterprise Applications		JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications
	PFM - Agent for Exchange Server*		JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) Exchange Server
	PFM - Agent for HiRDB*		JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB
	PFM - Agent for WebSphere MQ*		JP1/Performance Management - Agent Option for IBM WebSphere MQ
	PFM - Agent for IIS*		JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) Internet Information Server
	PFM - Agent for Microsoft SQL Server		JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) SQL Server
	PFM - Agent for OpenTP1*		JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1
	PFM - Agent for Oracle		JP1/Performance Management - Agent Option for Oracle
	PFM - Agent for Platform	PFM - Agent for Platform (UNIX)	JP1/Performance Management - Agent Option for Platform (UNIX 用)
		PFM - Agent for Platform (Windows)	JP1/Performance Management - Agent Option for Platform (Windows 用)
PFM - Agent for Service Response		JP1/Performance Management - Agent Option for Service Response	

表記		製品名
PFM - Agent	PFM - Agent for WebLogic Server**	JP1/Performance Management - Agent Option for Oracle(R) WebLogic Server
	PFM - Agent for WebSphere Application Server**	JP1/Performance Management - Agent Option for IBM WebSphere Application Server
PFM - Base		JP1/Performance Management - Base
PFM - Manager		JP1/Performance Management - Manager
PFM - RM	PFM - RM for Microsoft SQL Server	JP1/Performance Management - Remote Monitor for Microsoft(R) SQL Server
	PFM - RM for Oracle	JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle
	PFM - RM for Platform	JP1/Performance Management - Remote Monitor for Platform
	PFM - RM for Virtual Machine	JP1/Performance Management - Remote Monitor for Virtual Machine
PFM - Web Console		JP1/Performance Management - Web Console
WSFC		Windows Server Failover Cluster

- PFM - Manager, PFM - Agent, PFM - Base, PFM - Web Console, および PFM - RM を総称して、Performance Management と表記することがあります。
- HP-UX, AIX, および Linux を総称して、UNIX と表記することがあります。

注※

この製品は日本語環境だけで動作する製品です。

## 付録 M.3 このマニュアルで使用する英略語

このマニュアルで使用する英略語を次に示します。

英略語	英字での表記
CSV	Comma Separated Values
DAM	Direct Access Method
DHCP	Dynamic Host Configuration Protocol
DNS	Domain Name System
I/O	Input/Output
IPF	Itanium Processor Family
MCF	Message Control Facility

英略語	英字での表記
RPC	Remote Procedure Call
RTS	Real Time Statistic
TAM	Table Access Method

## 付録 M.4 このマニュアルでのプロダクト名, サービス ID, およびサービスキーの表記

Performance Management 09-00 以降では, プロダクト名表示機能を有効にすることで, サービス ID およびサービスキーをプロダクト名で表示できます。

識別子	プロダクト名表示機能	
	無効	有効
サービス ID	HS1 インスタンス名[ホスト名]	インスタンス名[ホスト名]<0openTP1>(Store)
	HA1 インスタンス名[ホスト名]	インスタンス名[ホスト名]<0openTP1>
サービスキー	agth	0openTP1

このマニュアルでは, プロダクト名表示機能を有効としたときの形式で表記しています。

なお, プロダクト名表示機能を有効にできるのは, 次の条件を同時に満たす場合です。

- PFM - Agent の同一装置内の前提プログラム (PFM - Manager または PFM - Base) のバージョンが 09-00 以降
- PFM - Web Console および接続先の PFM - Manager のバージョンが 09-00 以降

## 付録 M.5 Performance Management のインストール先フォルダの表記

Windows 版 Performance Management のデフォルトのインストール先フォルダは, 次のとおりです。

### PFM - Base のインストール先フォルダ

システムドライブ¥Program Files¥Hitachi¥jp1pc

このマニュアルでは, PFM - Base のインストール先フォルダを, インストール先フォルダと表記しています。

### PFM - Manager のインストール先フォルダ

システムドライブ¥Program Files¥Hitachi¥jp1pc

### PFM - Web Console のインストール先フォルダ

システムドライブ¥Program Files¥Hitachi¥jp1pcWebCon

## 付録 M.6 KB (キロバイト) などの単位表記について

1KB (キロバイト), 1MB (メガバイト), 1GB (ギガバイト), 1TB (テラバイト) はそれぞれ  $1,024$  バイト,  $1,024^2$  バイト,  $1,024^3$  バイト,  $1,024^4$  バイトです。

### (英字)

#### Action Handler

PFM - Manager または PFM - Base のサービスの一つです。アクションを実行するサービスのことです。

#### Agent Collector

PFM - Agent のサービスの一つです。パフォーマンスデータを収集したり、アラームに設定されたしきい値で、パフォーマンスデータを評価したりするサービスのことです。

#### Agent Store

PFM - Agent のサービスの一つです。パフォーマンスデータを格納するサービスのことです。Agent Store サービスは、パフォーマンスデータの記録のためにデータベースを使用します。各 PFM - Agent に対応して、各 Agent Store サービスがあります。

#### Correlator

PFM - Manager のサービスの一つです。サービス間のイベント配信を制御するサービスのことです。アラームの状態を評価して、しきい値を超過するとアラームイベントおよびエージェンイベントを、Trap Generator サービスおよび PFM - Web Console に送信します。

#### JP1/SLM

システムをサービス利用者が体感している性能などの視点で監視し、サービスレベルの維持を支援する製品です。

JP1/SLM と連携することで、稼働状況の監視を強化できます。

#### Master Manager

PFM - Manager のサービスの一つです。PFM - Manager のメインサービスのことです。

#### Master Store

PFM - Manager のサービスの一つです。各 PFM - Agent から発行されたアラームイベントを管理するサービスのことです。Master Store サービスはイベントデータの保持のためにデータベースを使用します。

#### Name Server

PFM - Manager のサービスの一つです。システム内のサービス構成情報を管理するサービスのことです。



## ODBC キーフィールド

PFM - Manager または PFM - Base で、Store データベースに格納されているレコードのデータを利用する場合に必要な主キーです。ODBC キーフィールドには、各レコード共通のものと各レコード固有のものがあります。

## PD レコードタイプ

→ [「Product Detail レコードタイプ」](#) を参照してください。

## Performance Management

システムのパフォーマンスに関する問題を監視および分析するために必要なソフトウェア群の総称です。Performance Management は、次の 5 つのプログラムプロダクトで構成されます。

- PFM - Manager
- PFM - Web Console
- PFM - Base
- PFM - Agent
- PFM - RM

## PFM - Agent

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。PFM - Agent は、システム監視機能に相当し、監視対象となるアプリケーション、データベース、OS によって、各種の PFM - Agent があります。PFM - Agent には、次の機能があります。

- 監視対象のパフォーマンスの監視
- 監視対象のデータの収集および記録

## PFM - Base

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。Performance Management の稼働監視を行うための基盤機能を提供します。PFM - Agent を動作させるための前提製品です。

- 各種コマンドなどの管理ツール
- Performance Management と他システムとの連携に必要な共通機能

## PFM - Manager

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。PFM - Manager は、マネージャー機能に相当し、次の機能があります。

- Performance Management のプログラムプロダクトの管理
- イベントの管理

## PFM - Manager 名

Store データベースに格納されているフィールドを識別するための名称です。コマンドでフィールドを指定する場合などに使用します。

## PFM - View 名

PFM - Manager 名の別名です。PFM - Manager 名に比べ、より直感的な名称になっています。例えば、PFM - Manager 名の「INPUT\_RECORD\_TYPE」は、PFM - View 名で「Record Type」です。PFM - Web Console の GUI 上でフィールドを指定する場合などに使用します。

## PFM - Web Console

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。ブラウザで Performance Management システムを一元的に監視するため Web アプリケーションサーバの機能を提供します。PFM - Web Console には、次の機能があります。

- GUI の表示
- 統合監視および管理機能
- レポートの定義およびアラームの定義

## PI レコードタイプ

→ [「Product Interval レコードタイプ」](#) を参照してください。

## PL レコードタイプ

→ [「Product Log レコードタイプ」](#) を参照してください。

## Product Detail レコードタイプ

現在起動しているプロセスの詳細情報など、ある時点でのシステムの状態を示すパフォーマンスデータが格納されるレコードタイプのことです。PD レコードタイプは、次のような、ある時点でのシステムの状態を知りたい場合に使用します。

- システムの稼働状況
- 現在使用しているファイルシステム容量

## Product Interval レコードタイプ

1 分ごとのプロセス数など、ある一定の時間（インターバル）ごとのパフォーマンスデータが格納されるレコードタイプのことです。PI レコードタイプは、次のような、時間の経過に伴うシステムの状態の変化や傾向を分析したい場合に使用します。

- 一定時間内に発生したシステムコール数の推移
- 使用しているファイルシステム容量の推移

## Product Log レコードタイプ

UNIX 上で実行されているアプリケーションまたはデータベースのログ情報が格納されるレコードタイプのことです。

## Store データベース

Agent Collector サービスが収集したパフォーマンスデータが格納されるデータベースのことです。

## Trap Generator

PFM - Manager のサービスの一つです。SNMP トラップを発行するサービスのことです。

# (ア行)

## アクション

監視するデータがしきい値に達した場合に、Performance Management によって自動的に実行される動作のことです。次の動作があります。

- Eメールの送信
- コマンドの実行
- SNMP トラップの発行
- JP1 イベントの発行

## アラーム

監視するデータがしきい値に達した場合のアクションやイベントメッセージを定義した情報のことです。

## アラームテーブル

次の情報を定義した一つ以上のアラームをまとめたテーブルです。

- 監視するオブジェクト (Process, TCP, WebService など)
- 監視する情報 (CPU 使用率, 1 秒ごとの受信バイト数など)
- 監視する条件 (しきい値)

## インスタンス

このマニュアルでは、インスタンスという用語を次のように使用しています。

- レコードの記録形式を示す場合  
1 行で記録されるレコードを「単数インスタンスレコード」、複数行で記録されるレコードを「複数インスタンスレコード」、レコード中の各行を「インスタンス」と呼びます。
- PFM - Agent の起動方式を示す場合

同一ホスト上の監視対象を一つのエージェントで監視する方式のエージェントを「シングルインスタンスエージェント」と呼びます。これに対して監視対象がマルチインスタンスをサポートする場合、監視対象のインスタンスごとにエージェントで監視する方式のエージェントを「マルチインスタンスエージェント」と呼びます。マルチインスタンスエージェントの各エージェントを「インスタンス」と呼びます。

## エージェント

パフォーマンスデータを収集する PFM - Agent のサービスのことです。

## (カ行)

### 監視テンプレート

PFM - Agent に用意されている、定義済みのアラームとレポートのことです。監視テンプレートを使用することで、複雑な定義をしなくても PFM - Agent の運用状況を監視する準備が容易にできるようになります。

### 管理ツール

サービスの状態の確認やパフォーマンスデータを操作するために使用する各種のコマンドまたは GUI 上の機能のことです。次のことができます。

- サービスの構成および状態の表示
- パフォーマンスデータの退避および回復
- パフォーマンスデータのテキストファイルへのエクスポート
- パフォーマンスデータの消去

## (サ行)

### サービス ID

Performance Management プログラムのサービスに付加された、一意の ID のことです。コマンドを使用して Performance Management のシステム構成を確認する場合、または個々のエージェントのパフォーマンスデータをバックアップする場合などは、Performance Management プログラムのサービス ID を指定してコマンドを実行します。サービス ID の形式は、プロダクト名表示機能の設定によって異なります。サービス ID の形式については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

### ステータス管理機能

PFM - Manager および PFM - Agent 上で動作するすべてのサービスの状態を管理する機能です。ステータス管理機能を用いると、システム管理者は各ホストでのサービスの起動や停止などの状態を正しく把握できるため、障害復旧のための適切な対処を迅速に行うことができます。

## (タ行)

### 単数インスタンスレコード

1行で記録されるレコードです。このレコードは、固有の ODBC キーフィールドを持ちません。

→「[インスタンス](#)」を参照してください。

### データベース ID

PFM - Agent の各レコードに付けられた、レコードが格納されるデータベースを示す ID です。データベース ID は、そのデータベースに格納されるレコードの種類を示しています。データベース ID を次に示します。

- PI PI レコードタイプのレコードのデータベースであることを示します。
- PD PD レコードタイプのレコードのデータベースであることを示します。

### データモデル

各 PFM - Agent が持つレコードおよびフィールドの総称のことです。データモデルは、バージョンで管理されています。

### ドリルダウンレポート

レポートまたはレポートのフィールドに関連づけられたレポートです。あるレポートの詳細情報や関連情報を表示したい場合に使用します。

## (ハ行)

### バインド

アラームをエージェントと関連づけることです。バインドすると、エージェントによって収集されているパフォーマンスデータが、アラームで定義したしきい値に達した場合、ユーザーに通知できるようになります。

### パフォーマンスデータ

監視対象システムから収集したリソースの稼働状況データのことで。

### フィールド

レコードを構成するパフォーマンスデータの集まりのことです。

### 複数インスタンスレコード

複数行で記録されるレコードです。このレコードは、固有の ODBC キーフィールドを持っています。

→「[インスタンス](#)」を参照してください。

## 物理ホスト

クラスタシステムを構成する各サーバに固有な環境のことです。物理ホストの環境は、フェールオーバー時にもほかのサーバに引き継がれません。

## (ラ行)

### ライフタイム

各レコードに収集されるパフォーマンスデータの一貫性が保証される期間のことです。

### リアルタイムレポート

監視対象の現在の状況を示すレポートです。

### 履歴レポート

監視対象の過去から現在までの状況を示すレポートです。

### レコード

収集したパフォーマンスデータを格納する形式のことです。レコードの種類は、Store データベースの各データベースによって異なります。

### レポート

PFM - Agent が収集したパフォーマンスデータをグラフィカルに表示する際の情報を定義したものです。主に、次の情報を定義します。

- レポートに表示させるレコード
- パフォーマンスデータの表示項目
- パフォーマンスデータの表示形式 (表, グラフなど)

# 索引

## 数字

- 09-00 の変更内容 392
- 10-00 の変更内容 392
- 11-00 の変更内容 391
- 12-00 の変更内容 391

## A

- Action Handler 400
- Advanced フォルダ 167
- Agent Collector 400
- Agent Collector サービスのプロパティ一覧 364
- Agent Store 400
- Agent Store サービスのプロパティ一覧 360
- AIX の場合 354

## C

- char(n) データ型 231
- Checkpoint Dump Detail レポート 174
- Checkpoint Dump Status (PD\_CPD) レコード 241
- Checkpoint Dump Status レポート 175
- Correlator 400

## D

- Daily Trend フォルダ 167
- DAM File Detail レポート 176
- DAM File Status (PD\_DAM) レコード 243
- DAM Status レポート 177
- DAM Summary (PI\_DAMS) レコード 245
- DAM サービスに関する稼働統計情報 245
- DAM ファイル状態 243
- DAM ファイルのリアルタイム情報 176
- double データ型 231

## F

- float データ型 231

## H

- HA クラスタシステム 106

## I

- IP アドレスの設定 (UNIX の場合) 69
- IP アドレスの設定 (Windows の場合) 31

## J

- Journal Detail レポート 179
- Journal Status (PD\_JNL) レコード 249
- Journal Status レポート 181
- JP1/SLM 400
- JP1/SLM との連携 390
- jpchosts ファイル 116, 127
- jpccras コマンド (UNIX の場合) 346
- jpccras コマンド (Windows の場合) 343
- jpcsto.ini ファイル (UNIX の場合) 94
- jpcsto.ini ファイル (Windows の場合) 54

## K

- KB (キロバイト) などの単位表記について 399

## L

- LANG 環境変数の設定 79
- Linux の場合 354
- Lock Detail レポート 183
- Lock Status (PD\_LCK) レコード 252
- Lock Status レポート 184
- long データ型 231

## M

- Master Manager 400
- Master Store 400
- MCF Connection Detail (5.0) レポート 185
- MCF Connection Status (PD\_MCFC) レコード 254
- MCF Logical Terminal Detail (5.0) レポート 186

MCF Logical Terminal Status (PD\_MCFL) レコード 258  
MCF Service Group Detail (5.0) レポート 187  
MCF Service Group Status (PD\_MCFG) レコード 256  
MCF Status (5.0) レポート 188  
MCF Summary (PI\_MCFS) レコード 261  
MCF コネクション状態についてのリアルタイム情報 185  
MCF サービスグループについてのリアルタイム情報 187  
MCF サービスグループの受信メッセージ数 153  
MCF サービスに関する稼働統計情報 261  
MCF 入力キューの滞留状況の監視 26  
MCF 論理端末についてのリアルタイム情報 186  
Message Log レポート 189  
Monthly Trend フォルダ 167

## N

Name Server 400  
Name Status レポート 190

## O

ODBC キーフィールド 401  
ODBC キーフィールド一覧 228  
OpenTP1 Message (PD\_MLOG) レコード 263  
OpenTP1 管理下のプロセスのリアルタイム情報 191  
OpenTP1 システムの主な稼働統計情報 274  
OpenTP1 スケジュールサービスのサーバごとのスケジュール状況 211  
OpenTP1 で発行される RPC の最近 1 か月間の応答時間 195  
OpenTP1 で発行される RPC の最近 1 か月間の処理時間 204  
OpenTP1 で発生した RPC の最近 1 日間の実行状況 194, 203  
OpenTP1 で発生したプロセスの最近 1 か月間の発生数 193, 202  
OpenTP1 で発生したプロセスの最近 1 日間の実行状況 192, 201  
OpenTP1 の運用上の問題点を通知できます 19

OpenTP1 のパフォーマンスデータを収集できます 17  
OS 固有の環境変数の設定 86

## P

PD\_CPD 241  
PD\_DAM 243  
PD\_JNL 249  
PD\_LCK 252  
PD\_MCFC 254  
PD\_MCFG 256  
PD\_MCFL 258  
PD\_MLOG 263  
PD\_PRC 265  
PD\_SCD 270  
PD\_SHM 272  
PD\_TAM 286  
PD\_TRN 292  
PD レコードタイプ 18, 401  
Performance Management 401  
Performance Management システムの障害回復 351  
Performance Management のインストール先フォルダの表記 398  
Performance Management の障害検知 350  
PFM - Agent 401  
PFM - Agent for OpenTP1 のインストール手順 38, 77  
PFM - Agent for OpenTP1 の運用方式の変更 (UNIX の場合) 93  
PFM - Agent for OpenTP1 の運用方式の変更 (Windows の場合) 53  
PFM - Agent for OpenTP1 の概要 16  
PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成の変更 (UNIX の場合) 92  
PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成の変更 (Windows の場合) 52  
PFM - Agent for OpenTP1 のシステム構成の変更 [クラスタ運用時] 145  
PFM - Agent for OpenTP1 の接続先 PFM - Manager の設定 (UNIX の場合) 85



PFM - Agent for OpenTP1 の接続先 PFM - Manager の設定 (Windows の場合) 46  
PFM - Agent for OpenTP1 のセットアップ (Windows の場合) 40  
PFM - Agent for OpenTP1 のセットアップファイル (UNIX の場合) 81  
PFM - Agent for OpenTP1 のセットアップファイル (Windows の場合) 41  
PFM - Agent for OpenTP1 の特長 17  
PFM - Agent for OpenTP1 のポート番号 357  
PFM - Agent の登録 (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 125  
PFM - Agent の登録 (Windows の場合) [クラスタ運用時] 114  
PFM - Agent の論理ホストのアンセットアップ (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 141  
PFM - Agent の論理ホストのアンセットアップ (Windows の場合) [クラスタ運用時] 134  
PFM - Agent の論理ホストのセットアップ (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 126  
PFM - Agent の論理ホストのセットアップ (Windows の場合) [クラスタ運用時] 115  
PFM - Agent ホストに障害が発生した場合のフェールオーバー 108  
PFM - Base 401  
PFM - Manager 401  
PFM - Manager および PFM - Web Console への PFM - Agent for OpenTP1 の登録 40, 79  
PFM - Manager が停止した場合の影響 109  
PFM - Manager での設定の削除 (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 143  
PFM - Manager での設定の削除 (Windows の場合) [クラスタ運用時] 137  
PFM - Manager 名 402  
PFM - View 名 402  
PFM - Web Console 402  
PI 274  
PI\_DAMS 245  
PI\_MCFS 261  
PI\_RTSS 267  
PI\_TAMS 289

PI レコードタイプ 18, 402  
PL レコードタイプ 402  
Process Detail レポート 191  
Process Status (PD\_PRC) レコード 265  
Process Status レポート 192  
Process Trend レポート 193  
Product Detail レコードタイプ 402  
Product Interval レコードタイプ 402  
Product Log レコードタイプ 403

## R

Rcv Msg Count アラーム 153  
Real-Time フォルダ 167  
Rollbacks アラーム 154  
RPC Status レポート 194  
RPC Time Out アラーム 155  
RPC Trend レポート 195  
RPC タイムアウトの発生件数 159  
RPC タイムアウト発生回数 155  
RTS Branch Time アラーム 156  
RTS Checkpoint Dump Status (5.2) レポート 196  
RTS DAM Status (5.2) レポート 197  
RTS JNL Write Time アラーム 157  
RTS Journal Status (5.2) レポート 198  
RTS Lock Status (5.2) レポート 199  
RTS Name Status (5.2) レポート 200  
RTS Process Status (5.2) レポート 201  
RTS Process Trend (5.2) レポート 202  
RTS Rollbacks アラーム 158  
RTS RPC Status (5.2) レポート 203  
RTS RPC Time Out アラーム 159  
RTS RPC Trend (5.2) レポート 204  
RTS SCD Stay Time アラーム 160  
RTS SCD Waits アラーム 161  
RTS Schedule Status (5.2) レポート 205  
RTS Schedule Trend (5.2) レポート 206  
RTS Shared Memory Status (5.2) レポート 207  
RTS Summary (PI\_RTSS) レコード 267  
RTS Svc Time アラーム 162

RTS TAM Status (5.2) レポート 208  
RTS Transaction Status (5.2) レポート 209  
RTS Transaction Trend (5.2) レポート 210  
RTS UAP Terminates アラーム 163

## S

Schedule Detail レポート 211  
Schedule Status (PD\_SCD) レコード 270  
Schedule Status レポート 212  
Schedule Trend レポート 213  
Shared Memory Detail レポート 214  
Shared Memory Status (PD\_SHM) レコード 272  
Shared Memory Status レポート 215  
short データ型 231  
Status Reporting フォルダ 167  
Store データベース 18, 403  
Store データベースに格納されているデータをエクスポートすると出力されるフィールド 236  
Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド 234  
Store バージョン 2.0 への移行 (UNIX の場合) 98  
Store バージョン 2.0 への移行 (Windows の場合) 58  
string(n) データ型 231  
syslog と Windows イベントログの一覧 302  
System Summary (PI) レコード 274

## T

TAM Status レポート 216  
TAM Summary (PI\_TAMS) レコード 289  
TAM Table Detail レポート 217  
TAM Table Status (PD\_TAM) レコード 286  
TAM サービスに関する稼働統計情報 289  
TAM テーブル状態 286  
TAM テーブルの状態のリアルタイム情報 217  
time\_t データ型 231  
timeval データ型 231  
Transaction Detail レポート 219  
Transaction Status (PD\_TRN) レコード 292  
Transaction Status レポート 221

Transaction Trend レポート 222  
Trap Generator 403  
Troubleshooting フォルダ 167

## U

UAP Terminates アラーム 164  
UAP が異常終了した回数 163, 164  
UAP 稼働状況の監視 22  
ulong データ型 231  
UNIX の場合 375  
utime データ型 231

## W

Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定 63, 103  
Windows の場合 373  
word データ型 231

## あ

アクション 19, 403  
アラーム 19, 403  
アラーム一覧 152  
アラームおよびレポートが容易に定義できます 19  
アラームテーブル 19, 152, 403  
アラームの記載形式 151  
アラームの定義に関するトラブルシューティング 328  
アンインストール(UNIX の場合) 88  
アンインストール(Windows の場合) 48  
アンインストール手順 (UNIX の場合) 90  
アンインストール手順 (Windows の場合) 50  
アンインストール前の注意事項(UNIX の場合) 88  
アンインストール前の注意事項(Windows の場合) 48

## い

インスタンス 403  
インスタンス環境のアンセットアップ 89  
インスタンス環境のアンセットアップ(Windows の場合) 49  
インスタンス環境の更新の設定 (UNIX の場合) 96

インスタンス環境の更新の設定 (Windows の場合) 56  
インスタンス環境の設定 (UNIX の場合) 82  
インスタンス環境の設定 (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 127  
インスタンス環境の設定 (Windows の場合) 43  
インスタンス環境の設定 (Windows の場合) [クラスタ運用時] 116  
インストール (Windows の場合) 38  
インストール手順 (UNIX の場合) 76  
インストールとセットアップ (UNIX の場合) 65  
インストールとセットアップ (Windows の場合) 28  
インストールとセットアップ (Windows の場合) [クラスタ運用時] 110  
インストールとセットアップの流れ (UNIX の場合) 66  
インストールとセットアップの流れ (Windows の場合) 29  
インストールとセットアップの前に確認すること 31  
インストールとセットアップの前に確認すること (Windows の場合) [クラスタ運用時] 110  
インストールに必要な OS ユーザー権限について 33, 71  
インストール前に確認すること 69  
インストール前の注意事項 35, 73

## え

エイリアス名 31, 69  
エージェント 404

## か

カーネルパラメーター 354  
各バージョンの変更内容 391  
稼働状況ログ 333  
監視テンプレート 19, 149, 150, 404  
監視テンプレートの概要 150  
管理ツール 404  
関連マニュアル 394

## き

共通メッセージログ 45

共通メッセージログ 332  
共通メッセージログ (ログファイルおよびディレクトリー覧) 333  
共有ディスクのアンマウント (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 129, 142  
共有ディスクのオフライン (Windows の場合) [クラスタ運用時] 118, 136  
共有ディスクのオンライン (Windows の場合) [クラスタ運用時] 115, 134  
共有ディスクのマウント (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 125, 140  
共用メモリー使用状況 272  
共用メモリー使用状況のリアルタイム情報 214

## <

クラスタ運用時のディスク占有量 353  
クラスタシステム 106  
クラスタシステムで運用できません 20  
クラスタシステムでの PFM - Agent for OpenTP1 の運用方式の変更 146  
クラスタシステムでのアンインストール手順 (UNIX の場合) 144  
クラスタシステムでのアンインストール手順 (Windows の場合) 137  
クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ (UNIX の場合) 138  
クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップ (Windows の場合) 132  
クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップの流れ (UNIX の場合) 138  
クラスタシステムでのアンインストールとアンセットアップの流れ (Windows の場合) 132  
クラスタシステムでのアンセットアップ手順 (UNIX の場合) 139  
クラスタシステムでのアンセットアップ手順 (Windows の場合) 133  
クラスタシステムでのインスタンス環境の更新の設定 146  
クラスタシステムでのインストール手順 (UNIX の場合) 125  
クラスタシステムでのインストール手順 (Windows の場合) 114

クラスタシステムでのインストールとセットアップ  
(UNIX の場合) 121

クラスタシステムでのインストールとセットアップに  
ついて 34, 72

クラスタシステムでのインストールとセットアップの  
流れ (UNIX の場合) 123

クラスタシステムでのインストールとセットアップの  
流れ (Windows の場合) 112

クラスタシステムでのインストールとセットアップの  
前に確認すること (UNIX の場合) 121

クラスタシステムでの運用 105

クラスタシステムでの環境設定 (UNIX の場合) [ク  
ラスタ運用時] 131

クラスタシステムでの環境設定 (Windows の場合)  
[クラスタ運用時] 120

クラスタシステムでのセットアップ手順 (UNIX の場  
合) 125

クラスタシステムでのセットアップ手順 (Windows  
の場合) 114

クラスタシステムでの論理ホスト環境定義ファイルの  
エクスポート・インポート 147

クラスタシステムの概要 106

クラスタソフトからの PFM - Agent の登録解除  
(UNIX の場合) [クラスタ運用時] 143

クラスタソフトからの PFM - Agent の登録解除  
(Windows の場合) [クラスタ運用時] 137

クラスタソフトからの起動・停止の確認 (UNIX の場  
合) [クラスタ運用時] 131

クラスタソフトからの起動・停止の確認 (Windows  
の場合) [クラスタ運用時] 120

クラスタソフトからの停止 (UNIX の場合) [クラ  
スタ運用時] 140

クラスタソフトからの停止 (Windows の場合) [ク  
ラスタ運用時] 134

クラスタソフトへの PFM - Agent の登録 (UNIX の  
場合) [クラスタ運用時] 130

クラスタソフトへの PFM - Agent の登録 (Windows  
の場合) [クラスタ運用時] 118

## け

言語環境の設定 40

## こ

構築前のシステム見積もり 353

このマニュアルで使用する英略語 397

このマニュアルでのプロダクト名, サービス ID, お  
よびサービスキーの表記 398

このマニュアルの参考情報 394

コマンドの実行に関するトラブルシューティング 327  
固有フィールド 229

## さ

サービス ID 404

サービスのスケジュール状態 270

サービス要求のスケジュールキュー滞留時間 160

最近 1 時間以内の OpenTP1 出力メッセージの情報  
189

最近 1 日間の DAM ファイルアクセス状況 177, 197

最近 1 日間の MCF キューアクセス状況 188

最近 1 日間の TAM ファイルアクセス状況 208, 216

最近 1 日間の共用メモリー使用状況 207, 215

最近 1 日間のジャーナル取得状況 181, 198

最近 1 日間のスケジュール発生状況 205, 212

最近 1 日間のチェックポイントダンプ取得状況 175,  
196

最近 1 日間のトランザクション実行状況 209, 221

最近 1 日間のネームサービス状況 190, 200

最近 1 日間の排他制御状況 184, 199

## し

識別子一覧 355

システムログ (ログ情報の種類) 332

実行系ノード 20

実ホスト名 31, 69

ジャーナル出力時間の監視 25

ジャーナル取得状況 249

ジャーナル取得状況のリアルタイム情報 179

ジャーナルの出力時間 157

障害発生時の資料採取の準備 34, 72

## す

- スケジュールキューに滞留したサービス要求数 161
- スケジュール待ちの最近 1 か月間の履歴情報 213
- ステータス管理機能 350, 404

## せ

- 接続先 PFM - Manager の解除 50, 90
- 接続先 PFM - Manager の設定 (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 126
- 接続先 PFM - Manager の設定 (Windows の場合) [クラスタ運用時] 115
- セットアップ (UNIX の場合) 79
- セットアップコマンド (UNIX の場合) 81
- セットアップコマンド (Windows の場合) 42
- セットアップやサービスの起動に関するトラブルシューティング 323
- 前提 OS 31, 69
- 前提プログラム (UNIX の場合) 71
- 前提プログラム (Windows の場合) 33

## そ

- その他のトラブルに関するトラブルシューティング 331

## た

- 他 Performance Management プログラムの論理ホストのアンセットアップ (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 141
- 他 Performance Management プログラムの論理ホストのアンセットアップ (Windows の場合) [クラスタ運用時] 135
- 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 127
- 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ (Windows の場合) [クラスタ運用時] 116
- 待機系ノード 20
- 対処の手順 322
- 単数インスタンスレコード 405

## ち

- チェックポイントダンプ取得状態 241
- チェックポイントダンプのリアルタイム情報 174

## つ

- 追加フィールド 229

## て

- ディスク占有量 353
- データ型一覧 231
- データベース ID 405
- データモデル 18, 224, 405
- デルタ 227, 232

## と

- 同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストール、セットアップするときの注意事項 73
- 動作ログ出力の設定 (UNIX の場合) 86
- 動作ログ出力の設定 (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 128
- 動作ログ出力の設定 (Windows の場合) 47
- 動作ログ出力の設定 (Windows の場合) [クラスタ運用時] 117
- 動作ログに出力される事象の種別 381
- 動作ログの出力 381
- 動作ログの出力形式 382
- 動作ログの保存形式 381
- 動作ログを出力するための設定 387
- トラブルシューティング 323
- トラブルシューティング時に UNIX 環境で採取する資料の採取方法 346
- トラブルシューティング時に Windows 環境で採取する資料の採取方法 343
- トラブルシューティング時に採取が必要な資料 335
- トラブルシューティング時に採取する資料の採取方法 343
- トラブルシューティング時に採取するログ情報 332
- トラブルシューティング時に採取するログ情報の種類 332

トラブルシューティング時に参照するログファイルおよびディレクトリー覧 333

トラブル発生時に UNIX 環境で採取が必要な資料 339

トラブル発生時に Windows 環境で採取が必要な資料 335

トラブルへの対処方法 321

トランザクション状態 292

トランザクションの最近 1 か月間の実行数 222

トランザクションの最近 1 日間のリアルタイム情報 219

トランザクションの同期点処理が完了するまでの実時間 156

トランザクションの同期点処理が完了するまでの実時間の最近 1 か月間の履歴情報 (リアルタイム統計情報) 210

トランザクションのロールバック決着回数 158

トランザクションのロールバック決着回数を監視 154

ドリルダウンレポート 405

ドリルダウンレポート (フィールドレベル) 165

ドリルダウンレポート (レポートレベル) 165

トレースログ (ログ情報の種類) 333

トレースログ (ログファイルおよびディレクトリー覧) 333

## ね

ネットワークの環境設定 31, 69

ネットワークの設定 (UNIX の場合) 84

ネットワークの設定 (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 127

ネットワークの設定 (Windows の場合) 45

ネットワークの設定 (Windows の場合) [クラスタ運用時] 116

## は

バージョンアップ手順とバージョンアップ時の注意事項 379

バージョンアップの注意事項 (UNIX の場合) 74

バージョンアップの注意事項 (Windows の場合) 36

バージョン互換 380

排他制御状態 252

排他制御についてのリアルタイム情報 183

バインド 19, 405

バックアップ 61, 101

バックアップとリストア 61, 101

パフォーマンス監視の運用例 22

パフォーマンスデータ 405

パフォーマンスデータの格納先の変更 (UNIX の場合) 85, 93

パフォーマンスデータの格納先の変更 (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 128

パフォーマンスデータの格納先の変更 (Windows の場合) 46, 53

パフォーマンスデータの格納先の変更 (Windows の場合) [クラスタ運用時] 117

パフォーマンスデータの管理方法 21

パフォーマンスデータの収集と管理に関するトラブルシューティング 329

パフォーマンスデータの収集と管理の概要 21

パフォーマンスデータの収集方法 21

パフォーマンスデータの性質に応じた方法で収集できます 18

パフォーマンスデータを保存できます 18

## ふ

ファイアウォールの通過方向 357

ファイルおよびディレクトリー覧 373

フィールド 18, 165, 405

フィールドの値 232

フェールオーバー時の処理 108

複数インスタンスレコード 405

物理ホスト 406

付録 352

プログラムのインストール順序 38, 76

プロセス一覧 356

プロセス状態 265

プロパティ 360

## へ

ベースラインの選定 22

## ほ

- ポート番号一覧 357
- ポート番号の設定 (UNIX の場合) 70
- ポート番号の設定 (Windows の場合) 32
- ポート番号の設定の解除 (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 140
- ポート番号の設定の解除 (Windows の場合) [クラスタ運用時] 134

## ま

- マニュアルでの表記 394
- マニュアルの参照手順 64, 104
- マニュアルを参照するための設定 63, 103

## め

- メッセージ 295
- メッセージ一覧 304
- メッセージの記載形式 297
- メッセージの形式 296
- メッセージの出力形式 296
- メッセージの出力先一覧 299
- メモリー所要量 353

## ゆ

- ユーザーサーバのスケジュールキューに滞留したサービス要求数 (行列長) について最近 1 か月間の 1 日ごとの履歴情報 (リアルタイム統計情報) 206
- ユーザーサービス実行時間 162

## よ

- 用語解説 400
- 要約ルール 229

## ら

- ライフタイム 406

## り

- リアルタイム統計情報 267
- リアルタイムレポート 17, 406
- リストア 61, 101

- 履歴レポート 17, 406

## れ

- レコード 18, 165, 223, 406
- レコード一覧 239
- レコードの記載形式 225
- レコードの注意事項 237
- レポート 17, 406
- レポート一覧 168
- レポートの記載形式 165
- レポートの定義に関するトラブルの要因 328
- レポートのフォルダ構成 166

## ろ

- ログのファイルサイズ変更 (UNIX の場合) 85
- ログのファイルサイズ変更 (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 128
- ログのファイルサイズ変更 (Windows の場合) 45
- ログのファイルサイズ変更 (Windows の場合) [クラスタ運用時] 117
- ログファイルに保存されたメッセージ 263
- 論理ホスト環境定義ファイルのインポート (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 129, 142
- 論理ホスト環境定義ファイルのインポート (Windows の場合) [クラスタ運用時] 118, 136
- 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 128, 142
- 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート (Windows の場合) [クラスタ運用時] 117, 135
- 論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー (UNIX の場合) [クラスタ運用時] 128, 142
- 論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー (Windows の場合) [クラスタ運用時] 118, 136